和歌山市都市整備公社発掘調査報告書　第２集

# 太田・黒田遺跡 第59次発掘調査報告書

2009

財団法人 和歌山市都市整備公社

空撮写真全景（東上空から）

ＳＫ－ 125 出土の弥生土器

高床建物を描いた弥生絵画土器

# 序　　文

和歌山市は、紀淡海峡を望む和歌山県の北西端に位置し、本市の中央を西流する紀ノ川の恵みを受けた和歌山平野を中心とした地域であります。この肥沃な平野部には、古くから人々が生活を営み、市域には岩橋千塚古墳群や和歌山城など400ヵ所を数える多くの遺跡が残されています。

そのなかでも今回発掘調査を行いました太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部、標高４ｍ前後の微高地に位置しています。遺跡は、南北約850ｍ、東西約500ｍの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡として知られています。弥生時代前期から中期にかけての時期には県内最大規模の集落を形成し、竪穴建物・井戸などの他、水田などの生産域に関わる遺構や土坑墓・土器棺など埋葬施設も確認されています。また、絵画土器（鹿）を含む大量の弥生土器などの他、直柄広鍬や鋤などの木製農耕具、銅鐸や銅鏃などの重要な遺物が出土しています。なお、古墳時代では竪穴建物や土坑、奈良時代では和同開珎42枚などが出土した井戸も見つかっており、遺跡南半部は秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が含まれるとされています。

調査の結果、弥生時代の遺構は前期の土坑、中期の竪穴建物６棟や墓とみられる土坑、祭祀を行ったとみられる土坑などを確認しました。また、特に注目されるものに高床建物を描いた弥生土器があります。中世の遺構は溝５条・土坑７基・石組井戸２基など集落関係の遺構が見つかりました。今回の調査成果は太田・黒田遺跡の様相を知る上で新たな知見であると言えます。

ここに報告する調査成果が、広く私たちの郷土に関する歴史認識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成21年３月31日

財団法人 和歌山市都市整備公社

理事長　武　内　　功

# 例　　言

1．本書は、株式会社穴吹工務店が和歌山市太田446,448,449,450,451,453,454番地内において計画したマンション建設工事に先立つ発掘調査の報告書である。
2．調査は、株式会社穴吹工務店の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受け、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積994㎡を2007年４月16日から2007年８月１日までの期間で実施した。
3．発掘調査及び報告書刊行に係る調査体制は下記のとおりである。
財団法人和歌山市都市整備公社
事務局　埋蔵文化財班
班長（学芸員）　　北野隆亮（発掘調査担当）
主任（学芸員）　　奥村　薫（文化財事務・遺物整理担当）
4．本書に掲載の遺跡・遺構及び遺物の写真撮影は調査担当者が行った。
5．発掘調査及び出土遺物整理に際し、基準点測量・航空写真撮影・航空写真測量を株式会社かんこうに、石器の一部実測図・トレース図作成を株式会社地域文化財研究所に作業委託として業務委託を実施した。
6．本書の執筆は、発掘調査担当の北野のほか、第２章・第６章第１節～第８節については奥村が分担して行い、編集は北野が行った。
7．現地調査及び報告書の作成にあたり、寺西貞弘、藤田三郎、前田敬彦、山下奈津子の諸氏を初め関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝申し上げます。
8．発掘調査及び遺物整理作業において作成した実測図、写真、台帳等の記録資料及び出土遺物等はすべて和歌山市教育委員会の所管であり、財団法人和歌山市都市整備公社が収蔵・管理している。

# 凡　　例

1．調査の基準線は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を用い、図示した北は座標北を示す。
2．調査の標高は、東京湾標準潮位（T.P.値）を基準とした。
3．土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。
4．本書で使用した遺構の略号は以下の通りである。
ＳＢ…竪穴建物　ＳＤ…溝　ＳＥ…井戸　ＳＫ…土坑　ＳＸ…落ち込み　Ｐ…柱穴等
5．挿図・写真図版の遺物に付した数字番号は、出土遺物観察表の遺物実測図番号に対応する。

# 本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と経過…… 1
調査日誌抄
第２章　遺跡の位置と環境…… 3
第１節　地理的環境…… 3
第２節　歴史的環境…… 3
第３章　太田・黒田遺跡の既往の調査…… 5
第４章　調査の方法と概要…… 9
第１節　調査の方法…… 9
第２節　調査の概要……10
第５章　検出遺構……12
第１節　弥生時代の遺構……12
第２節　古墳時代の遺構……17
第３節　古代の遺構……18
第４節　中世の遺構……19
第５節　近世の遺構……23
第６節　近代の遺構……26
第６章　出土遺物……28
第１節　弥生時代の土器……28
第２節　古墳時代の土器……29
第３節　古代の土器……31
第４節　中世の土器・陶磁器……34
第５節　近世の土器・陶磁器……45
第６節　埴輪……50
第７節　瓦……51
第８節　土製品……51
第９節　石器・石製品……51
第10節　金属製品……60
第11節　木製品……60
第７章　考察……62
第１節　遺構の時期別構成と変遷……62
第２節　高床建物を描いた弥生土器について……65
出土遺物観察表……69
報告書抄録……80

# 挿 図 目 次


第１図　調査地位置図
第２図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図
第３図　太田・黒田遺跡及び太田城跡 既往の調査位置図
第４図　調査地区割図
第５図　調査地北壁土層柱状模式図
第６図　遺構全体平面図
第７図　SB－１実測図
第８図　SB－６実測図
第９図　SB－３実測図
第10図　SB－４実測図
第11図　SB－５実測図
第12図　SK－125実測図
第13図　SK－169土層断面図
第14図　SD－８土層断面図
第15図　SE－２実測図
第16図　SE－３実測図
第17図　SD－５実測図
第18図　SD－７実測図
第19図　遺物実測図１
第20図　遺物実測図２
第21図　遺物実測図３
第22図　遺物実測図４
第23図　遺物実測図５
第24図　遺物実測図６
第25図　遺物実測図７
第26図　遺物実測図８
第27図　遺物実測図９
第28図　遺物実測図10
第29図　遺物実測図11
第30図　遺物実測図12
第31図　遺物実測図13
第32図　遺物実測図14
第33図　遺物実測図15
第34図　遺物実測図16
第35図　遺物実測図17
第36図　遺物実測図18
第37図　遺物実測図19
第38図　遺物実測図20
第39図　遺物実測図21
第40図　遺物実測図22
第41図　遺物実測図23
第42図　遺物実測図24
第43図　遺物実測図25
第44図　遺物実測図26
第45図　遺物実測図27
第46図　遺物実測図28
第47図　遺物実測図29
第48図　遺物実測図30
第49図　遺物実測図31
第50図　遺物実測図32
第51図　遺物実測図33
第52図　遺物実測図34
第53図　遺物実測図35
第54図　遺物実測図36
第55図　遺物実測図37
第56図　遺物実測図38
第57図　遺物実測図39
第58図　遺物実測図40
第59図　遺物実測図41
第60図　遺物実測図42
第61図　遺物実測図43
第62図　遺物実測図44
第63図　遺物実測図45
第64図　遺物実測図46
第65図　時期別遺構変遷図１
第66図　時期別遺構変遷図２
第67図　弥生土器絵画推定図


**（表・写真）**


第１表　既往の調査一覧表
写真１　SE－３出土の火を受けた石材

# 図 版 目 次

巻頭図版１　空撮写真全景（東上空から）
巻頭図版２　SK－125出土の弥生土器、高床建物を描いた弥生絵画土器

図版１　調査前の状況（西から）、調査前の状況（東から）
図版２　全景（上が北）、調査区西端部下面検出遺構（西から）
図版３　全景（西から）、全景（東から）
図版４　SB－１（東から）、SB－１（南から）
図版５　SB－１土層堆積状況（西から）、SB－３（上が北）
図版６　SB－３（北から）、SB－３（北東から）
図版７　SB－３炉（北から）、SB－４（上が北）
図版８　SB－４（南から）、SB－４壁溝（南から）
図版９　SB－５・６（上が北）、SB－５（北から）
図版10　SB－５（東から）、SB－５土層堆積状況（南西から）
図版11　SB－５炉土層堆積状況（南西から）、SB－６（北から）
図版12　SK－７（東から）、SK－７土層堆積状況（東から）
図版13　SK－31（北東から）、SK－31遺物出土状況（北西から）
図版14　SK－125（南から）、SK－125遺物出土状況（西から）
図版15　SK－83（南から）、SK－169（上が北）
図版16　SK－169（西から）、SK－169土層堆積状況（西から）
図版17　SK－92（北西から）、SK－95（南から）
図版18　SK－95土層堆積状況（南から）、SK－96（東から）
図版19　SK－10（東から）、SK－10土層堆積状況（西から）
図版20　SD－１（上が北）、SD－１土層堆積状況（南から）
図版21　SD－２土層堆積状況（東から）、SD－８土層堆積状況（東から）
図版22　SK－３石製品出土状況（北から）、SK－49（南から）
図版23　SE－２（西から）、SE－３（南から）
図版24　SE－３遺物出土状況（北西から）、SD－５a・５b（上が北）
図版25　SD－５a・５b（南から）、P－233埋甕底部（北から）
図版26　SD－５a護岸杭列と堰杭列（南から）、SD－５a護岸俵に打ち込んだ杭（南西から）
図版27　SD－５a護岸俵・杭列検出状況（南から）、SD－５a護岸俵・杭列断割状況（南東から）
図版28　SD－５a護岸俵・杭断面（北から）、SD－５a護岸杭列断割状況１（東から）
図版29　SD－５a護岸杭列断割状況２（東から）、SD－５a護岸杭列断割状況３（東から）
図版30　SD－７堰杭断割状況（南から）、SD－７土層堆積状況（南から）
図版31　調査区西南端部小溝群（SD－11）（西から）、SX－３（南から）
図版32　SK－67（南から）、調査区西端部第４層上面遺構（西から）

図版33　調査区西北端部近代屋敷地（西から）、サブトレンチ１（南から）
図版34　サブトレンチ２（南から）、サブトレンチ３（南から）
図版35　SK－148出土土器　弥生土器　　SB－５出土土器　弥生土器　　SK－125出土土器　弥生土器
図版36　SK－125出土土器　弥生土器
図版37　その他遺構等出土土器（弥生時代）　弥生土器
図版38　その他遺構等出土土器（弥生時代）　弥生土器
図版39　その他遺構等出土土器（弥生時代）　弥生土器
図版40　その他遺構等出土土器（弥生時代）　弥生土器　　SK－17出土土器　土師器　　SK－133出土土器　土師器　　その他遺構等出土土器（古墳時代）　土師器
図版41　その他遺構等出土土器（古墳時代）　土師器・須恵器　　SK－20出土土器　土師器
図版42　SK－20出土土器　須恵器　　SK－61出土土器　土師器
図版43　SK－61出土土器　須恵器　　その他遺構等出土土器（古代）須恵器　　SK－107出土土器　土師器・黒色土器
図版44　SK－165・169出土土器　土師器・黒色土器　　SK－96出土土器　土師器・瓦器
SK－92出土土器　土師器・瓦器
図版45　SK－128出土土器　土師器・瓦器・山茶椀・東播系須恵器　　SD－1・２出土土器　土師器・土師質土器
図版46　SD－1・２出土土器　備前焼・瀬戸美濃系陶器・中国製青磁・中国製染付
SD－５出土土器（中世）　土師器・瓦質土器
図版47　SD－５出土土器（中世）　東播系須恵器・備前焼・瀬戸美濃系陶器・中国製青磁・中国製白磁
図版48　SD－５出土土器（中世）　中国製染付
図版49　その他遺構等出土土器（中世）　土師器・瓦質土器・東播系須恵器・備前焼・瀬戸美濃系陶器
図版50　その他遺構等出土土器（中世）　中国製青磁・中国製白磁・中国製青白磁・中国製染付
SK－118出土土器　瓦質土器・備前焼　　SD－５出土土器（近世）　土師器・瓦質土器
図版51　SD－５出土土器（近世）　土師質土器・瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃系陶器・肥前系陶磁器
図版52　SD－５出土土器（近世）　肥前系陶磁器
図版53　SD－５出土土器（近世）　肥前系陶磁器　　その他遺構等出土土器（近世）　土師器・備前焼・肥前系陶磁器・大谷焼　　埴輪　円筒埴輪　　瓦　軒丸・丸・鳥伏間・熨斗・塼
図版54　土製品　ミニチュア土器　土笛　紡錘車　円板状土製品　土製支脚　土錘　焼塩壺
図版55　石器　打製石器　石鏃・石錐・スクレイパー　　磨製石器　石包丁
図版56　石器　磨製石器　大型石包丁・石包丁未製品・石斧　　礫石器　石鋸・叩石
図版57　石器　礫石器　台石　　石製品　砥石・石鍋・火打石　　石造物　石仏・石造五輪塔（水輪）　金属製品　鍬・刀・煙管（吸口）・銅銭・鉄砲玉　　木製品　箸・板塔婆・板状加工品
図版58　木製品　下駄・木札・同赤外線撮影・同白黒反転

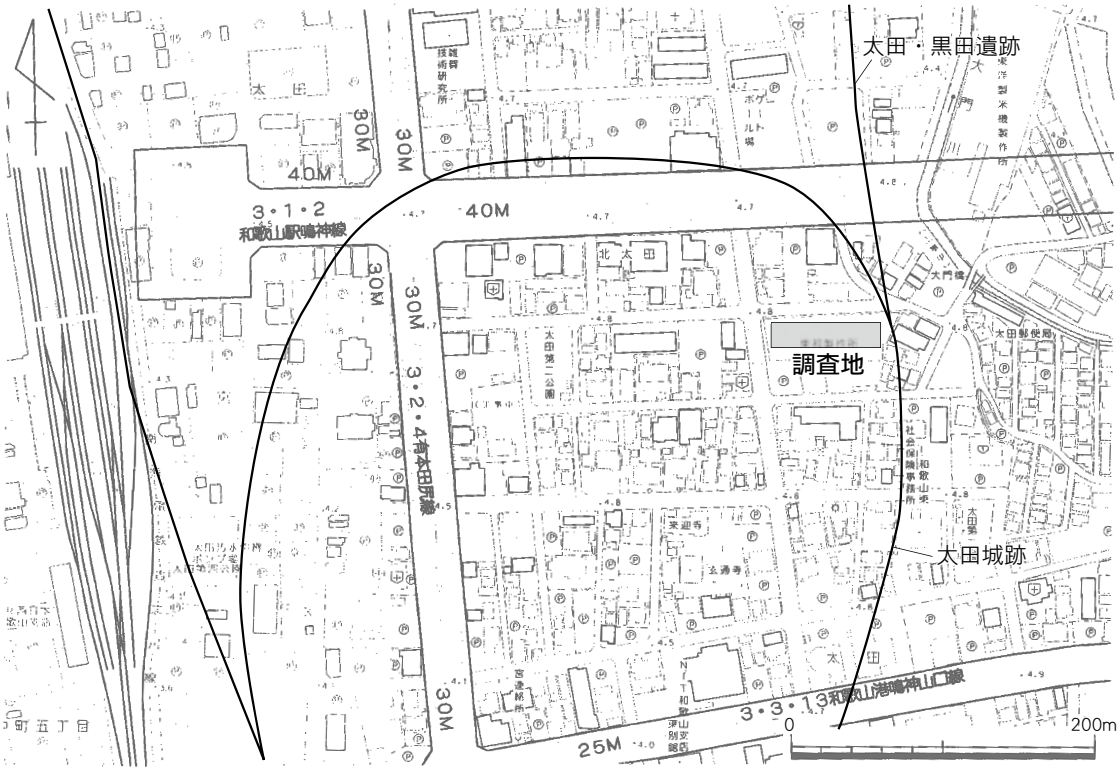
# 第１章　調査に至る経緯と経過

太田･黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点に所在する。遺跡は南北約850m、東西約500mの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡である（第１図）。

今回の調査地周辺は比較的発掘調査の実施例が少ないところである。調査地周辺における過去の調査では、1996年に行われた周辺の下水道管埋設工事時に本調査地の北側に隣接する道路で小規模な調査が第31次調査のトレンチ２として行われた。この調査では遺構面を２面確認した。下面の第２遺構面は弥生時代中期以前の溝状遺構１条を検出した。また、第１遺構面は弥生時代中期の土坑２基・ピット１基、鎌倉時代の土坑１基、鎌倉時代以降の水田１面を検出し、弥生時代中期から中世にかけての時期とされた。

今回の調査は、遺跡範囲東端部においてマンション建設工事が行われることになり、遺跡範囲内であることから、和歌山市教育委員会が工事に先立ち確認調査を行った結果、遺構の存在が確認され本発掘調査を行うことになった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて実施したものである。

現地調査は、平成19年４月16日から平成19年８月１日までの期間で行った。




第１図　調査地位置図

〈調査日誌抄〉

平成19年４月16日（月）　本日から客土の機械掘削を開始。

４月17日（火）　（株）かんこうによる基準点測量を行う。

４月23日（月）　本日から人力による掘削調査を開始。調査区東端から壁面調整及び遺構検出作業を開始。並行して遺構配置図の作成を開始。

４月25日（水）　遺構検出作業に並行して、調査区東端から遺構掘削作業を開始する。

４月26日（木）　弥生時代の竪穴建物SB－１などが検出され始める。

５月２日（水）　調査区東端部において南北方向の大溝SD－１を検出。

５月８日（火）　掘削完了した遺構について写真撮影を開始。遺構実測図の作成も開始。

５月14日（月）　弥生時代の大型竪穴建物SB－３を検出。

５月16日（水）　土坑SK－31から体部に穿孔のある弥生土器壺が出土。

５月22日（火）　弥生時代の竪穴建物SB－４を検出。

５月23日（水）　調査区中央部において南北方向の大溝SD－５を検出。

５月28日（月）　大溝SD－５北東端部で中世の石組井戸SE－２を検出、掘削調査を開始。

６月６日（水）　大溝SD－５の掘削を完了し、写真撮影を行う。

６月15日（金）　調査区西側で検出した土坑SK－92・－95・－96は鎌倉時代の遺構と判明。

６月27日（水）　（株）かんこうによる第1回目の航空写真撮影・航空写真測量を行う。作業終了後、ローリングタワーを設置し、全景・個別遺構写真撮影を行う。

７月２日（月）　調査区西端で検出した土坑SK－125から完形の弥生土器が多量に出土。

７月７日（土）　調査区西端で中世の石組井戸SE－３を検出、埋土から完形の石仏が出土。

７月９日（月）　弥生時代の竪穴建物SB－５・－６を検出。

７月16日（月）　調査区北西端で近世初頭の埋甕（備前焼）を検出。

７月24日（火）　遺構実測図の作成をほぼ完了。

７月25日（水）　（株）かんこうによる第２回目の航空写真撮影・航空写真測量を行う。作業終了後、ローリングタワーを設置し、全景・個別遺構写真撮影を行う。

７月26日（木）　下層堆積調査のため、調査区北壁に沿わせサブトレンチを３カ所設定。

７月30日（月）　遺構実測図の追加作成。

７月31日（火）　図面類の最終的な点検を行う。調査道具の撤収。

８月１日（水）　調査事務所の撤去を行い、現場から撤収。本日にて第59次調査の現場での全日程を終了する。

（出土遺物整理）

８月20日（月）　本日から出土遺物整理作業を開始。水洗作業を開始。

８月22日（水）　遺物登録台帳の作成を開始。並行して抽出遺物の注記・接合補強を行う。

10月４日（木）　弥生土器壺の体部破片１点に絵画（高床建物）が描かれていることを確認。

10月15日（月）　SK－125出土の弥生土器群の接合・復元を開始。

11月28日（水）　本日にて出土遺物整理作業を終了する。その後、図面整理・原稿執筆などを経て、本報告書の刊行に至る。

# 第２章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代においては、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、このために紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦湾に注いでいたとされている。この海岸砂州に位置する独立丘陵、岡山に和歌山城は築かれている。

太田･黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、標高４ｍ前後を測る微高地に所在する（第２図)。

## 第２節　歴史的環境

太田･黒田遺跡（1）は、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡として知られ、竪穴住居・井戸などの集落域や水田などの生産域に関わる遺構、土坑墓・土器棺などの埋葬施設が確認されている。また、絵画土器（鹿）を含む大量の弥生土器などの他、直柄広鍬や鋤などの木製農耕具、銅鐸や銅鏃などの重要な遺物が出土している。弥生時代以降では、古墳時代から江戸時代までの遺構・遺物が多数みられ、古墳時代では竪穴住居や土坑、奈良時代では和同開珎42枚・萬年通寶４枚などが出土した井戸がある。なお､遺跡南半部は秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地(2)が含まれるとされている。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡として鳴神貝塚、禰宜貝塚が知られている。鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土しているが、その貝層の中に海水系の貝殻が多くみられることから、当時の海岸線は同遺跡周辺の岩橋山塊西麓あたりまで及んでいたと推定されている。弥生時代になると遺跡の数は増加し、太田・黒田遺跡や秋月遺跡（4）を初めとする集落が平野部に展開するようになる。古墳時代においても鳴神遺跡群や友田町遺跡（3)、田屋遺跡、西田井遺跡などの集落が平野部に営まれ、鳴神Ｖ遺跡（5）では水田跡が検出されている。

奈良時代になると南海道に面する形で直川廃寺跡や上野廃寺跡、山口廃寺跡等の寺院が建立される。また鳴神Ｖ遺跡では平安時代中期を中心に多くの土器が出土しているが、その中には緑釉陶器や初期貿易陶磁器、陶硯などが出土していることから、当該期において官衙的な施設があったと考えられている。

中世には太田・黒田遺跡において、石組井戸や土坑などが検出され、中国製陶磁器や備前焼をはじめとする国産陶器など多くの遺物が出土している。特に、戦国期には紀ノ川下流域の土豪は雑賀五組と呼ばれる集団をつくり、本願寺の門徒組織などを利用して在地支配を行った。

羽柴秀吉によって天正13年４月に太田城が攻め落され、調査地の北東約250ｍには太田城水攻め堤跡の一部が残る。紀州を領有した秀吉によって築城が開始された和歌山城は、桑山重晴を城代として本丸周辺を中心として築城が進められたとされ､慶長５（1600）年に関ヶ原の戦いで軍功のあった浅野幸長が入城し、天守などの築造が行われた。その後、元和５（1619）年に浅野氏に代わって

徳川頼宣が入城し、二の丸の拡張や砂の丸などを増築した。そして、明治４（1871）年の廃藩置県によって廃城になるまで御三家のひとつ紀州徳川家として領有された。

このように、当遺跡は周囲に多くの遺跡が分布する地域に立地している。

| 番号 | 遺　跡　名 | 時　代 | 番号 | 遺　跡　名 | 時　代 | 番号 | 遺　跡　名 | 時　代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **1** | **太田・黒田遺跡** | **弥生～奈良** | 15 | 岩橋千塚古墳群 | 古　　墳 | 29 | 国有本遺跡 | 弥生～古墳 |
| 2 | 太田城跡 | 安土・桃山 | 16 | 寺内古墳群 | 古　　墳 | 30 | 有功遺跡 | |
| 3 | 友田町遺跡 | 弥生～平安 | 17 | 井辺遺跡 | 弥　　生 | 31 | 六十谷遺跡 | 縄文～弥生 |
| 4 | 秋月遺跡 | 弥生～平安 | 18 | 神前遺跡 | 弥　　生 | 32 | 直川遺跡 | 縄　　文 |
| 5 | 鳴神Ⅴ遺跡 | 弥生～平安 | 19 | 井辺前山古墳群 | 古　　墳 | 33 | 高井遺跡 | 縄　　文 |
| 6 | 鳴神Ⅳ遺跡 | 弥生～江戸 | 20 | 和田古墳群 | 古　　墳 | 34 | 府中Ⅳ遺跡 | 弥生～古墳 |
| 7 | 鳴神Ⅵ遺跡 | 弥生～江戸 | 21 | 和田岩坪遺跡 | 弥生～古墳 | 35 | 府中Ⅱ遺跡 | 弥　　生 |
| 8 | 音浦遺跡 | 古　　墳 | 22 | 和田遺跡 | 弥　　生 | 36 | 田屋遺跡 | 弥生～古墳 |
| 9 | 鳴神Ⅲ遺跡 | | 23 | 平井遺跡 | 弥生～奈良 | 37 | 西田井遺跡 | 弥生～中世 |
| 10 | 鳴神Ⅱ遺跡 | 弥生～平安 | 24 | 大谷古墳 | 古　　墳 | 38 | 有本銅鐸出土遺跡 | 弥　　生 |
| 11 | 津秦遺跡 | 弥　　生 | 25 | 晒山古墳群 | 古　　墳 | 39 | 紀ノ川銅鐸出土遺跡 | 弥　　生 |
| 12 | 井辺Ⅱ遺跡 | 弥生～古墳 | 26 | 雨が谷古墳群 | 古　　墳 | 40 | 本願寺跡 | 中　　世 |
| 13 | 井辺Ⅰ遺跡 | 弥生～古墳 | 27 | 鳴滝古墳群 | 古　　墳 | 41 | 鷺ノ森遺跡 | 弥生～江戸 |
| 14 | 花山古墳群 | 古　　墳 | 28 | 楠見遺跡 | 先土器、古墳 | 42 | 和歌山城跡 | 近　　世 |

**第２図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図**

## 第３章　太田・黒田遺跡の既往の調査

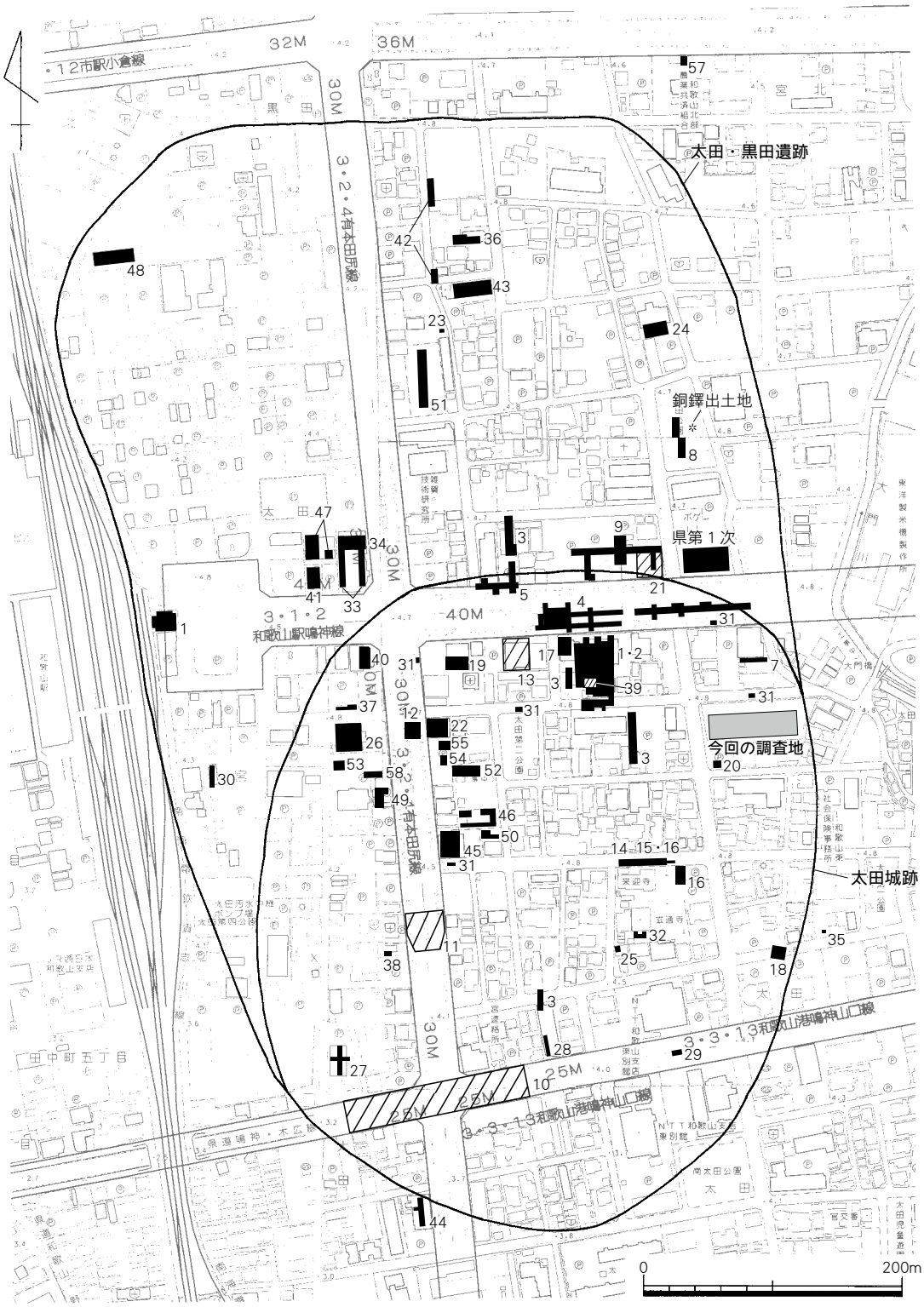
太田・黒田遺跡の埋蔵文化財発掘調査は1968年から開始された。調査の契機は、太田・黒田遺跡の範囲に和歌山市の都市改造事業に伴う区画整理が計画されたことによる。和歌山市教育委員会はこの区画整理事業の実施に先立って、文化財保護上の見地から遺跡の実態を明らかにすることと、保護行政上の資料を得るため、遺跡の総合的な学術調査を計画した。

この調査は、和歌山市長を調査団長とし、末永雅雄氏や角田文衛氏らを指導委員としたもので、考古学・文献史学・地理学の３班で構成される太田・黒田地区文化財総合調査団によって実施された。調査の中心は考古学班であり、森浩一氏を調査責任者、白石太一郎氏を調査主任とし、同志社大学、関西大学、和歌山大学、平安博物館及び地元の研究者・学生によって構成される発掘調査団を組織し、1968年２月からの予備調査に始まり1971年３月にかけての期間に９次数に至る発掘調査が行われ、合計約4,900㎡の面積が調査された（森・白石1969、森・大野1981、和歌山市教委1983）。

その後の発掘調査は、和歌山市教育委員会が直接実施したもので、1975年12月から1988年４月までに第10次から第21次調査までの12次数に至る発掘調査が行われ、合計約1,500㎡の面積が調査された（和歌山市文事1995）。

1988年４月からは和歌山市教育委員会が発掘調査を実施する組織として財団法人和歌山市文化体育振興事業団を設立したことから、財団組織が発掘調査の主体を占めることになる。なおこの財団組織は2006年４月から財団法人和歌山市都市整備公社埋蔵文化財班に組織改変され、今日に至っている（和市文事1992 ～ 2005・和市都公2007 ～ 2008）。今回の調査で、太田・黒田遺跡の一連の調査は第59次数の調査を数える。また、2005年には財団法人和歌山県文化財センターが遺跡東部で調査を１回（県１次）実施しており（和歌山県文セ2007）、この調査を含め太田・黒田遺跡の発掘調査は合計面積約12,000㎡に至っている（第３図、第１表）。

調査次数の呼称については、太田・黒田遺跡調査団が1968年２月から1971年３月にかけて断続的に実施した調査名称を再整理した報告書（和歌山市教委1983）に準じて使用した。現在の和歌山市での調査次数の呼称は、これに継続して使用されている。なお、和歌山市教育委員会と同市設立の財団組織（財団法人和歌山市文化体育振興事業団、2006年４月から財団法人和歌山市都市整備公社埋蔵文化財班）は調査次数を共有している。




第３図　太田・黒田遺跡及び太田城跡 既住の調査位置図

## 第１表　既往の調査一覧表

| 次数 | 期　間 | 面積(㎡) | 概　要 | 調査組織 | 文 献 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1968年2～4月・5～6月 | 700 | 弥生時代中期の竪穴建物１棟、掘立柱建物１棟、古墳時代前期の井戸１基、後期の溝１条などを検出。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 1・3・4・14 |
| 2 | 1968年8～9月 | 1,000 | 弥生時代前期の土坑５基、中期後葉の竪穴建物２棟、古墳時代前期と中期の井戸各１基、中世末の濠状遺構（幅10m以上、深さ３m以上）などを検出。弥生時代前期の土坑から底部穿孔の甕と縄文系の深鉢形土器が組み合わさった状態で出土。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 1・3・4・14 |
| 3 | 1969年2～4月 | 650 | 弥生時代前期の土坑６基、中期の竪穴建物１棟、掘立柱建物１棟、古墳時代前期の土坑１基などを検出。奈良時代の井戸には大型の井筒を据えており、和同開珎42枚・万年通宝４枚などが一括出土。近代の太田焼窯道具出土。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 1・3・4・14 |
| 4 | 1969年9～12月 | 1,200 | 弥生時代前期の井戸１基、土坑３基、中期の竪穴建物２棟、古墳時代前期の井戸３基、後期の溝１条、近世初頭の東西方向の大型濠状遺構などを検出。４次調査の包含層から土師質の土馬出土。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 3・4・14 |
| 5 | 1970年1～2月 | | | | |
| 6 | 1970年5～8月 | 740 | 弥生時代中期の竪穴建物４棟、土坑２基、古墳時代前期の井戸２基、後期の溝１条などを検出。調査中に隣接地の工事で銅鐸が出土、内部に石製の舌が遺存。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 3・4・14 |
| 7 | 1970年11～12月 | | | | |
| 8 | 1970年12月～1971年1月 | | | | |
| 9 | 1971年2～4月 | 560 | 弥生時代中期の竪穴建物４棟などを検出、また中期中葉の土坑墓とみられる長楕円形土坑を10基検出。古墳時代前期の溝１条などを検出、溝から復原径９cmの小型内行花文鏡（破鏡）が出土。 | 太田・黒田遺跡調査団 | 3・4・14 |
| 10 | 1975年12月～1976年3月 | 53 | 古墳時代中期以降の遺構・遺物などを検出。 | 和歌山市教育委員会 | 2 |
| 11 | 1977年7～8月 | 180 | 古墳時代前期の土坑、中世の溝２条などを検出。石仏・一石五輪塔が出土。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 12 | 1978年8～9月 | 115 | 弥生時代中期の井戸１基、古墳時代前期の土坑４基、15世紀前半代の瓦溜め、16世紀代の落込みなどを検出。包含層から鹿をヘラ描きした弥生土器出土。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 13 | 1978年8～9月 | 20 | 古墳時代前期の土坑４基などを検出。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 14 | 1979年7～8月 | 200 | 弥生時代前期末～中期初頭の遺物包含層を確認。碧玉製管玉が出土。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 15 | 1980年7～8月 | 170 | 弥生時代前期末の竪穴建物１棟、中期後半の竪穴建物１棟などを検出。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 16 | 1981年8～9月 | 170 | 弥生時代前期の竪穴建物１棟を検出。６本柱から４本柱へ建替えられたとみられる。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 17 | 1983年11月～1984年2月 | 181 | 弥生時代中期の竪穴建物２棟、井戸１基を検出。井戸底には半截刳り抜き部材を組合せた井筒が遺存。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 18 | 1985年7月 | 14 | 太田城水攻めの際の戦死者を葬ったという伝承をもつ「小山塚」の調査。井戸状の土坑１基、瓦器椀数個体、白磁片、土師器皿、円形薄板などが出土。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 19 | 1987年6～7月 | 140 | 弥生時代・古墳時代のピット、土坑、溝を多数検出した他、東西方向の中世末期の大型濠状遺構を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 20 | 1987年9月 | 16 | 12世紀後半～13世紀前半の溝、15世紀後半～16世紀の溝を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 21 | 1988年2～4月 | 450 | 弥生時代の溝・土坑、小型の土器棺、土坑墓を検出。奈良時代前期の大型井戸１基を検出、須恵器十数個体・斎串１点など出土。 | 和歌山市教育委員会 | 14 |
| 22 | 1988年4～5月 | 210 | 弥生時代の円形竪穴建物３棟、中世の大溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 5・14 |
| 23 | 1994年3月 | 7 | 弥生時代の溝状遺構を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 6・14 |
| 24 | 1994年3～5月 | 300 | 弥生時代の壺棺などを検出。噴砂を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 6・14 |
| 25 | 1994年10月 | 22 | 中世の溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 7・14 |
| 26 | 1995年4～5月 | 340 | 弥生時代前期の大溝、中期の水田跡を検出。前期の大溝は環濠とみられ、直柄広鍬などが出土。中世の大溝からは鉛玉・宋銭が出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 8・14 |
| 27 | 1995年5～6月 | 27 | 弥生時代中期の甕棺を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 8 |
| 28 | 1995年5～6月 | 70 | 弥生時代中期の甕棺や墳墓に関係した溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 8 |
| 29 | 1995年7月 | 6 | 平安時代の土坑を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 8 |
| 30 | 1995年12月 | 18 | 弥生時代中期の溝を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 8 |
| 31 | 1996年2～3月 | 35 | 遺跡の基本層序の確認。中世末の遺構を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 8 |
| 32 | 1996年1月 | 10 | 弥生時代の土器・石器が多量に出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 8 |
| 33 | 1996年3月 | 170 | 弥生時代の溝、平安時代の土地区画溝などを検出。江戸時代の溝から鉛玉が出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 8・15 |
| 34 | 1996年4・7月 | 160 | 弥生時代中期の大溝、奈良時代の大溝、平安時代の条里溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9・15 |
| 35 | 1996年6月 | 4 | 中世の遺物包含層と土坑を確認。 | 和歌山市教育委員会 | 9 |
| 36 | 1996年8～9月 | 80 | 弥生時代中期の遺物包含層と古墳時代の溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9 |
| 37 | 1996年11～12月 | 20 | 弥生時代中期の遺物包含層、鎌倉時代の溝状遺構を検出、鉛玉出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9 |
| 38 | 1997年1月 | 18 | 近世以降の耕作に伴う小溝を確認。 | 和歌山市教育委員会 | 9 |
| 39 | 1997年2～3月 | 60 | 弥生時代中期の土坑・溝状遺構を検出。土坑から畿内Ⅱ様式の土器一群が出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9・23 |
| 40 | 1997年5～6月 | 160 | 弥生時代中期の植物痕跡、古墳時代後期の溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9 |
| 41 | 1997年6～8月 | 140 | 弥生時代の溝、平安時代後期の溝を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9 |
| 42 | 1997年8～11月 | 50 | 弥生時代中期の溝、江戸時代の土坑を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9 |
| 43 | 1998年1～2月 | 280 | 弥生時代の竪穴建物３棟・土器棺・大溝、古墳時代の大溝等の検出、赤色顔料の付着した石杵や碧玉製管玉２点などが出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 9・16 |
| 44 | 1998年11月 | 43 | 弥生時代の溝などを検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 10 |
| 45 | 2000年10月～2001年1月 | 300 | 弥生時代前期の環濠を２条検出。弥生時代中期の鹿を描いた絵画土器出土。古墳時代初頭の銅鏃出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・17 |
| 46 | 2000年11～12月 | 90 | 弥生時代前期の土坑、古墳時代の竪穴建物などを検出。平安時代の須恵器円面硯出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・24 |
| 47 | 2000年12月～2001年2月 | 190 | 弥生時代中期初頭の溝から木製鋤出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・18 |
| 48 | 2001年5～8月 | 300 | 弥生時代中期の甕棺墓７基を検出、管状土錘91点が溝から一括出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・19 |
| 49 | 2001年5～6月 | 100 | 古墳時代の土坑・溝・ピット、江戸時代の粘土採掘坑を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・20 |
| 50 | 2001年6～7月 | 48 | 弥生時代前期の土坑、古墳時代の竪穴建物などを検出。須恵器イイダコ壺・碧玉製管玉が出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・25 |
| 51 | 2001年7月 | 60 | 弥生時代前期の環濠、古墳時代の竪穴建物などを確認。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11 |
| 52 | 2001年8～11月 | 120 | 弥生時代中期初頭の井戸や中期の竪穴建物を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 11・21 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 53 | 2002年11月 | 8 | 古墳時代の溝・土坑を検出。 | 和歌山市教育委員会 | 13 |
| 54 | 2004年5～6月 | 49 | 弥生時代前期の方形周溝墓の可能性のあるL字状の溝を検出。溝内部から前期の遺物が一括出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 12 |
| 55 | 2004年7～8月 | 39 | 弥生時代前期の溝、前期から中期の土坑・柱穴を検出。８世紀代の須恵器杯身を転用した硯が出土。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 12・22 |
| 56 | 2005年6～7月 | 60 | 古墳時代初頭の大溝を初め古墳時代集落の一部を確認した。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 13 |
| 57 | 2005年6月 | 40.8 | 遺跡の範囲外であることを確認。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 13・26 |
| 58 | 2005年6月 | 59 | 弥生時代前期の環濠の痕跡、また江戸時代後期の粘土採掘坑を検出。 | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 | 13 |
| 県1次 | 2005年7月～2006年1月 | 795 | 弥生時代の竪穴建物・井戸、飛鳥～奈良時代では河道や溝を検出。 | 財団法人和歌山県文化財センター | 27 |

［文　献］


1　森浩一・白石太一郎1969「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相　－和歌山市太田・黒田遺跡の調査から－」『考古学ジャーナル』33　ニューサイエンス社

2　和歌山市教育委員会1976『太田・黒田遺跡範囲確認調査（和歌山港鳴神線）概要』

3　森浩一・大野左千夫1981「和歌山市太田・黒田遺跡」『日本考古学年報』21・22・23　日本考古学協会

4　和歌山市教育委員会1983『太田・黒田遺跡』図版編

5　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1992『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』1

6　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1996『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』3

7　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1997『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』4

8　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1998『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』5

9　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2000『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』6

10　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2002『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』7

11　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2004『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』8

12　財団法人和歌山市都市整備公社2007『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』－平成16年度－

13　財団法人和歌山市都市整備公社2008『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』－平成17年度－

14　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1995『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』

15　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1996『太田・黒田遺跡　第33・34次発掘調査概報』

16　財団法人和歌山市文化体育振興事業団1998『太田・黒田遺跡　第43次発掘調査概報』

17　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2001『太田・黒田遺跡　第45次発掘調査概報』

18　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2001『太田・黒田遺跡　第47次発掘調査概報』

19　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2002『太田・黒田遺跡　第48次発掘調査概報』

20　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2002『太田・黒田遺跡　第49次発掘調査概報』

21　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2002『太田・黒田遺跡　第52次発掘調査概報』

22　財団法人和歌山市文化体育振興事業団2005『太田・黒田遺跡　第55次発掘調査概報』

23　和歌山市教育委員会1997『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成８年度－

24　和歌山市教育委員会2002『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成12年度－

25　和歌山市教育委員会2003『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成13年度－

26　和歌山市教育委員会2007『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成17年度－

27　財団法人和歌山県文化財センター 2007『太田・黒田遺跡（県１次調査）　―和歌山労働局新庁舎建設に伴う発掘調査報告書―』

# 第4章　調査の方法と概要

## 第1節　調査の方法

調査地は、遺跡範囲東端部に位置し、調査前の現況は建物等を撤去した更地であった。

調査は、マンション建設工事予定範囲に南北14m、東西71m、面積994㎡の調査区を設定して実施した（第１図）。

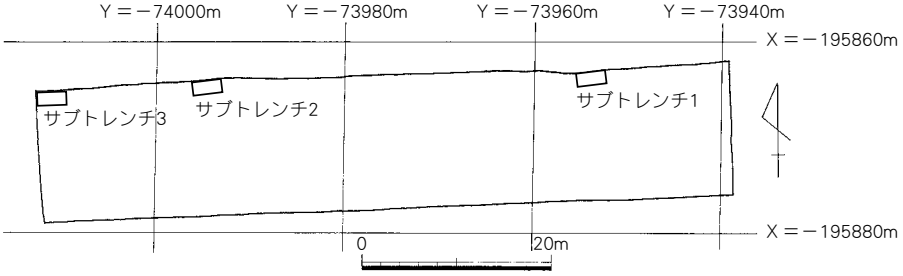
重機による掘削は、深さ約50㎝までの造成土、旧表土である厚さ10～20㎝の耕作土（第１層）、遺物を包含する厚さ５～10㎝の第２層までについて行った。掘削時に調査区の西端から15～40mの範囲の一部が深く撹乱されている状況がみられたため、その部分についても重機掘削を行い、最も深い部分では掘削深約２ｍまでに達した。また、西端部から約15mまでの範囲は遺構検出面（第４層上面）が浅く、掘削深30～40㎝で掘削を行った。

重機掘削の結果、調査区西端から約15mまでの範囲は第４層上面が露出、40mまでの範囲は撹乱が著しく第４層以下の層が不連続に露出、そこから東端までの範囲は第５層上面が露出し一部に第３・４層が残存した状況となった。

人力による調査は、西端部から約15mまでの範囲については第４層上面における遺構検出作業を行った。そこから東側については、一部に残存していた第３層を掘削し、第４層上面で遺構検出作業を行ったが、ほとんどの部分が削平を受け不明確な状況であったため、第５層上面での遺構検出作業とした。調査の結果、遺構検出面は第４層上面と第５層上面の２面であり、それぞれ第１遺構面、第２遺構面とした。なお、第１遺構面を検出した範囲は、第４層が良好に残存した調査区西端部から約15mまでの範囲に限られた。下層堆積状況の確認については、調査区北壁に沿った位置にサブトレンチを３カ所設定した（第４図、図版33・34）。サブトレンチは長さ１ｍの範囲を70～90㎝の深さまで掘削した。

航空写真測量は２回実施した。第１回は、調査区西端部から約15mまでの範囲を第１遺構面、そこから東端までの範囲は第２遺構面を対象として行った。第２回目は、調査区西端部から約15mまでの範囲を第２遺構面、そこから東端までの範囲はサブトレンチなどの補足調査部分を対象とした。これらの図面は校正・編集作業を行い、遺構面毎の図面に分離し、合成図等を作成した。

記録保存の方法として、調査範囲内に国土座標軸（世界測地系）を基準とした値を設置し、遺構実測の基準とした（第４図）。遺構全体平面図は航空写真測量により縮尺１/40で作成し、一部の遺構平面図と土層堆積図は縮尺１/20で作成した。なお遺跡の水準は国家水準点（T.P.値）を基準とし、土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。




第４図　調査地区割図

## 第２節　調査の概要

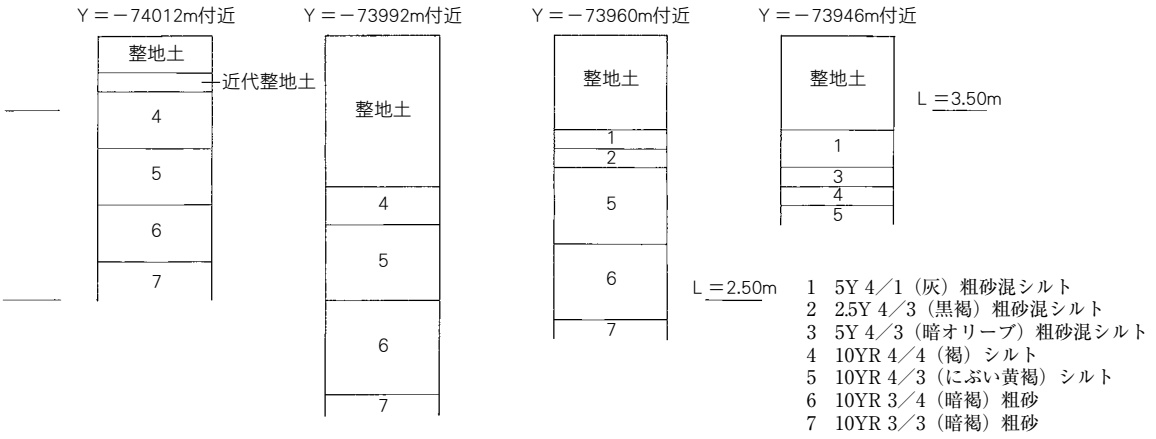
各調査区における基本層序は第５図に示した通りである。

調査地の地表面標高は約3.9mを測る。地表下深さ約50cmまでは既存建物解体時のものとみられる整地土が堆積しており、その下の旧表土と考えられる第１層は厚さ10～20cmの水田耕土である。なお、この水田面の標高は3.4mを測る。第２層は厚さ５～10cmの黒褐色粗砂混シルトであり、床土に相当する層である。第３層は厚さ５～10cmの暗オリーブ色の粗砂混シルトの土層である。第１層から第３層は調査区東側の一部で確認したものであり、第２層と第３層は江戸時代までの遺物を僅かに包含する層である。第４層は厚さ20～40cmの褐色のシルトで、弥生時代中期までの遺物を僅かに包含する層である。この層の上面は第１遺構面で弥生時代中期以降の遺構を多数検出した。第５層は厚さ30～40cmの黄褐色のシルトである。この層の上面が第２遺構面で、弥生時代中期以前の遺構を検出した。第５層上面の標高は調査区西端のY=－74012m付近が最も高く、標高3.30mを測る。そこから東に下降した傾斜をもって堆積しており、Y=－73992m付近が最も低く標高2.90mとなる。その地点から東へは緩やかに上昇してゆき、Y=－73960m付近で標高3.20mを測るが、そこから東へ再び緩やかに下降してゆき、東端のY=－73946m付近では標高3.00mとなる。第５層以下は無遺物層であることから、自然地形がそのような起伏をもっていたものと考えられる。第６層と第７層は暗褐色の粗砂の堆積で、第６層は厚さ30～50cm、第７層は厚さ20cm以上を測る。

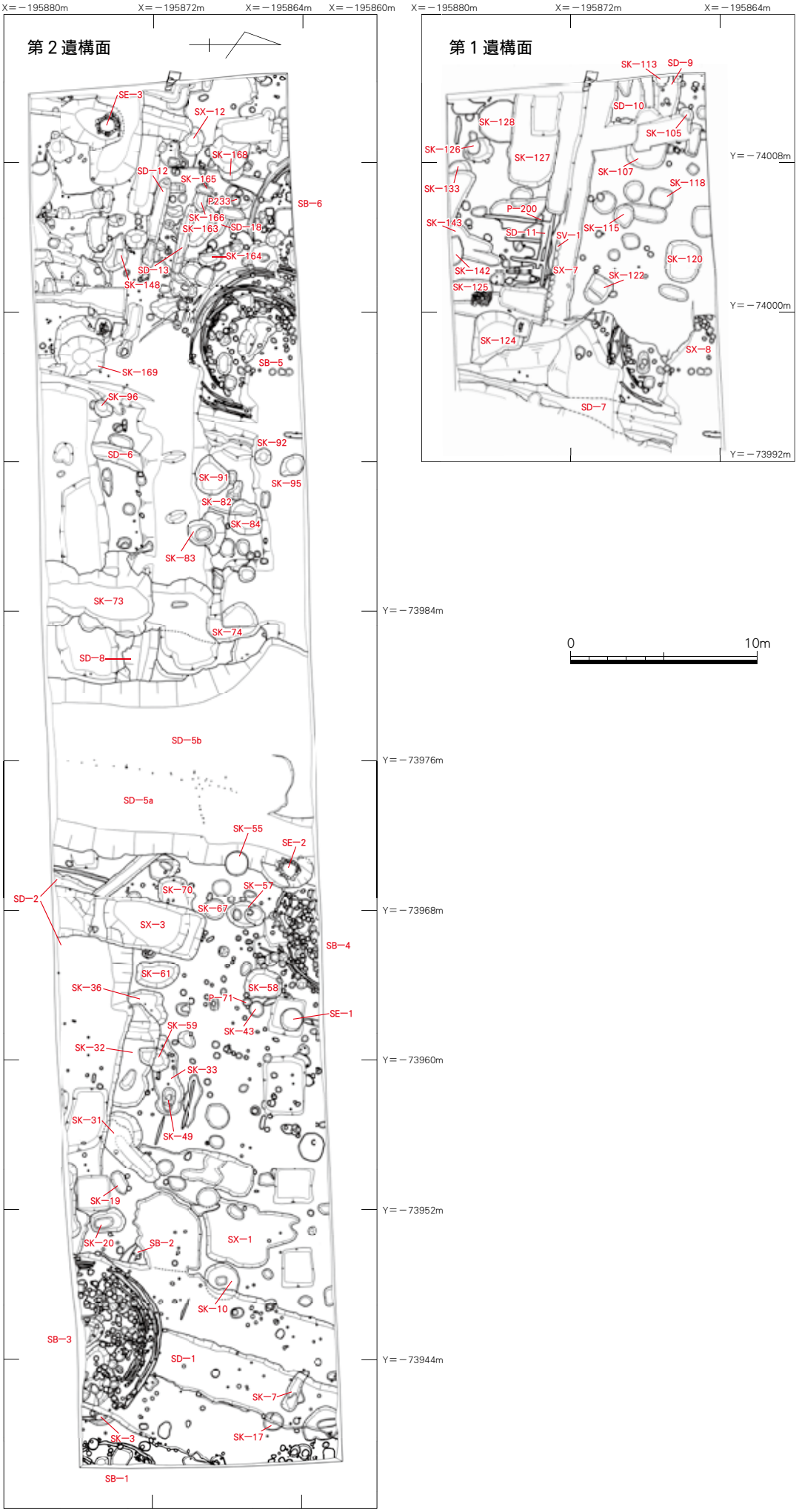
なお、第31次調査・トレンチ２との対応関係であるが、本調査区Y=－73992m付近が隣接地となり、第31次調査で検出した２面の遺構面は上面標高3.05m、下面標高2.70mであり、それぞれ今回の調査の第１遺構面・第２遺構面に対応するものと考えられる。

調査区は既存建物撤去時に大きく撹乱を受けており、第１～４層の大部分を失っていた。それらの層のうち第４層は調査区西端部から約15mまでの比較的撹乱の少ない範囲で残存しており、その範囲において第４層上面を第１遺構面として調査を行った。その後、調査区全面において確認した第５層の上面を第２遺構面と把握し、調査を行った。第１遺構面においては弥生時代中期から近代に至るまでの遺構を多数検出し、第２遺構面では弥生時代前期から中期の遺構を検出した（第６図）。

なお、遺構の検出状況について、大規模な撹乱のため第５層の上面は大部分の包含層を失っており、第２遺構面においても第１遺構面所属の遺構を多数検出し、本来の弥生時代中期以前の遺構を




第５図　調査地北壁土層柱状模式図


X＝－195880m
X＝－195872m
X＝－195864m
X＝－195860m
第２遺構面
SE－3
SX－12
SK－168
SD－12
SK－165
P233
SB－6
SK－166
SK－163
SD－18
SK－164
SD－13
SK－148
SK－169
SB－5
SK－96
SK－92
SD－6
SK－91
SK－95
SK－82
SK－84
SK－83
SK－73
SK－74
SD－8
SD－5b
SD－5a
SK－55
SE－2
SD－2
SK－70
SK－57
SK－67
SX－3
SB－4
SK－61
SK－36
SK－58
P－71
SE－1
SK－59
SK－43
SK－32
SK－33
SK－31
SK－49
SK－19
SK－20
SB－2
SX－1
SK－10
SB－3
SD－1
SK－7
SK－3
SK－17
SB－1
Y＝－73984m
Y＝－73976m
Y＝－73968m
Y＝－73960m
Y＝－73952m
Y＝－73944m
X＝－195880m
X＝－195872m
X＝－195864m
第１遺構面
SK－113
SD－9
SD－10
SK－128
SK－105
SK－126
SK－127
SK－107
SK－118
SK－133
P－200
SK－143
SK－115
SD－11
SV－1
SK－120
SK－142
SX－7
SK－122
SK－125
SK－124
SX－8
SD－7
Y＝－74008m
Y＝－74000m
Y＝－73992m
0
10m

第６図　遺構全体平面図

面的に検出可能な場所は第４層上面の残存した範囲に限られた。しかし、第４層上面の残存した調査区西端部から約15mまでの範囲は多くの遺構が密集しており、この部分の第２遺構面においても第１遺構面で確認できなかった遺構をこの面で検出するなど、各時期の遺構が第２遺構面においても残存して検出せざるを得なかった。

そのような調査の現状に鑑み、遺構についての記述は遺構面毎とはせず、時代順に扱うことにする。以下、各時期における概要を述べるが、遺構個別の詳細は次章で時期別に記述する。遺構名は現地調査時のものをそのまま使用した。なお、各時代については、便宜上前半・後半の意で前期・後期と二分までに留めたものもある。また、ピットは1000基以上検出したが、時期不明のものが多く、竪穴建物内部の柱穴以外では建物などを構成する柱穴を確認することはできなかった。

弥生時代の遺構は､前期の土坑１基（SK－91）や中期の竪穴建物６棟（SB－１～６）･土坑４基（SK－７,－31,－148,－125)、P－200などがある。後期の遺構は明確ではない。

古墳時代では、前期の土坑３基（SK－83,－113,－126)、中期の土坑２基（SK－17,－133）などがある。後期の遺構は明確ではない。

古代では、飛鳥・奈良時代の遺構として、溝１条（SD－９）・土坑７基（SK－20,－33･59,－61,－142･143, －105）などがある。平安時代では、土坑３基（SK－107,－165,－169）などがある。SK－107とSK－169は井戸と考えられる。

中世では、鎌倉時代の遺構として、溝２条（SD－6,－12）・土坑５基（SK－92,－95,－96,－128,－10）などがある。南北朝時代から室町時代までの遺構は､溝３条（SD－１,－２,－８）･土坑３基（SK－３,－49,－57）・石組井戸２基（SE－２,－３）などがある。

近世では、江戸時代前期の遺構として、SD－１とSD－２が継続して営まれており、それに溝１条（SD－５b）・土坑４基（SK－43, －115,－118,－120）などがある。江戸時代後期の遺構は、SD－５bを埋め立てて流路を東側に付け替えた溝１条（SD－５a）・井戸（SE－１）１基・粘土採掘土坑４基（SK－73・74,－124,－127）・土坑１基（SK－122）などがある。

近代の遺構としては、溝１条（SD－７）･農耕に関する小溝群（SD－11)･粘土採掘土坑２基（SX－３,SK－36）・埋桶２基（SK－55,－67）・石垣１基（SV－1・SX－７）などがある。

# 第５章　検出遺構

## 第1節　弥生時代の遺構

### １．弥生時代前期

弥生時代前期の遺構は土坑１基（SK－91）がある。SK－91は調査区西側で検出したもので、南側を大きく撹乱されているが、東西2.2m、南北1.8m、深さ約70㎝を測る平面形が不整円形のものである（第６図)。

### ２．弥生時代中期

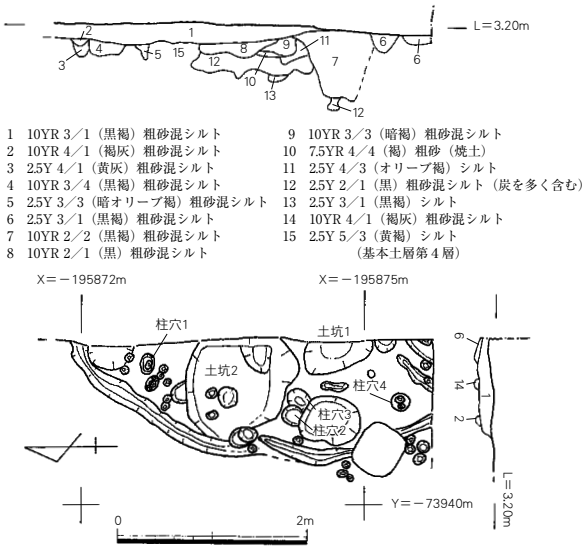
中期の遺構は、竪穴建物６棟（SB－１～６）・土坑４基（SK－７,－31,－148,－125)、P－200など

がある。

竪穴建物は全形を検出したものはないが、全て平面形が円形のもので、壁溝を検出できたものが６棟ある。直径６ｍ程度のものと８ｍ前後を測る大小二通りの規模のものがある。これらの竪穴建物はいずれも遺構覆土をほとんど失ったものであるが、壁溝を検出することによって認識した。

直径６ｍ程度の規模に復元できる比較的小型のものはSB－１、－６があり、直径７ｍ以上を測る大型のものにはSB－３、－４、－５がある。

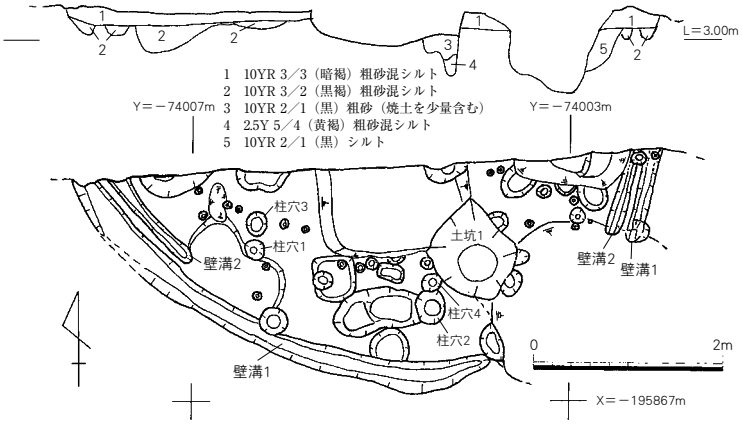
SB－１とSB－２は調査区の南東部で検出したものである。SB－１は建物西側の一部を検出した。南北3.8m以上、東西1.3m以上の規模を測るもので、厚さ約15cmの覆土が一部に残る。壁溝は１条、貯蔵穴とみられる土坑２基を検出した（第７図、図版４・５）。明確な柱穴とみとめられるものは直径約20cm、深さ約20cmの規模を測る柱穴１～４の４基を検出した。なお、柱穴２と３は切り合いがあり、柱穴２の方が新しいものである。土坑２基にも切り合いがあり、土坑１の方が新しい。土坑２の覆土には炭化物や焼土が混じるものである。



第７図　SB－１実測図

SB－２は建物の南西隅の一部を検出したもので、大部分が削平を受け壁溝の一部が残存した状況である（第６図）。壁溝は残存長1.2m、幅50～20cm、深さ13cmを測るもので、内部に柱穴が１基残存している。柱穴は直径28cm、深さ18cmを測る。直径等の建物規模は復元することができず、南東に隣接するSB－３との新旧関係も不明である。

SB－６は調査区北西部で竪穴建物の南側一部を検出したもので、その東側で検出したSB－5を切っている。南北2.4m以上、東西6.2m以上の規模を測るもので、厚さ約15cmの覆土が一部に残る。壁溝は２条、貯蔵穴とみられる土坑１基などを検出した（第８図、図版９・11）。壁溝１は幅35cm、深さ15cmを測り、検出範囲内では全周するものである。壁溝２は幅25cm、深さ12cmを測るもので、南側部分が途切れている。土坑１は北西から南東に長辺をもつ楕円形のもので、長辺90cm、短辺80cm、深さ72cmを測る。柱穴は数多く検出したが、対になる柱穴とみとめられるものは直径約20～30cm、深さ約15cmの規模を測る柱穴１～４の４基がある。壁溝１に対して柱穴１と２、壁溝２には柱穴３と４が対応するものとみられ、それぞれ柱穴数は８基を復元することができる。また、この竪穴建物は壁溝２か

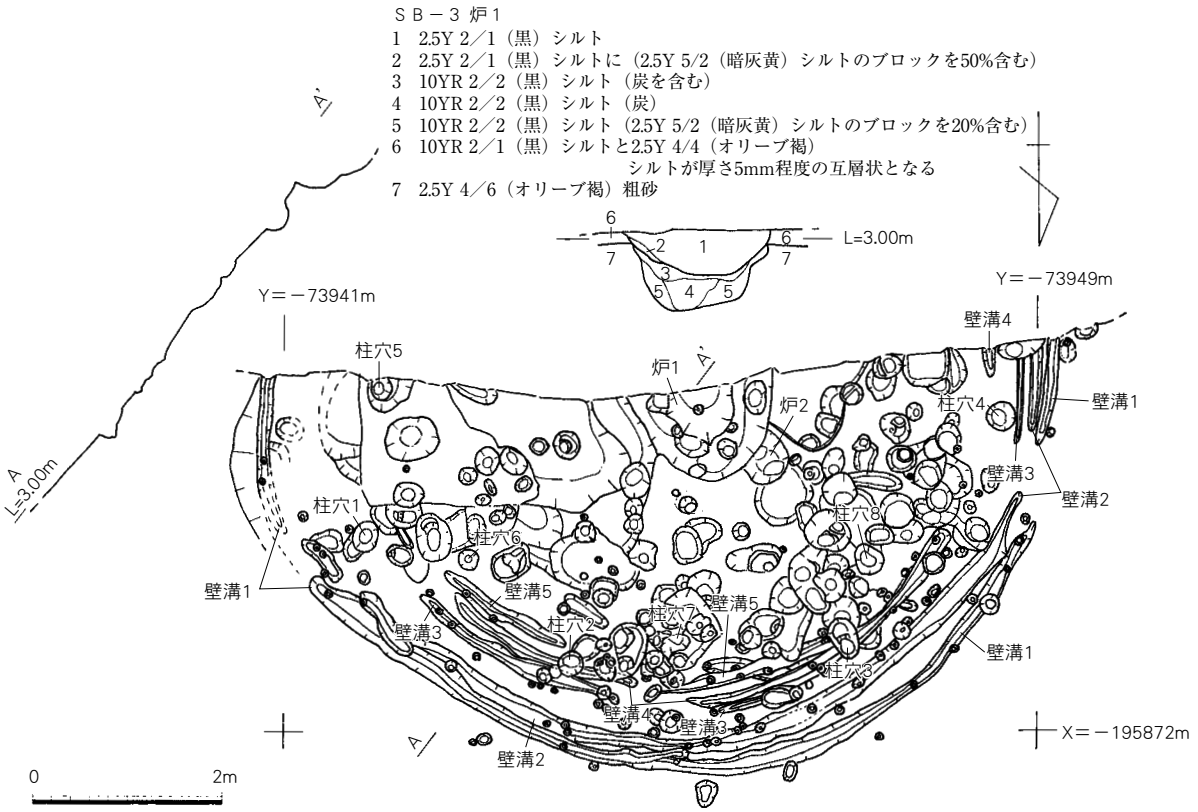


第８図　SB－６実測図

ら壁溝１へと一度拡張したものと考えられる。

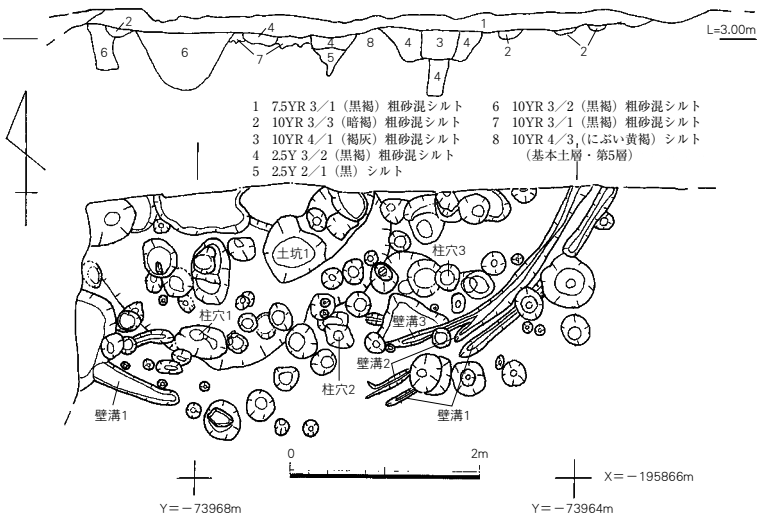
SB－３は調査区の南東部で竪穴建物の北側半分を検出したもので、東に１ｍの距離にはSB－１が隣接して位置する。南北4.2ｍ以上、東西8.9ｍの規模を測るもので、壁溝は５条、炉とみられる土坑２基、多くの柱穴などを検出した（第9図、図版５～７）。最も外側に位置する壁溝１は幅25㎝、深さ15㎝を測り、ほぼ全周するものである。壁溝２～５は壁溝１の内側にほぼ並行して幅1.2ｍの帯状の範囲に掘削されており、それぞれの間隔は10～25㎝を測る。炉１は建物の中心部に位置する直径1.6ｍ、深さ71㎝を測る土坑で、土層の堆積状況から新旧の２時期がみとめられる（図版７）。炉１の新相は第６層から掘り込むもので、第１・２層の堆積分である。古相は第７層から掘り込んだ第３～５層の堆積である。特に３・４層には炭が多く含まれる。第６層は炉１の周囲にわずかに残存している水平堆積の土層であるが、質の違ったシルトが５㎜程度の厚さで交互に堆積していることから、貼床とみられる。炉２は炉１の北西に接して位置し、南東の一部を炉１に切られるもので直径55㎝、深さ30㎝を測る。周囲に焼土の面がみられるものである。柱穴のまとまりとみられるものは直径約22～30㎝、深さ15～60㎝の規模を測る柱穴１～４の４基と柱穴５～８の４基がある。壁溝１に対して、柱穴１～４の４基が対応するものと考えられ、８本柱を復元することができる。柱穴５～８の４基については、壁溝２～４のいずれかに対応するものと考えられ、この柱穴群についても８本柱を復元することができる。以上、この竪穴建物は壁溝などから４度拡張が行われたとみられ、最も新しい段階は貼床を施したもので、壁溝１と柱穴１～４、炉１新相が対応すると考えられ、直径8.9ｍを復元することができる。

SB－４は調査区の中央部、Y=－73968m付近の北壁に接した位置で竪穴建物南側の１／３の範囲




第９図　SB－３実測図

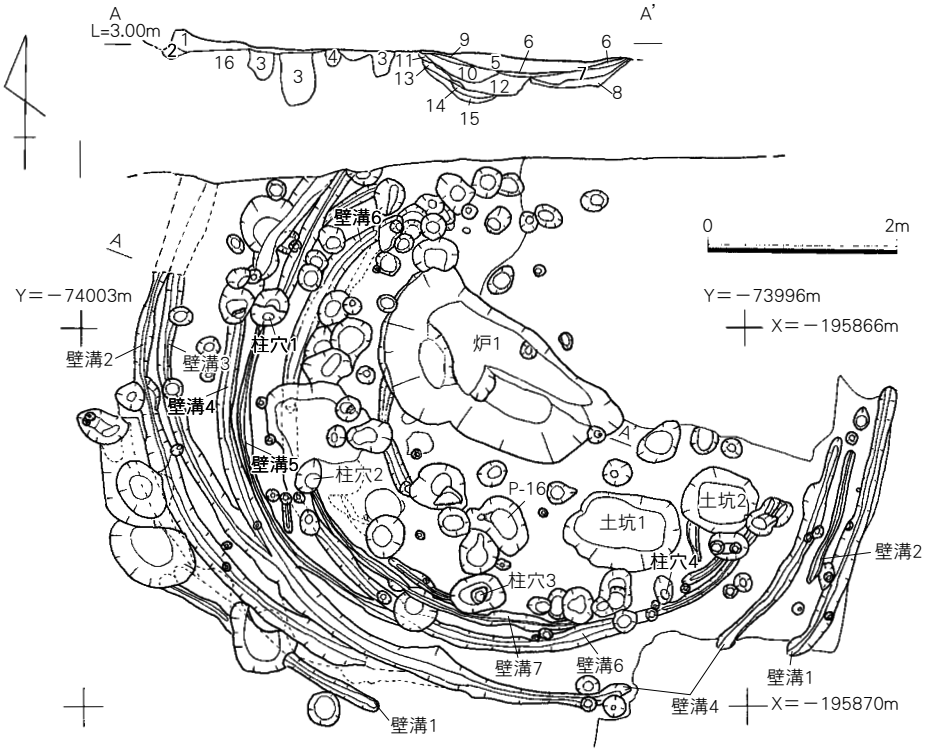
を検出したものである。南北2.3m以上、東西6.0m以上の規模を測る。覆土は北側寄りに厚さ約15㎝を残すもので、壁溝を３条、土坑１基、多くの柱穴などを検出した（第10図、図版７・８）。最も外側に位置する壁溝１は幅15㎝、深さ13㎝を測り、検出範囲でほぼ全周するものである。その内側の南東部分に壁溝２が延長3.3mみとめられる。壁溝２は幅18㎝、深さ８㎝を測る。壁溝３は壁溝２と一部を共有しているが、南側で内側に分岐した部分は長さ1.2mを測る。壁溝３は幅12㎝、深さ６㎝の規模を測る。柱穴は数多く検出したが、セット関係と考えられるものは、柱穴１～３の３基がある。柱穴１は直径50㎝、深さ45㎝、柱穴２は直径30㎝、深さ37㎝、柱穴３は直径25㎝、深さ47㎝の規模を測る。これらの柱穴は壁溝１に対応するものと考えられる。土坑１は直径70㎝、深さ39㎝を測るもので貯蔵穴の可能性がある。建物の規模は、壁溝１から直径7.8mを復元することができる。



第10図　SB－４実測図

SB－５は調査区北西部で竪穴建物の南側２／３を検出したもので、その西側で検出したSB－６に西端部を切られている。南北5.8m以上、東西8.0mの規模を測る。上部が削平を受け覆土の大部分を失っているが、壁溝を７条、貯蔵穴とみられる土坑２基、炉１基、多くの柱穴などを検出した（第11図、図版９～11）。最も外側に位置する壁溝１は幅20㎝、深さ20㎝を測り、長さ３mと2.3mの延長部分２ヵ所で検出したものである。壁溝２～７のうち、検出面の範囲で途切れずにほぼつながっているものは壁溝４と６である。壁溝の規模は幅15～32㎝、深さ10～24㎝の範囲であり、壁溝２と３は壁溝４と交わった状況で検出しており切り合い関係は不明である。壁溝５についても壁溝６と交わった状況で検出しており切り合い関係は不明であるが、壁溝７は壁溝６に切られている。これらの壁溝の状況から、この竪穴建物は少なくとも６回の建て替えを行ったものと考えられる。柱穴は数多く検出したが、セット関係と考えられるものは、柱穴１～４の４基がある。柱穴１は直径38㎝、深さ56㎝、柱穴２は直径30㎝、深さ54㎝、柱穴３は直径57㎝、深さ60㎝、柱穴４は直径28㎝、深さ41㎝の規模を測る。これらの柱穴は壁溝１～３のいずれかに対応するものと考えられる。貯蔵穴とみられる土坑について、土坑１は楕円形で長径1.2m、短径80㎝、深さ39㎝、土坑２は隅円方形で東西80㎝、南北70㎝の規模を測る。炉１は建物の中心部に位置する長径2.7m、短径1.45m、深さ59㎝を測る楕円形の土坑で、土層の堆積状況から新旧の３時期がみとめられる。最も新相は第５・６層の堆積分で、６層が炭層である。次の段階は南東部の長径1.1m、短径0.7m以上の楕円形に堆積した第７・８層の堆積分で、８層が炭層である。最古相は南西部の直径1.2mの円形に堆積した第９～15層の堆積分で、第12・15層が炭層である。建物の規模は、壁溝１から直径8.2mを復元することができる。なお、床面から切り込むP－16（第11図）から紀伊第Ⅱ様式の甕（第20図５、図版

1　2.5Y 4／2（暗灰黄）粗砂混シルト（炭少量混入）
2　2.5Y 3／3（暗オリーブ褐）粗砂混シルト
3　10YR 2／2（黒褐）粗砂混シルト
4　10YR 3／2（黒褐）粗砂混シルト
5　2.5Y 3／2（黒褐）粗砂混シルト
6　N 2／0（黒）炭層
7　10YR 3／2（黒褐）粗砂混シルト
8　10YR 2／1（黒）粗砂混シルト（炭を多く含む）
9　2.5Y 6／6（明黄褐）シルト
10　10YR 3／3（暗褐）シルト
11　10YR 4／4（褐）シルト
12　N 2／0（黒）炭層
13　2.5Y 3／2（黒褐）粗砂混シルト
14　2.5Y 4／3（オリーブ褐）粗砂混シルト
15　N 2／0（黒）炭層
16　10YR 4／4（褐）シルト
（5～15は炉の堆積、16は基本土層第4層）




第11図　SB－５実測図

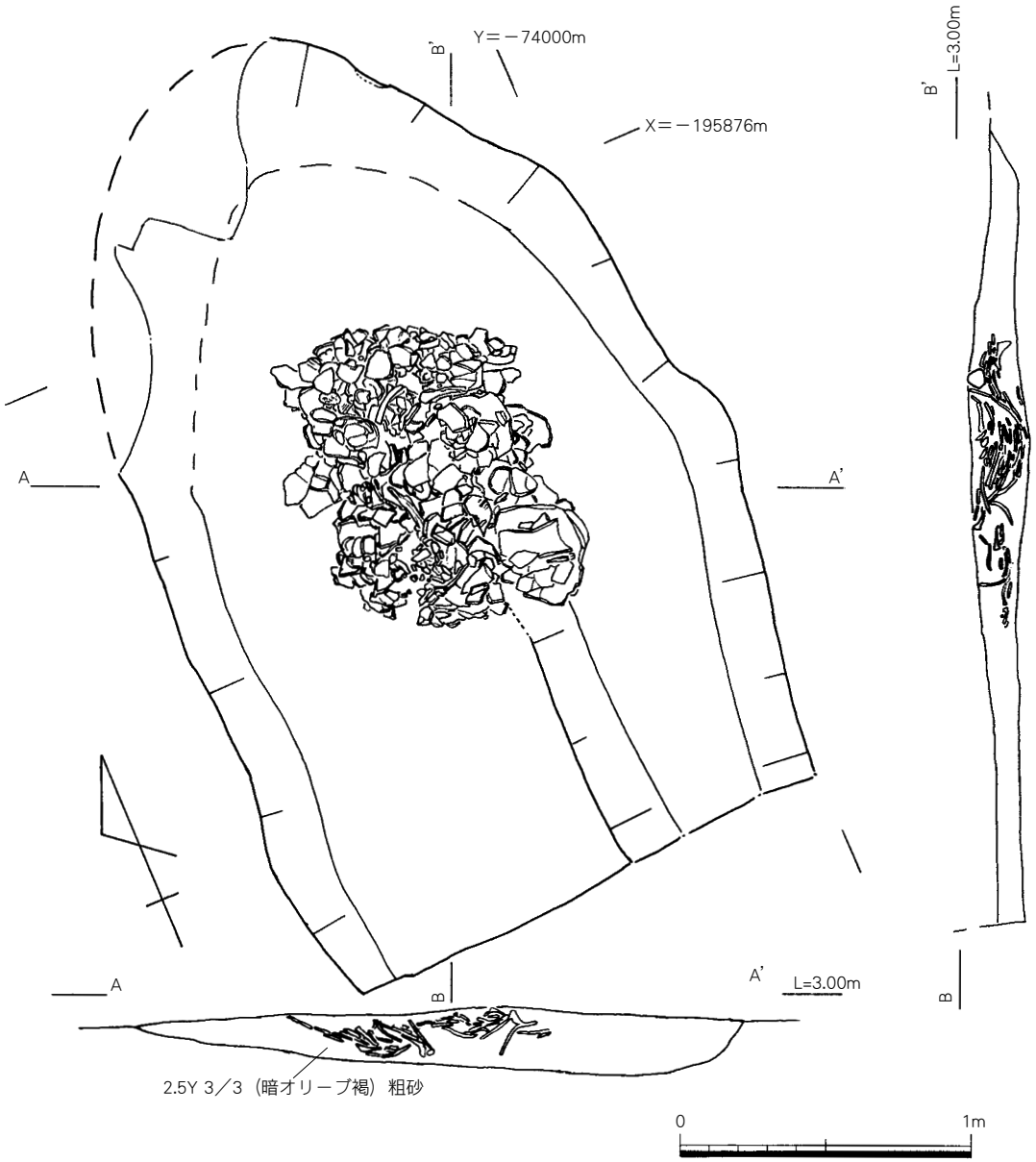
35）が出土しており、僅かに残存した覆土から中期中葉とみられる鉢（第28図45、図版40）が出土したことなどから、SB－５は中期初頭から中葉までの時期のものと考えられる。また、その他の竪穴建物についても出土した土器から、SB－５と同様の時期に収まるものと推定できる。

SK－７は調査区北東隅で検出したもので、上部の大部分を削平されていた。北西から南東に細長い溝状の土坑で、幅0.8m、長さ2.4m、深さ63cmを測る（第６図、図版12）。覆土は10YR ２／２（黒褐）シルトで、炭化物を多く含み、歯が出土したことなどから土坑墓の可能性がある。出土遺物から中期初頭の時期と考えられる。

SK－31は北東から南西に細長い溝状の船底型土坑で、幅1.15m、長さ3.8m以上、深さ0.9mの規模を測る（第６図、図版13）。覆土下位に炭化物を多く含み、上位に口縁部を欠失し体部を１箇所穿孔した紀伊第Ⅱ様式の長頸壺（第24図19）が出土したことなどから中期初頭の土坑墓とみられる。

SK－148は調査区西端部で検出したもので、平面形が東西方向に長い不整円形の土坑である。東西長約2.3m、南北幅1.3m、深さ60cmの規模を測る（第６図）。

SK－125は調査区南西部の南壁に接した位置で検出した平面形が楕円形の土坑である。南北方向に長径をもつもので、長径2.45m以上、短径約2.1m、深さ約20cmの規模を測る（第12図、図版14）。覆土は2.5Y ３／３（暗オリーブ褐）粗砂である。土坑中央部を中心に完形のものを含む多くの土器が投棄されていたことから祭祀土坑の可能性がある。出土した土器は壺類が多く、紀伊第Ⅲ－１様式の一群のものとみられることから中期前葉の遺構と考えられる（第21～23図、図版35・36）。




第12図　SK－125実測図

P－200は調査区西端部のY=－74005m、X=－195873.5m付近で検出した平面形が楕円形のピットである（第６図）。東西方向に長径をもつもので、長径52cm、短径36cm、深さ23cmの規模を測る。少量の壺片などが出土したが、そのうちの１点に高床建物を描いた壺体部（第25図28、図版38）がある。

## 第２節　古墳時代の遺構

### １．古墳時代前期

古墳時代前期の遺構は、土坑３基（SK－83、－113、－126）などがある（第６図）。

SK－83は調査区西側で検出したもので、南半部分を撹乱坑によって大きく削平されていた。直径2.32cm、深さ1.46cmを測る擂鉢状の土坑である（図版15）。土師器高杯・壺・鉢、脚台式の製塩土器などの出土した土器から前期の遺構と考えられる。

SK－113は調査区西端部で検出した土坑である。遺構の西半部は調査外となるが、平面形は楕円

とみられ、長径を東西方向にもつと考えられる。長径40㎝以上、短径50㎝、深さ34㎝を測るもので、布留式併行期の土師器甕が出土したことから前期の遺構と考えられる。

SK－126は調査区西南隅で検出した。遺構の平面形は楕円であり、長径を南北方向にもつ擂鉢状の土坑である。遺構の規模は長径1.6m、短径1.3m、深さ67㎝を測るもので、土師器小型丸底壺・甕、製塩土器などが出土したことから前期の遺構と考えられる。

### ２．古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は、土坑２基（SK－17、－133）などがある（第６図）。

SK－17は調査区北東隅で検出したもので、平面形が円形の土坑である。直径1.0m、深さ59㎝の規模を測る。出土遺物から中期の遺構と考えられる。

SK－133は第１遺構面の調査区南西隅で検出したもので、平面形が円形の土坑である。東半部を他の遺構に壊されている。直径1.2m以上、深さ60㎝の規模を測る。出土遺物から中期の遺構と考えられる。

なお、古墳時代の遺構は前期から中期のものに限られ、後期の遺構は明確ではない。

## 第３節　古代の遺構

### １．飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代の遺構として、溝１条（SD－９）・土坑７基（SK－20、－33・59、－61、－142・143、－105）などがある（第６図）。

SD－９は調査区北西隅部で検出した東西方向の溝で、幅1.5m、深さ21㎝、長さ2.2m以上の規模を測る。出土した須恵器（第32図79～81）の時期から７世紀後半の遺構と考えられる。

SK－20は調査区南東隅部で検出したもので、遺構の平面形は楕円であり、長径を南北方向にもつ土坑である。長径1.85m、短径1.3m、深さ56㎝の規模を測る。土師器や須恵器など出土遺物（第30図）から７世紀後半の遺構と考えられる。

SK－33とSK－59は調査区東側のY=－73960m付近で検出した二つの土坑である。SK－59はSK－33に切られる。まずSK－59が掘削され埋没した後、重複してSK－33が掘削されたものである。SK－33は南側をSD－２によって大きく削平を受けているが、東西方向に長径をもつ楕円形の土坑である。長径4.25m、短径1.45m、深さ10㎝を測る。SK－59は南北方向に長径をもつ楕円形の土坑で、長径1.75m、短径1.2m、深さ42㎝の規模を測る。出土遺物に時期差を認めにくいことから、SK－33とSK－59は短期間のうちに掘削され埋没したものとみられ、７世紀代の遺構と考えられる。

SK－61は調査区東側のY=－73964m付近で検出した土坑である。南北方向に長径をもつ不整形な楕円形の土坑で、長径2.22m、短径1.43m、深さ31㎝の規模を測る。出土した遺物（第31図）から７世紀後半の遺構と考えられる。

SK－142とSK－143は調査区西側のY=－74004m付近で検出した二つの土坑である。SK－143はSK－142に切られる。まずSK－143が掘削され埋没した後、重複してSK－142が掘削されたものである。SK－142は遺構の南半部は調査外となるが、平面形は楕円とみられ、長径を東西方向にもつと考えられる。長径1.6m、短径60㎝以上、深さ23㎝を測る。SK－143は南北長3.2m以上、東西幅1.75

m、深さ39㎝を測る不整形な土坑である。これらの遺構から出土した遺物から７世紀代のものと考えられる。なお、この二つの土坑は先述のSK－33とSK－59の関係に類似しており、SK－142とSK－143の出土遺物に時期差を認めにくいことから、それぞれ短期間に掘削され埋没したものと考えられる。

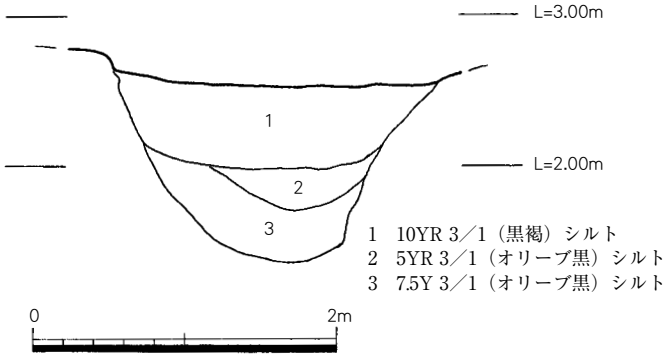
SK－105は調査区北西隅部で検出した円形の土坑である。南東隅部を撹乱坑により一部壊されているが、直径80㎝、深さ62㎝の規模を測る。出土した土師器や須恵器などから８世紀代の遺構とみられる。

### ２．平安時代

平安時代の遺構は、中期の土坑３基（SK－107、－165、－169）などがある。

SK－107は調査区北西隅部で検出した。遺構の西半分は撹乱のため削平を受けているが、平面形は円形の土坑で、直径2.2m、深さ1.32mの規模を測るものである（第６図）。この土坑は形状や土層堆積状況などから井戸と考えられる。土師器や黒色土器などの出土遺物（第33図）から10世紀後半から11世紀前半の遺構とみられる。

SK－165は調査区西端部で検出したもので、遺構の平面形は南北方向に長い隅円長方形の土坑である（第６図）。南北長86㎝、東西幅48㎝、深さ39㎝の規模を測る。出土遺物（第34図96・97）からSK－107とほぼ同時期の遺構と考えられる。



第13図　SK－169土層断面図

SK－169は調査区西側のY=－73998m付近で検出したもので、遺構の平面形は楕円であり、長径を南北方向にもつ土坑である（第６図、図版15・16）。長径2.55m、短径2.15m、深さ1.75mの規模を測るもので、覆土の堆積は３単位みとめられる（第13図、図版16）。この土坑はSK－107と同様に、形状や土層堆積状況などから井戸と考えられる。土師器や黒色土器などの出土遺物（第34図98～109）からSK－107とほぼ同時期の遺構とみられる。

なお、平安時代前期・後期の遺構は明確ではない。

## 第４節　中世の遺構

### １．鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、溝２条（SD－６、－12）、土坑５基（SK－92、－95、－96、－128、－10）などがある（第６図）。

SD－６は調査区西側のY=－73992m付近で検出した南北方向の溝で、北側と南側を撹乱坑によって削平されている。検出長3.15m、幅95㎝、深さ27㎝の規模を測る。溝の走行方向は座標北から東へ18°傾いた方向性を示す。底面の比高差から、水は南から北へ流れたとみられる。土師器や瓦器などが少量出土した。

SD－12は調査区西側のY=－74002mからY=－74007mの間で検出した東西方向の溝で、検出長4.88m、幅97㎝、深さ47㎝の規模を測る。溝の走行方向は座標東から南へ15°傾いた方向性を示し、先述のSD－６にほぼ直交する角度を示す。なお、SD－12の北側に約１ｍの距離を隔てて並行して掘削されている同規模の溝（SD－13）があるが、遺物の出土が少なく詳細な時期は不明である。もし時期が同じ遺構ならばこれらの並行する溝に挟まれた空間は通路の可能性を考えられる。

SK－92は調査区西側のY=－73992m付近、調査区北壁に近接する位置で検出した。平面形は円形の土坑で、直径85㎝、深さ1.0ｍの規模を測るものである（第６図、図版17）。土師器皿や瓦器椀（紀伊型瓦器椀Ⅲ－２期）などの土器（第37図、図版44）の他、平瓦（第48図241・242）・熨斗瓦（第49図248）なども出土しており、これらの出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

SK－95は先述のSK-92と調査区北壁に挟まれた位置で検出した。遺構の平面形は楕円形であり、長径を北西から南東方向にもつ土坑である（第６図、図版17・18）。長径1.4m、短径1.07ｍ、深さ76㎝の規模を測る。覆土は３単位みとめられ、上から10YR ２／２（黒褐）シルト、10YR ４／１（褐灰）粗砂、10YR ３／２（黒褐）粗砂の順に堆積している（図版18）。土師器や瓦器などの出土遺物からSK－92とほぼ同時期の遺構と考えられる。

SK－96は調査区西側のY=－73995m付近、調査区南側寄りの位置で検出した。平面形はほぼ円形の土坑で、直径1.05ｍ、深さ1.2ｍの規模を測るものである（第６図、図版18）。土師器皿・釜、瓦器椀（紀伊型瓦器椀Ⅱ－２～Ⅲ－１期）などの出土遺物（第35図、図版44）から13世紀前半の遺構とみられる。

SK－128は調査区南西隅で検出したもので、北側の一部を後述のSE-3及びSK－127に削平を受けている。平面形はほぼ円形の土坑で、直径2.3ｍ、深さ1.27ｍの規模を測る（第６図）。土師器皿、瓦器椀（紀伊型瓦器椀Ⅱ－２～Ⅲ－１期）などの出土遺物（第36図、図版45）から13世紀前半の遺構とみられる。

SK－10は調査区東側のY=－73949m付近で検出したもので、東側の一部を後述のSD－２によって削平を受けている。平面形は円形の土坑で、直径1.9ｍ、深さ60㎝の規模を測る中央部が深い擂鉢状のもので、覆土は10YR ３／２（黒褐）粗砂混シルトである（第６図、図版19）。

以上の土坑５基は、形状や規模、土層堆積状況などからいずれも井戸と考えられる。

## ２．南北朝・室町時代

南北朝から室町時代までの遺構は、溝３条（SD－１、－２、－８）･土坑３基（SK－３、－49、－57）・石組井戸２基（SE－２、－３）などがある。

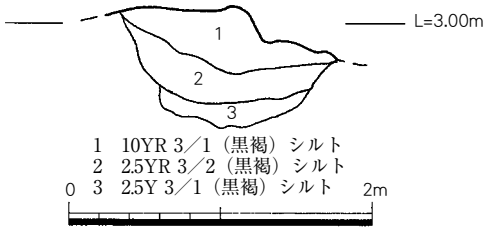
SD－１は調査区北東端部で検出した南北方向の溝で、遺構の第２層部分（2.5Y ３／２（黒褐）粗砂混シルト）が出土遺物から16世紀後半段階の遺構と考えられる。SD－１第２層部分は幅3.0ｍ、深さ30㎝、検出長12.32ｍを測るもので、溝の走行方向は座標北から東へ20°傾いた方向性を示す（第６図、図版20）。SD－１第２層部分はSD－２第２・３層部分と対応するもので、SD－１は調査区南東隅部で西にほぼ直角に屈折しSD－２に繋がるものとみられる。瀬戸・美濃系天目茶椀や中国製染付などが出土している（第38図、図版46）。

SD－２は調査区南東端部のY=－73950m付近から西方向にY=－73970m付近までの間で検出した

溝で、遺構の第２・３層部分が出土遺物から16世紀後半段階の遺構と考えられる。遺構は幅６ｍ以上、深さ56㎝、検出長19.25ｍの規模を測るもので、溝の走行方向は座標東から南へ11°傾いた方向性を示す（第６図、図版21）。この溝は東端調査外の延長部でSD－１第２層部分と繋がっているものとみられ、土師器堝、備前焼、中国製染付（第38図、図版45・46）、鉄砲玉（第62図、図版57）などが出土した。

SD－８は調査区中央部のY=－73981m付近から西方向にY=－73984m付近までの間で検出した溝で、幅1.9m、深さ86㎝、検出長2.8m以上の規模を測るもので、溝の走行方向は座標東から南へ10°傾いた方向性を示す。覆土の堆積は３単位みとめられ、底面の比高差から水は西から東へ流れたとみられる（第６・14図、図版21）。土師器堝などの出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。

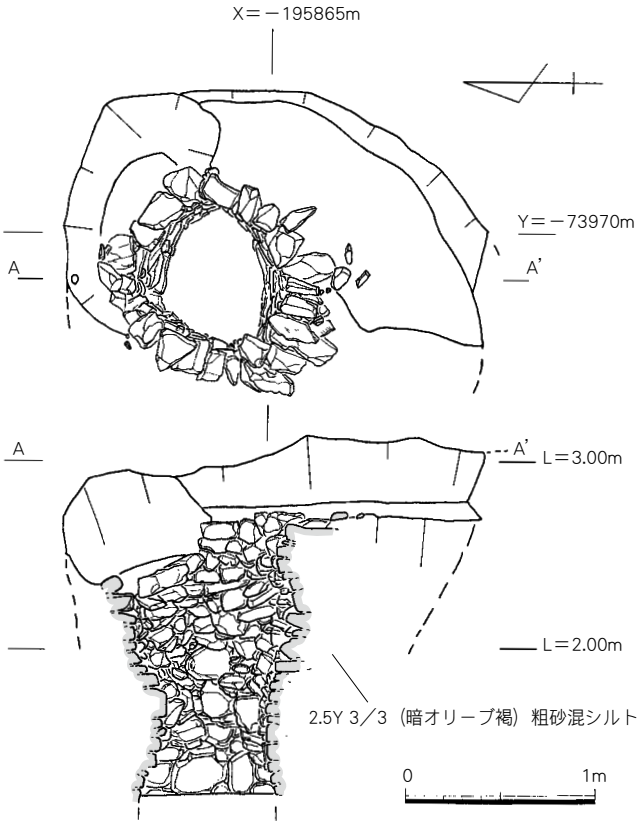
SK－３は調査区南東隅で検出した平面形が不整円形の大型土坑で、SB－３の上部を削り込むように掘削された後、SD－１に大部分を壊されている。遺構の南側半分は調査外であるが、東西7.3m、南北3.9m以上、深さ28㎝の規模を測る（第６図）。遺構内から石製品が出土したが（図版22）、SK－３の下にあるSB－３の所属遺物（第57図316）であったことが遺物整理時に判明した。中国製染付などの出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。



第14図　SD－８土層断面図

SK－49は調査区東側のY=－73958m付近で検出した平面形が楕円形の土坑である。長径を東西方向にもつもので、長径1.28m、短径65㎝、深さ20㎝の規模を測る（第６図、図版22）。土坑底部において、長さ約40㎝の砂岩礫を東西に２個据えたような状態で検出した。中国製染付などの出土遺物から、SK－３と同様に中世後期の遺構と考えられる。

SK－57 は調査区中央部のY=－73968m付近の北側寄りで検出した平面形が楕円形の土坑である。北側半分を壊されているが長径を南北方向にもつもので、長径1.32m以上、短径1.42m、深さ24㎝の規模を測る（第６図）。瀬戸・美濃系灰釉大皿などの出土遺物から、中世後期の遺構と考えられる。

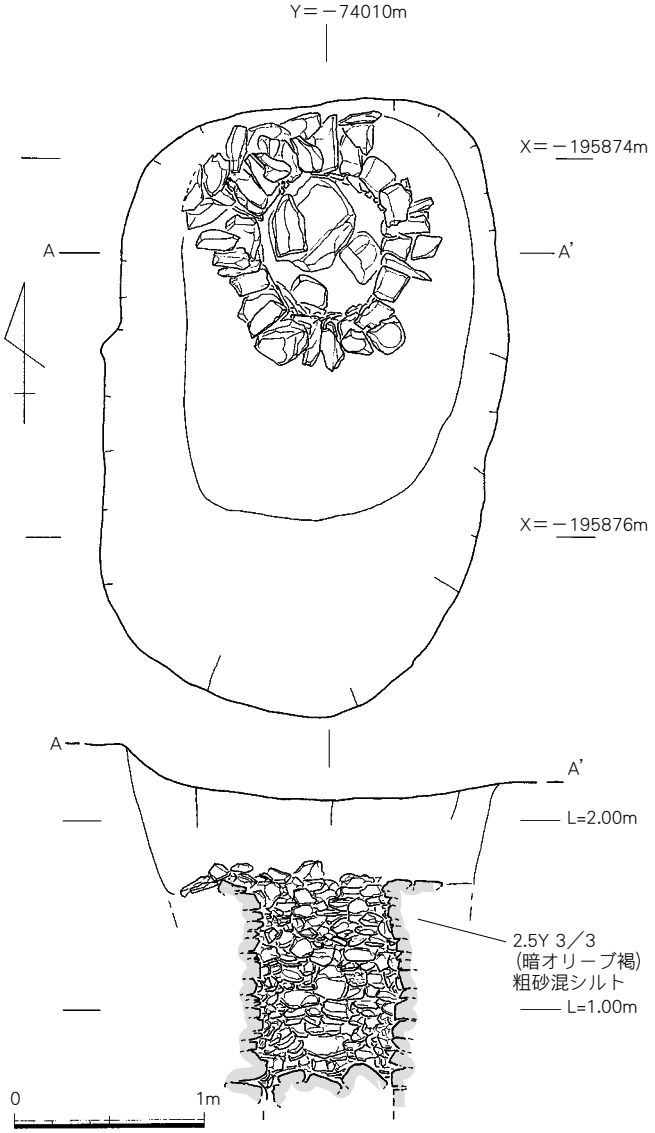


第15図　SE－２実測図

SE－２は調査区中央部のY=－73970m付近の北壁に接したところで検出した平面形が円形の石組井戸で、西側上部をSD

－５aによって削られている。掘方は直径2.8m、深さ1.1m以上を測るもので、石組は掘方の中心から北側寄りに築かれており、直径は80㎝、深さ1.53m以上を測る。石組の石材は砂岩を用いたもので、内部は深さ約１mの位置で石材が内側にせり出しており、崩落の危険性があったため底部まで完掘できなかった。井戸内部の覆土は2.5Y ３／２（黒褐）粗砂混シルト、掘方は2.5Y ３／３（暗オリーブ褐）粗砂混シルトである（第15図、図版23）。中国製青磁腰折稜花皿（第41図192）などの出土遺物から、中世後期の遺構と考えられる。

SE－３は調査区西端部の西壁に接したところで検出した平面形が円形の石組井戸で、北側上部をSK－127によって大きく壊されている。掘方は長径を南北方向にもつ楕円形のもので、長径3.24m、短径2.15㎝、深さ1.9m以上の規模を測る。石組は掘方の中心から北側寄りに築かれており、直径は80㎝、石組検出面からの深さ1.14m以上を測る。石組の石材は砂岩を用いたもので、内部は石材がほぼ垂直に積み上げられており、原位置を保っているものとみられたが、掘削深が深くなり崩落の危険性があったため底部まで完掘できなかった。覆土は2.5Y ３／２（黒褐）粗砂混シルト、掘方は2.5Y ３／３（暗オリーブ褐）粗砂混シルトである（第16図、図版23）。石組検出面からの深さ約１mで完形の石仏が出土した（第60図、図版24・57）。また、石仏と共に出土した結晶片岩の板石などには火を受けた痕跡が認められた（写真１）。瓦質土器火鉢、備前焼大甕・壺などの土器の他、平瓦・丸瓦（第47図235、図版53）などの出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。




第16図　SE－３実測図

写真１ SE－３出土の火を受けた石材

## 第５節　近世の遺構

### １．江戸時代前期

江戸時代前期の遺構として、SD－１とSD－２が前代から継続して営まれており、それに溝１条（SD－５b）・土坑４基（SK－43、SK－115、SK－118、－120）などがある。

SD－１の第１層部分（10YR ３／１（黒褐）粗砂混シルト）は出土遺物から17世紀代の遺構と考えられる。遺構の規模は幅9.1m、深さ34㎝、検出長14.5mを測る（第６図、図版20）。SD－１第１層部分はSD－２第１層部分と対応するもので、SD－１は調査区南東隅部で西にほぼ直角に屈折しSD－２に繋がる。瀬戸・美濃系の志野皿や肥前系染付椀、備前焼建水・徳利（第45図225・226、図版53）などが出土している。

SD－２の第１層部分（10YR ３／１（黒褐）粗砂混シルト）は出土遺物から17世紀代の遺構と考えられる。遺構は幅６m以上、深さ56㎝、検出長19.25mの規模を測る（第６図、図版21）。この溝は東端調査外の延長部でSD－１第１層部分と繋がっているものとみられ、肥前系染付椀・唐津皿などが出土した。

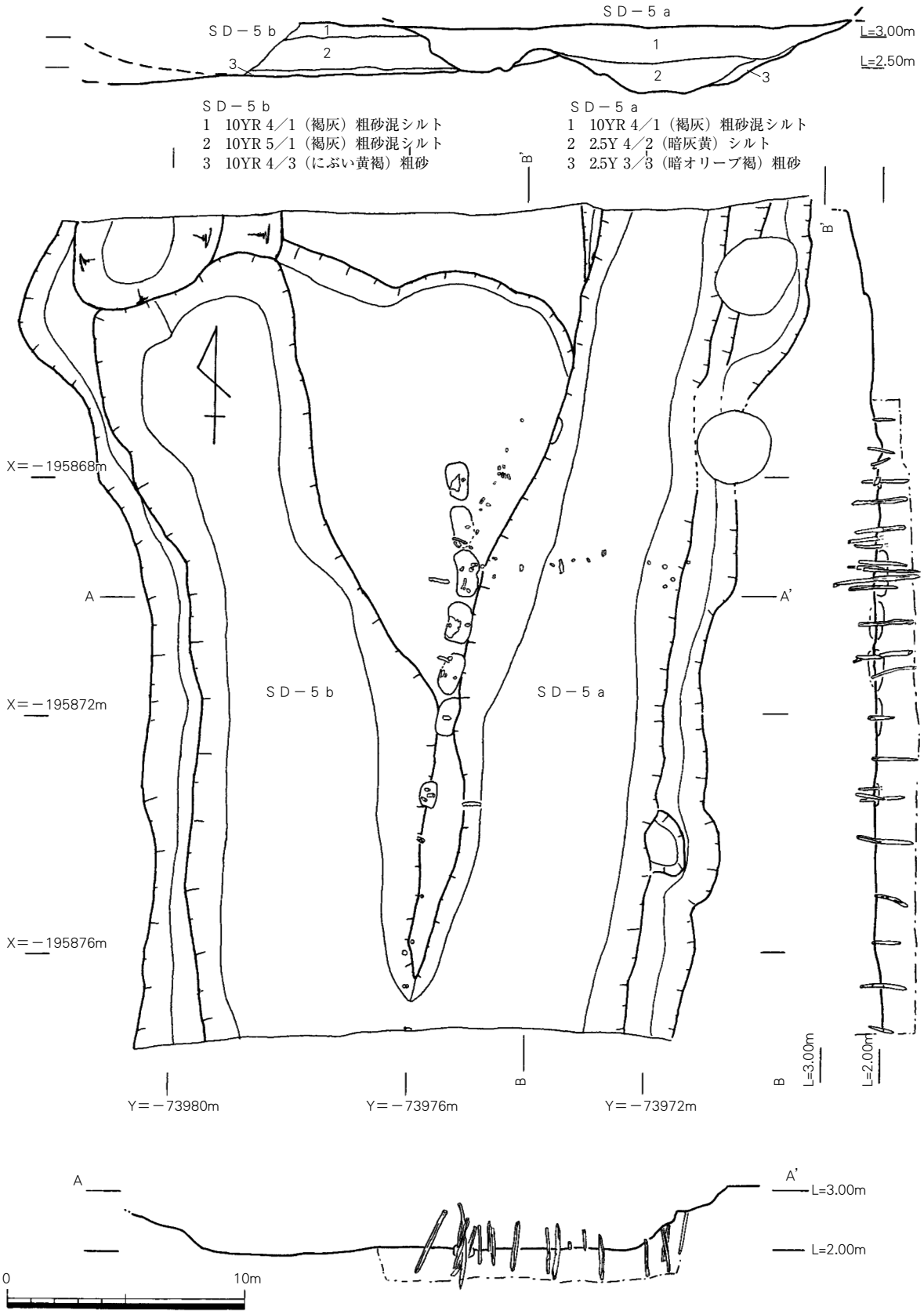
SD－５bは調査区中央部で検出した南北方向の大溝で、東西に調査区を分断するものである。東側の肩部をSD－５aによって壊されており、幅6.65m以上、検出長14.2m、深さ1.3mの規模を測り、覆土の堆積は３単位みとめられる（第６・17図、図版24・25）。溝の走行方向は座標北から東へ２°傾いた方向性を示すもので、溝幅は約９mの規模を復元できる。また、溝底面の比高差から、流路方向は北から南方向へ水が流れたとみられる。土師質・瓦質土器、備前焼、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶器などの出土遺物（第43・44図、図版50～53）から17世紀前半の埋没時期と考えられるが、中世後期のもの（第39・40図、図版46～48）を多く含んでおり、掘削時期は中世後期に遡る可能性がある。

SK－43は調査区東側のY=－73962m付近の北壁寄りの位置で検出した平面形は円形の土坑で、直径85.0㎝、深さ９㎝の規模を測る（第６図）。出土した肥前系陶磁器などの遺物から江戸時代前期の遺構と考えられる。

SK－115は調査区西側の第１遺構面、Y=－74005m付近の北壁寄りの位置で検出した平面形が楕円形の土坑である。長径を東西方向にもつもので、長径1.25m、短径1.1m、深さ19㎝の規模を測る（第６図）。なお、覆土に被熱した壁土が多く混じっていたことや遺構の一部に被熱面がみられること、周囲に炭化物がみられる一定の部分が認められることなどから、この土坑は竈の基部を構成していた可能性がある。瓦質土器火鉢、備前焼壺などが出土した。

SK－118は調査区西側の第１遺構面で検出したもので、前出のSK－115の北西に接して掘削された土坑である。なお、同じ位置の第２遺構面で検出したP－233はこの土坑の下部構造とみられ備前焼水屋甕の底部が据えられていたことから埋甕遺構と考えられる（図版25）。SK－118は平面形が楕円形であり、長径を南北方向にもつもので、長径1.2m、短径1.05m、P－233を合わせた深さは43㎝の規模を測る（第６図）。P－233に据えられた甕底部の直径は23.0㎝で、底面の標高はL=2.94mである。遺物は据えられていた備前焼水屋甕と瓦質土器火鉢（第42図、図版50）などが出土しており、それらの遺物から16世紀末から17世紀前半の時期の遺構と考えられる。

SK－120も調査区西側の第１遺構面で検出したもので、前出のSK－115の北東約１mの距離に掘


ＳＤ－５ａ
ＳＤ－５ｂ
L=3.00m
L=2.50m
ＳＤ－５ｂ
1　10YR 4／1（褐灰）粗砂混シルト
2　10YR 5／1（褐灰）粗砂混シルト
3　10YR 4／3（にぶい黄褐）粗砂
ＳＤ－５ａ
1　10YR 4／1（褐灰）粗砂混シルト
2　2.5Y 4／2（暗灰黄）シルト
3　2.5Y 3／3（暗オリーブ褐）粗砂
X＝－195868m
X＝－195872m
X＝－195876m
Y＝－73980m
Y＝－73976m
Y＝－73972m
L=3.00m
L=2.00m
0
10m

第17図　SD－５実測図

削された土坑である。東西方向に長径をもつ隅円方形のもので、長径2.21m、短径1.91m、深さ44㎝の規模を測る（第６図）。刷毛目唐津鉢などの出土遺物から17世紀代の遺構と考えられる。

## ２．江戸時代後期

江戸時代後期の遺構は、SD－５bを埋め立てて流路を東側に付け替えた大溝１条（SD－５a）・井戸（SE－１）･粘土採掘土坑４基（SK－73、－74、－124、－127）･土坑１基（SK－122）などがある。

SD－５aは調査区中央部で検出した南北方向の大溝で、東西に調査区を分断するものである。SD－５bが埋没した後、掘削位置を東側にずらせて掘削したものである。幅6.35～7.65m、検出長14.2m、深さ1.3mの規模を測り、覆土の堆積は３単位みとめられる（第６・17図、図版24・25）。溝の走行方向は座標北から東へ10°傾いた方向性を示す。溝底面の比高差から、SD－５bと同様に流路方向は北から南方向へ水が流れたものとみられる。SD－５b埋没部分と重複する西側肩部には、粘土質の土を充填した俵を土止めに用い杭を打ち込んで固定した護岸施設が設けられており、SD－５b埋没部分が軟弱地盤となっていたための補強とみられる（第17図、図版26～29）。土俵は長さ1.0～1.9m、幅0.7～1.0m、杭は直径５～10㎝、長さ0.8～3.6mの規模を測るもので、杭41本が調査区南壁からSD－５bと重複した位置までの長さ26.5mの範囲に打設されていた。溝内部のX=－195870m付近には、護岸の杭と同規模の杭18本を列状に打ち込み堰を設けていた。堰を構成する杭列は長さ11.2mの範囲にみられ、流路方向に対して73°の角度で設けられており、北側から来る水を堰き止め、西側に流していたものとみられる。以上のことから、SD－５aは灌漑水路と考えられる。溝の埋没時期は大谷焼甕（第45図229、図版53）などの出土遺物から江戸時代末期頃とみられる。

SE－１は調査区東側のY=－73962m付近の北壁寄りの位置で検出した平面形は円形の井戸とみられる遺構で、直径1.2㎝、深さ1.35mの規模を測る（第６図）。覆土は2.5Y ３／２（黒褐）粗砂混シルトである。出土した肥前系陶磁器や堺焼擂鉢などの遺物から江戸時代後期の遺構と考えられる。

SK－73は調査区西側のY=－73985m付近で検出した南北方向に長軸をもつ平面形は隅円長方形の土坑である。遺構の上半部を大きく撹乱されているが、長さ6.1m以上、幅4.5m、深さ1.3mの規模を測るもので、南半側は調査区外に伸びる（第６図）。南北方向の長辺は座標北から東に10°傾いた方向性を示す。遺構の壁面が垂直や内傾して掘削されていること、底面に凹凸をもつこと、規模や方向性などから粘土採掘土坑とみられる。出土した肥前系陶磁器や堺焼擂鉢などの遺物から江戸時代後期の遺構と考えられる。

SK－74はSK－73の北側に接して掘削された南北方向に長軸をもつ平面形は隅円長方形の土坑である（第６図）。遺構の南半部をSK－74に切られており、遺構上半部は大きく撹乱され東側の一部を失っているが、長さ5.9m以上、幅3.2m、深さ0.9mの規模を測るものである。SK－73と同様に南北方向の長辺は座標北から東に10°傾いた方向性を示し、遺構の特徴から粘土採掘土坑とみられる。出土した肥前系陶磁器や瀬戸・美濃系褐釉壺などの遺物から江戸時代後期の遺構と考えられる。明確ではないが、SK－74はSK－73と一連の遺構である可能性もある。

SK－124、SK－127、SK－122は調査区西側の第１遺構面で検出した土坑である。

SK－124は、Y=－74997m付近からY=－74000mにかけての位置の調査区南壁寄りで検出した東西方向に長軸を持つ､平面形が隅円長方形の土坑である。東半部が大きく撹乱され失われているが、

東西長2.9m、南北幅2.65m、深さ47cmの規模を測る（第６図）。後述のSK－127の東延長線上に位置することや類似した掘削状況を示し、南北幅の規模が一致することなどから粘土採掘土坑とみられる。丹波焼褐釉徳利や丸桟瓦などが出土した。

SK－127、Y=－74007m付近から西壁にかけて検出した東西方向に長軸を持つ、平面形が隅円長方形の土坑である。東西長4.9m以上、南北幅2.64m、深さ40cmの規模を測るもので、西半部は調査区外に伸びる（第６図）。東西方向の長辺は座標東から南に７°傾いた方向性を示す。遺構の壁面が垂直や内傾して掘削されていること、底面に凹凸をもつこと、規模や方向性などから粘土採掘土坑とみられる。肥前系陶磁器、丹波焼水屋甕、堺焼擂鉢などが出土した。

SK－122は調査区西側の第１遺構面のY=－74001m付近で検出した北西から南東方向に長軸を持つ、平面形が隅円長方形の土坑である。北西側２／３の部分が深く掘削されている。長軸長1.51m、短軸長1.2m、深さ38cmの規模を測る（第６図）。肥前系陶磁器、京・信楽系陶器椀、丹波焼褐釉徳利などが出土した。

## 第６節　近代の遺構

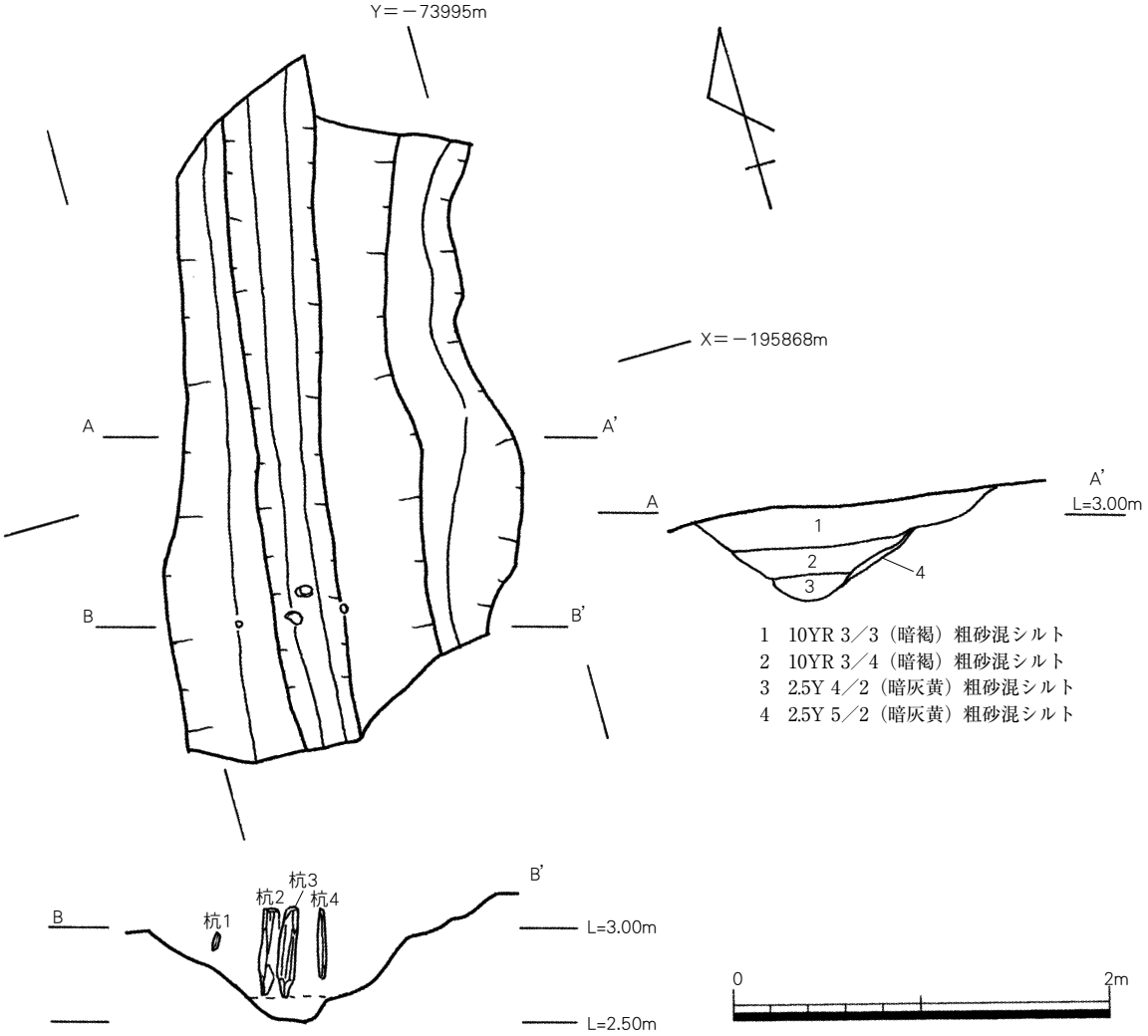
近代（明治時代から昭和時代前期まで）の遺構としては、溝１条（SD－７）・農耕に関する小溝群（SD－11）・粘土採掘土坑２基（SX－３、SK－36）・埋桶２基（SK－55、－67）・石垣１基（SV－1・SX－７）などがある。

SD－７は調査区西側のY=－73995m付近で検出した南北方向の溝で、北側と中央部及び南側上部を撹乱坑によって大きく削平されている。検出長12.4m、幅1.9m、深さ64cmの規模を測るもので、覆土は４単位みとめられる（第６・18図、図版30）。溝の走行方向は座標北から東へ14°傾いた方向性を示す。底面の標高差から北から南へ水を流したものと考えられる。X=－195868.8mの位置で流路に直交した方向で杭列を検出した。杭列の杭は４本で、直径５～10cm、残存長10～45cmの規模を測る。この杭列は堰の施設とみられ、そのことからSD－７は灌漑用水路と考えられる。瀬戸・美濃系染付湯呑椀などが出土した。

SD－11は調査区西側の第１遺構面、Y=－74001～－74005 m間の南半部で検出した。東西及び南北方向の小溝群で、覆土の状況から一連の遺構である（図版31）。小溝は幅25m、深さ５～10cmの規模を測るもので、溝の走行方向は座標北から東へ10°傾いた方向性を示す。後述のSV－１の石垣面から約30cm隔てて面に並行に東西方向の小溝を長さ3.9m分検出し、そこから南へ直交する小溝が３条派生しており、西側のものから3.75m、2.45m、1.95mの長さを検出した。なお、東西方向の小溝の西側の一部は二重に掘られている。これらの小溝群は農耕に関する小溝群と考えられる。

SX－３は調査区中央部のY=－73968m付近で検出した南北方向に長軸をもつ平面形は隅円長方形の土坑である（第６図、図版31）。長さ8.4m以上、幅2.75m、深さ1.44mの規模を測るもので、南半側は調査区外に伸びる。覆土は10Y ３／１（黒褐）粗砂混シルトである。南北方向の長辺は座標北から東に13°傾いた方向性を示す。遺構の壁面が垂直や内傾して掘削されていること、底面に凹凸をもつこと、規模や方向性などから粘土採掘土坑とみられる。肥前系染付広東椀などが出土した。

SK－36はSX－３の東側約２mの距離に掘削された不整円形の土坑である（第６図）。遺構の南半部を削平され、遺構の一部を失っているが、東西1.7m、南北1.9m以上、深さ43cmの規模を測るも




第18図　SD－７実測図

のである。覆土はSX－３と同様に10Y ３／１（黒褐）粗砂混シルトである。遺構の壁面が垂直や内傾して掘削されていること、底面に凹凸をもつことなどの特徴からSX－３と同様に粘土採掘土坑とみられる。

SK－55は調査区中央部のY=－73971m付近の北側寄りの位置で検出した平面形が正円形の土坑である。直径1.25m、深さ40cmの規模を測るもので、木製の桶を埋設していたとみられる。

SK－67は、SK－55の南東約1.5mの距離に掘削された平面形が正円形の土坑である。直径1.1m、深さ13cmの規模を測るもので、木製桶底板の木質が遺存していたことから、SK－55と同様に埋桶である（図版32）。

SV－１は石垣、SX－７はその裏込である。SV－１は調査区西側の第１遺構面、Y=－73999～－74004 m間、X=－195873m付近で検出した東西方向に積まれた石垣で、南側に面をもつものである。東西の端部は削平を受け失われているが、検出長4.5m、高さ33cmの規模を測る。石材には結晶片岩の割石を用いており、一石は一辺30～60cmの規模を測るもので、一列に１段分の12個を検出したが、２段以上の石積みは削平を受け失われたとみられる。石垣下部には直径約15cmの胴木が敷設された

ものである。石垣の構築方向は座標東から南へ10°傾いた方向性を示すことから、南側に隣接するSD－11と関連性が強いものと考えられる。SX－７はSV－１の裏込であり、石垣を積んだ方向に布掘りされたものである。幅1.2～1.3m、深さ12cmの規模を測る。裏込の埋土には礫を交えないことから高さの低い石垣であったとみられる。

## 第6章　出土遺物

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、瓦器、土師質・瓦質土器、中世陶器、輸入陶磁器、近世陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、石造物、金属製品、木製品などコンテナ135箱分が出土した。遺物は、弥生時代から近世までの時期の各時代を通じた多種類のものがみられる。

以下、量的に最も多い土器については、所属する各時代順に第１節から第５節にまとめ、遺構から一括して出土したものについては遺構出土土器として扱い、出土量の少ないものや時期の異なる遺構に混入したもの、包含層など本来の所属時期から遊離したものなどをその他遺構等出土土器として各項目にまとめた。

土器以外の遺物は、埴輪、瓦、土製品、石器･石製品、金属製品、木製品として第６節から第11節に種類毎にまとめて記述する。

### 第1節　弥生時代の土器

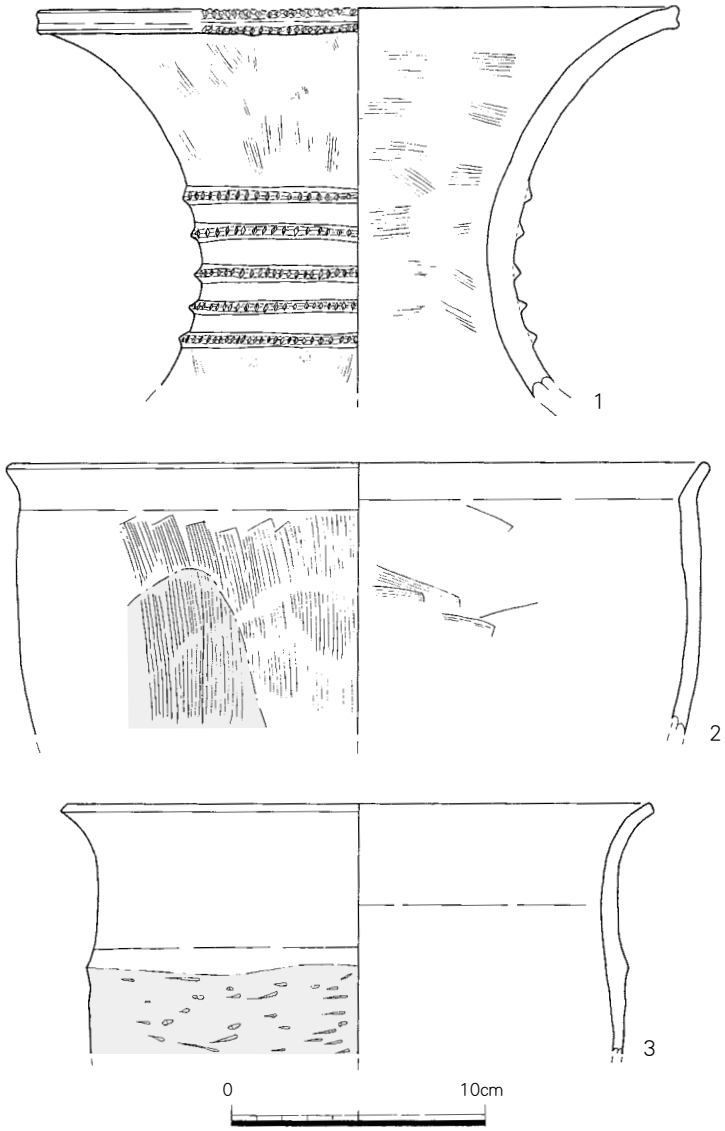
弥生時代の土器は、壺・甕・鉢・高杯などが出土した（１～50）。主な遺構別に述べる。

[SK-148出土土器]（第19図１～３、図版35）

広口壺（１）と甕（２・３）などが出土した。１は大型広口壺で、３は紀伊型甕である。これらの土器は前期後葉のものとみられる。なお、SK－148はⅡ様式の土器も含んでいる。

[SB－５出土土器]（第20図４・５、図版35）

蓋（４）と甕（５）が出土した。５は紀伊型甕である。これらの




第19図　遺物実測図１

土器は中期初頭のものとみられる。

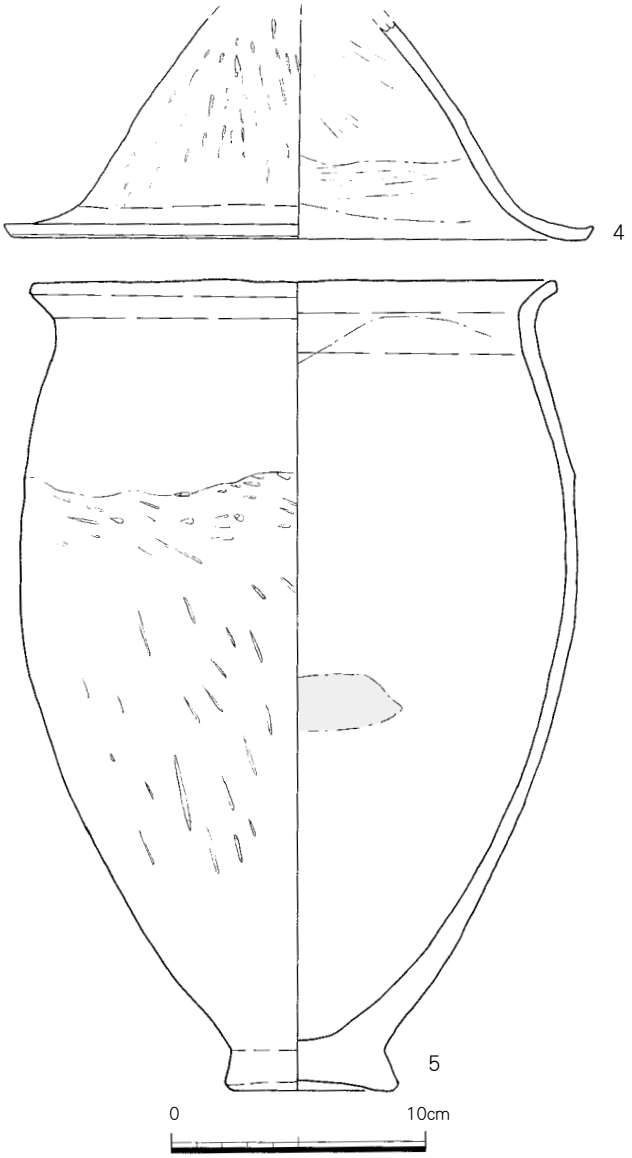
[SK－125出土土器]（第21～23図、巻頭図版２、図版35・36）

６から14は壺である。６～11は広口壺で、６～９は大型、10・11は中型のものである。12・13は直口壺、14は細頸壺、15は鉢、16は高杯脚台部である。14は播磨系の可能性があるもので、算盤玉状の体部の最大径と頸部下位に隆帯を巡らし、その間を縦方向に隆帯をほぼ等間隔に貼り付けてつなぐものである。これらの土器は、紀伊第Ⅲ－１様式の一群のものと考えられる。

[その他遺構等出土土器]（第24～28図17～50、図版37～40）

壺（17～28）、甕（29～37）、蓋（38・39）、高杯（40～43）、鉢（44～50）などが出土している。

壺には広口壺（17～24）、直口壺（25・26）、有段口縁壺（27）、高床建物が描かれた壺体部（28）がある。28はP－200出土のもので、大型の有段口縁壺の可能性がある。



第20図　遺物実測図２

甕は遠賀川系（29）、紀伊型（30～32）、瀬戸内系（36）のものがあり、蓋には生駒西麓産（39）のものがみられる。高杯は杯部が水平口縁を有するとみられるもの（40・41）、脚部中位で外方向に広がる裾部をもつもの（42）、脚部に円形の透かしを２段巡らすもの（43）がある。

鉢については、44の大型のものは播磨系の可能性がある。46は椀型のもので体部下半を削って仕上げている。47～50は台付鉢である。台付鉢のうち48は中部瀬戸内系のものとみられる。これらの鉢は中期前葉から後葉のものとみられる。

## 第２節 古墳時代の土器

古墳時代の土器は、土師器（51～63）と須恵器（64）が出土した。土師器は、壺・甕・甑・高杯・製塩土器、須恵器は杯蓋などがある。他の時期の土器に比べ出土量は少ない傾向がある。出土の状況についても、新しい時期の遺構に混入して出土したものが多い。

[SK－17出土土器]（第29図51・52、図版40）

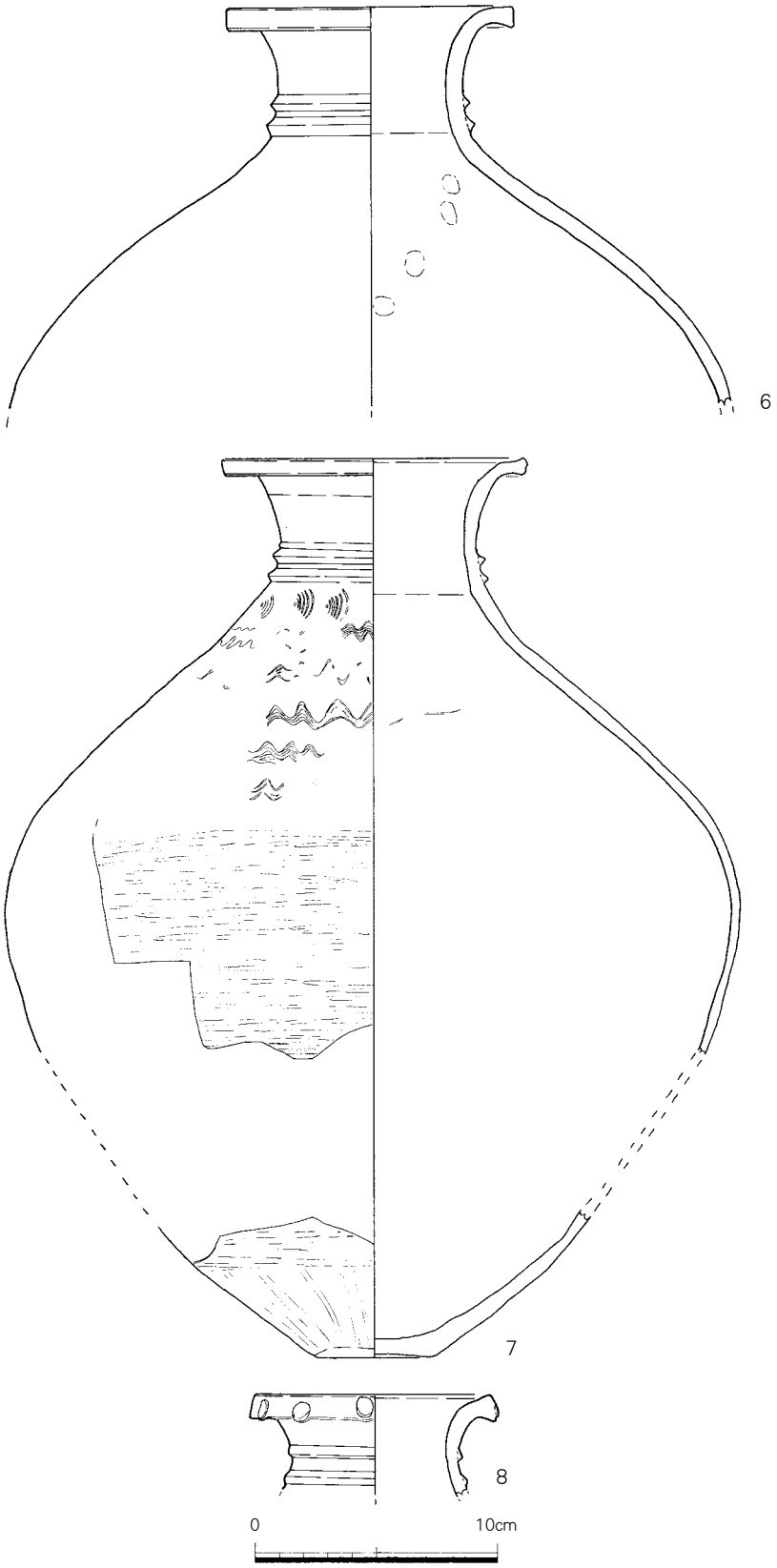
51・52はSK－17出土土器である。51は土師器の有稜高杯で布留式古段階のものとみられる。これらのほかにSK－17からは製塩土器や須恵器も出土しており、遺構の時期は中期とみられる。

[SK－133出土土器]（第29図53～56、図版40）

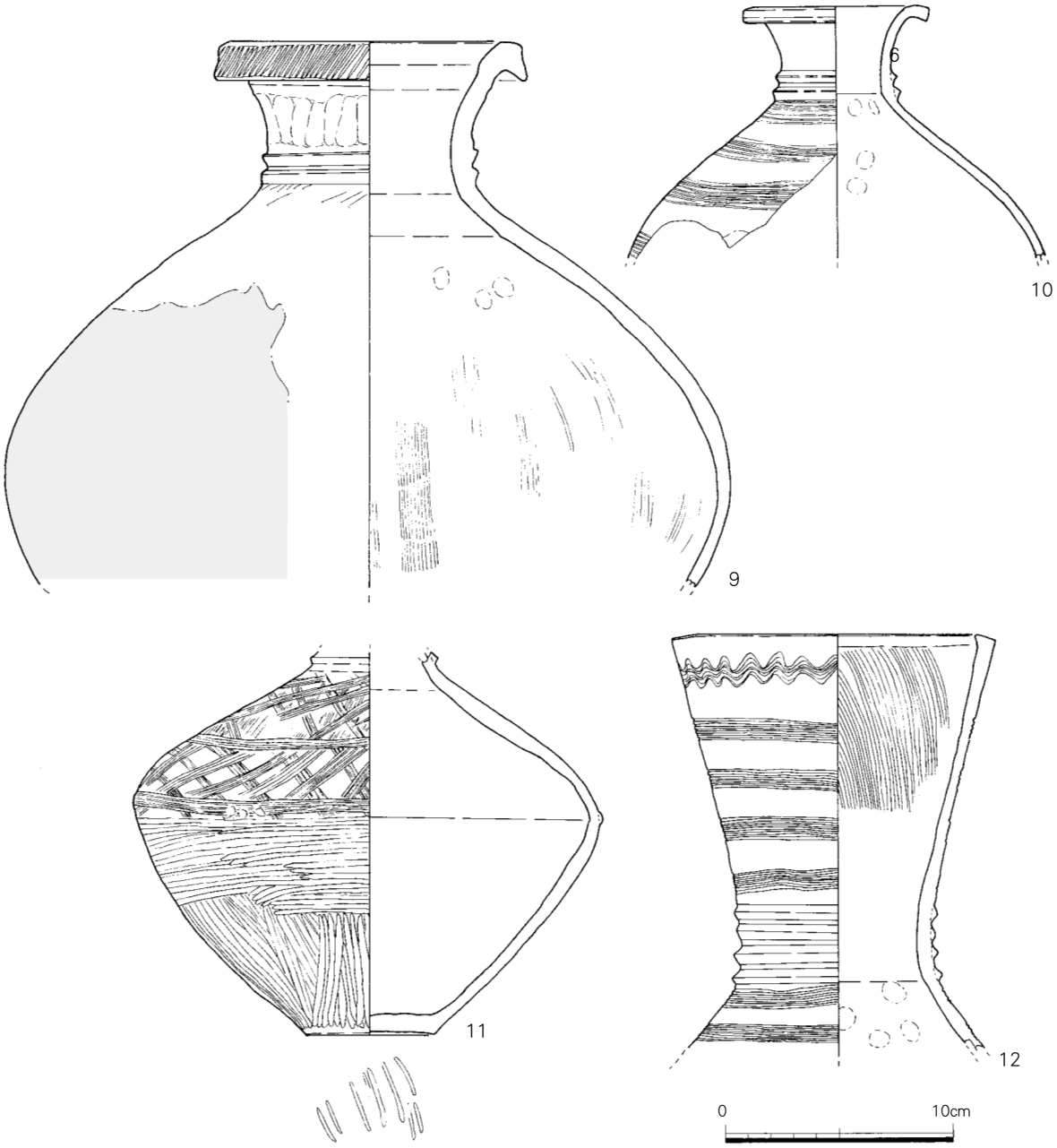
53から56はSK－133出土土器である。53と54は土師器の高杯で、そのうち53は椀型高杯とみられる。55・56は脚台式の製塩土器である。この遺構も前期の土器を含むが中期の遺構であると考えられる。

[その他遺構等出土土器]（第29図57～64、図版40・41）

57は小形丸底壺、59・60は椀型高杯で布留式古段階のものとみられる。58は鉢、61は甕、62は甑、63は丸底式の製塩土器である。64は須恵器杯蓋で６世紀中頃のものである。




第21図　遺物実測図３




第22図　遺物実測図４

## 第３節　古代の土器

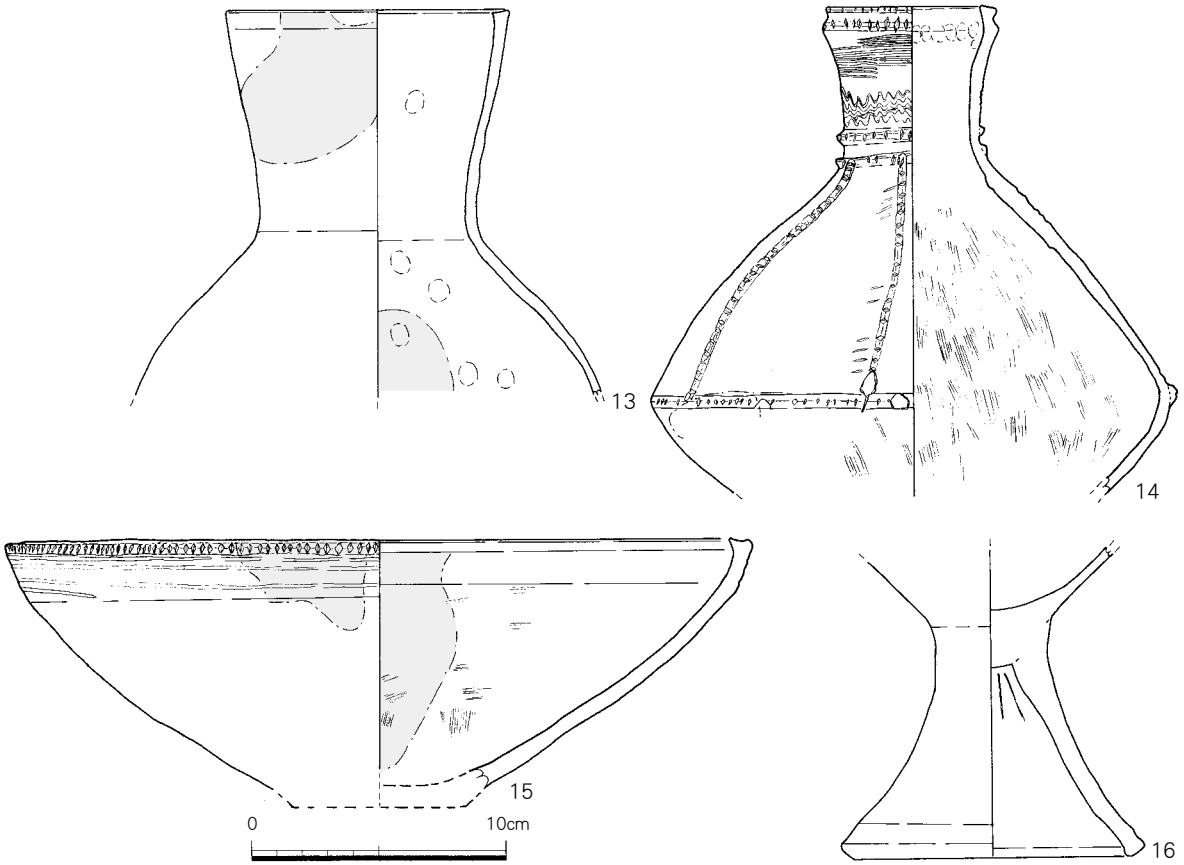
### １．飛鳥時代

[SK－20出土土器]（第30図65～73、図版41・42）

土師器（65～67）と須恵器（68～73）が出土した。土師器は杯（65）・長胴甕（66）・甑（67）など、須恵器は杯蓋（68・69）・杯身（70・71）・平瓶（72）・甕（73）などがある。65の土師器は杯A、70・71の須恵器は杯Gである。これらは７世紀後半のものとみられる。

[SK－61出土土器]（第31図74～78、図版42・43）

土師器と須恵器が出土した。土師器は甕（74・75）、須恵器は杯（76～78）などがある。76・77は杯A、78は杯Bである。これらは７世紀後半のものとみられる。




第23図　遺物実測図５

[その他遺構等出土土器]（第32図79 ～ 85、図版43）

その他の遺構等からは須恵器（79 ～ 85）が出土している。須恵器は杯身（79 ～ 82）・盤（83）・台付皿（84）・平瓶（85）などがある。

## ２．平安時代

[SK－107出土土器]（第33図86 ～ 95、図版43）

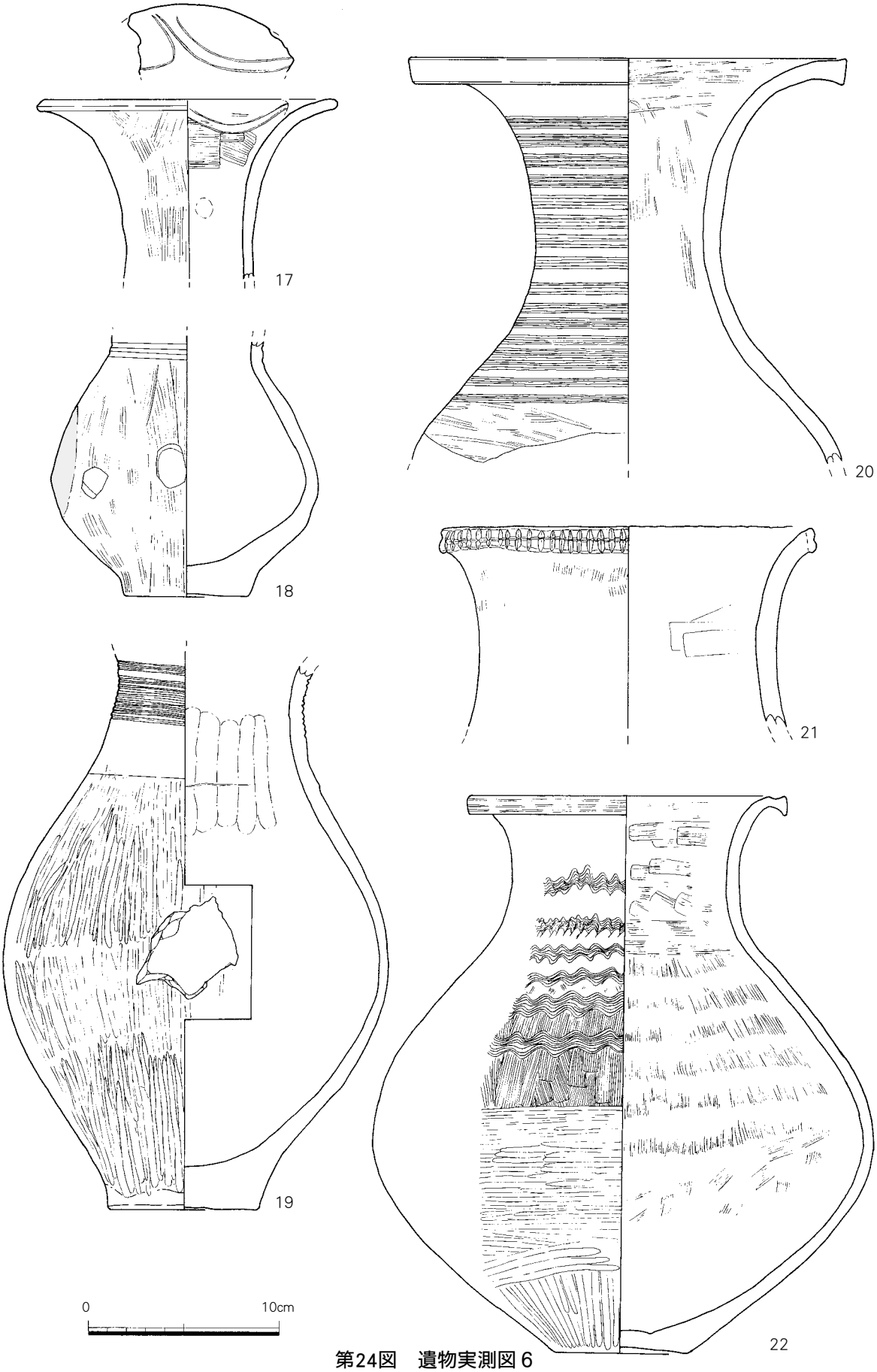
土師器（86 ～ 93）、黒色土器（94・95）などが出土した。土師器は杯（86・87）・皿（88 ～ 90）と台付皿（91・92）、椀（93）がある。黒色土器はA類椀（94）とB類椀（95）がある。95は高台の内側に接地しない小型の高台をもつもので、二重高台といわれるものである。また、ミニチュア土製品の壺（第50図253）や両溝式土錘（第50図265･266）なども出土している。以上の出土遺物から、この遺構の時期は10世紀後半から11世紀前半とみられる。

[SK－165出土土器]（第34図96・97、図版44）

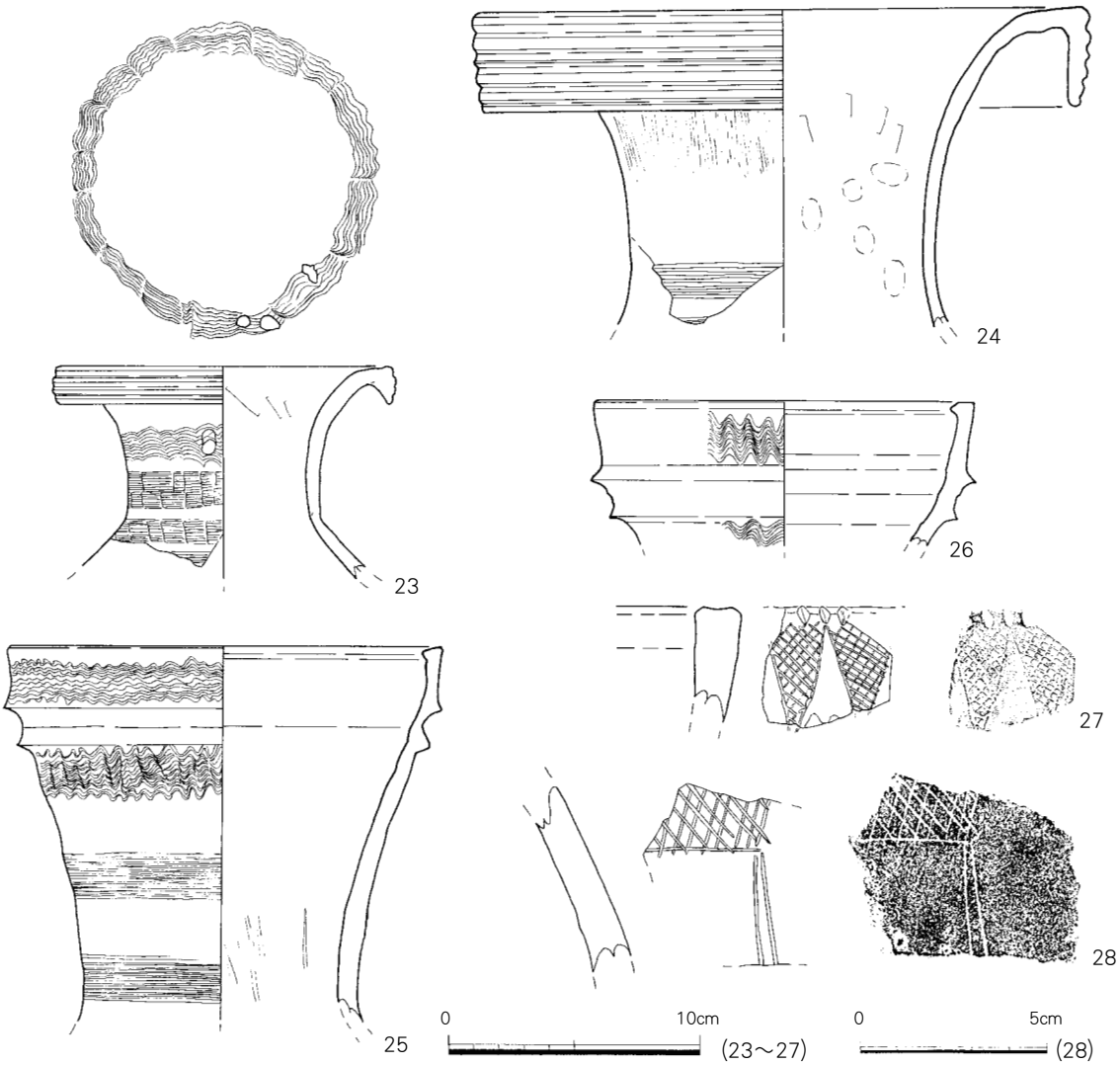
土師器（96）と黒色土器（97）などが出土した。96は小型の土師器椀、97は黒色土器A類椀の体部下半である。また、平瓦（第48図240）や両溝式土錘（第50図264）なども出土している。

[SK－169出土土器]（第34図98 ～ 109、図版44）

土師器（98 ～ 107、109）と黒色土器（108）などが出土した。土師器は皿で、平底のもの（98 ～ 105、109）と台付のもの（106･107）がある。平底の皿は法量から大（98･99）、中（104）、小（100




第24図　遺物実測図６




第25図　遺物実測図７

～103、105、109）に分けられる。また、底部処理方法としては、回転糸切（98・99、103・104、109）、回転篦切（105）、手づくね成形（100～102）の３通りがみられる。100･101はいわゆる「て」字状口縁皿である。109は皿底部を加工して円板状土製品に転用したものである。また、黒色土器（108）はA類椀である。なお、この遺構からは平瓦（第48図239）なども出土している。

## 第４節　中世の土器・陶磁器

### １．鎌倉時代

[SK－96出土土器]（第35図110～117、図版44）

土師器（110～113）と瓦器（114～117）などが出土した。

土師器は皿（110・111）・釜（112・113）、瓦器は椀（114～116）・皿（117）がある。

土師器皿は大皿（110）と小皿（111）がある。土師器釜は口縁部の断面が「く」の字状に折り返すもので、体部上半に鍔が退化した突帯が一条施される。瓦器椀は、114・115は紀伊型瓦器椀Ⅱ－2～Ⅲ－1期のもので、116は和泉型瓦器椀の可能性がある。時期は12世紀後半から13世紀前半のものである。

[SK－128出土土器]（第36図118～124、第41図194、図版45・50）

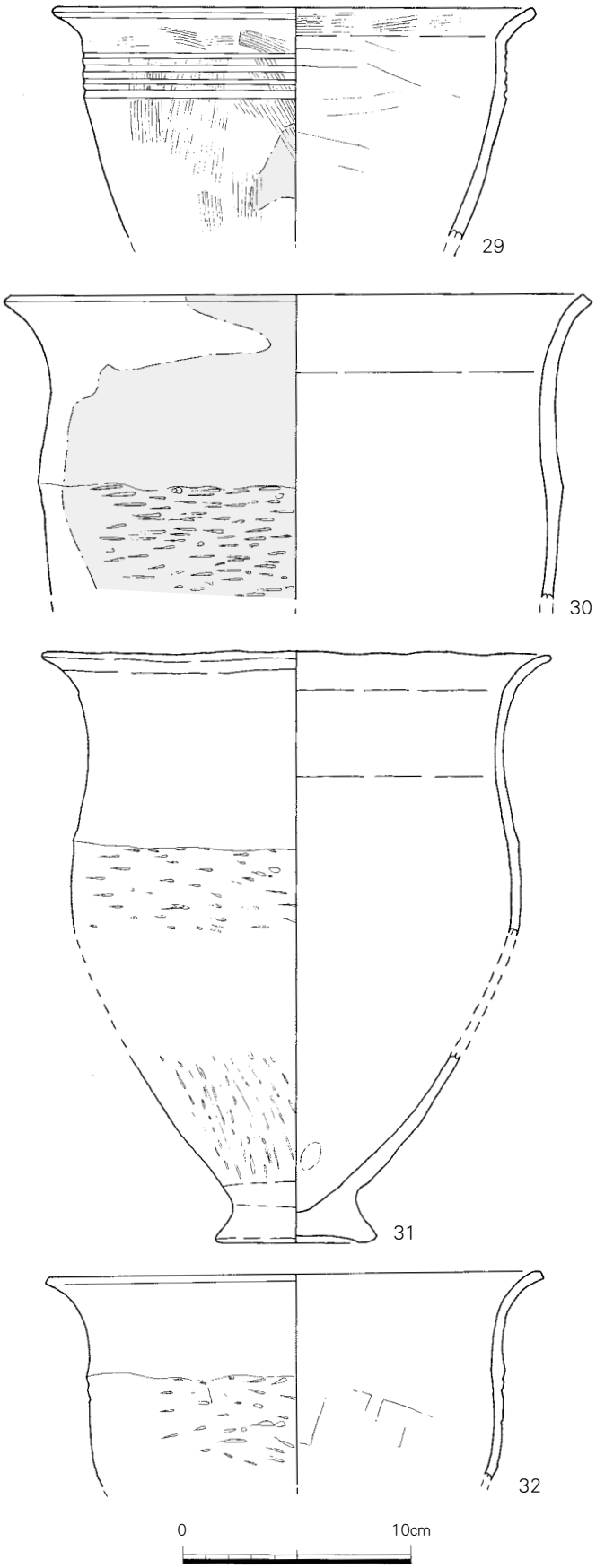
土師器（118～120）、瓦器（121・122）、山茶椀（123）、東播系須恵器（124）、中国製青白磁（194）などが出土した。

土師器は大皿（118）と小皿（119・120）がある。瓦器は椀（121）・皿（122）、山茶椀は皿（123）、東播系須恵器は捏鉢（124）が出土している。121は紀伊型瓦器椀Ⅱ－2～Ⅲ－1期のもので、123は底部調整が回転糸切未調整のものである。また、194は合子の身である。

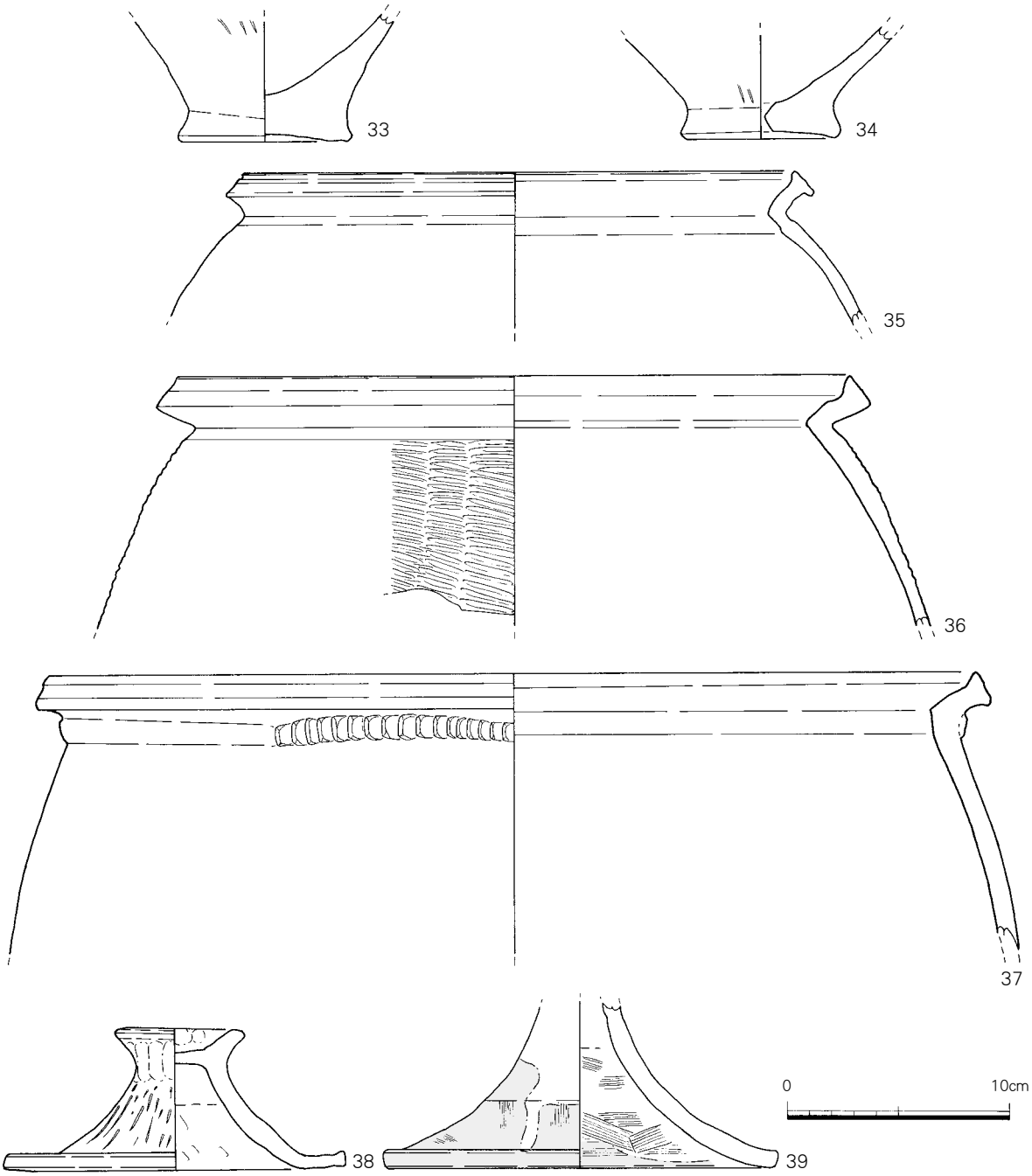
[SK－92出土土器]（第37図125～127、図版44）

土師器（125）と瓦器（126・127）などが出土した。

土師器は皿（125）、瓦器は皿（126）と椀（127）がある。127は紀伊型瓦器椀Ⅲ－2期のもので、時期は13世紀後半のものである。




第26図　遺物実測図８



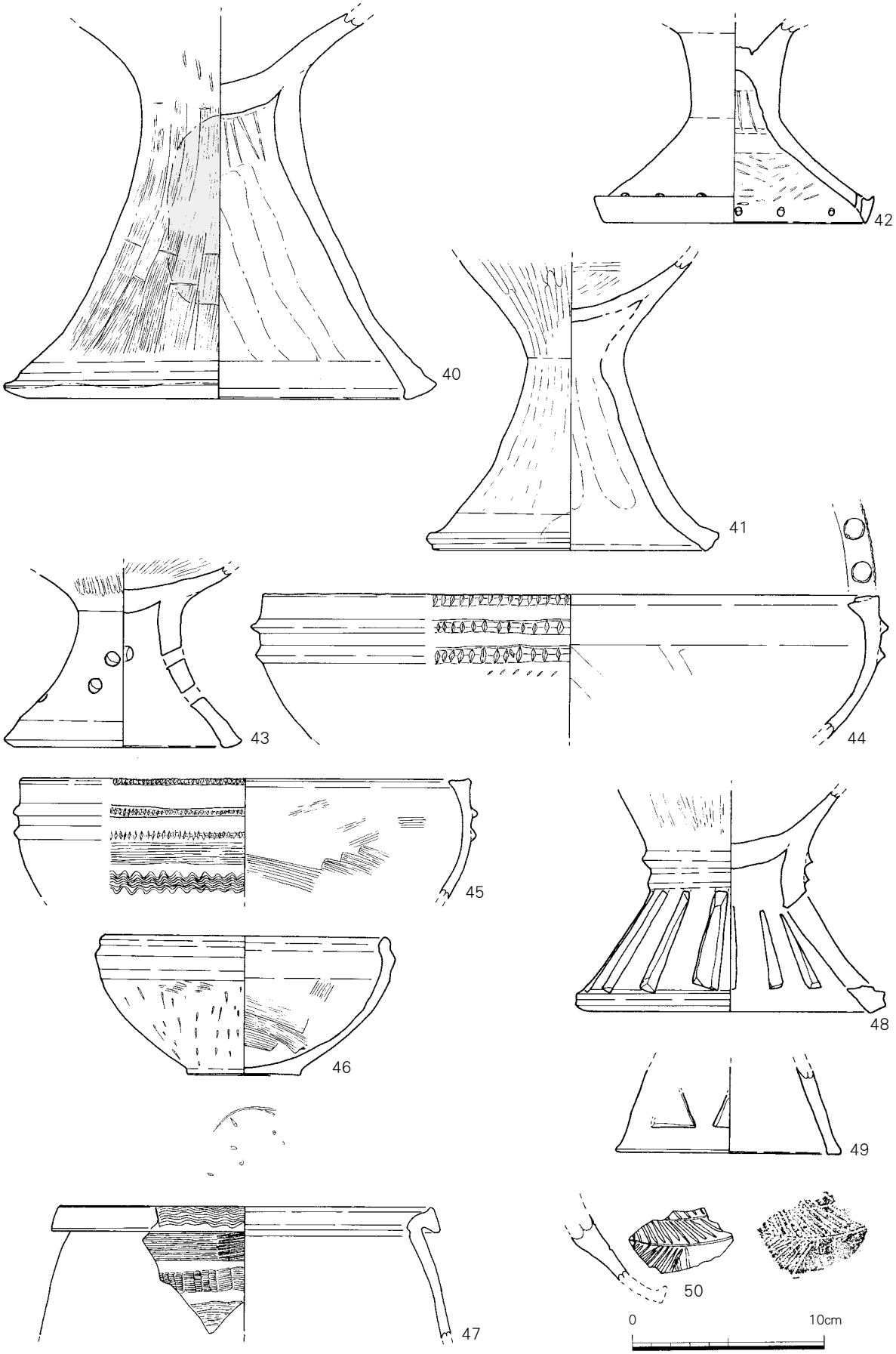

第27図　遺物実測図９

## ２．南北朝時代～室町時代

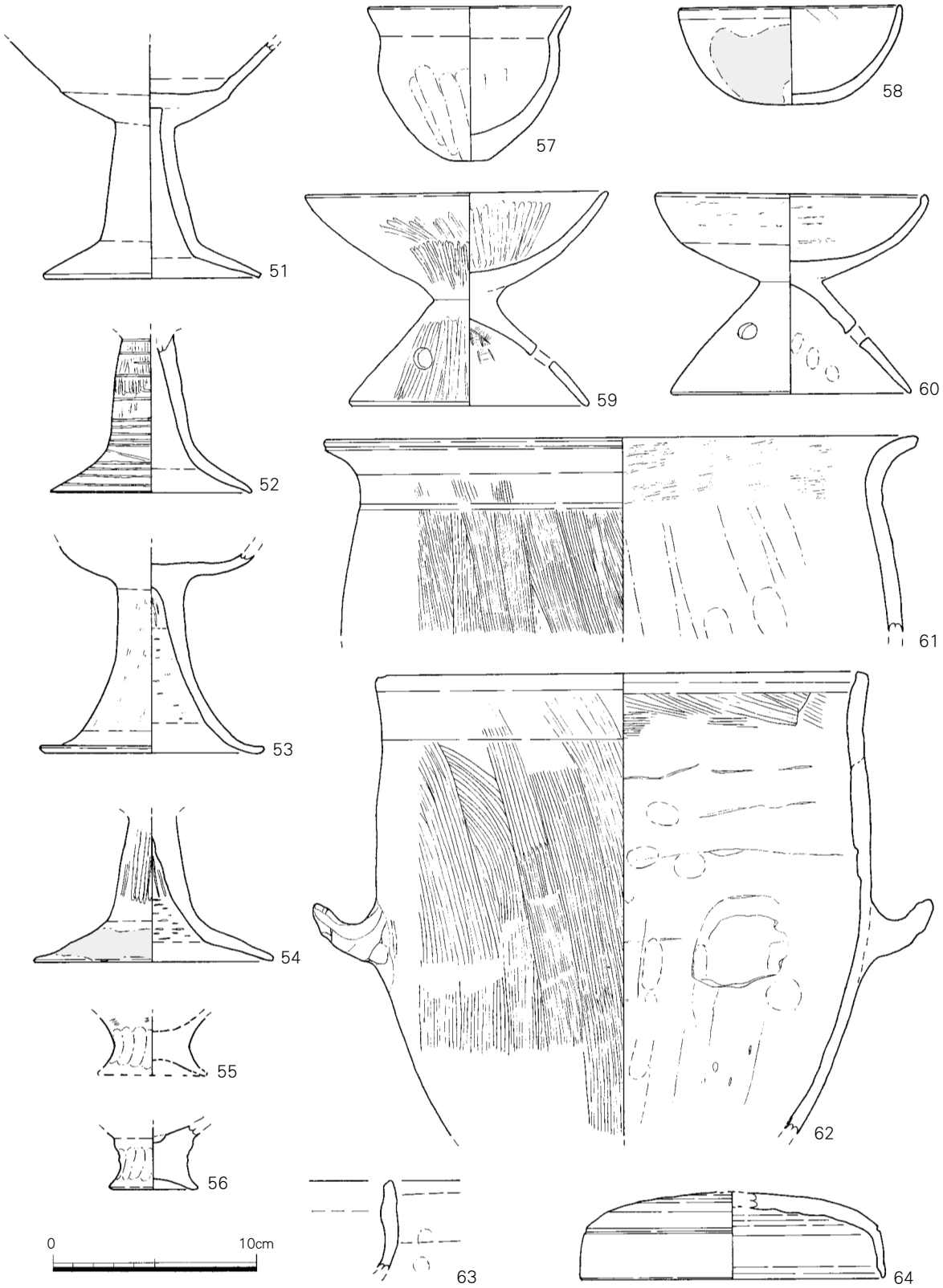
[SD－１・２出土土器]（第38図128 ～ 143、図版45・46）

SD－１・２の下層が当該時期の遺構であるが、上層に遊離した当該時期の遺物を含めてSD－１・２出土土器として報告する。

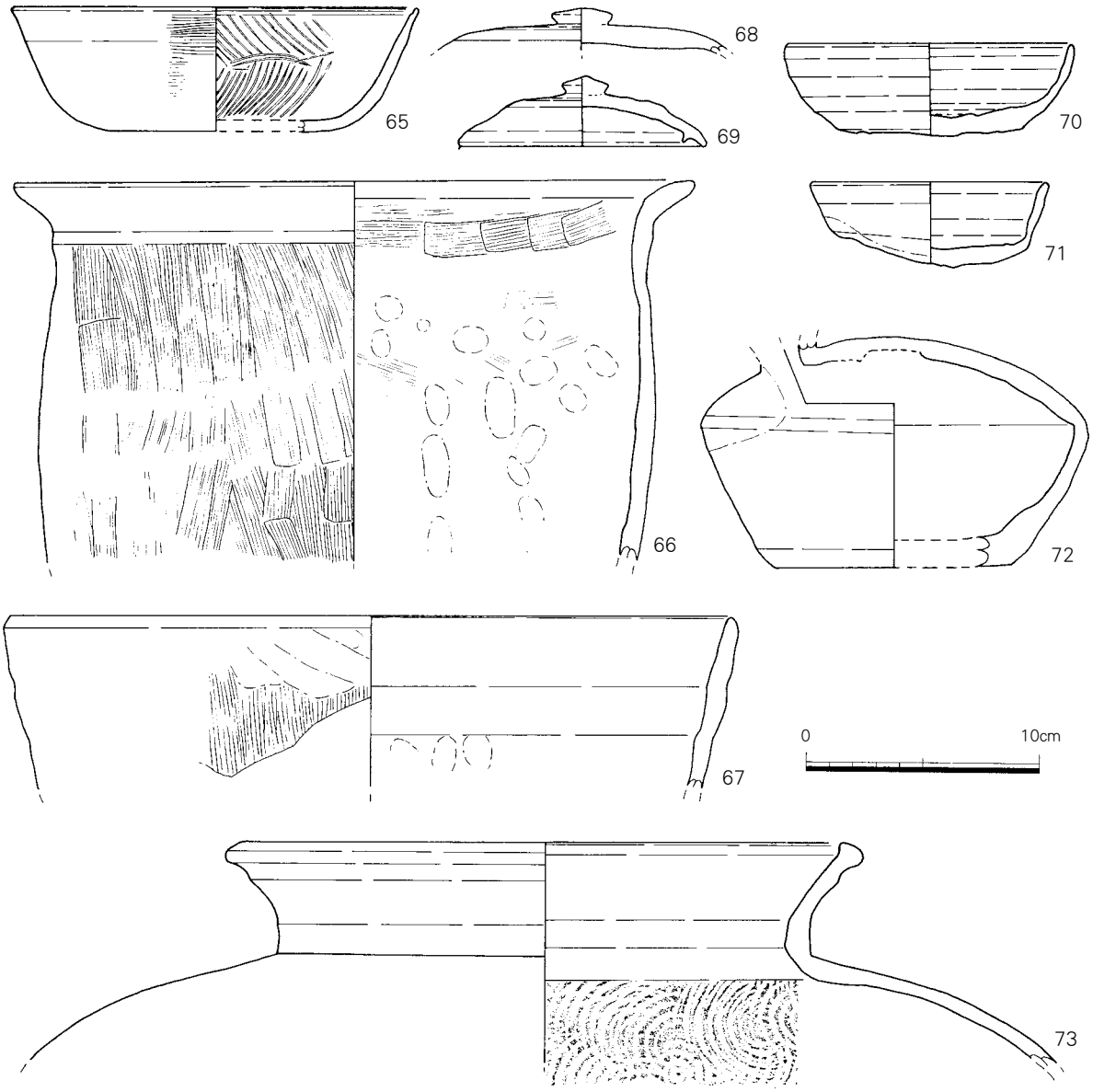
土師器（128 ～ 133）、土師質土器（134・135）、陶器（136 ～ 139）、中国製磁器（140 ～ 143）が




第28図　遺物実測図10




第29図　遺物実測図11




**第30図　遺物実測図12**

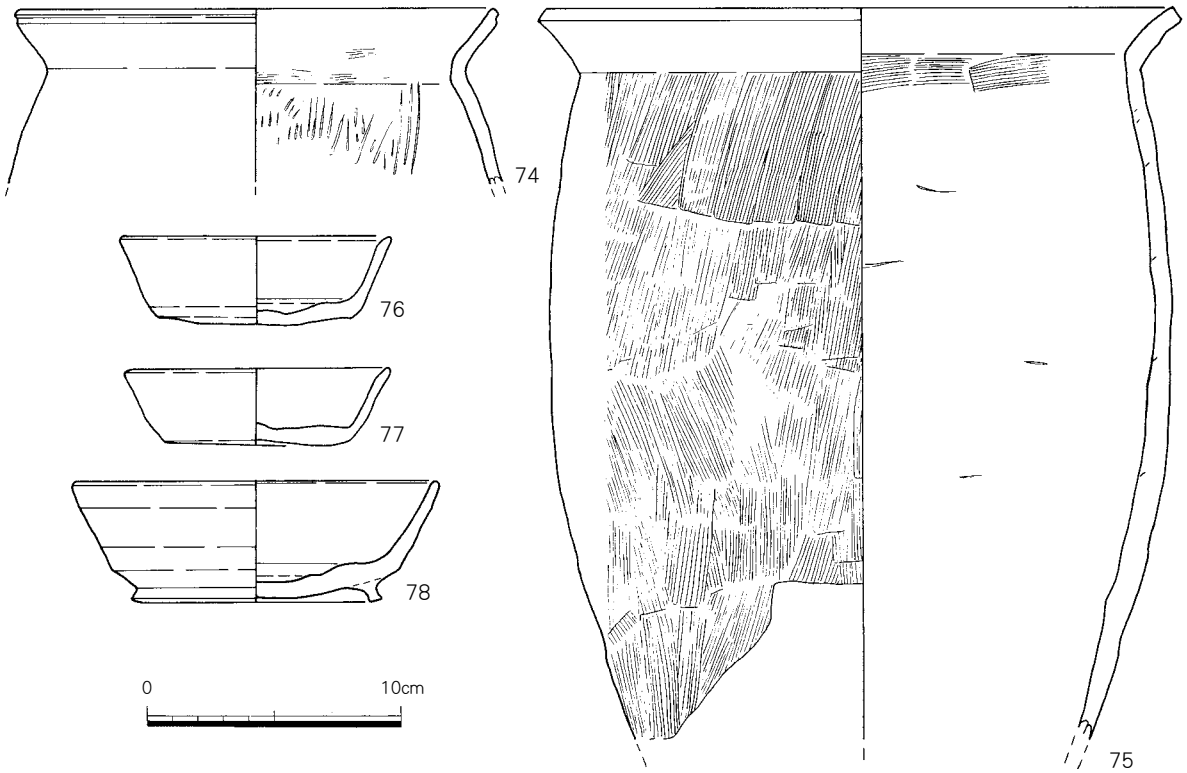
出土している。

土師器は皿（128・129）・堝（130 ～ 133）、土師質土器は火鉢（134）・三足香炉（135）がある。土師器皿は手づくね成形のもので、堝は外面体部下半に平行叩き（130 ～ 132）と格子叩き（133）がみられるものである。陶器は備前焼（136・137）と瀬戸・美濃系陶器（138・139）、中国製磁器は青磁（140）・染付（141 ～ 143）がある。備前焼は大甕（136）・擂鉢（137）、瀬戸・美濃系陶器は灰釉皿（138）・天目茶椀（139）、中国製の青磁は椀（140）、染付は椀（141）・碁笥底皿（142）・大皿（143）などがある。

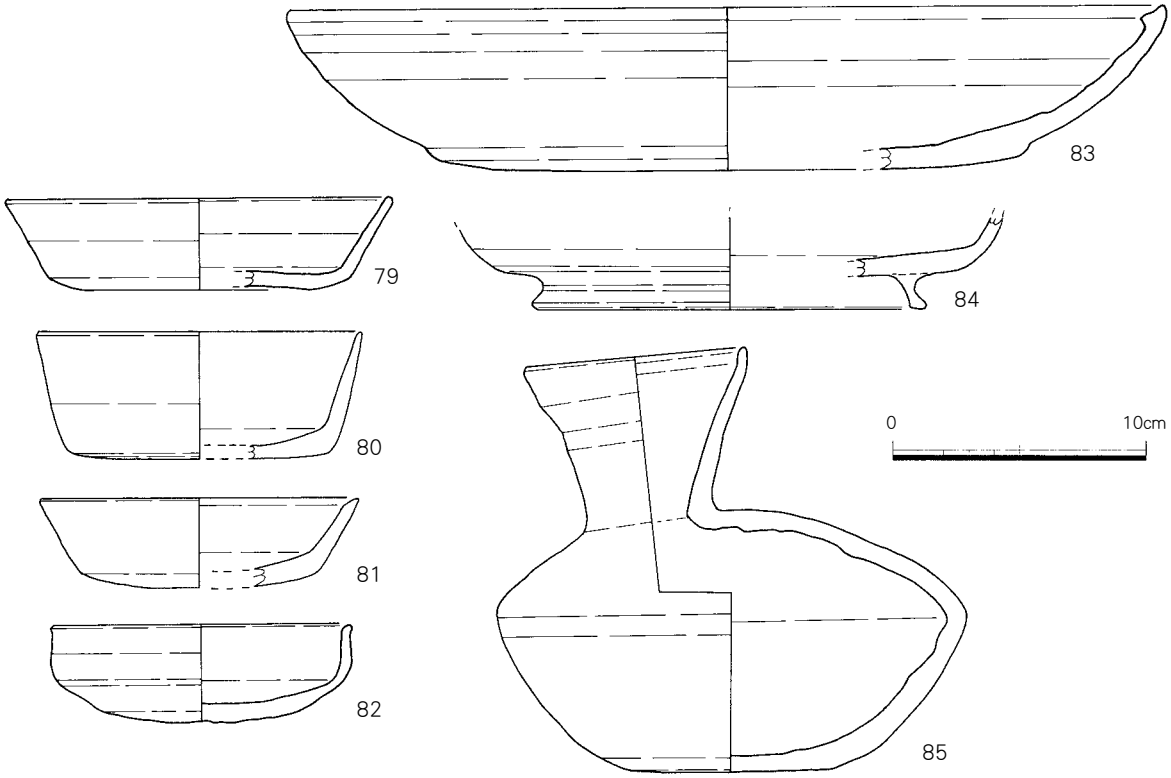
[SD－５出土土器]（第39・40図144 ～ 179、図版46 ～ 48）

SD－５（a、b）は江戸時代の遺構であるが、多量の中世後期の遺物が出土したため、一括してSD－５出土土器として報告する。

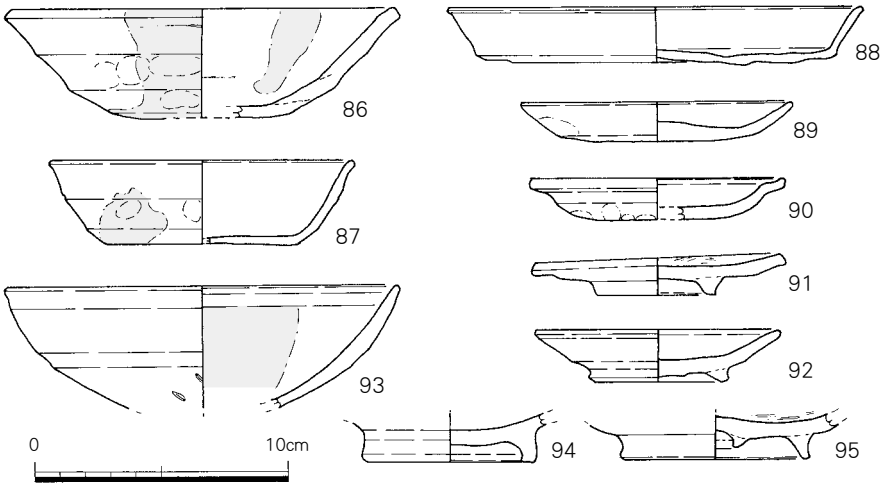
土師器（144 ～ 150）、瓦質土器（151）、東播系須恵器（152）、陶器（153 ～ 161）、中国製磁器（162



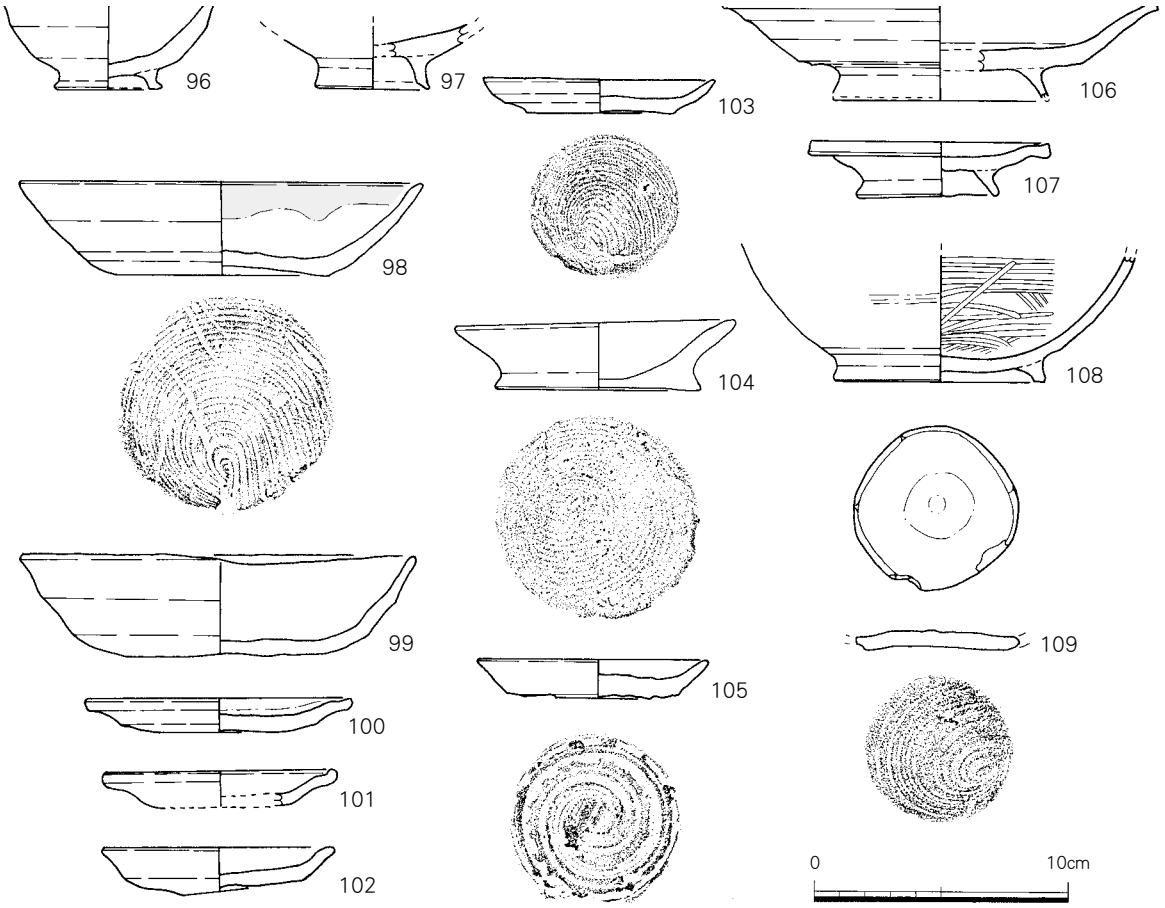

第31図　遺物実測図13




第32図　遺物実測図14



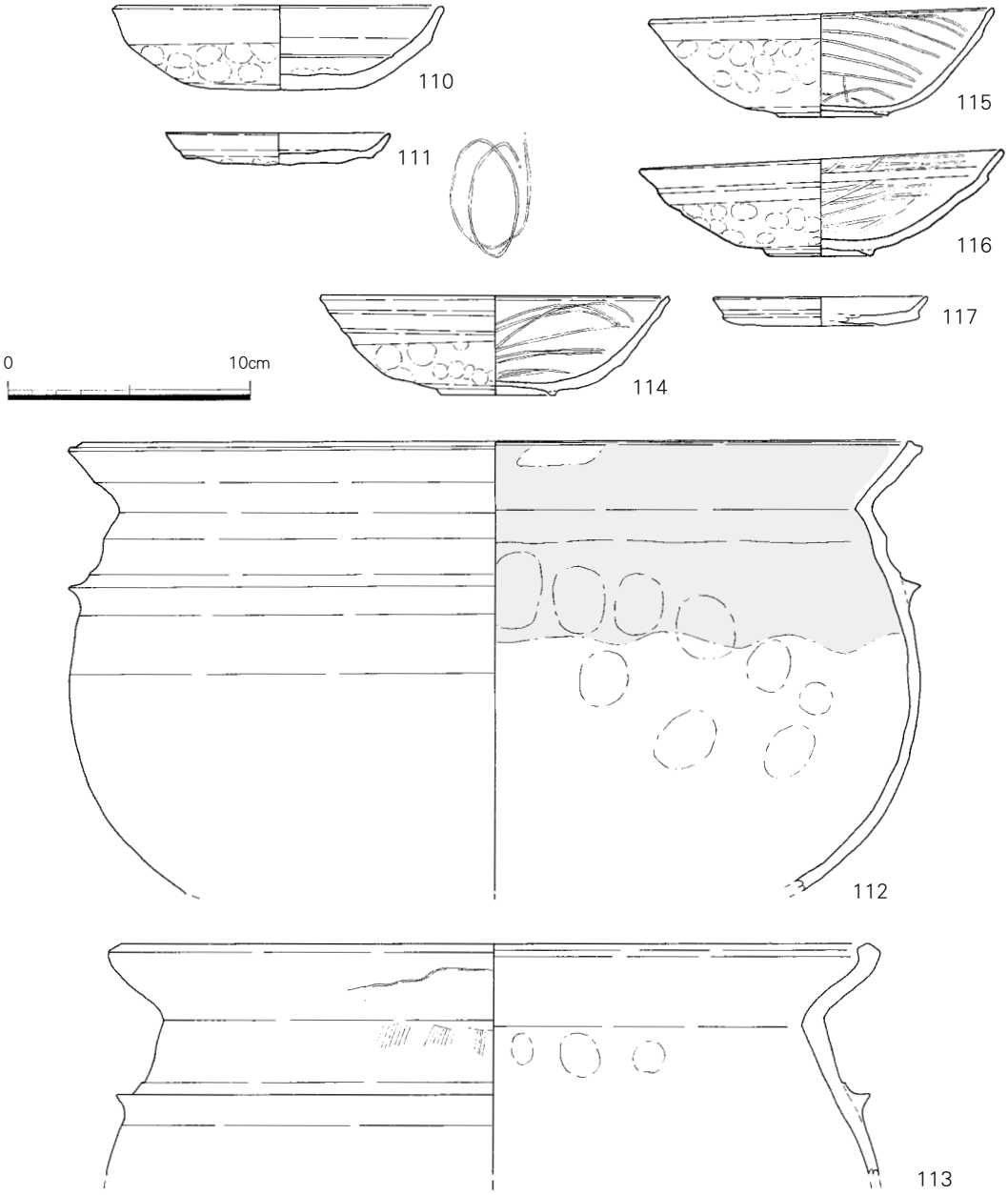

第33図　遺物実測図15



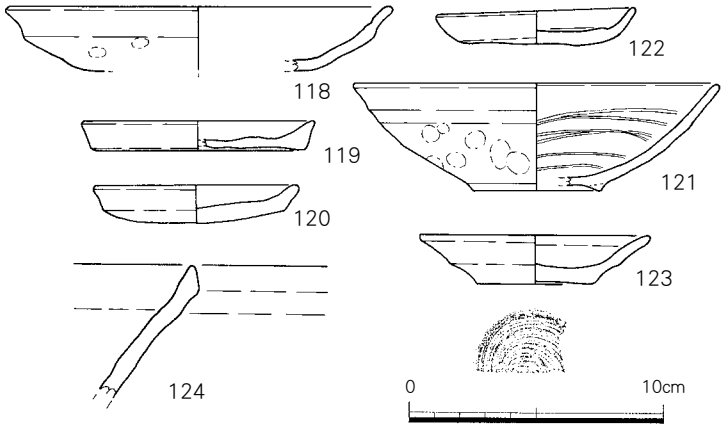

第34図　遺物実測図16

～179）などが出土した。

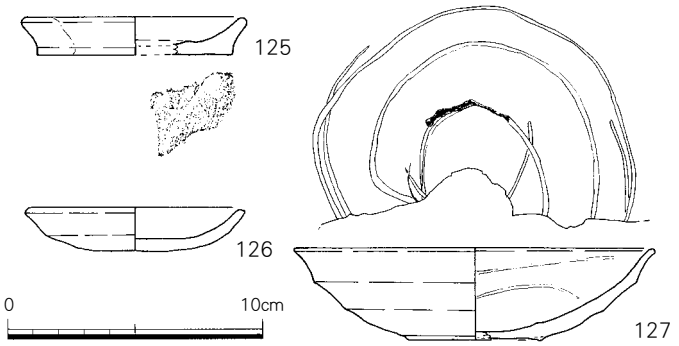
土師器は皿（144～147）、釜（148・149）、堝（150）がある。皿には大皿（144）と小皿（145～147）があり、145は煤の付着から灯明皿に用いられたものとみられる。瓦質土器は三足をもつ小型香炉（151）がある。東播系須恵器は捏鉢（152）であるが、他の遺物と比べやや古い時期のものである。陶器は備前焼（153～155）と瀬戸・美濃系陶器（156～161）がある。備前焼は壺（153）・



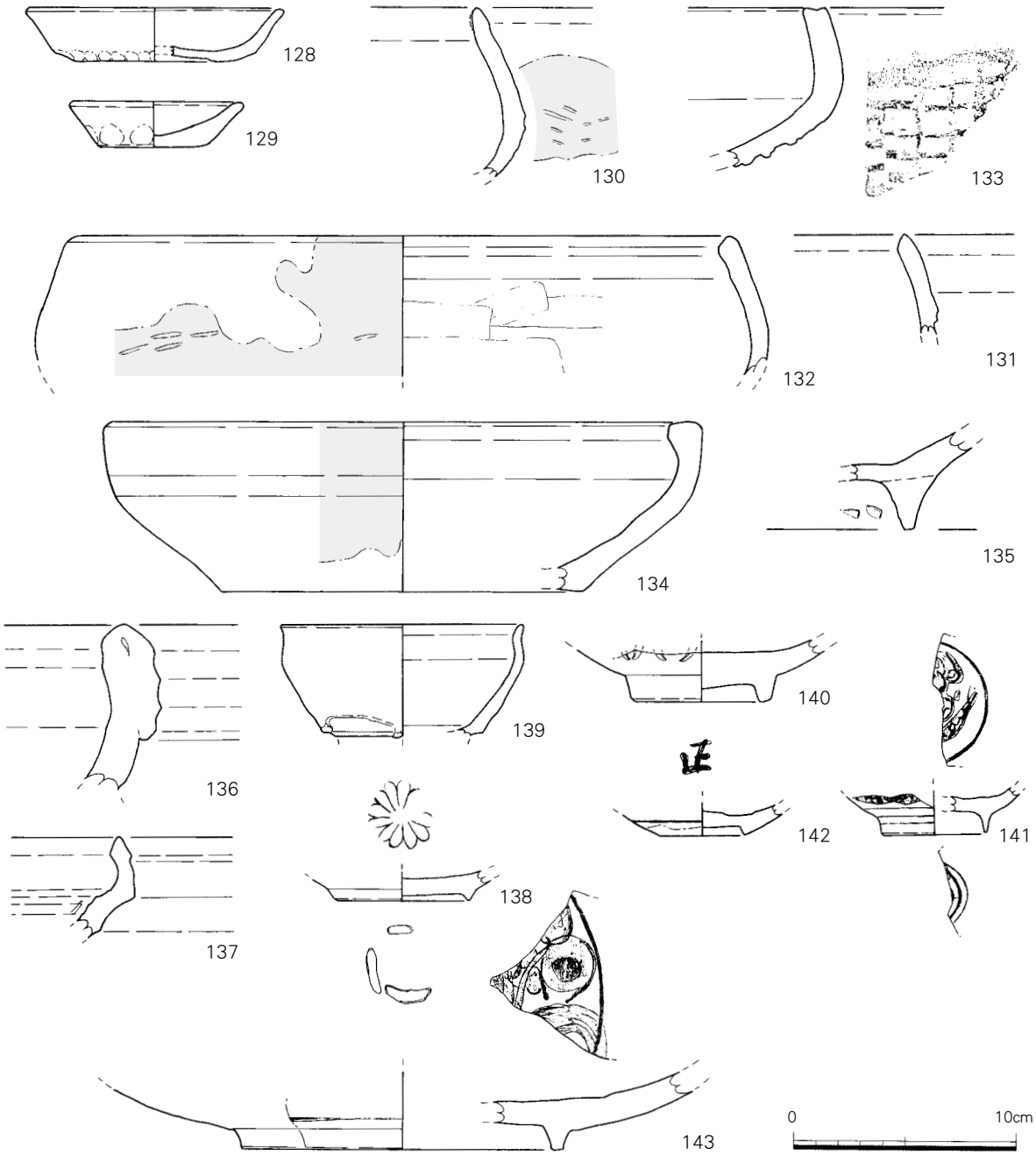

第35図　遺物実測図17



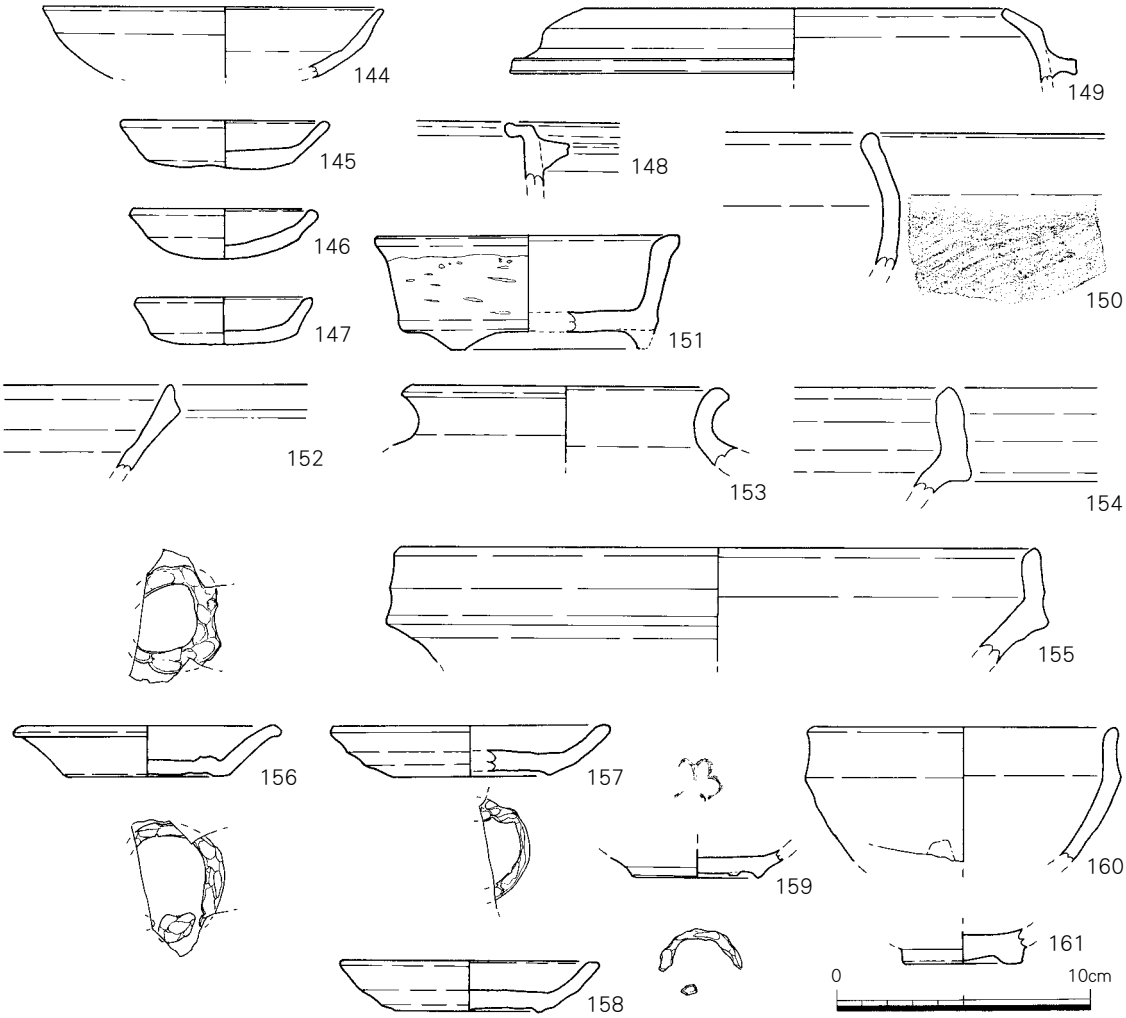

第36図　遺物実測図18




第37図　遺物実測図19




第38図　遺物実測図20




**第39図　遺物実測図21**

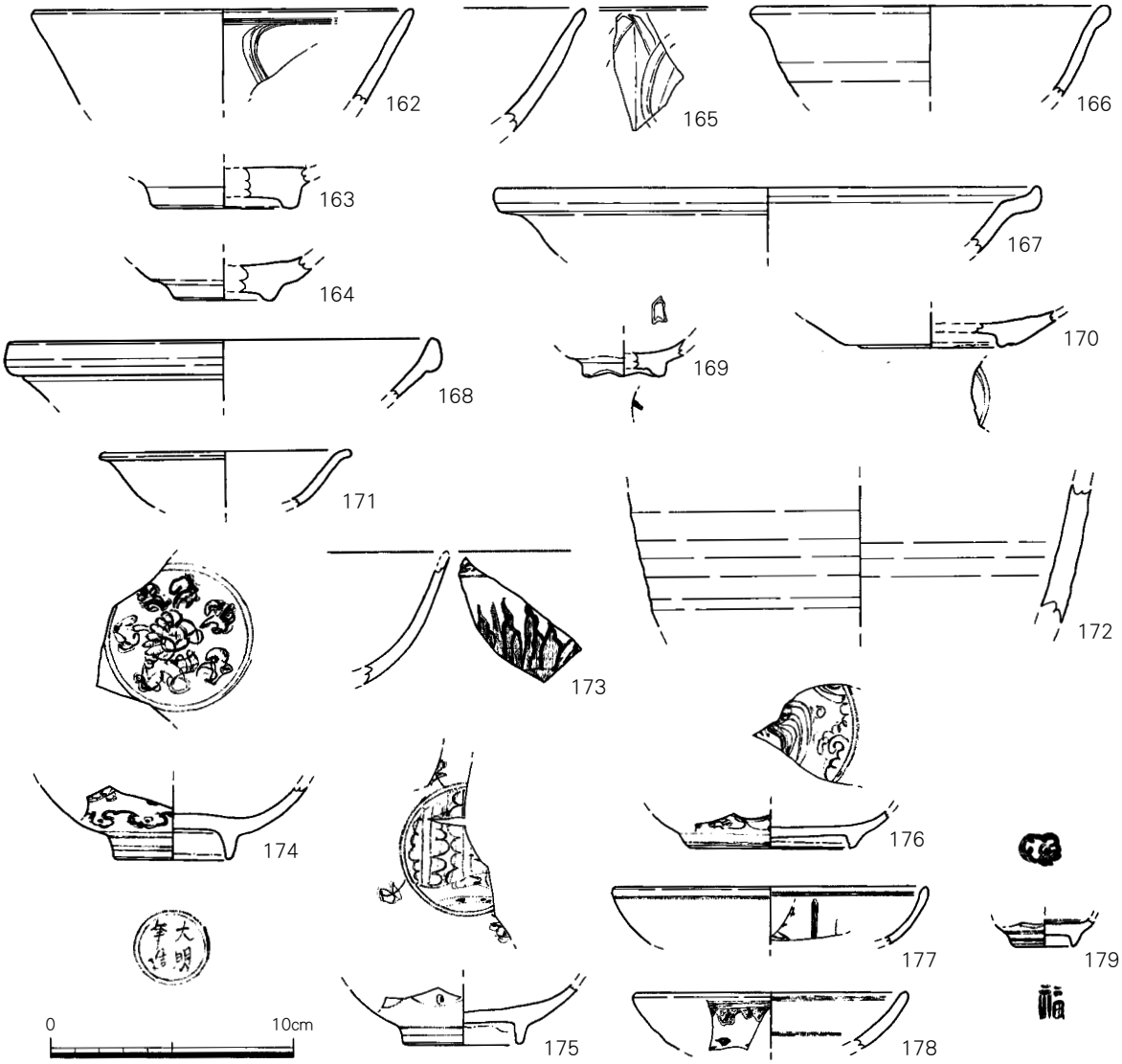
擂鉢（154・155）がある。瀬戸・美濃系陶器は灰釉皿（156 ～ 159）・天目茶椀（160・161）などがある。

中国製磁器は青磁（162 ～ 167）・白磁（168 ～ 172）・染付（173 ～ 179）などが出土している。青磁は椀（162 ～ 166）･盤（167）があるが、166以外は他の遺物と比べやや古い時期のものである。白磁は椀（168）・皿（169 ～ 171）・四耳壺（172）があるが、168と172は他の遺物と比べやや古い時期のものである。染付は椀（173 ～ 175）・皿（176 ～ 178）・小杯（179）がみられる。

[その他遺構等出土土器]（第41図180 ～ 196、図版49・50）

その他の遺構等から土師器（180･181）、瓦質土器（182）、東播系須恵器（183 ～ 186）、陶器（187･188）、中国製磁器（189 ～ 196）などが出土している。

土師器は皿（180・181）で、どちらも手づくね成形のものである。瓦質土器は火鉢（182）で円筒形のもので、外面体部に突帯が３条以上みられる。瓦質土器には、外面に平行叩きを施す甕などもある。東播系須恵器は捏鉢（183 ～ 186）、陶器は備前焼（187）と瀬戸･美濃系陶器（188）がある。




第40図　遺物実測図22

備前焼は水屋甕（187）、瀬戸・美濃系陶器は天目茶椀（188）がある。瀬戸・美濃系陶器には灰釉瓶子なども出土している。

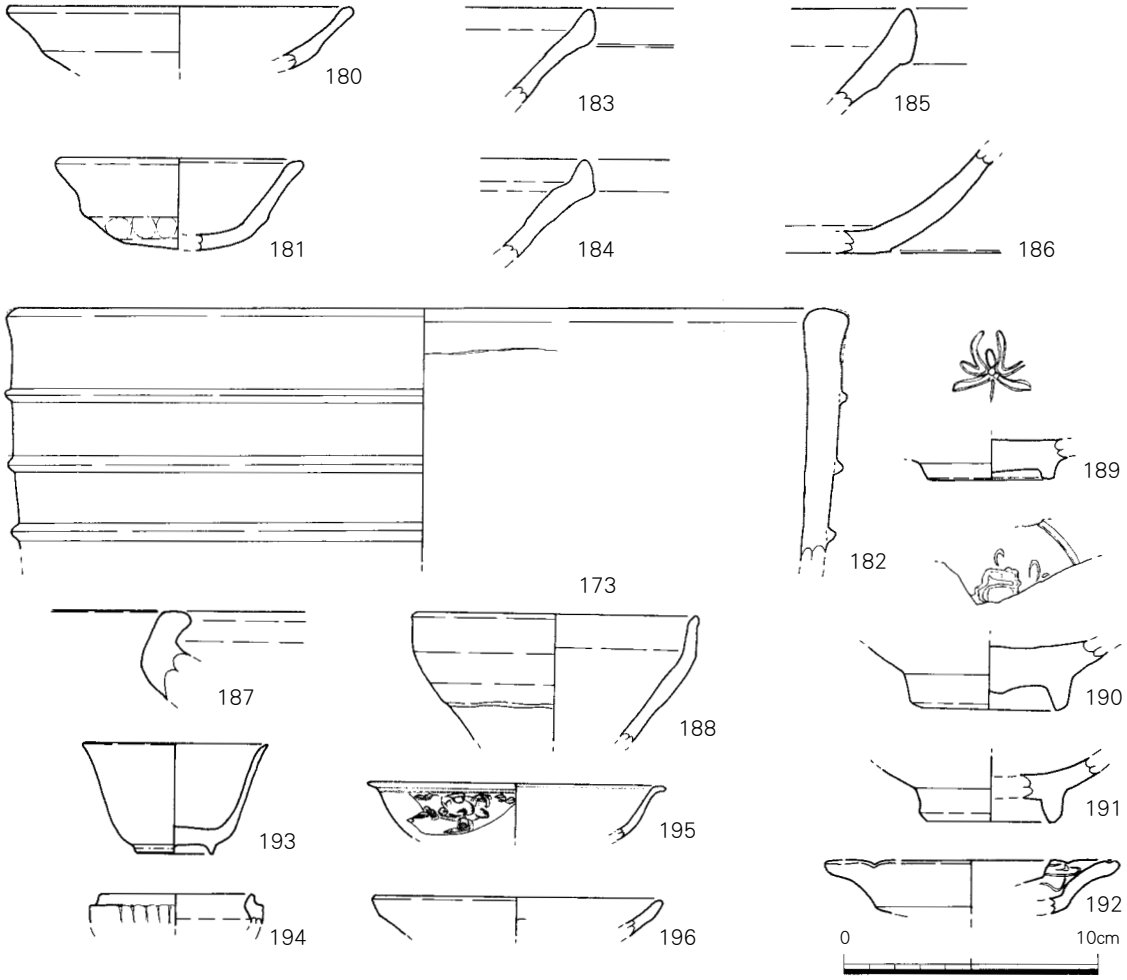
中国製磁器は青磁（189 ～ 192）、白磁（193）、青白磁（194）、染付皿（195･196）が出土している。青磁は椀（189 ～ 191）･皿（192）があり、189は円板状に再加工されたものである。白磁は杯（193）、青白磁は合子（194）、染付は皿（195・196）がある。

東播系須恵器捏鉢（183 ～ 186）と青白磁合子（194）は他の遺物と比べやや古い時期のものである。

## 第５節　近世の土器・陶磁器

[SK－118出土土器]（第42図197・198、図版50）

瓦質土器（197）と備前焼（198）が出土した。瓦質土器は火鉢（197）である。水屋甕形のもので、口縁部は玉縁状で外面体部上半と下端部に突帯を巡らせるものである。底面には離れ砂がみられ、低い三足が付く。備前焼は水屋甕（198）で、口縁部は欠失しているが外面体部上半に突帯を巡ら




**第41図　遺物実測図23**

せるものである。土坑に底部が埋設されていたものであり、埋甕として使用されたとみられる。

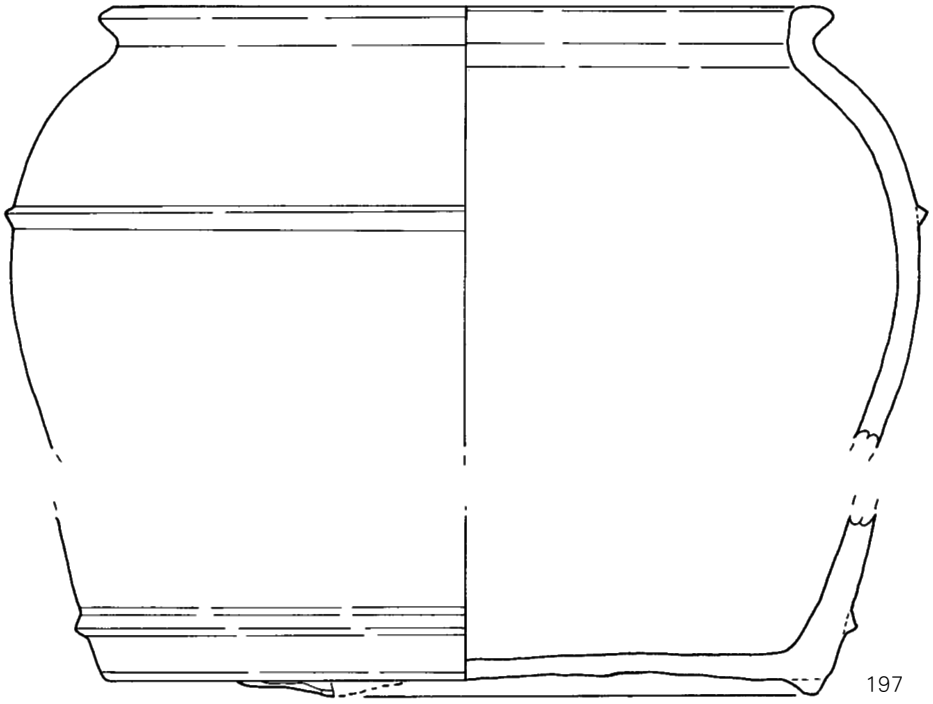
これらの土器は江戸時代初頭のものである。

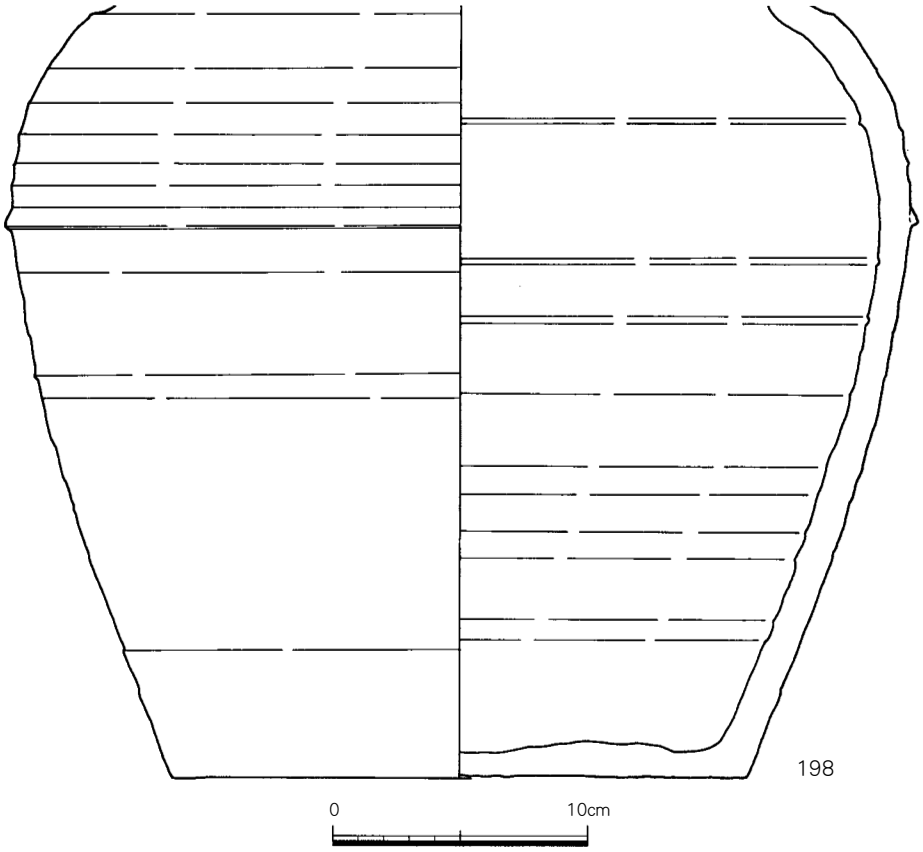
[SD－５出土土器]（第43・44図199～223、図版50～53）

SD－５bは江戸時代初頭に埋没した遺構である。ここでは、その江戸時代初頭の遺物をSD－５出土土器として報告する。

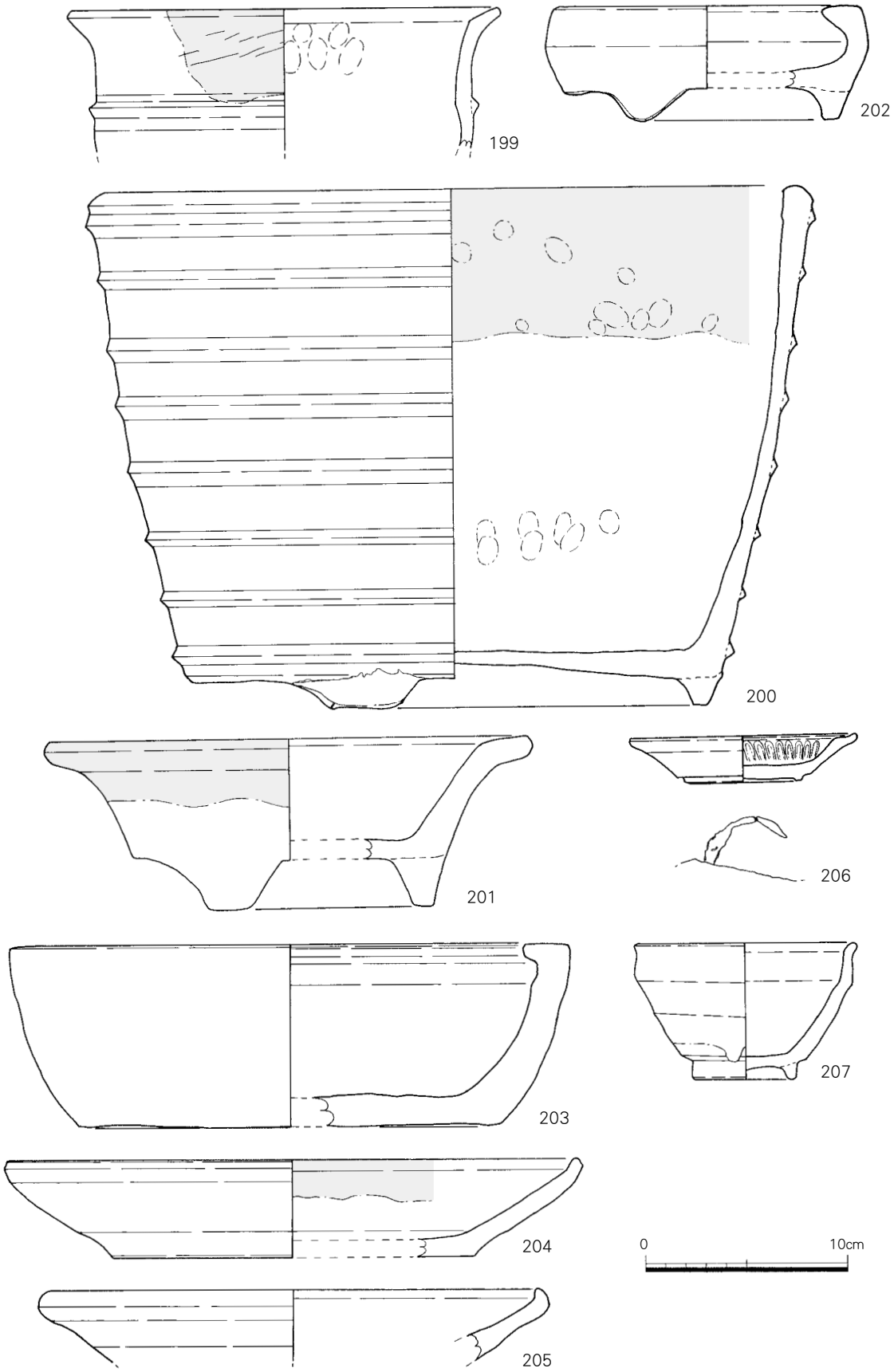
土師器（199）、土師質・瓦質土器（200～203）、陶器（204～223）などが出土している。土師器は釜（199）がある。口縁部は外反し、外面体部に突帯を一条巡らせるものである。土師質土器は火鉢（201）がある。口縁部が外反し、三足をもつ深さの浅いものである。瓦質土器は火鉢（200・203）と香炉（202）がある。200は円筒状の深いもので外面体部に突帯を８条巡らせ、三足をもつものである。203は円筒状の深さの浅いもので、口縁部は内側に折り返している。202は円筒状の深さの浅い香炉で、口縁部を内側に折り返すものである。

陶器には備前焼、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶器がある。備前焼は盤（204・205）、瀬戸・美濃系陶器は皿（206）・天目茶椀（207）がある。肥前系陶器は皿（208～219）、椀（220～222）、瓶（223）がある。皿は灰釉が施されるもので、通常口縁の皿（208～210）、腰折皿（211・213～

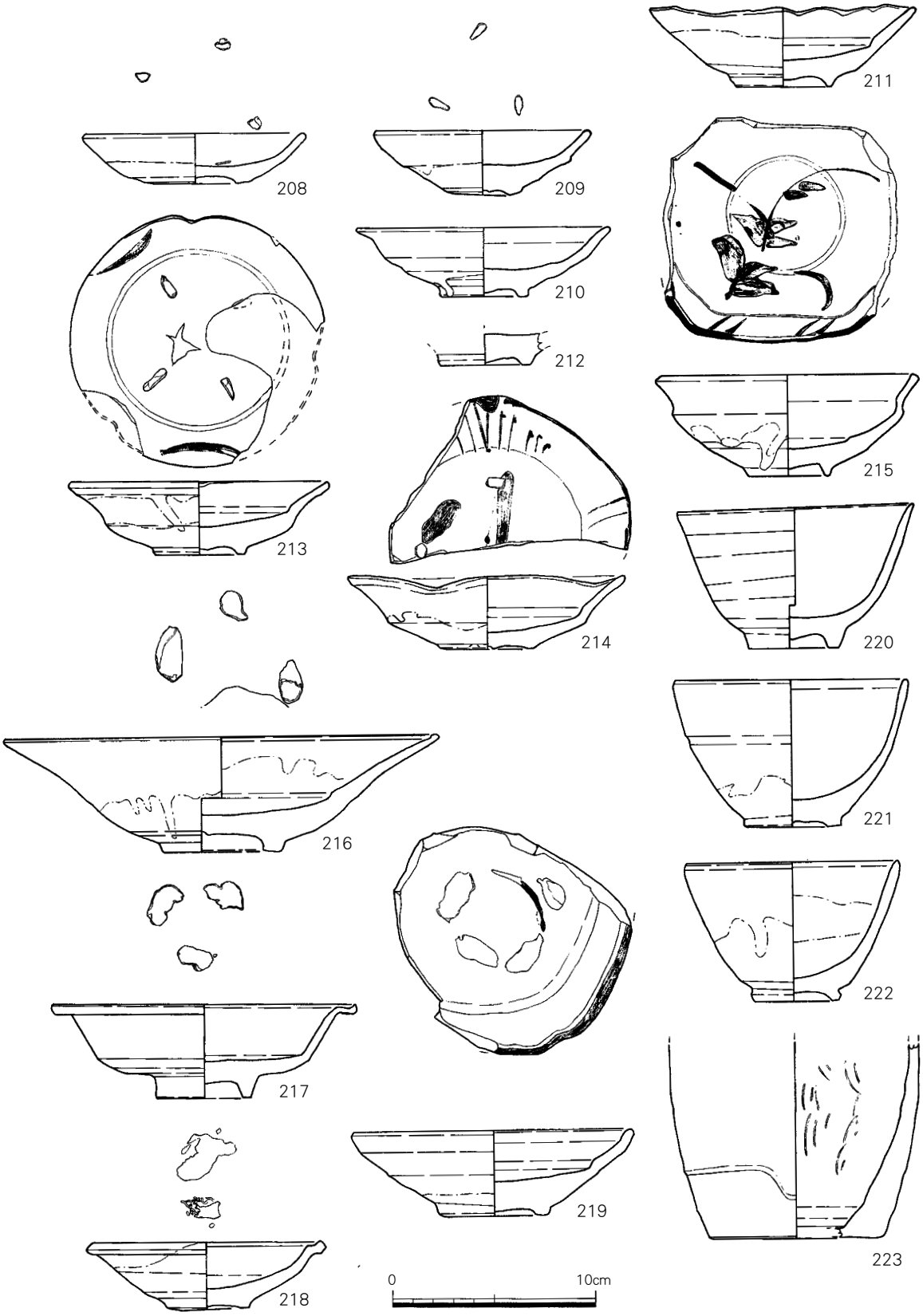


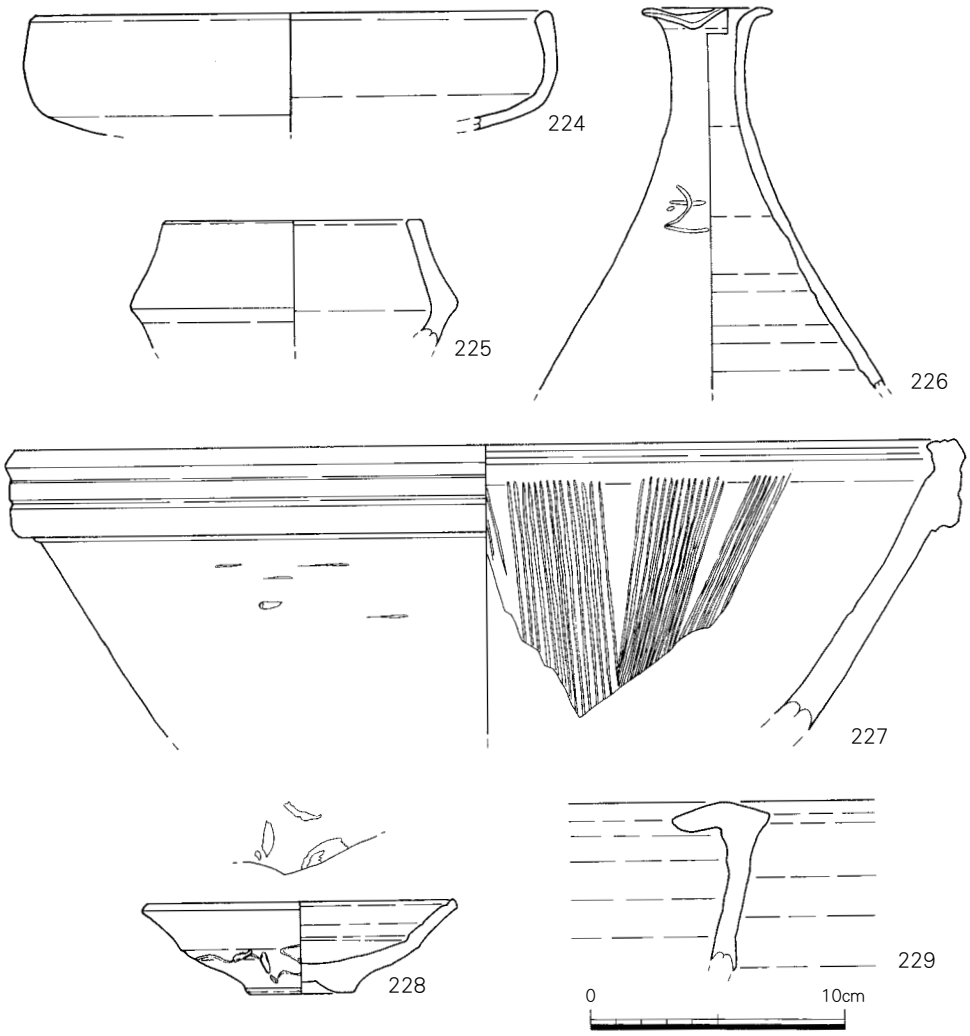

第42図　遺物実測図24




第43図　遺物実測図25




第44図　遺物実測図26




**第45図　遺物実測図27**

216、219)、溝縁皿（217・218）がある。213 ～ 215は鉄絵が描かれ、219の口縁部にも鉄釉が施される。211の口縁部は波状、214･215･219は意図的に方形に歪めている。216は他に比べ大型である。窯道具の痕跡については208 ～ 215は胎土目、216 ～ 219は砂目を残すものである。椀は丸形のもの（220 ～ 222）である。瓶は褐釉を施したもので、内面に同心円状の当て具痕がみられる。これらの土器は17世紀前半の時期のものである。

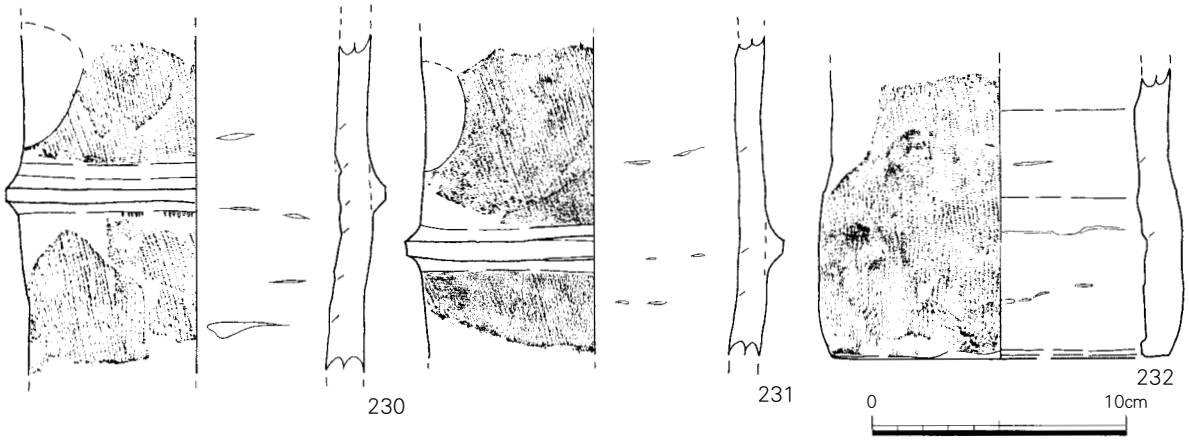
[その他遺構等出土土器]（第45図224 ～ 229、図版53）

その他の遺構等から、土師器（224)、陶器（225 ～ 229）が出土した。

土師器は堝（224）がある。陶器には、備前焼の建水（225)・徳利型瓶（226)、堺焼擂鉢（227)、肥前系陶器灰釉皿（228)、大谷焼甕（229）などが出土している。225・226はSD－１第１層、229はSD－５a第１層からの出土であり、それぞれの遺構の下限時期を示す遺物であるといえる。

## 第６節　埴輪（第46図230 ～ 232、図版53）

今回の調査において埴輪を３点確認した。これらは全てSD－１の第１層からの出土で、近接し




第46図　遺物実測図28

た場所からの出土である。器種は円筒埴輪とみられるが、形象埴輪（盾）の基部の可能性もある。なお、これらの３点は接合しないが同一個体のものとみられる。古墳時代中期以降の時期のものと考えられる。

## 第７節　瓦（第47 ～ 49図233 ～ 251、図版53）

瓦は、軒丸瓦（233・234）、丸瓦（235 ～ 238）、平瓦（239 ～ 245）、丸桟瓦（246）などの他、鳥伏間（247）・熨斗瓦（248・249）・塼（250・251）などの道具瓦が出土している。

軒丸瓦は右巻き（233）と左巻き（234）のものがある。

瓦の詳細は観察表に記したが、所属時期については、239 ～ 241は平安時代後期、242 ～ 245は鎌倉時代、235 ～ 237・249は室町時代後期、233・234・246は江戸時代前期のものとみられる。

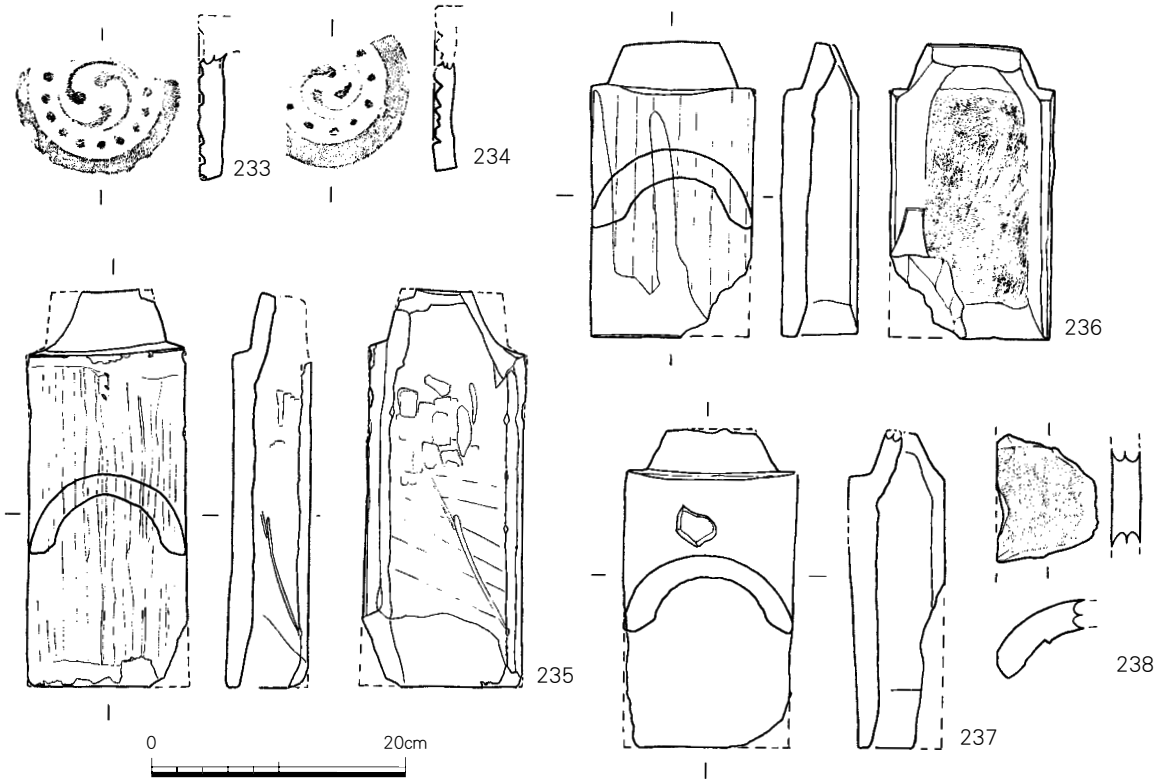
## 第８節　土製品（第50図252 ～ 268、図版54）

土製品には、ミニチュア土器 (252・253)、土笛（254）、紡錘車（255・256）、円板状土製品（257・258）、土製支脚（259）、土錘（260 ～ 266）、焼塩壺（267・268）などがある。

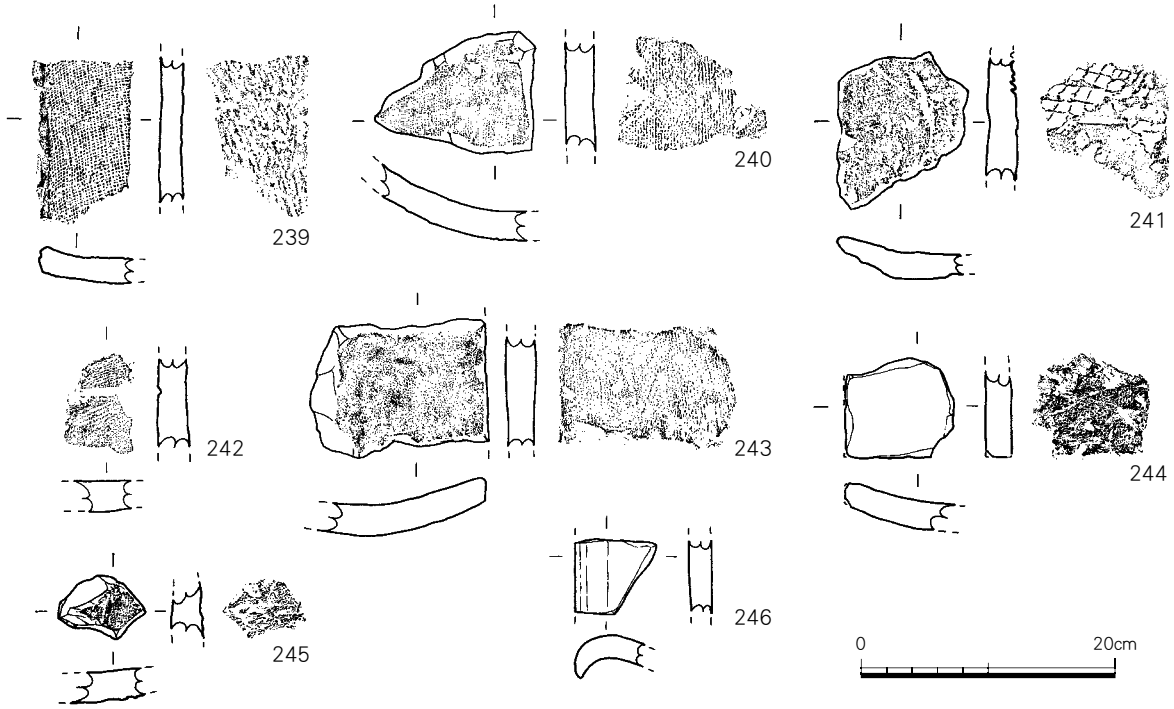
252・253はミニチュア土器の壺である。252はSB－６出土のもので弥生時代、253はSK－107出土で平安時代のものである。254は手づくね成形の土笛で弥生時代のものとみられる。255 ～ 258は弥生土器甕を転用したもので、弥生時代のものとみられる。土錘は管状土錘（260 ～ 263）と有溝土錘（264 ～ 266）がある。管状土錘のうち、表面に縄状の痕跡がみられるもの（261 ～ 263）と有溝土錘（264 ～ 266）は平安時代のものと考えられる。268の焼塩壺の身には刻印がないなどの特徴から江戸時代初期のものとみられる。

## 第９節　石器・石製品（第51 ～ 60図269 ～ 322、図版55 ～ 57）

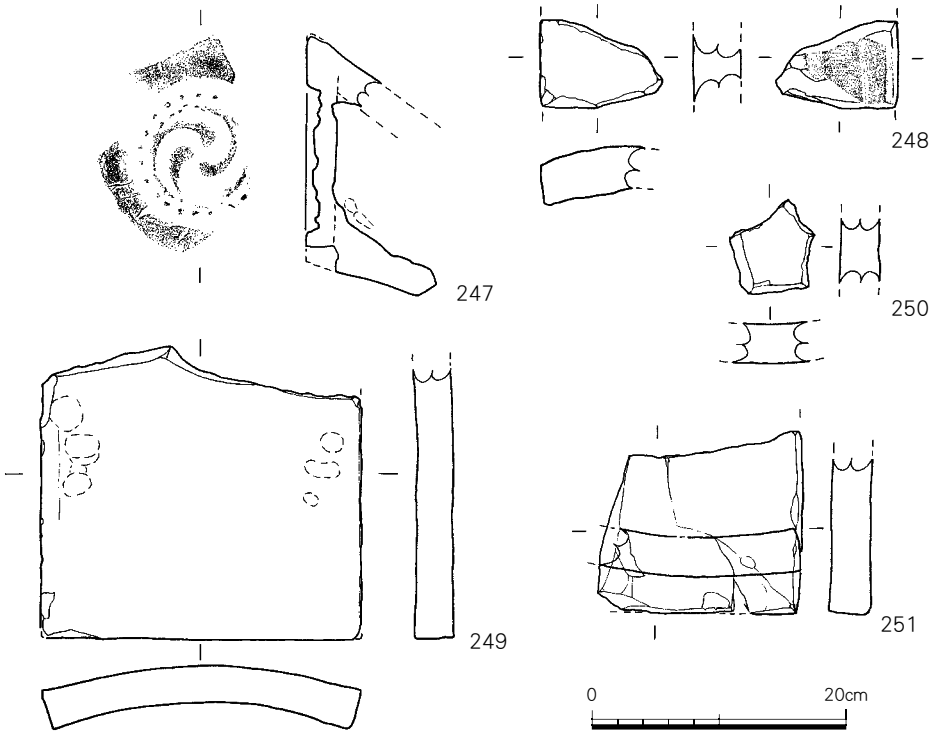
石器は打製石器、磨製石器、礫石器が多く出土した。打製石器と磨製石器は明確な製品について図化を行ったが、礫石器は使用痕のある典型的なものを取り上げ報告する。



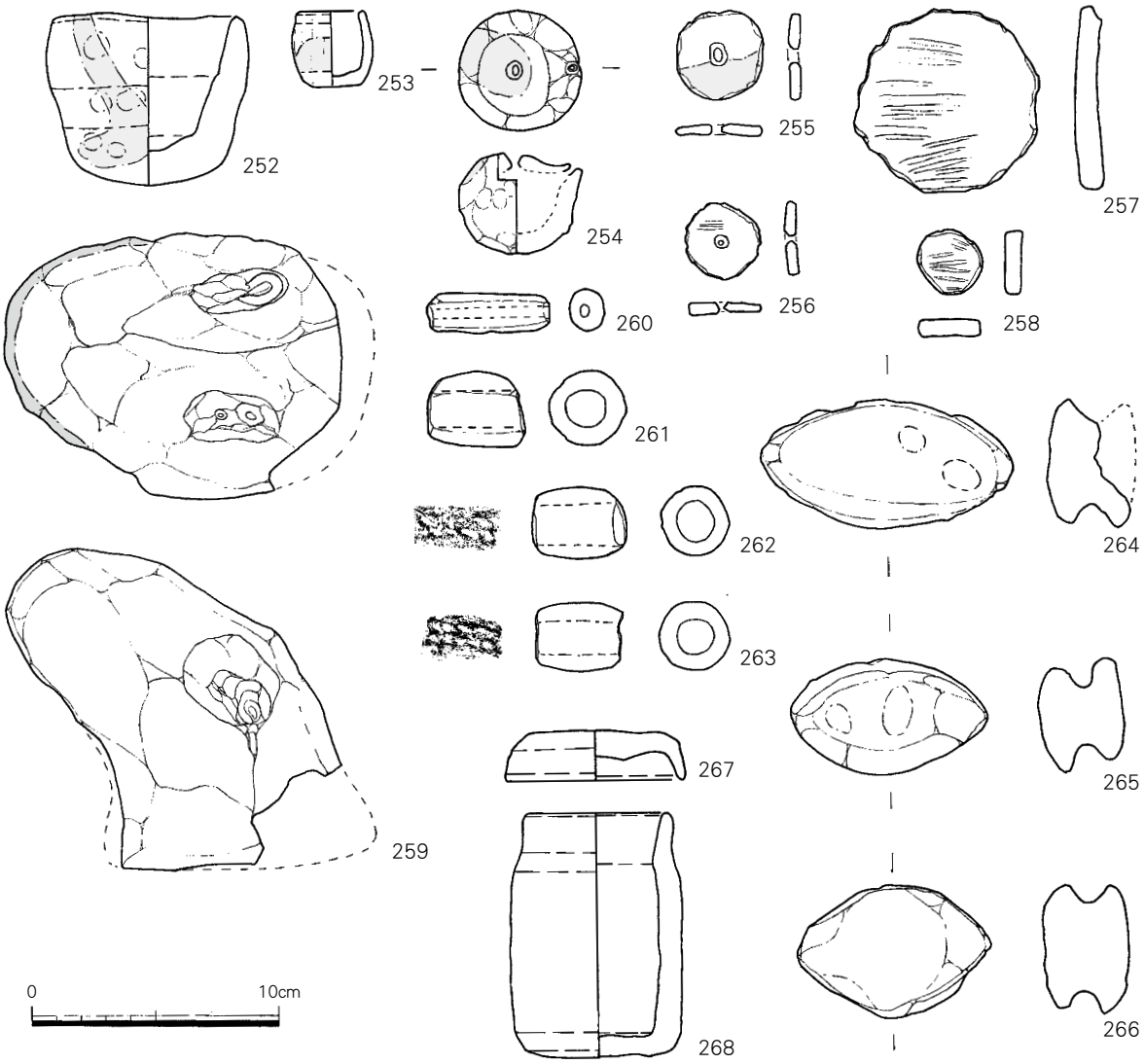

第47図　遺物実測図29



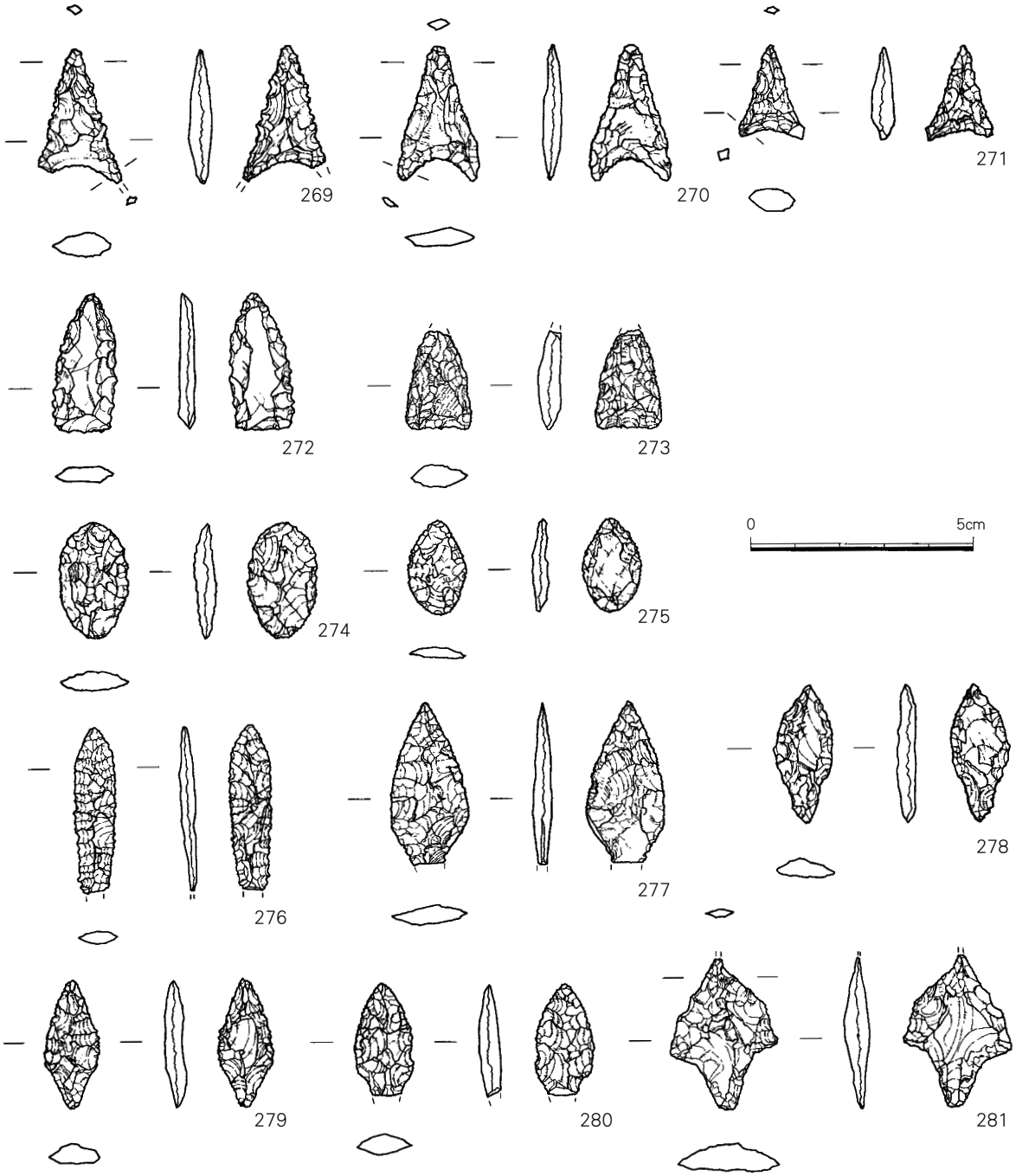

第48図　遺物実測図30




第49図　遺物実測図31




第50図　遺物実測図32




第51図　遺物実測図33

打製石器には石鏃（269～281）、石錐（282～286）、スクレイパー（287・288）などがある。

石鏃は凹基式（269～271）、平基式（272・273）、円基式（274・275）、凸基有茎式（276～281）がある。また凸基有茎式は幅の狭い276、柳葉形の277～280、幅が広く翼状の281に細分できる。

石錐は基部が幅広で平板状の282・283、やや幅広の284、幅の狭い285、基部が無く両端が錐部の286がある。

スクレイパーは刃部が刀の切先状のような287と直線状の288がある。

以上の打製石器の石材については全てサヌカイト製でおおむね二上山産とみられるが、269は金

山産の可能性がある。この他、サヌカイト石核・剥片なども出土している。

磨製石器は石包丁（289 ～ 306）と石斧（307 ～ 311）などがある。

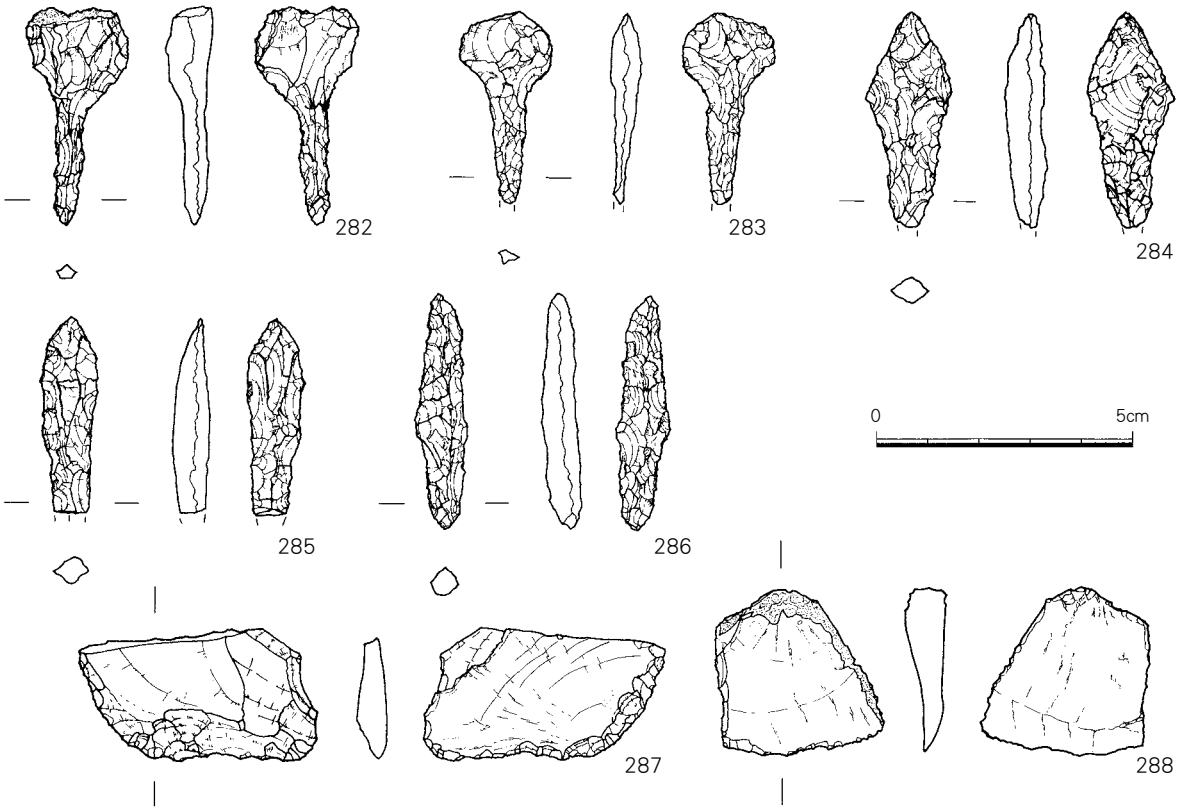
石包丁には通常のサイズのもの（289 ～ 300)、大形石包丁（301 ～ 304)、石包丁未製品（305・306)がある。これらの石材は全て結晶片岩であり、色調は暗緑褐色から緑灰色の範囲におさまるが、黒灰色のもの（296）が１点みられる。通常サイズの石包丁はいわゆる半月形で、刃部は片刃が基本である。幅の広いもの（300）もあるが、使用頻度の差を示すものと考えられる。刃部は直線状が一般的であるが、内湾状のもの（289）もある。紐孔については２孔が基本であるが、未穿孔１箇所が片面にみられるもの（289)、紐孔が５箇所以上みられるもの（296）もある。また、破損した後に叩石に転用された例も一定量みられる（290、291、295、299)。

大形石包丁は台形のもの（301・302）が２点と、全形不明の紐孔周囲の破片１点（303)、刃部の破片１点（304）がある。台形のものは上辺近くに紐孔を２孔もつものとみられ、303も台形の可能性がある。

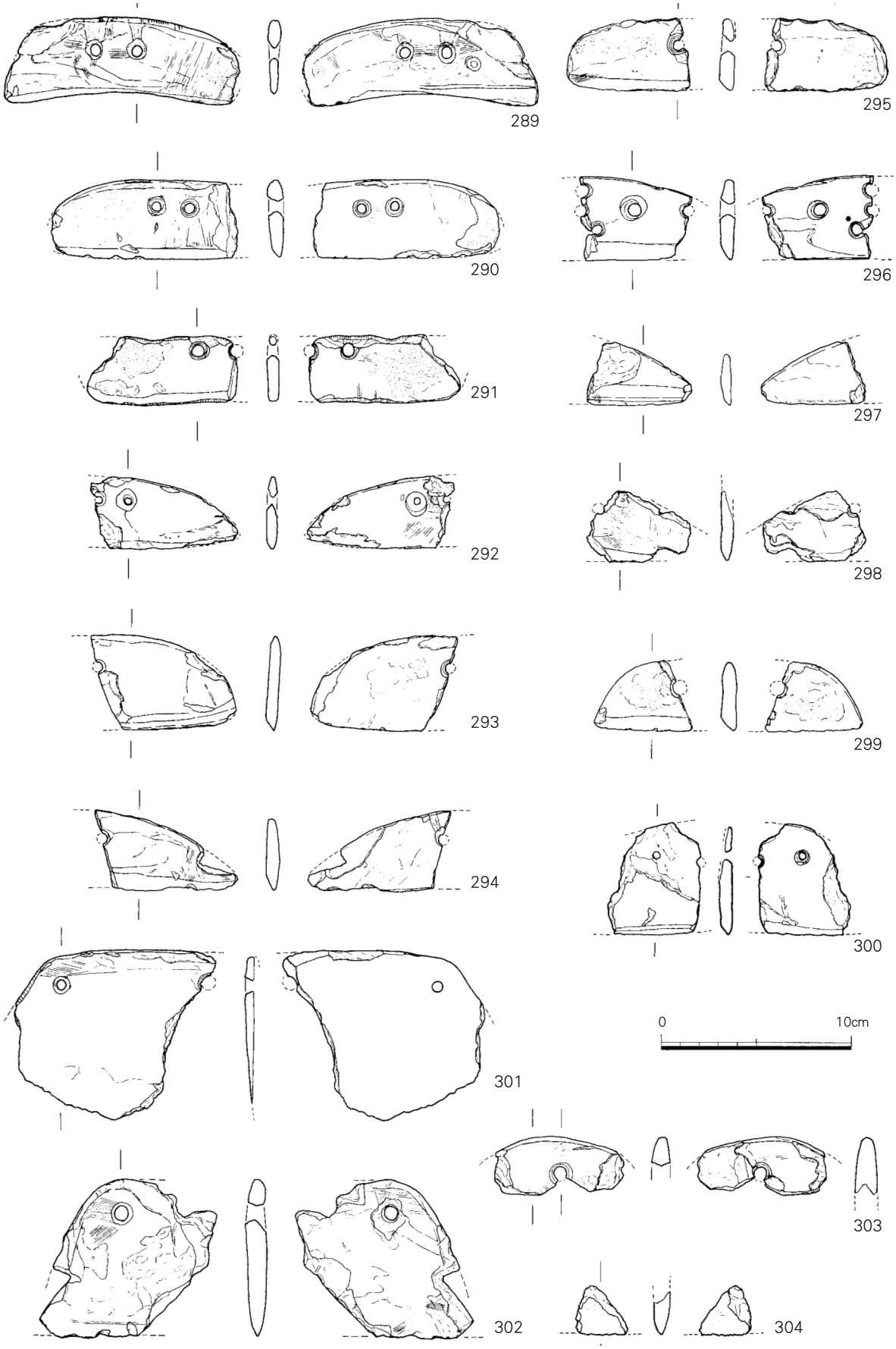
石包丁未製品は２点とも紐孔は未穿孔で刃部と周縁部は仕上げられているが、305は表面がやや磨かれているが裏面は剥離面のまま未調整である。306は表面と裏面がやや磨かれているが、刃部が大きく破損している。また、305は２点の接合資料であるが、表面左側の部分に表裏面とも敲打痕がみられることから二つに割れた後に叩石に転用されたと考えられる。

石斧は太型蛤刃石斧（307・308)、柱状片刃石斧（309・310)、扁平片刃石斧（311）がある。

太型蛤刃石斧は基部が完存するもの（307）と刃部の破片（308）がある。これらの石材は閃緑岩

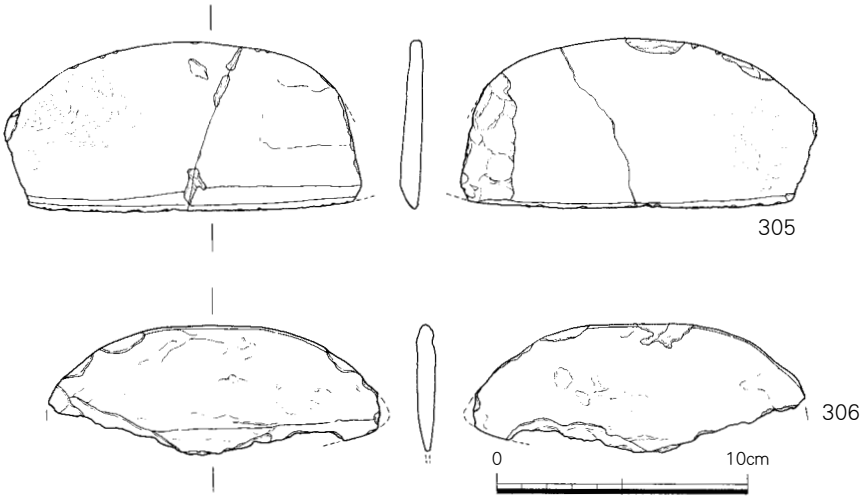



第52図　遺物実測図34

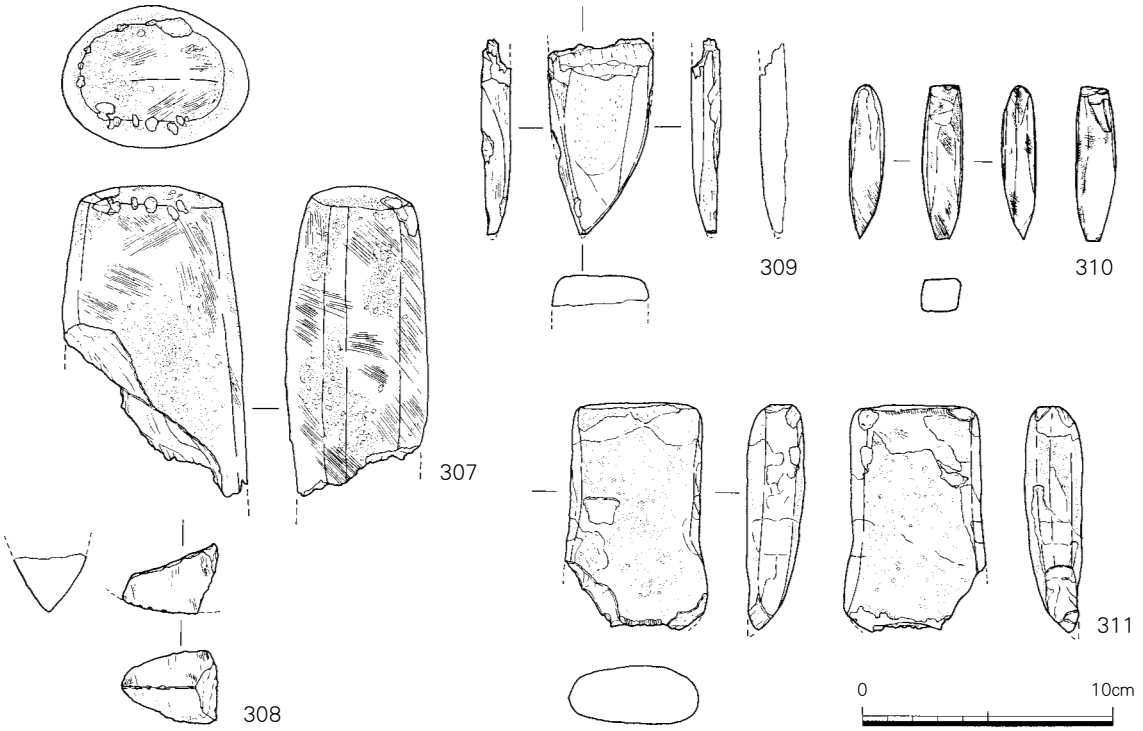



第53図　遺物実測図35

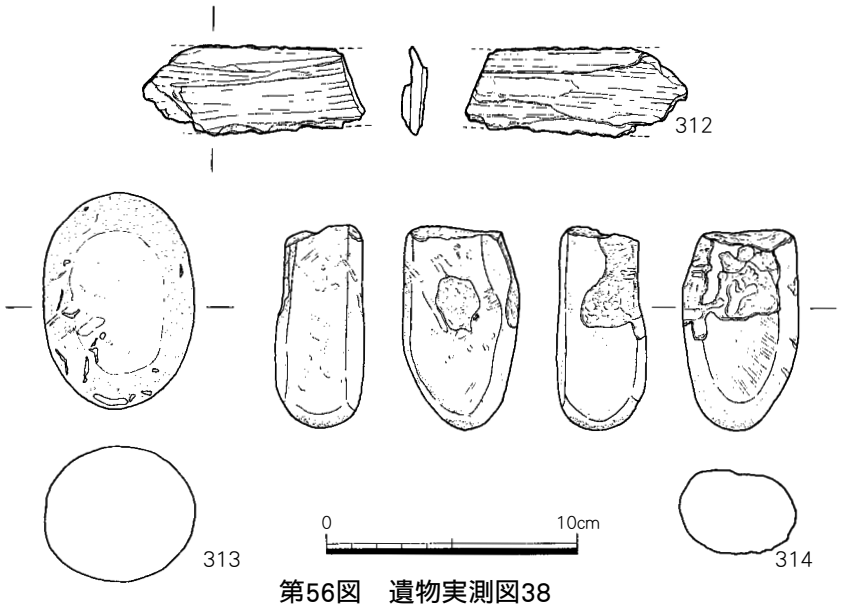
で、表面は丁寧に磨かれ全体的に光沢をもつ。また、307の表面には敲打痕がわずかにみられる。柱状片刃石斧は大型のもの（309）と小型のもの（310）がある。309は灰褐色の結晶片岩のもので、板状節理面で破損している。表面は磨かれ平滑となっており、刃部に光沢をもつ。310は完形品で色調は黒灰色、石材は黒色粘板岩である。基部に自然面を残すが、表面は丁寧に磨かれ全体的に光沢をもつ。扁平片刃石斧（311）は刃部を欠損しているが、残存する調整面は丁寧に磨かれ全体的に光沢をもつ。暗緑色のもので、石材は閃緑岩である。基部を除く側面全体に多くの敲打痕があり、刃部を欠損後に叩石に転用されたと考えられる。



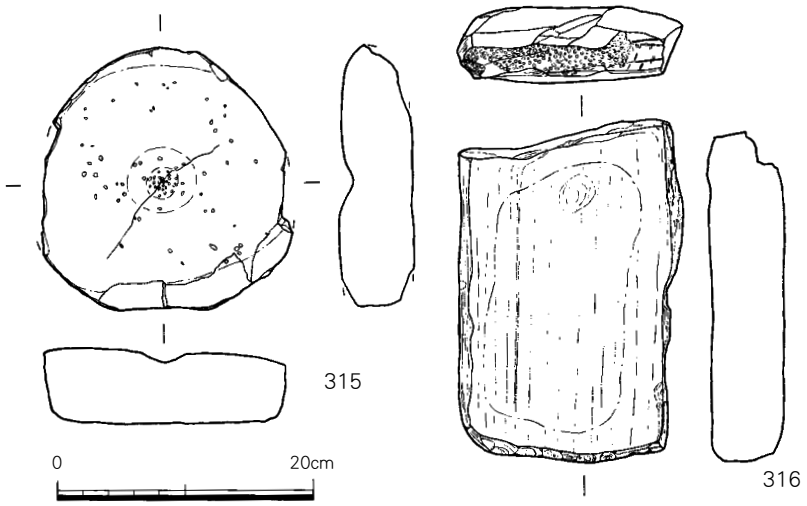

第54図　遺物実測図36




第55図　遺物実測図37




第56図　遺物実測図38

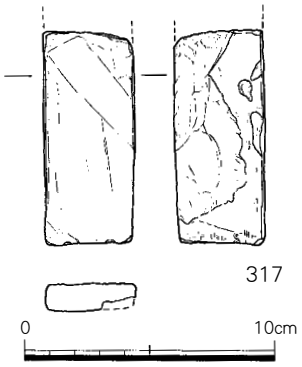



第57図　遺物実測図39

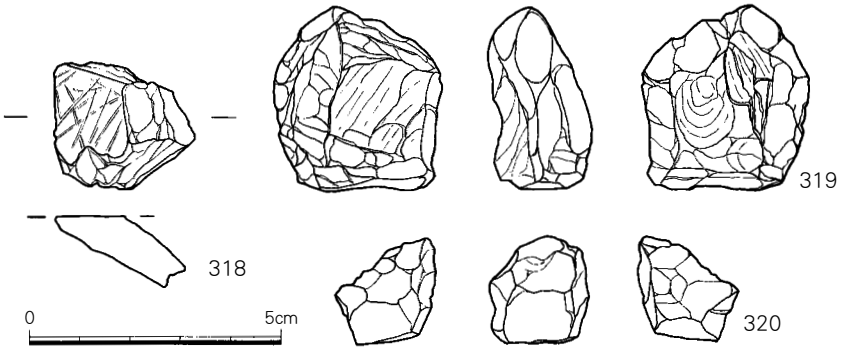
礫石器は石鋸（312）、叩石（313・314）、台石（315・316）などがある。

石鋸（312）は淡赤灰色の紅簾片岩を用いたもので、板状石材の相対する両側縁部を刃部として使用している。左右の端部に欠損がみられる。

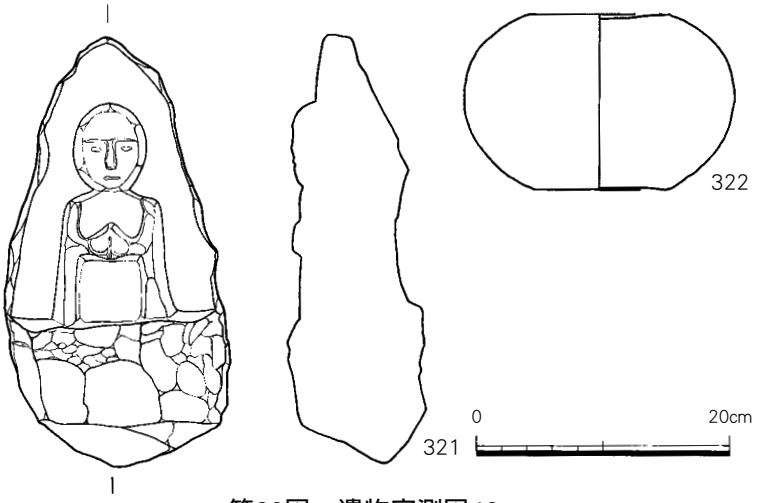
叩石は灰褐色の砂岩礫を用いたもので、卵形のもの（313）と角の取れた方柱状のもの（314）などがある。313は全体的に研磨されており、一部に敲打痕がみられる。314は方柱状であるが、全ての面に敲打痕がみられる。




第58図　遺物実測図40




第59図　遺物実測図41




第60図　遺物実測図42

台石は灰褐色の砂岩礫を用いたもの（315）と暗緑褐色の結晶片岩を用いたもの（316）などがある。315は円板状で表面中央部に凹みを持つもので、表面全体に研磨痕と敲打痕がみられる。316は長方形の板状石材で表面と裏面の中央部は平滑となっている。側面のうち３面は起伏に沿って平滑であるが、他１面の使用状況が著しく、光沢をもつ程研磨した後に敲打を行った状況が観察できる。

石製品には砥石（317）、石鍋（318）、火打石（319・320）などがある。また、いわゆる石造物には石仏（321）、五輪塔の水輪（322）などがある。

317は淡緑灰色の泥岩製砥石で、正面と背面に磨り面をもつ。残存する側面３面には加工時の鋸痕を残す。

318は滑石製石鍋の内底面破片である。細片であるが黒灰色の良質なもので、長崎県西彼杵半島産のものとみられる。

319・320は石英製火打石である。稜角部は全て火打金との打撃により潰れており、319は30.3g、320は11.0gを量る。319の正面と背面の一部に結晶片岩の付着した部分がみられる。

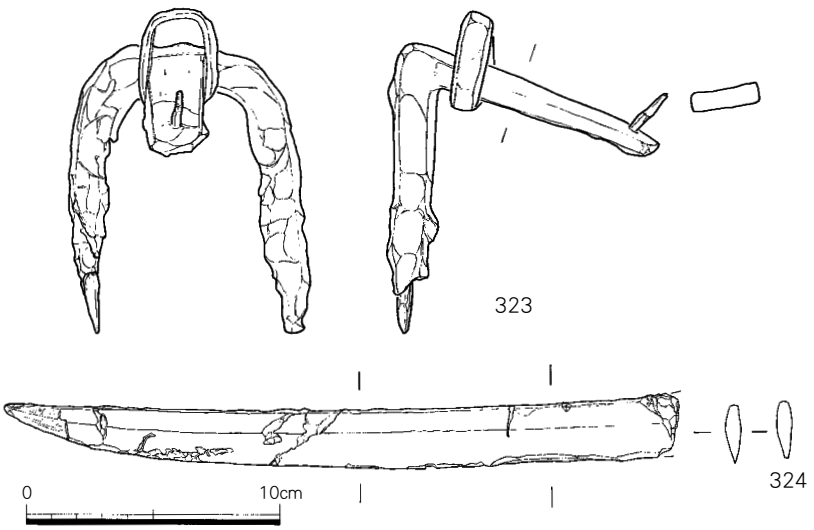
321は、下部を土中に埋めて立たせる砂岩製の埋込式石仏である。灰緑褐色の自然石から像容部を彫り出したもので、像容は合掌した供養者の立像とみられる。背面は粗彫りで舟底状とし、埋込部も粗彫りであるが立像の足下部分はやや平滑に仕上げている。

322は砂岩製五輪塔の水輪である。緑灰色のもので、最大幅は天地の中央部にある。上下の面は中央部に向かって削り込まれたもので、梵字彫刻の有無は不明である。

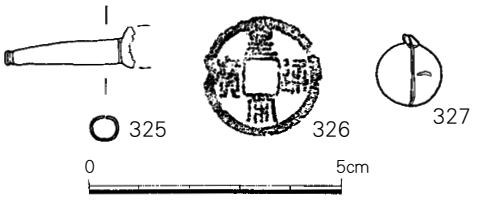
## 第10節　金属製品（第61・62図323～327、図版57）

金属製品はその材質から、鉄（323・324）、　銅（325・326）、鉛（327）のものがある。

鉄製品には鍬（323）と刀（324）がある。323は二叉の鍬先で、片手で持つ小形の熊手とみられ、農具であると考えられる。角柱形の木製柄に装着するもので、柄基部を締め金具１個と目釘１本で固定したものである。324は鉄製の刀である。残存長は26.6cmを測るが、本来は刃渡り60cm以上の刀であったとみられる。折れたため腰刀に転用したものとみられる。腰刀としての使用時は、刃を潰している部分が7.5cmあり、それを茎部とし切先からの刃長は19.1cmを測る。残存重量は119.0gを量り、側面には明瞭な鎬があり、わずかに反りがみられる。



第61図　遺物実測図43



第62図　遺物実測図44

銅製品には煙管（325）と銭貨（326）がある。325は銅製煙管の吸口部分である。表面は光沢のある金色で、鍍金仕上げとみられる。吸い込み口は直径0.3cmを測る。326は銅銭で、中国の北宋銭である。銭種は「皇宋通寶」（初鋳は寶元元（1038）年）で文字は篆書体のものである。「寶」字の周辺に二次焼成がみられる。

327は鉛製の鉄砲玉である。直径1.2cm、重量10.2gを測るもので、鋳型の合わせ目が突線状に残っており、湯口の痕跡が高さ0.15cm残存している。このことから、仕上げを行っていない未使用のものと考えられる。

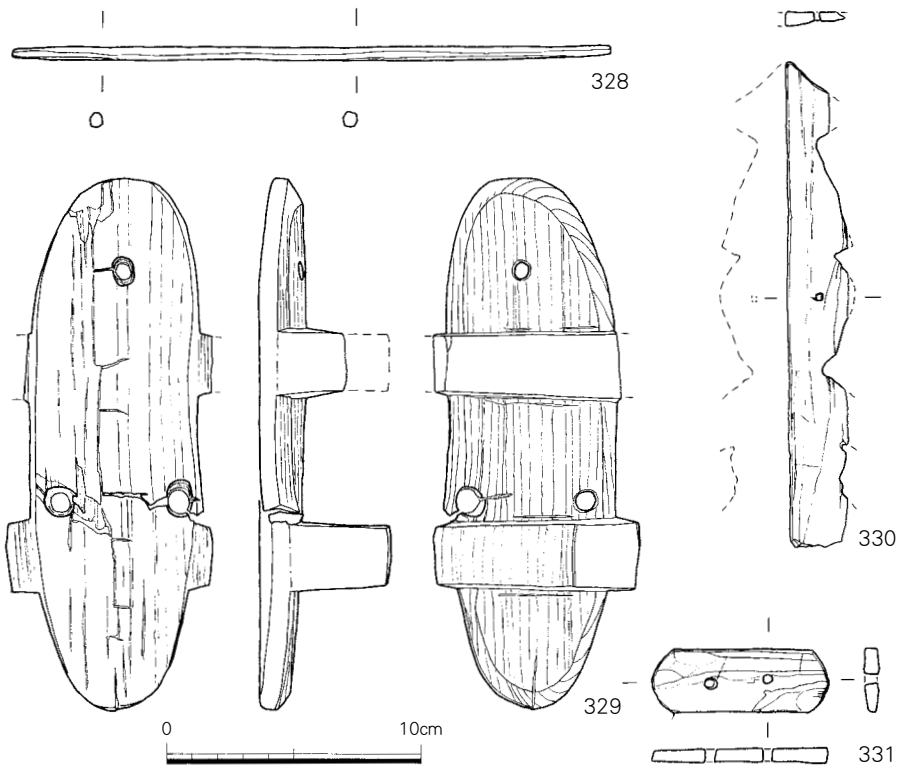
## 第11節 木製品（第63・64図328～332、図版57・58）

木製品には、箸(328)、下駄（329）、板塔婆（330）、板状加工品（331）、木札（332）などが出土している。

328は長さ23.6cm、幅0.6cmを測る箸で、両端は細く削り込まれており、多角柱状となっている。

329は連歯下駄で、漆塗りのものである。台部の表面と側面は茶色、台部裏面と歯部は光沢のない黒色の漆塗りが施されている。楕円形で鼻緒穴の位置から左足用とみられ、壺穴は壺錐で穿たれたとみられ円孔で垂直に穿孔されている。このような漆塗り下駄は江戸時代においても少ないとされ、類例から女性用のものと考えられる。

330は小形の板塔婆の先端部分である。五輪塔の形をしており、残存長19.0cmを測る。上部から、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部分が残る。板塔婆は塔婆堂の壁面や柱に釘で打ち付けたものとい



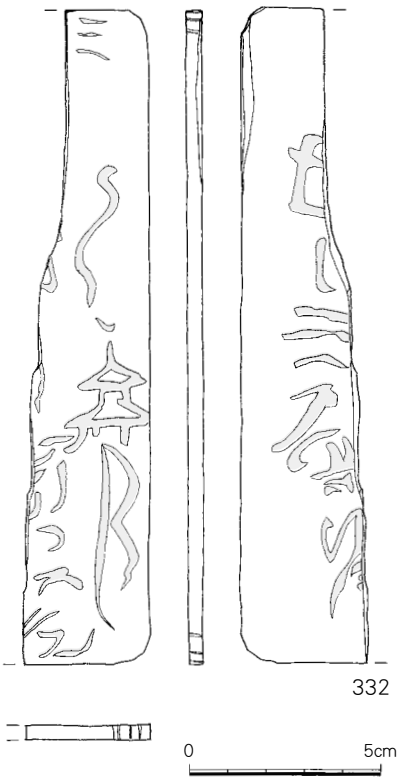

第63図　遺物実測図45

われ、本資料の水輪部分に釘穴とみられる２㎜角の穴が１ヵ所みられる。

331は板状の加工品で、短辺を円弧状に削り、直径3.5㎜の円孔が２ヵ所相対する位置に穿たれている。用途は不明である。

332は木札で、表裏面に墨書がみられる（図版58）。表面は中央下寄りの位置に二層の楼閣状建物を描いている。屋根の頂部には相輪状のものがあることから塔の可能性もある。屋根の少し上には三日月とみられる表現があり、その他の部分は意匠が不明である。裏面には判読不明の文字列が一列みられる。

以上の木製品は全て江戸時代前期の溝SD－５b第２層から出土したものである。なお、木製品はこの他に曲物・折敷・編籠・柄杓などの他、SD－５aやSD－７から護岸や堰に用いた杭が大量に出土している。




第64図　遺物実測図46

【参考文献】

土井孝之1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年　―近畿編Ⅰ―』寺沢薫・森岡秀人編　木耳社

前田敬彦2003「紀伊地域」『古墳出現期の土師器と実年代』財団法人大阪府文化財センター
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
古代の土器研究会編1992～1994『都城の土器集成』Ⅰ～Ⅲ　真陽社
中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡ＸＶ　―陶磁器分類編―』
北野隆亮2006「紀伊型瓦器椀の編年と分布」『中近世土器の基礎研究』第20号　日本中世土器研究会
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
永井久美男2002『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院

# 第７章　考察

## 第１節　遺構の時期別構成と変遷

今回の調査で弥生時代前期から近代に至る多くの遺構を検出した。それらの遺構について、時期別の様相をまとめ、その変遷について整理する。

今回の調査では、２面の遺構面を確認した。第１遺構面は調査区西端部で検出したもので、弥生時代中期以降の遺構面で多数の遺構を検出し、第２遺構面では弥生時代中期以前の遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、前期は土坑（SK－91)、中期は竪穴建物６棟（SB－１～６）や墓とみられる土坑(SK－7,－31)、祭祀を行ったとみられる土坑(SK－125)などがある。前期の状況は不明ながら、調査区全体は中期の集落内部であったものと考えられる。他の調査地同様、後期の遺構はみられない。

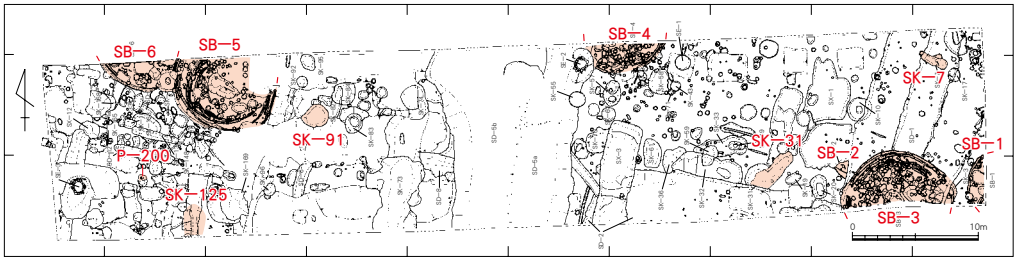
古墳時代は、前期の土坑（SK－83,－113,－126）が調査区西半部にみられる。中期も土坑（SK－17,－133）があり、これらは調査区の東端と西端に位置する。なお、後期の遺構は確認していない。古墳時代前期から中期にかけての時期はこのように土坑が掘られており、当調査地の詳細な性格は明確ではないが、集落内部であった可能性が考えられる。

古代は、飛鳥・奈良時代では、溝（SD－９）・土坑（SK－20,－33･59,－61,－142･143, －105）などがあり、調査区全体に遺構が散在的にみられる状況である。平安時代中期は、井戸と考えられる土坑（SK－107,－169）などがある。これらの遺構の位置や井戸が掘られていることなどから調査区の西端部に居館が営まれていた可能性が考えられる。なお、平安時代前期・後期の遺構は確認していない。

中世は、鎌倉時代では、現在の地割と方向性がほぼ一致する溝（SD－６,－12）や井戸と考えられる土坑（SK－10,－92,－95,－96,－128）などがある。溝の方向性は座標北の方向から15°東に傾斜した方向性をとる。これらの遺構の位置などから前代に引き続いて調査区西端部に居館が営まれていた可能性が考えられ、その場合SD－６とSD－12は区画溝に想定できる。また、東側にも井戸と考えられるSK－10が掘削されており、調査区全域が居住域となっていた可能性がある。

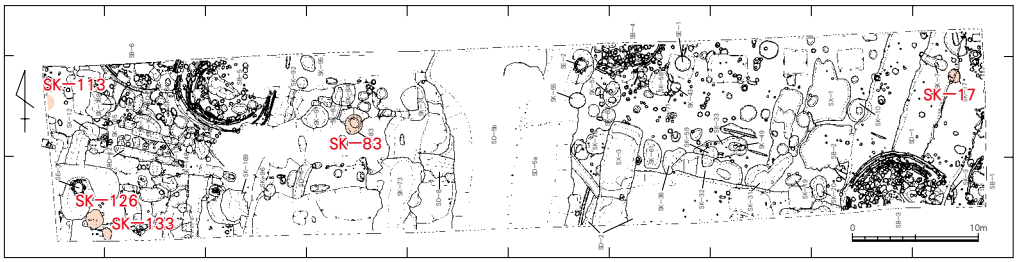
南北朝時代から室町時代までの遺構は、現在の地割とほぼ方向性が一致する溝（SD－１,－２,－８）や土坑（SK－49,－57)、石組井戸（SE－２,－３）などがある。これらの遺構から調査区全域

弥生時代



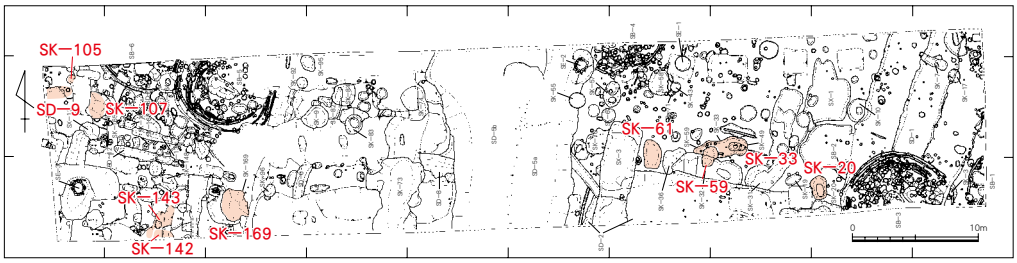

↓

古墳時代



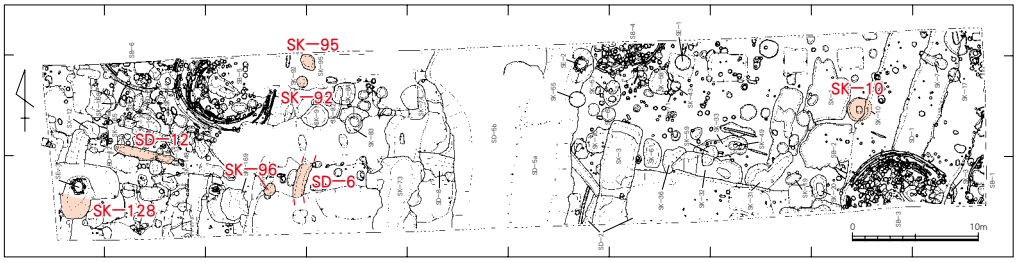

↓

飛鳥～平安時代




↓

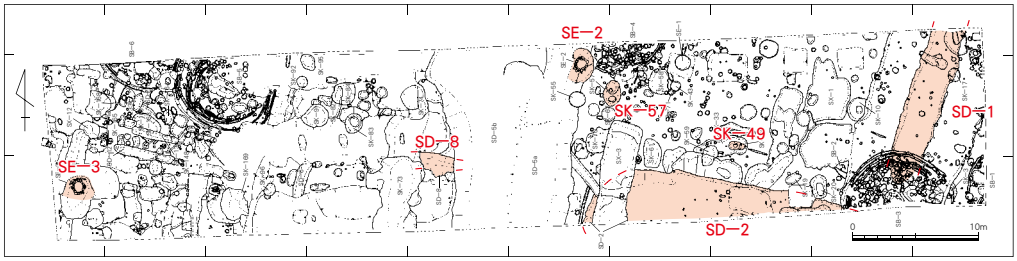
鎌倉時代



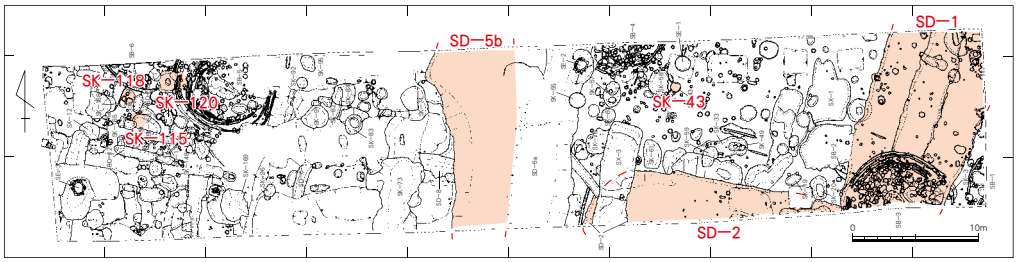

↓

第65図　時期別遺構変遷図１

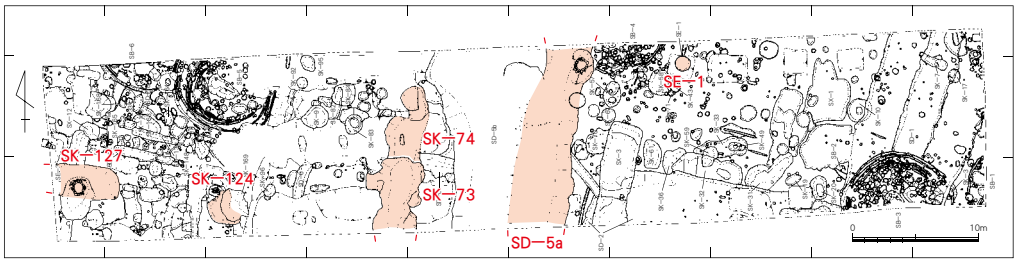
南北朝～室町時代



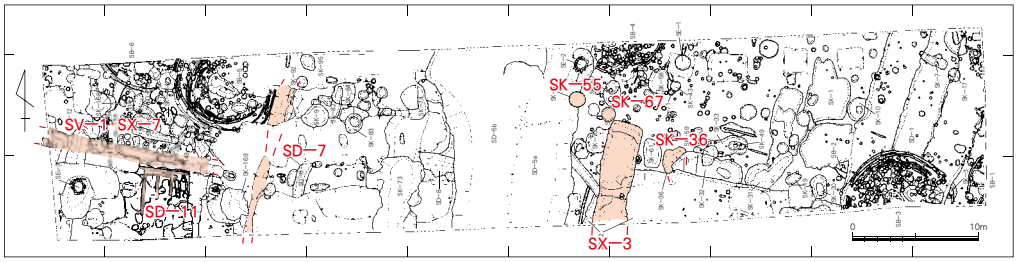

江戸時代前期




江戸時代後期




明治時代～




第66図　時期別遺構変遷図２

が居住域となり、溝で区画された屋敷地が連なっていた状況を復原することができる。溝の方向性は座標北の方向から10 ～ 20°東に傾斜した方向性をとる。

江戸時代前期は、大溝（SD－１・－２）が継続して営まれており、新たに大溝（SD－５b）や土坑（SK－43,－115,－118,－120）などがみられる。これらの遺構覆土に多量の陶磁器を中心とした土器類が含まれることや竈とみられる土坑（SK－115）、備前焼の小型甕を埋甕としていた土坑（SK－118）などもみられることから、この時期まで前代に引き続いて調査区全域が居住域として利用されていたものと考えられる。新たに掘削された大溝（SD－５b）の方向性は座標北の方向から2°東に傾斜した方向性をとり、前後の時期のものとはやや異なった様相を示す。同時期の和歌山城などの地割りと同じく真北方向を指向した可能性がある。

江戸時代後期では、大溝SD－５bを埋め立てて流路を東側に付け替えた大溝（SD－５a）や井戸（SE－１）・現在の地割とほぼ方向性が一致する粘土採掘土坑（SK－73･74,－124,－127）などがある。掘り直された大溝（SD－５a）は杭と土嚢（俵）で護岸され、堰を備えた灌漑水路であり、この時期に調査区北西隅部分を除いて耕地化されたものとみられる。掘り直された大溝（SD－５a）や粘土採掘土坑の方向性は座標北の方向から７～ 10°東に傾斜した方向性をとり、現在の地割とほぼ方向性が一致する。調査区北西隅部分は居住域として残されたと考えられる。

近代（明治時代～）の状況は、調査区北西隅部分は溝（SD－７）と石垣（SV－1・SX－７）で区画されており、前代に引き続いて居住域として利用されていたと考えられる。また、その南側は農耕に関する小溝群（SD－11）があり、調査区中央部では現在の地割と方向性が一致する粘土採掘土坑（SX－３,SK－36）や埋桶（SK－55,－67）なども検出されており、前代に引き続いて耕地として利用されていたと考えられる。

以上、時期別の遺構変遷から土地利用の状況を考察したが、弥生時代前期から現在まで連綿と生活の痕跡を辿ることができた。今回の調査地の様に一ヵ所の調査で各時期の遺構を網羅的に検出する事例は稀であり、本調査地は遺跡全体からみて中枢部の一角に位置するものと考えられる。

## 第２節　高床建物を描いた弥生土器について

今回の調査において、弥生時代の遺物は弥生土器・石器などが大量に出土しているが、特に注目される遺物に高床建物を描いた弥生土器の破片１点がある（第25図28、巻頭図版２、図版38）。この土器片は弥生時代のピット（P－200）から出土したもので、中期の大形壺の胴部上半に篦状の工具で絵画を描いたものである。

和歌山県において、弥生時代の絵画土器が出土した事例はこれまでに３遺跡５事例あるが、田辺市水取山遺跡出土の水鳥１例（浦1938）の他は鹿４例で、全て動物を描いた例である。鹿は、かつらぎ町西飯降Ⅱ遺跡例（大形有段口縁壺２個体分と推定される）（手島2007）の他は和歌山市太田・黒田遺跡で３例が知られる。

太田・黒田遺跡では、まず1962年に資料紹介された１例がある。この例は羯磨正信氏が資料紹介した個人採集のもので、鹿を描いた壺胴部１点である。鹿の絵は、胴部下半と後脚２本が描かれており、足首の向きから復元するならば頭部を右に向けた構図で描かれたものとみられる。報告当時は絵画土器の出土例は非常に少なく、報告者は奈良県唐古遺跡出土例に対比させ評価を行い、太田・

黒田遺跡においても弥生土器に鹿の絵を描いていたものと推定された（羯磨1962）。

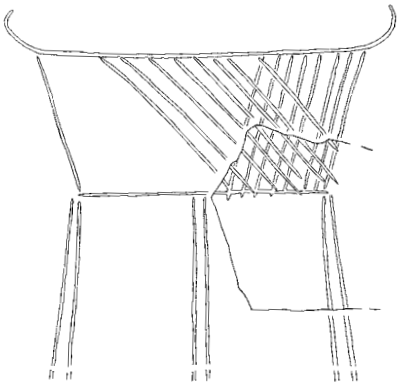
2001年には有段口縁壺１例が資料紹介された。この例は、1978年に和歌山市教育委員会によって実施された第12次発掘調査で出土していた未整理資料を、1999年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が再整理した際に確認されたものである。第12次調査地は遺跡のほぼ中央部であり、絵画土器は遺物包含層から出土した。土器は同一個体とみられる有段口縁壺の上半部破片約20点で、図上復元すると口径29.8㎝、頸部径24.4㎝、残存高19.5㎝の規模を測る。色調や胎土などの特徴から在地で製作されたものとみられ、第Ⅲ様式古段階の時期のものと考えられる。絵画は有段口縁部の外側面に描かれており、口縁外側面の幅は4.6㎝を測る。口縁部は47％残存しており、その範囲で判別可能な絵画は鹿２頭がある。鹿は頭部を右に向けた鹿１と左に向けた鹿２がある。鹿１は胴部を格子状の表現で充填し、角の特徴から牡鹿と考えられている。また、鹿２には格子状の表現は無い。２例とも胴部に斜め後上方から矢が刺さった表現がある。その他にも絵画の一部とみられる線刻が数カ所ある。破損のため明確ではないが、鹿１の左側にある線刻は家屋を描いた可能性が指摘された（大野・井馬2001）。

また、同じ2001年に報告書で報告された有段口縁壺１例がある。この例は、2000年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った第45次発掘調査で出土したものである。第45次調査地は遺跡のほぼ中央部からやや南寄りで、第12次調査地から南に約100ｍの距離に位置する。絵画土器は江戸時代の溝から出土した。土器は有段口縁壺の口縁部１点で、口径33.6㎝、残存高5.2㎝の規模を測る。色調や胎土などの特徴から在地で製作されたものとみられる。絵画は有段口縁部の外側面に描かれており、口縁外側面の幅は4.1㎝を測る。絵画は鹿２頭がみられる。２頭の鹿は頭部を左に向けて並んだ構図で描かれている（和歌山市文事2001）。

太田・黒田遺跡における絵画土器の出土事例としては今回の例で４例目、和歌山県内で６例目となるが、建物が描かれた弥生土器は和歌山県で初めての例であるといえる。また、描かれた建物は高床建物であり、描き方から切妻屋根をもつ高床式倉庫とみられる。奈良県や大阪府の出土事例を参考にして、絵画の構図について推定図を示す（第67図）。

弥生時代の絵画土器は、全国で600点以上出土しているが（うち建物は約60点）、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡で350点以上、それに隣接する田原本町清水風遺跡で約50点が出土しており、奈良県が弥生時代の絵画土器分布の中心地であるといえる（田原本町教委2006）。これらの絵画土器は集落のマツリに用いられたものと考えられており、大形壺の胴部上半に鹿・魚・シャーマン・建物などを組み合わせて描かれる場合があり、なかでも鹿と建物を組み合わせる例が多い（藤田・辰巳1998）。

これまでに太田・黒田遺跡で出土した３例の鹿を描いた絵画土器も大形壺であり、描かれた部位は有段口縁壺の口縁部外側面２例、胴部１例であり、いずれも在地で作られたものと考えられる。描かれた鹿には矢が刺さった表現をしたものがあり、今回出土した壺の胴部に描いた高床建物の例と併せて考えた場合、出土数自体は少ないが、これらの土器は奈良県の例と同様にマツリに用いたものとみられ、マツリの内容



第67図　弥生土器絵画推定図

を理解し土器に絵画として描く技能を持った人物が太田・黒田遺跡の集落内に居たことを示す貴重な例と考えられる。そして、唐古・鍵遺跡など奈良県の絵画土器は第Ⅲ様式に始まり、第Ⅳ様式に盛期をむかえ、第Ⅴ様式に衰退にむかうことから、太田・黒田遺跡での時期の明確な出土例は第Ⅲ様式古段階であり、奈良県とほぼ同時期に絵画土器は成立したといえる。

また、数少ない祭祀遺物として銅鐸と絵画土器の出土位置について中期の遺構密度の高い地域（竪穴建物等が密集する中枢域）の両端で出土していることから、祭祀領域が確立していた可能性が指摘されている（前田2006）。銅鐸は密集地北東縁辺部の黒田公園で出土しており、絵画土器（第12・45次調査）は、密集地南西縁辺部での出土である。今回の第59次調査地は密集地南東縁辺部にあたり、高床建物を描いた壺１点の他、同タイプの有段口縁壺で口縁部外側面に鋸歯文を施すもの１点（第25図27、図版38）も出土している。このことから、遺跡内における祭祀領域候補地として密集地南東縁辺部を追加することができ、中期の密集地縁辺部において祭祀領域が確立していた可能性がより高まったものと考えられる。

**【参考文献】**

浦　宏1938「水取山弥生式遺跡発見鳥形紋土器」『紀伊考古』第１巻第２号　紀伊考古雑誌発行会

大野左千夫・井馬好英2001「太田黒田遺跡出土の弥生絵画土器」『紀伊考古学研究』第４号　紀伊考古学研究会

羯磨正信1962「和歌山市黒田遺跡出土の一土器片」『熊野路考古』第２号

金関恕1985「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集

財団法人和歌山市文化体育振興事業団2001『太田・黒田遺跡　第45次発掘調査概報』

田原本町教育委員会2006『田原本の遺跡４ 弥生の絵画 ―唐古･鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画―』

手島芙美子2007「西飯降Ⅱ遺跡出土の絵画土器」『財団法人和歌山県文化財センター年報』2006（平成18）年度　財団法人和歌山県文化財センター

春成秀爾1991「描かれた建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会

藤田三郎1993a「弥生土器における土器絵画（1）」『みずほ』第９号　大和弥生文化の会

藤田三郎1993b「弥生土器における土器絵画（2）」『みずほ』第10号　大和弥生文化の会

藤田三郎･辰巳和弘1998「古代絵画にみるシンボリズム」『考古学による日本歴史』第12号　芸術･学芸とあそび　雄山閣

前田敬彦2006「紀伊における弥生時代遺跡の基礎的研究（1）―和歌山市太田・黒田遺跡―」『紀伊考古学研究』第９号　紀伊考古学研究会

**【太田・黒田遺跡に関する文献一覧】**（本文中に示した以外の主要なもの）


大野左千夫1991「太田黒田遺跡」他『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会

大野左千夫・奥村薫2006「太田黒田遺跡出土の中世瓦の一例　―第12次調査SK－８出土資料―」『紀伊考古学研究』第９号　紀伊考古学研究会

北野隆亮2006「「太田城跡」周辺の考古学的考察」『和歌山平野における荘園遺跡の復元研究』海津一朗編

北野隆亮2008a「考古学からみた太田城跡」『中世終焉　秀吉の太田城水攻めを考える』海津一朗編　清文堂出版

北野隆亮2008b「太田・黒田遺跡井戸出土の古代銭貨　―第３次調査SE－202出土の和同開珎と萬年通寶―」『紀伊考古学研究』第11号　紀伊考古学研究会

北野隆亮2008c「太田城跡の考古学史と景観復元」『紀州経済史文化史研究所紀要』第29号　和歌山大学紀州経済史文化史研究所

小賀直樹1979「和歌山県の弥生式土器」『和歌山の研究』第１号　地質・考古篇　清文堂出版

髙橋方紀1999「太田・黒田遺跡の石器組成」『紀伊考古学研究』第２号　紀伊考古学研究会

坪井清足1958「和歌山県和歌山市南黒田遺跡の土器」『弥生式土器集成　資料編１』小林行雄・杉原荘介編

仲原知之2006「太田・黒田遺跡の（県１次）発掘調査」・「太田・黒田遺跡出土の管玉２種」『(財)和歌山県文化財センター年報　2005年度』財団法人和歌山県文化財センター

前田敬彦1995「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」『古代文化』47－10　財団法人古代学協会

前田敬彦2002「和歌山市太田・黒田遺跡出土の銅鐸」『和歌山市立博物館研究紀要』第16号　和歌山市立博物館

宮田啓二1954a「太田・黒田遺跡」『紀伊考古学資料調査報告　あさも』第４巻第６号　和歌山考古学会

宮田啓二1954b「土器図録」『紀伊考古学資料調査報告　あさも』第４巻第７号　和歌山考古学会

森浩一・白石太一郎ほか1971「シンポジウム弥生文化研究の諸問題 ―近畿とその周辺の中での太田・黒田遺跡」『古代学研究』第61号　古代学研究会

和歌山井堰研究会2004「太田城水攻め堤跡の調査 ―和歌山市出水堤の測量調査―」『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅱ（那賀郡編）』

和歌山県史編さん委員会1983「太田・黒田遺跡」『和歌山県史　考古資料』

和佐野喜久夫・前田敬彦2003「和歌山市太田・黒田遺跡の炭化米特性と稲作起源」『和歌山市立博物館研究紀要』第17号

# 出土遺物観察表

〈凡例〉

○　遺物番号は、遺物実測図番号を示す。

○　計測値欄の（　）は残存値を示す。

○　残存率　1/10未満は「小片」、1/20以下は「細片」とそれぞれ表記した。

○　観察表の作成にあたっては、主に下記の参考文献を参照した。

【参考文献】

土井孝之1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年 ―近畿編Ⅰ―』寺沢薫・森岡秀人編　木耳社

前田敬彦2003「紀伊地域」『古墳出現期の土師器と実年代』財団法人大阪府文化財センター

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

古代の土器研究会編1992～1994『都城の土器集成』Ⅰ～Ⅲ　真陽社

中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡ＸＶ　―陶磁器分類編―』

北野隆亮2006「紀伊型瓦器椀の編年と分布」『中近世土器の基礎研究』第20号　日本中世土器研究会

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』

永井久美男2002『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院

出土遺物観察表目次

出土遺物観察表１　土器・陶磁器１

出土遺物観察表２　土器・陶磁器２

出土遺物観察表３　土器・陶磁器３

出土遺物観察表４　土器・陶磁器４

出土遺物観察表５　土器・陶磁器５

出土遺物観察表６　土器・陶磁器６

出土遺物観察表７　埴輪

出土遺物観察表８　瓦

出土遺物観察表９　土製品

出土遺物観察表10　石器・石製品１

出土遺物観察表11　石器・石製品２

出土遺物観察表12　金属製品

出土遺物観察表13　木製品

## 出土遺物観察表１　土器・陶磁器１

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 第19図 | SK－148 | 弥生土器<br>壺 | 口径　25.0<br>器高　(15.4) | 広口壺 | 口縁　キザミ目<br>頸部　５条の突帯に<br>キザミ目 | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･チャート･赤色粒･<br>結晶片岩<br>焼成：良 | 口縁～頸部1/4 | |
| 2 | 第19図 | SK－148 | 弥生土器<br>甕 | 口径　27.0<br>器高　(10.8) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　タテハケ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩･赤<br>色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/8 | 黒斑 |
| 3 | 第19図 | SK－148 | 弥生土器<br>甕 | 口径　22.9<br>器高　(9.9) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/8 | 紀伊型甕 |
| 4 | 第20図 | SB－５ | 弥生土器<br>蓋 | 口径　22.2<br>器高　(8.6) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 1/4 | 甕の蓋<br>スス付着 |
| 5 | 第20図 | SB－５<br>内P－16 | 弥生土器<br>甕 | 口径　20.4<br>器高　32.0<br>底径　7.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 3/4 | 紀伊型甕<br>内面に炭化物付着。 |
| 6 | 第21図 | SK－125取7 | 弥生土器<br>壺 | 口径　15.6<br>器高　(21.9) | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/4 | |
| 7 | 第21図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　16.6<br>器高　50.0<br>底径　6.3 | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　波状文、ミガキ<br>底部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 8 | 第21図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　17.0<br>器高　(6.6) | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 淡褐色 | 胎土：精良<br>長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 口縁部　完形 | |
| 9 | 第22図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　16.7<br>器高　(32.2) | 広口壺 | 口縁　ナナメ方向の<br>キザミ目<br>頸部　タテナデ<br>体部　ミガキ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･石英･黒色粒(？)･<br>結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 2/3 | 底部欠 |
| 10 | 第22図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　11.0<br>器高　(14.9) | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>頸部　２条突帯<br>体部　クシ描直線文 | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･石英･白色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/4 | |
| 11 | 第22図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 器高　(22.6)<br>底径　7.6 | 広口壺 | 体部　上　格子状クシ<br>描文<br>下　ミガキ<br>底部　ヨコナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 3/4 | 口縁部欠 |
| 12 | 第22図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　16.5<br>器高　(24.5) | 直口壺 | 口縁　クシ描波状文<br>頸部　下位に突帯4条<br>体部　クシ描直線文 | 淡黄赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･チャート<br>焼成：良 | 1/4 | 口縁～頸部ほぼ完形 |
| 13 | 第23図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　14.0<br>器高　(20.3) | 直口壺 | 口縁　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁部～頸部<br>1/8 | |
| 14 | 第23図 | SK－125 | 弥生土器<br>壺 | 口径　9.0<br>器高　(25.8) | 細頸壺 | 口縁　キザミ目<br>頸部　波状文、<br>突帯にキザミ<br>体部　タテ方向の<br>突帯にキザミ | 黄灰色 | 胎土：精良<br>石英・結晶片岩<br>焼成：良 | 2/3 | 底部欠 |
| 15 | 第23図 | SK－125 | 弥生土器<br>鉢 | 口径　37.6<br>器高　(13.1) | | 口縁　キザミ目<br>体部　ミガキ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･石英･長石<br>焼成：良 | 3/4 | 底部欠 |
| 16 | 第23図 | SK－125取8 | 弥生土器<br>高杯 | 器高　(16.2)<br>脚台底径16.0 | | 脚部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 脚部 | 脚部完形 |
| 17 | 第24図 | SK－73 | 弥生土器<br>壺 | 口径　(15.0)<br>器高　9.3 | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>頸部　ハケ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>石英･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～頸部1/6 | 口径端部内側に弧状線を文様風に入れる。 |
| 18 | 第24図 | SD－5<br>SB－2下 | 弥生土器<br>壺 | 器高　(13.6)<br>底径　6.4 | 小形壺 | 体部　ハケ<br>底部　ハケ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･赤色粒<br>焼成：良 | 頸部～底部 | ３ヵ所穿孔<br>黒斑 |
| 19 | 第24図 | SK－31 | 弥生土器<br>壺 | 器高　29.1<br>底径　7.9 | | 頸部　ヘラ描沈線多条<br>体部　ミガキ<br>底部　ミガキ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 頸部～底部 | 胴部１ヵ所穿孔 |
| 20 | 第24図 | SX－1 | 弥生土器<br>壺 | 口径　22.8<br>器高　21.3 | 広口壺 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ミガキ<br>底部　ヨコナデ、<br>クシ描直線文 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/2 | |
| 21 | 第24図 | SD－18 | 弥生土器<br>壺 | 口径　19.0<br>器高　10.5 | 広口壺 | 口縁　横方向のヘラ描<br>沈線後キザミ目<br>頸部　タテハケ | 赤褐色 | 胎土：良<br>石英･片岩･赤色粒･<br>チャート?<br>焼成：良 | 口縁～頸部<br>1/4 | |
| 22 | 第24図 | SK－107 | 弥生土器<br>壺 | 口径　22.0<br>器高　39.4 | 広口壺 | 口縁　ナデ<br>体部　クシ描波状文<br>底部　ミガキ | 赤褐色 | | 2/3 | |
| 23 | 第25図 | SK－166 | 弥生土器<br>壺 | 口径　13.1<br>器高　(8.4) | 広口壺 | 口縁　3条の沈線<br>体部　クシ描直線文<br>底部　ヘラミガキ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･石英･赤色粒<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 24 | 第25図 | SX－8 | 弥生土器<br>壺 | 口径　24.0<br>器高　(12.7) | 広口壺 | 口縁　垂下口縁に<br>５条の沈線<br>頸部　ハケ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>長石･石英･結晶片岩･赤<br>色粒<br>焼成：良 | 口縁～頸部小片 | |
| 25 | 第25図 | SD－10 | 弥生土器<br>壺 | 口径　17.1<br>器高　(14.9) | 直口壺 | 口縁　クシ描波状文・<br>突帯2条<br>頸部　クシ描直線文 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･白色粒<br>焼成：良 | 口縁部1/4 | |
| 26 | 第25図 | SK－84 | 弥生土器<br>壺 | 口径　14.8<br>器高　(5.6) | 直口壺 | 口縁　クシ描波状文・<br>突帯2条 | 赤褐色 | 胎土：良<br>長石･石英･結晶片岩<br>焼成：良 | 口縁部小片 | |
| 27 | 第25図 | SK－84 | 弥生土器<br>壺 | 器高　(4.7) | 有段口縁壺 | 口縁　キザミ目 | 赤褐色 | 胎土：良<br>石英･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 口縁外面にヘラ描で鋸歯文 |
| 28 | 第25図 | P－200 | 弥生土器<br>壺 | | | 体部　ナデ | 赤茶褐色 | 胎土：良好<br>石英･長石･チャート<br>焼成：良好 | 体部細片 | ヘラ描線刻で絵画「高床建物」を描く。 |
| 29 | 第26図 | SK－10 | 弥生土器<br>甕 | 口径　22.8<br>器高　(10.2) | 頸部に篦描直線文<br>4条。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ハケ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･チャート?<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/4 | |
| 30 | 第26図 | SX－12 | 弥生土器<br>甕 | 口径　25.0<br>器高　(13.4) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ | 内面：黒灰色<br>外面：暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･長石<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/3 | 紀伊型甕 |
| 31 | 第26図 | SD－18 | 弥生土器<br>甕 | 口径　22.0<br>器高　26.0<br>底径　6.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩･赤<br>色粒<br>焼成：良 | 3/4 | 紀伊型甕 |
| 32 | 第26図 | SK－19 | 弥生土器<br>甕 | 口径　21.4<br>器高　(9.2) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/3 | 紀伊型甕 |
| 33 | 第27図 | SX－12 | 弥生土器<br>甕 | 器高　(6.5)<br>底径　7.4 | | 体部　ナデ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･石英<br>焼成：良 | 底部細片 | |
| 34 | 第27図 | SX－12 | 弥生土器<br>甑 | 器高　(5.0)<br>底径　6.6 | 底部1カ所穿孔 | 体部　ヘラケズリ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 底部細片 | |
| 35 | 第27図 | SK－84 | 弥生土器<br>甕 | 口径　24.1<br>器高　(7.0) | | 口縁　ヨコナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>緻密　長石･石英･結晶<br>片岩･<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>小片 | |

## 出土遺物観察表２　土器・陶磁器２

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36 | 第27図 | SK－166 | 弥生土器<br>甕 | 口径　30.2<br>器高　(11.2) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　平行タタキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･長石･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>小片 | |
| 37 | 第27図 | SK－3 | 弥生土器<br>甕 | 口径　41.6<br>器高　(12.5) | 頸部粘土貼付 | 口縁　ヨコナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･長石<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/8 | 外面スス付着 |
| 38 | 第27図 | SD－5<br>１層 | 弥生土器<br>蓋 | 口径　15.4<br>器高　6.3<br>つまみ径5.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ<br>つまみ部　ヨコナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 3/4 | 甕用の蓋。 |
| 39 | 第28図 | 第2層 | 弥生土器<br>甕 | 口径　17.0<br>器高　(7.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ハケ<br>底部 | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>角閃石･石英<br>焼成：良 | 小片 | 生駒西麓産 |
| 40 | 第28図 | SK－107<br>４層 | 弥生土器<br>高杯 | 脚部径　19.6<br>器高　(20.2) | | 杯部　ヘラミガキ<br>脚部　ハケ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 杯部下半～脚部<br>1/2 | |
| 41 | 第28図 | SK－168 | 弥生土器<br>高杯 | 脚部径　14.0<br>器高　(15.1) | 水平口縁高杯の脚部とみられる。 | 杯部　ヘラミガキ<br>脚台部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･石英･長石･赤色粒<br>焼成：良 | 杯部下半～脚部<br>2/3 | 杯部下半～脚部黒斑 |
| 42 | 第28図 | SD－5<br>１層 | 弥生土器<br>高杯 | 脚部径　13.6<br>器高　(10.4) | 脚端部に円形の穿孔18カ所を復元できる | 脚台部　ナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 脚部1/3 | |
| 43 | 第28図 | SD－10 | 弥生土器<br>高杯 | 脚部径　11.2<br>器高　(9.5) | 脚部上段に７ヵ所下段に10ヵ所の円形の穿孔。 | 脚部　ヘラミガキ<br>杯部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 脚部2/3 | |
| 44 | 第28図 | SK－168 | 弥生土器<br>鉢 | 口径　32.0<br>器高　(7.5) | 大形鉢。<br>口径端部上面に円形浮文が施されている。２条突帯に刻目。 | 口縁　ナデ<br>体部　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>長石･石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～杯部上半<br>小片 | 播磨系 |
| 45 | 第28図 | SB－５ | 弥生土器<br>鉢 | 口径　23.2<br>器高　(6.2) | ２条の突帯に刻目。 | 口縁　キザミ目<br>体部　クシ描直線文・波状文 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･赤色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>小片 | |
| 46 | 第28図 | SK－84 | 弥生土器<br>鉢 | 口径　14.6<br>器高　7.3<br>底径　5.8 | 口縁部に凹線文。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 47 | 第28図 | SK－163 | 弥生土器<br>鉢 | 口径　19.4<br>器高　(6.7) | 台付鉢 | 口縁　クシ描波状文<br>体部<br>底部 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>小片 | |
| 48 | 第28図 | SB－3内<br>SK－2･SK－3 | 弥生土器<br>高杯 | 脚部　14.6<br>器高　(11.6) | 脚部は14ヵ所の台形状の透かし孔が施されている。 | 脚部　ヨコナデ<br>杯部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 杯部下半～脚台部1/3 | 中部瀬戸内産 |
| 49 | 第28図 | SB－３内SK－2<br>２層 | 弥生土器<br>台付鉢 | 脚台部径11.4<br>器高　4.3 | 脚台部に三角形の透かし孔。 | 脚部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 脚台部　細片 | |
| 50 | 第28図 | 排土表採 | 弥生土器<br>台付鉢 | 器高　(3.3) | | | 赤褐色 | 胎土：良<br>石英･長石･結晶片石<br>焼成：良 | 脚台部　細片 | 脚部に綾杉文。 |
| 51 | 第29図 | SK－17 | 土師器<br>高杯 | 脚部径　10.5<br>器高　6.5 | | 脚部　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･結晶片石<br>焼成：良 | 杯部下半～脚部<br>2/3 | |
| 52 | 第29図 | SK－17 | 土師器<br>高杯 | 脚部径　9.9<br>器高　(7.8) | タテ方向のヘラミガキのちヨコ方向のヘラミガキ。 | 脚部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>白色粒<br>焼成：良 | 脚部1/3 | |
| 53 | 第29図 | SK－133 | 土師器<br>高杯 | 脚部径　11.0<br>器高　(9.7) | | 脚部　ヘラミガキ<br>杯部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片石･赤色粒<br>焼成：良 | 脚部3/4 | |
| 54 | 第29図 | SK－133 | 土師器<br>高杯 | 脚部径　11.8<br>器高　(7.2) | | 脚部　ヘラミガキ | 暗灰褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 脚部1/3 | 黒斑 |
| 55 | 第29図 | SK－133 | 土師器<br>製塩土器 | 脚部径　(5.4)<br>器高　(2.6) | | 脚部　ユビオサエ<br>体部　平行タタキ | 淡赤褐色 | 胎土：良<br>白色粒<br>焼成：良 | 脚台部小片 | 脚台式 |
| 56 | 第29図 | SK－133 | 土師器<br>製塩土器 | 脚部径　4.4<br>器高　(3.2) | | 脚部　ユビオサエ | 淡赤褐色 | 胎土：良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | 脚台部小片 | 脚台式<br>二次焼成を受けている。 |
| 57 | 第29図 | SD－１北半<br>２層 | 土師器<br>壺 | 口径　10.4<br>器高　7.6 | 小形丸底壺 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：良<br>石英･結晶長石･片岩<br>焼成：良 | 口縁部ほぼ完形 | 布留式古段階 |
| 58 | 第29図 | SK－10 | 土師器<br>杯 | 口径　10.8<br>器高　4.8 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩<br>焼成：良 | 3/4 | 黒斑 |
| 59 | 第29図 | SK－10 | 土師器<br>高杯 | 口径　14.7<br>器高　10.5<br>脚部径　11.6 | 脚部に円形の穿孔３ヶ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>杯部　ヘラミガキ<br>脚部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | ほぼ完形 | |
| 60 | 第29図 | SK－10 | 土師器<br>高杯 | 口径　13.3<br>器高　9.9<br>脚部径　11.8 | 脚部に円形の穿孔3ヶ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>杯部　ヘラミガキ<br>脚部　ヘラミガキ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | ほぼ完形 | |
| 61 | 第29図 | SB－５ | 土師器<br>甕 | 口径　28.8<br>器高　(9.6) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ハケ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 口縁部～体部上半1/4 | 混入品 |
| 62 | 第29図 | SB－５ | 土師器<br>甑 | 口径　23.1<br>器高　(22.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　タテハケ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>赤色粒･白色粒<br>焼成：良 | 口縁部～体部上半1/6 | 混入品 |
| 63 | 第29図 | SD－5<br>１層 | 土師器<br>製塩土器 | 器高　(4.3) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ | 淡赤褐色 | 胎土：良<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 丸底式<br>二次焼成を受ける。 |
| 64 | 第29図 | SK－169 | 須恵器<br>杯蓋 | 口径　14.8<br>器高　4.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ | 青灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：良 | 1/4 | MT15型式 |
| 65 | 第30図 | SK－20 | 土師器<br>杯 | 口径　17.3<br>器高　5.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ミガキ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 66 | 第30図 | SK－20 | 土師器<br>甕 | 口径　29.0<br>器高　(16.2) | 長胴甕 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　タテハケ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>赤色粒･石英<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/4 | |
| 67 | 第30図 | SK－20 | 土師器<br>甑 | 口径　31.4<br>器高　(7.3) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ・タテハケ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>赤色粒･結晶片岩･白色粒<br>焼成：良 | 口縁～体部上半<br>1/8 | |
| 68 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>杯蓋 | 器高　(1.8)<br>摘み径　2.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ<br>底部　ナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/3 | |
| 69 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>杯蓋 | 口径　10.5<br>器高　3.0<br>摘み径　2.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラケズリ | 灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/3 | |
| 70 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>杯身 | 口径　12.1<br>器高　3.9 | | 口縁　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/2 | |
| 71 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>杯身 | 口径　10.0<br>器高　3.6 | 焼け歪みあり。 | 口縁　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 2/3 | |
| 72 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>平瓶 | 胴部径　16.6<br>器高　9.9<br>底径　10.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 小片 | 自然釉 |

# 出土遺物観察表３　土器・陶磁器３

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 73 | 第30図 | SK－20 | 須恵器<br>甕 | 口径　25.4<br>器高　(9.4) | 大甕 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　平行タタキ後カキメ<br>頸部　強いカキメ | 青灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 口縁～体部上半小片 | 内面に同心円状当て具痕。 |
| 74 | 第31図 | SK－61 | 土師器<br>甕 | 口径　18.6<br>器高　(6.9) | 口縁外面端部に１条の沈線。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･白色粒<br>焼成：良 | 口縁部～体部上半1/4 | |
| 75 | 第31図 | SK－61 | 土師器<br>甕 | 口径　24.6<br>器高　(28.9) | 長胴甕 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　タテハケ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩･白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | 1/4 | 外面スス付着<br>底部欠 |
| 76 | 第31図 | SK－61 | 須恵器<br>杯身 | 口径　10.5<br>器高　3.5 | | 口縁　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 3/4 | |
| 77 | 第31図 | SK－61 | 須恵器<br>杯身 | 口径　10.4<br>器高　2.1 | | 口縁　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 3/4 | |
| 78 | 第31図 | SK－61 | 須恵器<br>杯身 | 口径　10.4<br>器高　4.8<br>高台　8.9 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/3 | |
| 79 | 第32図 | SD－9 | 須恵器<br>杯 | 口径　15.0<br>器高　3.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 暗灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/8 | 外面に重ね焼痕とみられる黒変部分有。 |
| 80 | 第32図 | SD－9 | 須恵器<br>杯 | 口径　12.6<br>器高　5.0 | | 口縁　ヨコナデ | 灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/4 | 外面に２次的な小孔状のキズ多くあり。 |
| 81 | 第32図 | SD－9 | 須恵器<br>杯 | 口径　12.4<br>器高　3.5 | | 口縁　ヨコナデ | 淡灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/4 | 底部に自然釉。 |
| 82 | 第32図 | SB－５ | 須恵器<br>杯 | 口径　11.6<br>器高　3.8 | 底部に粘土紐痕残る | 口縁　ヨコナデ<br>底部　未調整 | 青灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/4 | |
| 83 | 第32図 | SB－５ | 須恵器<br>盤 | 口径　34.2<br>器高　6.4 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 灰白色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 1/6 | |
| 84 | 第32図 | SD－２西半１層 | 須恵器<br>盤 | 高台　15.0<br>器高　(3.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>高台部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 杯部下半～高台部小片 | |
| 85 | 第32図 | SB－５ | 須恵器<br>平瓶 | 口径　長径8.6<br>短径7.8<br>器高　16.6<br>底径　8.9 | 口縁部楕円形 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ユビナデ | 暗青灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：堅緻 | 2/3 | 口縁～体部に自然釉。 |
| 86 | 第33図 | SK－107<br>下層 | 土師器<br>杯 | 口径　15.0<br>器高　4.3 | 粘土紐の巻上痕を顕著に残す。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>底部　ユビオサエ | 暗赤褐色 | 胎土:　精良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成:　良 | 1/4 | スス付着<br>灯明皿 |
| 87 | 第33図 | SK－107 | 土師器<br>杯 | 口径　11.8<br>器高　3.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>底部　ナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/4 | 黒斑 |
| 88 | 第33図 | SK－107下位 | 土師器<br>皿 | 口径　16.2<br>器高　2.2<br>底径　14.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 89 | 第33図 | SK－107 | 土師器<br>皿 | 口径　10.6<br>器高　1.5 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 90 | 第33図 | SK－107 | 土師器<br>皿 | 口径　10.0<br>器高　1.5 | 「て」字状口縁。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後ナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/4 | 京都系土師器皿 |
| 91 | 第33図 | SK－107<br>下層 | 土師器<br>皿 | 口径　10.0<br>器高　1.5<br>高台径　4.6 | 高台付 | 口縁　ヨコナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | ほぼ完形 | |
| 92 | 第33図 | SK－107<br>下層 | 土師器<br>皿 | 口径　9.6<br>器高　2.1<br>高台径　5.1 | 高台付 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 93 | 第33図 | SK－107 | 土師器<br>椀 | 口径　15.3<br>器高　(4.8) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/4 | 体部下半に稲モミ痕。<br>スス付着 |
| 94 | 第33図 | SK－107 | 黒色土器<br>椀 | 器高　1.9<br>高台径　6.4 | | 高台部　ヨコナデ | 外面：赤褐色<br>内面：黒色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 高台部小片 | 黒色土器A類椀 |
| 95 | 第33図 | SK－107 | 黒色土器<br>椀 | 器高　1.8<br>高台径　7.0 | 二重高台<br>内底面にヘラミガキ。 | 高台部　ヨコナデ<br>内底面　ヘラミガキ | 黒灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 高台部1/8 | 黒色土器B類椀 |
| 96 | 第34図 | SK－165 | 土師器<br>杯 | 口径　8.6<br>器高　3.7<br>高台径　3.9 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 97 | 第34図 | SK－165 | 黒色土器<br>椀 | 高台径　4.3<br>器高　(2.6) | | 高台　ヨコナデ | 外面：黒色<br>内面：淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･赤色粒<br>焼成：良 | 高台部小片 | 黒色土器A類椀 |
| 98 | 第34図 | SK－169<br>2層 | 土師器<br>皿 | 口径　15.8<br>器高　4.7<br>底径　8.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>赤色粒<br>焼成:　良 | 4/5 | 内面スス付着<br>灯明皿 |
| 99 | 第34図 | SK－169<br>2層 | 土師器<br>皿 | 口径　長径16.0<br>短径15.3<br>器高　4.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後ナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･赤色粒･結晶片岩･白色粒<br>焼成：良 | 口縁部5/6 | |
| 100 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　10.3<br>器高　1.4 | 「て」字状口縁皿 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>石英･白色粒･結晶片岩<br>焼成：良 | 4/5 | 黒斑 |
| 101 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　8.8<br>器高　1.6 | 「て」字状口縁皿 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･結晶片岩･赤色粒<br>焼成：良 | 1/4 | 内面スス付着 |
| 102 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　9.0<br>器高　2.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | 完形 | |
| 103 | 第34図 | SK－169<br>2層 | 土師器<br>皿 | 口径　9.1<br>器高　1.4<br>底径　1.4 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 黄灰色 | 胎土：精良<br>白色粒･赤色粒<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 104 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　8.8<br>器高　2.8<br>底径　8.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 105 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　8.6<br>器高　1.5<br>底径　6.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転ヘラ切 | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･赤色粒<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 106 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>杯 | 口径　17.0<br>器高　(4.0)<br>高台径　8.2 | 貼付高台付 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 107 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　9.2<br>器高　2.3<br>高台径　5.3 | 「て」字状口縁皿<br>台付皿 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>赤色粒･白色粒<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 108 | 第34図 | SK－169 | 黒色土器 | 高台　8.2<br>器高　(5.0) | | 体部　ヘラミガキ<br>高台　ヨコナデ | 外面：黒色<br>内面：淡褐色 | 胎土：精良<br>石英<br>焼成：良 | 高台部～杯部1/2 | 黒色土器A類椀 |
| 109 | 第34図 | SK－169 | 土師器<br>皿 | 口径　6.4<br>器高　(0.6) | 底部破断面を丸く研磨し、円板状に加工。 | 体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>白色粒<br>焼成：良 | 1/3 | 土師器皿を円板状に転用。 |

## 出土遺物観察表４　土器・陶磁器４

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 110 | 第35図 | SK－96 | 土師器<br>皿 | 口径　15.2<br>器高　3.5<br>底径　7.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 内外面スス付着<br>灯明皿 |
| 111 | 第35図 | SK－96 | 土師器<br>皿 | 口径　9.2<br>器高　1.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ユビオサエ | 淡黄褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 112 | 第35図 | SK－96 | 土師器<br>釜 | 口径　34.2<br>器高　(18.5)<br>突帯径　35.2 | 体部上半に突帯1条。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･わずかに結晶片岩を含む<br>焼成：良 | 口縁部～体部下半1/6 | 内外面スス付着 |
| 113 | 第35図 | SK－96 | 土師器<br>釜 | 口径　31.0<br>器高　(9.5)<br>突帯径　31.2 | 体部上半に突帯1条。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　タテハケ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：緻密<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：堅緻 | 口縁部小片 | 外面スス付着 |
| 114 | 第35図 | SK－96 | 瓦器<br>椀 | 口径　14.2<br>器高　4.1<br>高台径　5.0 | 内底面にミガキ2回転。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>高台　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 3/4 | 紀伊型瓦器椀 |
| 115 | 第35図 | SK－96 | 瓦器<br>椀 | 口径　14.2<br>器高　4.5<br>高台径　4.5 | 内底面にミガキ3回転。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>高台　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | ほぼ完形 | 紀伊型瓦器椀 |
| 116 | 第35図 | SK－96 | 瓦器<br>椀 | 口径　15.0<br>器高　4.4<br>高台径　4.2 | 内底面ジグザグ状暗文。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>高台　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 和泉型瓦器椀 |
| 117 | 第35図 | SK－96 | 瓦器<br>皿 | 口径　8.8<br>器高　1.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ後ユビオサエ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 118 | 第36図 | SK－128 | 土師器<br>皿 | 口径　15.0<br>器高　2.5 | 大皿 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 119 | 第36図 | SK－128 | 土師器<br>皿 | 口径　9.1<br>器高　1.2<br>底径　9.2 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 120 | 第36図 | SK－128 | 土師器<br>皿 | 口径　8.0<br>器高　1.5 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 121 | 第36図 | SK－128 | 瓦器<br>椀 | 口径　14.2<br>器高　4.2<br>高台　5.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>高台　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/4 | 紀伊型瓦器椀 |
| 122 | 第36図 | SK－128 | 瓦器<br>皿 | 口径　7.7<br>器高　1.5 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後ナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 5/6 | |
| 123 | 第36図 | SK－128 | 山茶碗<br>皿 | 口径　9.1<br>器高　1.9<br>底径　4.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 淡灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | 山皿 |
| 124 | 第36図 | SK－128 | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(5.3) | 口縁端部内側から口縁外面に自然釉。 | 体部　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 小片 | 東播系須恵器 |
| 125 | 第37図 | SK－92 | 土師器<br>皿 | 口径　5.6<br>器高　1.6<br>底径　7.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　回転糸切 | 淡赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 126 | 第37図 | SK－92 | 瓦器<br>皿 | 口径　8.3<br>器高　1.7 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　未調整<br>底部　ナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 127 | 第37図 | SK－92 | 瓦器<br>椀 | 口径　14.0<br>器高　3.6<br>高台径　5.2 | 台形の貼付高台。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/2 | 紀伊型瓦器椀 |
| 128 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師器<br>皿 | 口径　11.2<br>器高　2.1<br>底径　9.4 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>底部　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 129 | 第38図 | SD－2 南半<br>1層 | 土師器<br>皿 | 口径　8.0<br>器高　2.0 | 手づくね成形 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ<br>底部　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/2 | |
| 130 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師器<br>鍋 | 器高　(7.6) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　平行タタキ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 小片 | タール状付着物 |
| 131 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師器<br>鍋 | 器高　(4.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　格子メタタキ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 小片 | 播磨系<br>外面スス付着 |
| 132 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師器<br>鍋 | 口径　14.8<br>器高　(6.3) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　平行タタキ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 外面スス付着 |
| 133 | 第38図 | SD－2<br>2層 | 土師器<br>鍋 | 器高　(7.1) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　格子目タタキ | 黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 小片 | 外面にスス付着<br>播磨系 |
| 134 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師質土器<br>火鉢 | 口径　26.2<br>器高　7.6<br>底径　16.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 1/6 | 黒斑(体部下半) |
| 135 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 土師質<br>香炉 | 器高　(4.2) | 三足香炉 | 底部　ナデ | 外面：赤褐色<br>内面：淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 小片 | 高台スス付着<br>火中 |
| 136 | 第38図 | SD－2 西半<br>1層 | 備前焼<br>甕 | 器高　(7.5) | 大甕 | 口縁　ヨコナデ<br>底部　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 口縁端部スス付着 |
| 137 | 第38図 | SD－2 西半 | 備前焼<br>擂鉢 | 器高　(4.5) | 1単位4条以上のクシ目。 | 口縁　ヨコナデ | 外面：暗灰色<br>内面：灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 小片 | |
| 138 | 第38図 | SD－2 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>灰釉皿 | 器高　(1.3)<br>高台径　5.8 | 内底面に菊のスタンプ。外底面輪トチ痕 | 底部　ケズリ | 緑灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部完形 | |
| 139 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>天目茶碗 | 口径　10.8<br>器高　(5.0) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 施釉部：茶褐色<br>露胎部：黒灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/8 | |
| 140 | 第38図 | SD－1 南半<br>1層 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(2.8)<br>高台径　5.8 | 外面に片切彫りの蓮弁文有。貫入有 | 底部　ケズリ | 緑灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 小片 | 雷文帯青磁椀 |
| 141 | 第38図 | SD－1 北半<br>1層 | 中国製染付<br>椀 | 器高　(2.1)<br>高台径　(4.6) | | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部小片 | 内底面に呉須で雲文を描く。 |
| 142 | 第38図 | SD－2<br>3層 | 中国製染付<br>皿 | 器高　1.4<br>底径　3.8 | 底部碁笥底 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部1/3 | 内面見込に呉須で「正」を描く。 |
| 143 | 第38図 | SD－1 南半<br>2層 | 中国製染付<br>皿 | 器高　3.5<br>高台径　14.4 | 大皿 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部小片 | いわゆる「呉須手」盤。 |
| 144 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 土師器<br>皿 | 口径　12.3<br>器高　(2.7) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 145 | 第39図 | SD－5<br>2層 | 土師器<br>皿 | 口径　8.1<br>器高　1.9<br>底径　5.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ユビオサエ後ナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 3/4 | 口縁部内側に灯芯痕あり(灯明皿)。 |
| 146 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 土師器<br>皿 | 口径　7.0<br>器高　2.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　ナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 3/4 | |
| 147 | 第39図 | SD－5<br>2層 | 土師器<br>皿 | 口径　6.8<br>器高　1.9<br>底径　5.8 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　ナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 2/3 | 全体にスス付着。 |
| 148 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 土師器<br>釜 | 器高　(2.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 細片 | |

# 出土遺物観察表５　土器・陶磁器５

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 149 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 土師器<br>釜 | 口径　16.6<br>鍔径　22.4<br>器高　(2.9) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部外面　ヨコナデ<br>体部内面　ヨコハケ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>結晶片岩<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 150 | 第39図 | SD－5<br>2層下位 | 土師器<br>塙 | 器高　(5.4) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　平行タタキ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 細片 | 外面スス付着 |
| 151 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 瓦質土器<br>香炉 | 口径　11.8<br>器高　4.4 | 小形香炉<br>貼付三足 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラミガキ<br>底部　ケズリ | 内外面：黒灰色<br>断面：淡赤褐色 | 胎土：精良<br>長石･石英･結晶片岩･赤色軟質粒<br>焼成：良 | 1/3 | 口縁端部と内底面にタール状付着物。 |
| 152 | 第39図 | SD－5<br>2層下 | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(3.4) | 口縁部縁帯幅1.2㎝ | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗灰褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部破片 | 東播系須恵器 |
| 153 | 第39図 | SD－5 | 備前焼<br>壺 | 口径　12.0<br>器高　(3.1) | 一部に自然釉。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：堅緻 | 1/6 | |
| 154 | 第39図 | SD－5<br>2層下位 | 備前焼<br>擂鉢 | 器高　(4.2) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部細片 | 口縁部縁帯幅3.2㎝ |
| 155 | 第39図 | SD－5<br>2層下位 | 備前焼<br>擂鉢 | 口径　25.0<br>器高　(4.5) | 櫛1単位条線４本以上 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 156 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>灰釉皿 | 口径　10.6<br>器高　2.0<br>底径　5.8 | 細かい貫入有。<br>底部、内外面に輪トチ痕。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 施釉部：緑黄褐色<br>断面：灰白色 | 胎土：密<br>灰白色<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 157 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>灰釉皿 | 口径　11.0<br>器高　2.0<br>底径　6.2 | 細かい貫入有<br>外底面に輪トチ痕。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑黄褐色<br>断面：灰黄褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 158 | 第39図 | SD－5<br>2層下位 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>灰釉皿 | 口径　10.1<br>器高　2.0<br>高台径　(5.7) | 外底部輪トチ痕 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑黄色<br>露胎部：淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/2 | |
| 159 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>灰釉皿 | 器高　1.1<br>高台　5.2 | 細かい貫入有<br>内底面輪トチ痕<br>外底面酢漿草(かたばみ)のスタンプ | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑黄褐色<br>断面：暗灰白色 | 胎土：密<br>暗灰白色<br>焼成：良 | 1/2 | |
| 160 | 第39図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>天目茶椀 | 口径　12.3<br>器高　(5.3) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 施釉部：暗茶褐色<br>露胎部：暗灰褐 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部のみ1/6 | 露体部に錆釉塗布。 |
| 161 | 第39図 | SD－5<br>2層下位 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>天目茶椀 | 器高　(1.3)<br>高台径　4.8 | 内底面　平滑 | 底部　ケズリ | 施釉部：黒褐色<br>露胎部：褐白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | |
| 162 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製青磁<br>椀 | 口径　15.6<br>器高　(3.9) | 内面に片切彫りによる画花文。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 施釉部：灰緑色<br>断面：灰色 | 胎土：緻密<br>焼成：良 | 口縁部のみ小片 | |
| 163 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(1.7)<br>底径　6.2 | | 底部　ケズリ | 施釉部：青緑色<br>断面：灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | |
| 164 | 第40図 | SD－5 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(1.8)<br>底径　4.2 | | 底部　ケズリ | 施釉部：青緑色<br>断面：灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | 東口椀<br>高台内に窯道具溶着。 |
| 165 | 第40図 | SD－5<br>2層下位 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(5.1) | 外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 施釉部：緑黄色<br>断面：灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 細片 | |
| 166 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製青磁<br>椀 | 口径　14.8<br>器高　(3.7) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 施釉部：淡緑黄色<br>断面：灰色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 器表面二次焼成を受ける。 |
| 167 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製青磁<br>盤 | 口径　22.6<br>器高　(2.7) | 釉薬厚くかかる。 | 口縁　ヨコナデ | 施釉部：緑黄色<br>断面：灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | |
| 168 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製白磁<br>椀 | 口径　18.0<br>器高　(2.5) | 大きい玉縁口縁をもつ。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 施釉部：灰黄色<br>断面：灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | |
| 169 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製白磁<br>皿 | 器高　(1.5)<br>高台径　3.5 | 割り高台４分割<br>内外底面に重ね焼痕。 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | 内外面に墨書有り。 |
| 170 | 第40図 | SD－5<br>2層 | 中国製白磁<br>皿 | 器高　(1.4)<br>高台径　5.6 | 内底面型押しによる花文。<br>外底面に放射状の鉋痕。 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 底部小片 | 底部高台削り込み、高台内に呉須による圏線を描いている。 |
| 171 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製白磁<br>皿 | 口径　10.4<br>器高　2.3 | | 口縁　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 口縁部小片 | |
| 172 | 第40図 | SD－5<br>2層 | 中国製白磁<br>壺 | 器高　(5.7)<br>肩径　(19.0) | 四耳壺の体部とみられる。 | 体部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 細片 | |
| 173 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>椀 | 器高　(5.4) | | 体部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 小片 | 外面に、呉須による蕉葉文を描く。 |
| 174 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>椀 | 器高　(3.0)<br>高台径　5.0 | 高台端部釉削り取り。 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 小片 | 内面見込みに呉須による牡丹文、高台内底面に圏線２条と「大明年造」を描く。 |
| 175 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>椀 | 器高　(2.5)<br>高台径　5.0 | 高台端部　硅砂付着<br>外底部　鉋痕 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | 内面見込みに呉須による文様。 |
| 176 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>皿 | 器高　(1.6)<br>高台径　7.0 | | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | 内面見込みと外側面に呉須による文様。 |
| 177 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>皿 | 口径　12.8<br>器高　(2.4) | | 口縁　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 内側面に呉須による文様。 |
| 178 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>皿 | 口径　11.4<br>器高　(2.3) | | 口縁　ヨコナデ | 暗灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 呉須の発色は灰味が強い。<br>漳州窯系 |
| 179 | 第40図 | SD－5<br>1層 | 中国製染付<br>小杯 | 器高　1.1<br>高台　2.8 | 高台接地部に硅砂付着。 | 底部　ケズリ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部1/8 | 内面見込に呉須による花文外底面に「福」字。 |
| 180 | 第41図 | SE－2<br>1層上位 | 土師器<br>皿 | 口径　13.4<br>器高　(2.5) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 181 | 第41図 | SK－31<br>1層 | 土師器<br>皿 | 口径　9.4<br>器高　3.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ | 淡赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 182 | 第41図 | SE－3 | 瓦質土器<br>火鉢 | 口径　31.8<br>器高　(9.9) | 突帯３条以上 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>石英･白色粒･結晶片岩<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 183 | 第41図 | SK－31 | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(3.7) | 内面　平滑 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗青灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 口縁部小片 | 東播系須恵器 |
| 184 | 第41図 | SX－３ | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(3.8) | 内面　平滑 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 口縁部小片 | 東播系須恵器 |
| 185 | 第41図 | SE－2<br>1層上位 | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(3.8) | 内面　平滑 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗灰褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | 東播系須恵器 |
| 186 | 第41図 | SK－31 | 中世須恵器<br>捏鉢 | 器高　(4.1) | 内面　平滑 | 体部　ヨコナデ<br>底部　糸切り未調整 | 暗灰褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 底部小片 | 東播系須恵器<br>二次焼成を受ける。 |
| 187 | 第41図 | SK－124 | 備前焼<br>甕 | 器高　(2.5) | 水屋甕 | 口縁　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：堅緻 | 小片 | 一部に自然釉。 |
| 188 | 第41図 | SK－32 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>天目茶椀 | 口径　11.0<br>器高　(5.0) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ | 施釉部：黒褐色<br>露胎部：淡黄色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 189 | 第41図 | SK－70 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(1.6)<br>高台径　4.5 | 内面見込みに花弁状のスタンプ。 | 底部　ケズリ | 淡緑色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部小片 | 青磁椀を円板状に加工したもの。 |
| 190 | 第41図 | 排土表採 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(2.7)<br>高台径　5.4 | 内底面にスタンプで花文。 | 体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 淡緑灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | 高台接地面　磨滅 |
| 191 | 第41図 | 第3層 | 中国製青磁<br>椀 | 器高　(2.5)<br>高台径　5.0 | | 底部　ケズリ | 施釉部：暗黄褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 底部小片 | |
| 192 | 第41図 | SE－2<br>1層下位 | 中国製青磁<br>皿 | 口径　11.6<br>器高　(2.1) | 腰折稜花皿<br>内面片切彫りの文様。<br>粗い貫入有。 | 口縁　ヨコナデ | 施釉部：青緑色<br>断面：灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部小片 | |

# 出土遺物観察表６　土器・陶磁器６

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 193 | 第41図 | P－71 | 中国製白磁<br>小杯 | 口径　7.2<br>器高　4.3<br>高台径　3.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 4/5 | |
| 194 | 第41図 | SK－128 | 中国製青白磁<br>合子 | 口径　6.0<br>器高　(1.2) | | 口縁　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：淡青色<br>露胎部：灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 1/6 | 体部に連弁の線刻。 |
| 195 | 第41図 | SK－32 | 中国製染付<br>皿 | 口径　11.4<br>器高　(2.1) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/6 | 外面に呉須による花文を描く。 |
| 196 | 第41図 | SK－32 | 中国製染付<br>皿 | 口径　11.4<br>器高　(1.5) | 貫入有 | 口縁　ヨコナデ | 施釉部：白色<br>露胎部：灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/8 | 二次焼成を受ける。 |
| 197 | 第41図 | SK－118 | 瓦質土器<br>火鉢 | 口径　28.0<br>器高　(17.3)<br>底径　27.2 | 水屋甕形<br>三足脚台付 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヘラミガキ<br>底部　ハケ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>長石･石英･赤色粒<br>焼成：良 | 1/6 | |
| 198 | 第41図 | SK－118･P－223 | 備前焼<br>甕 | 器高　(31.3)<br>底径　22.6 | 水屋甕<br>貼付突帯1条 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 暗赤褐色 | 胎土：良<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 199 | 第43図 | SD－5<br>２層下位 | 土師器<br>釜 | 口径　21.0<br>器高　(7.0) | 貼付突帯 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/8 | 外面に黒斑。 |
| 200 | 第43図 | SD－5<br>1層･２層下位 | 瓦質土器<br>火鉢 | 口径　34.2<br>器高　25.6<br>底径　23.6 | 外面に８突帯<br>底部ハナレ砂<br>三足をもつ。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 1/4 | スス付着 |
| 201 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 土師質土器<br>火鉢 | 口径　23.4<br>器高　8.4<br>底径　11.0 | 三足をもつ。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗茶褐色 | 胎土：精良<br>石英･長石･結晶片岩<br>焼成：良 | 1/3 | 内面スス付着 |
| 202 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 瓦質土器<br>香炉 | 口径　14.6<br>器高　5.7<br>底径　13.1 | 三足をもつ。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ナデ<br>底部　ケズリ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>石英･長石<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 203 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 瓦質土器<br>火鉢 | 口径　26.4<br>器高　9.0<br>底径　20.7 | 円筒形火鉢 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ミガキ<br>底部　ナデ | 暗灰色 | 胎土：精良<br>長石他<br>焼成：良 | 1/6 | 口縁端部・内底面タール状付着物。 |
| 204 | 第43図 | SD－5<br>２層 | 備前焼<br>盤 | 口径　28.0<br>器高　4.8<br>底径　17.8 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ナデ | 暗茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 205 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 備前焼<br>盤 | 口径　23.8<br>器高　3.5 | | 口縁　ヨコナデ | 暗赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 口縁部小片 | |
| 206 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>黒釉皿 | 口径　11.0<br>器高　2.2<br>高台径　5.8 | 削り出し高台<br>外底面に糸切痕。 | 口縁　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 黒褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/3 | 内側面を丸ノミで削り菊花状となる。 |
| 207 | 第43図 | SD－5<br>1層 | 瀬戸・美濃系<br>陶器<br>天目茶椀 | 口径　10.5<br>器高　6.6<br>高台径　4.9 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：茶褐色<br>露胎部：淡褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 9/10 | |
| 208 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>灰釉皿 | 口径　10.7<br>器高　2.5<br>高台径　4.0 | 内面に胎土目跡３カ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：褐灰色<br>露胎部：淡赤褐色 | 胎土：緻密<br>焼成：良 | 3/4 | 口縁端部の一部に鉄釉。<br>高台接地面使用のため平滑。 |
| 209 | 第44図 | SD－5<br>２層下位 | 肥前系陶磁器<br>灰釉皿 | 口径　10.6<br>器高　3.2<br>高台径　3.7 | 内面に胎土目跡３カ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑褐色<br>露胎部：暗灰褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 完形 | 高台接地面使用のため平滑。 |
| 210 | 第44図 | SD－5<br>２層 | 肥前系陶磁器<br>灰釉皿 | 口径　12.0<br>器高　3.4<br>高台径　3.4 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑褐色<br>露胎部：灰褐色<br>一部赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 9/10 | 口縁端部全面にタール状付着物。<br>高台接地面使用のため平滑。 |
| 211 | 第44図 | SD－5 | 肥前系陶磁器<br>灰釉腰折皿 | 口径　13.0<br>器高　3.9<br>高台径　4.7 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ<br>底部　ケズリ | 緑灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 212 | 第44図 | SD－5<br>２層下位 | 肥前系陶磁器<br>灰釉皿 | 器高　(1.6)<br>高台径　4.5 | 削り出し高台 | 底部　ケズリ | 施釉部：緑灰色<br>露胎部：淡赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 高台部小片 | |
| 213 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>腰折皿 | 口径　12.6<br>器高　3.6<br>高台　4.4 | 内底面に胎土目跡４カ所。 | 体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：赤褐～灰褐色<br>露胎部：茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 3/4 | 内底面に鉄釉で草花文。 |
| 214 | 第44図 | SD－5 | 肥前系陶磁器<br>腰折皿 | 口径　13.6<br>器高　3.7<br>高台　4.6 | 内底面に胎土目２カ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 暗緑色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/3 | 内底面に黒色釉で文様。 |
| 215 | 第44図 | SD－5<br>２層下位 | 肥前系陶磁器<br>灰釉腰折皿 | 口径　12.3<br>器高　5.0<br>高台　4.0 | 口縁端部をひねり稜花状。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：灰白色の半透明<br>露胎部：茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/2 | 内底面に鉄釉で文様。 |
| 216 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>腰折皿 | 口径　21.3<br>器高　5.7<br>高台　5.8 | 大皿<br>内底面に砂目３ヵ所。<br>高台に回転糸切痕。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：灰白色<br>露胎部：茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/2 | |
| 217 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>溝縁皿 | 口径　14.9<br>器高　4.6<br>高台　4.7 | 内底面と外底部に砂目跡３ヶ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 黄灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 218 | 第44図 | SD－5<br>２層 | 肥前系陶磁器<br>溝縁皿 | 口径　11.1<br>器高　3.2 | 内底面に砂目跡有り。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：灰褐色<br>露胎部：暗赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 9/10 | 高台接地面使用のため平滑。 |
| 219 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>腰折皿 | 口径　13.6<br>器高　4.2<br>高台　5.4 | 内底面に砂目跡4ヵ所。<br>重ね焼痕１ヶ所 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 淡赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/2 | 口縁端部を黒色釉で縁取り。 |
| 220 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>椀 | 口径　11.6<br>器高　7.2<br>高台　4.6 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 淡緑灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/2 | |
| 221 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>椀 | 口径　11.4<br>器高　7.3<br>高台　4.8 | 削り出し高台 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：灰白色<br>露胎部：赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/3 | |
| 222 | 第44図 | SD－5<br>２層下位 | 肥前系陶磁器<br>椀 | 口径　10.4<br>器高　6.9<br>高台　4.3 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 施釉部：緑灰色<br>露胎部：茶褐～灰褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 4/5 | |
| 223 | 第44図 | SD－5<br>1層 | 肥前系陶磁器<br>褐釉瓶 | 胴径　12.2<br>器高　(9.6)<br>底径　8.6 | 練り込み土で露胎部が細かい塙状にみえる。<br>内面に同心円状の当具痕。 | 体部　タタキ | 施釉部：黄褐色<br>露胎部：赤茶褐色 | 胎土：精良<br>焼成：やや軟 | 1/6 | |
| 224 | 第45図 | SX－3 | 土師器<br>塙 | 口径　20.1<br>器高　(4.7) | 底部　離れ砂 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 1/8 | 外面スス付着 |
| 225 | 第45図 | SD－1<br>南半・１層 | 備前焼<br>建水 | 口径　10.0<br>器高　(5.0) | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ヨコナデ | 暗茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 口縁部小片 | |
| 226 | 第45図 | SD－1<br>南半・１層 | 備前焼<br>徳利 | 口径　4.6<br>器高　(15.0) | | 口縁　ヨコナデ | 茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 1/3 | 頸部にヘラ記号。 |
| 227 | 第45図 | SX－3 | 堺焼<br>擂鉢 | 口径　37.0<br>器高　(11.3) | 擂目１単位13条 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 暗赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 口縁～体部小片 | |
| 228 | 第45図 | SX－3 | 肥前系陶磁器<br>灰釉皿 | 口径　12.0<br>器高　3.6<br>高台　4.0 | 内底面見込に砂目跡３ヵ所。 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 灰緑色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 1/4 | |
| 229 | 第45図 | SD－5<br>1層 | 大谷焼<br>褐釉甕 | 器高　(6.7) | 大甕 | 口縁　ヨコナデ | 茶褐色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 口縁部細片 | |

## 出土遺物観察表７　埴輪

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 230 | 第46図 | SD－1<br>北半・1層 | 埴輪<br>(円筒) | 胴径　13.8<br>器高　(10.5) | 径5.2㎝の円形透かし。<br>突帯は台形状。 | 外　タテハケ<br>内　ヨコナデ | 淡黄赤褐色 | 胎土：精良<br>長石･石英･赤色粒･ﾁｬｰﾄ?<br>焼成：良 | 小片 | 形象埴輪の基部の可能性もある。 |
| 231 | 第46図 | SD－1<br>北半・1層 | 埴輪<br>(円筒) | 胴径　13.8<br>器高　(15.1) | 復元径5.4㎝の円形透かし。<br>突帯は台形状。 | 外　タテハケ<br>内　ナデ | 淡黄赤褐色 | 胎土：精良<br>長石･石英･赤色粒<br>焼成：良 | 小片 | 形象埴輪の基部の可能性もある。 |
| 232 | 第46図 | SD－1<br>北半・1層 | 埴輪<br>(円筒) | 胴径　14.0<br>器高　(11.4)<br>底径　13.2 | 内面に輪積成形痕を顕著に残す。 | 外　タテハケ<br>内　ヨコナデ | 淡黄赤褐色 | 胎土：良<br>長石･石英･赤色粒<br>焼成：良 | 底部小片 | 形象埴輪の基部の可能性もある。 |

## 出土遺物観察表８　瓦

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 233 | 第47図 | SX－3 | 軒丸瓦 | 瓦当径　13.0<br>厚み　2.0 | 接合面にタテ方向のクシ目 | 瓦当裏面ナデ | (凹面)暗灰色<br>(凸面)灰白色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 瓦当部3/4 | 瓦当文様は右巻三ツ巴文。<br>珠文(17)個 |
| 234 | 第47図 | SX－1 | 軒丸瓦 | 瓦当径　13.0<br>厚み　1.6 | | 瓦当裏面ナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 2/3 | 瓦当文様は左巻三ツ巴文。<br>珠文(10)個 |
| 235 | 第47図 | SE－3<br>下層 | 丸瓦 | 全長　31.2<br>全幅　12.5<br>高さ　6.4<br>玉縁長　1.7<br>厚み　1.7 | 木口面取 | 凸面　ナデ<br>凹面　コビキA・叩き痕 | 黒灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | ほぼ完形 | |
| 236 | 第47図 | SD－5<br>1層 | 丸瓦 | 全長　23.0<br>全幅　12.7<br>高さ　5.9<br>玉縁長　3.6<br>厚み　2.1 | 木口面取 | 凸面　ナデ<br>凹面　コビキB・縄目圧痕 | 黒灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 7/8 | |
| 237 | 第47図 | SD－5<br>1層 | 丸瓦 | 全長　25.0<br>全幅　12.3<br>高さ　7.5<br>玉縁長　3.5<br>厚み　2.0 | 木口面取 | 凸面　剥離<br>凹面　コビキB・布目圧痕 | 淡灰色 | 胎土：密<br>焼成：良 | 9/10 | |
| 238 | 第47図 | SK－124 | 丸瓦 | 全長　(10.1)<br>全幅　(7.9)<br>高さ　(7.0)<br>厚み　2.3 | | 凸面　縄叩き後ナデ<br>凹面　ナデ | 淡灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 239 | 第48図 | SK－169 | 平瓦 | 全長　(13.3)<br>全幅　(8.0)<br>厚み　2.0 | | 凸面　叩き痕(縄目深い)<br>凹面　布目圧痕 | 灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 240 | 第48図 | SK－165 | 平瓦 | 全長　(9.5)<br>全幅　(12.0)<br>厚み　2.2 | | 凸面　縄目圧痕<br>凹面　布目圧痕 | (凹面)灰色<br>(凸面)淡赤褐色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 細片 | |
| 241 | 第48図 | SK－92 | 平瓦 | 全長　(12.3)<br>全幅　(10.0)<br>厚み　2.3 | | 凸面　板状ナデ・深い格子目叩き<br>凹面　布目圧痕 | 灰白色 | 胎土：密<br>焼成：軟質 | 小片 | |
| 242 | 第48図 | SK－92 | 平瓦 | 全長　(8.2)<br>全幅　(4.7)<br>厚み　2.5 | | 凸面　叩き後ナデ<br>凹面　コビキA・叩き痕 | 灰色(胎土：茶褐色) | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 243 | 第48図 | SD－5<br>1層 | 平瓦 | 全長　(8.6)<br>全幅　(14.5)<br>厚み　2.4 | | 凸面　縄目圧痕<br>凹面　布目圧痕 | 暗灰色(胎土：赤色) | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 1/6 | 酸化炎焼成後、還元炎を行う。 |
| 244 | 第48図 | SD－5<br>2層 | 平瓦 | 全長　(6.8)<br>全幅　(8.6)<br>厚み　2.0 | 側面面取 | 凸面　縄目圧痕<br>凹面　布目圧痕 | 淡灰色(胎土：赤色) | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | 酸化炎焼成後、還元炎を行う。 |
| 245 | 第48図 | SD－5<br>2層 | 平瓦 | 全長　(4.4)<br>全幅　(7.8)<br>厚み　2.3 | | 凸面　縄叩き圧痕<br>凹面　布目圧痕 | 灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 246 | 第48図 | SK－124 | 桟瓦 | 全長　(6.0)<br>全幅　(6.5)<br>高さ　(3.4)<br>厚み　1.7 | 丸桟瓦 | 凸面　ナデ<br>凹面　ナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 247 | 第49図 | SD－1<br>北半・2層、南半・1層 | 鳥伏間 | 瓦当径　(17.7)<br>瓦当厚　2.4<br>全長　(10.3)<br>厚み　2.3 | | 凸面　ナデ<br>凹面　指押え後ナデ | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 瓦当部3/4 | 瓦当文様は右巻三ツ巴文。一部に二次焼成受ける。 |
| 248 | 第49図 | SK－92 | 熨斗瓦 | 全長　(6.8)<br>全幅　(9.5)<br>厚み　3.5 | | 凸面　ナデ<br>凹面　布目圧痕 | 灰色(一部淡赤褐色) | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | |
| 249 | 第49図 | SE－1 | 熨斗瓦 | 全長　(23.0)<br>全幅　25.0<br>厚み　3.0 | | 凸面　ナデ<br>凹面　磨滅 | 黒灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 4/5 | 相対する位置に指頭圧痕(運搬時のものか)。 |
| 250 | 第49図 | SD－5<br>1層 | 塼 | 全長　(7.3)<br>全幅　(6.2)<br>厚み　3.1 | 凸面に離れ砂。 | 凸面　ナデ<br>凹面　ナデ | 淡灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 小片 | 酸化炎焼成後、還元炎を行う。表面に炭素を吸着させる。 |
| 251 | 第49図 | SX－3 | 塼 | 全長　(13.1)<br>全幅　(14.4)<br>厚み　3.2 | | 全体に磨滅 | 暗灰色 | 胎土：密<br>焼成：堅緻 | 1/4 | |

## 出土遺物観察表９　土製品

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種類・器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色　調 | 胎土・焼成 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 252 | 第50図 | SB－6 | ミニチュア土器<br>壺 | 口径　7.0<br>器高　6.8<br>厚さ　1.4 | 手づくね成形 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後ナデ<br>底部　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 2/3 | 外面に黒斑。 |
| 253 | 第50図 | SK－107 | ミニチュア土器<br>壺 | 口径　2.5<br>器高　3.1<br>厚さ　0.4<br>重量　24.5 g | 手づくね成形 | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ケズリ<br>底部　ケズリ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 外面に黒斑。 |
| 254 | 第50図 | SD－5<br>1層 | 土笛 | 器高　4.15<br>幅　5.0<br>重量　80.3 g | 手づくね成形 | 口縁　ユビオサエ・ナデ<br>体部　ユビオサエ・ナデ<br>底部　ユビオサエ・ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 弥生時代のもの。<br>外面に黒斑。 |
| 255 | 第50図 | SB－1<br>1層 | 紡錘車 | 直径　3.5<br>厚さ　0.4<br>重量　6.6 g | | 内面　ヨコハケ | 暗黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 弥生土器甕体部を利用。<br>外面に黒斑。 |
| 256 | 第50図 | SB－3内<br>SK－11 | 紡錘車 | 直径　3.0<br>厚さ　0.5<br>重量　4.7 g | | 外面　ケズリ<br>内面　ナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 弥生土器紀伊型甕を利用。 |
| 257 | 第50図 | SK－143 | 円板状土製品 | 直径　7.5<br>厚さ　0.8 | | 外面　タタキ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 弥生土器甕を利用。 |
| 258 | 第50図 | SD－1<br>南半・１層 | 円板状土製品 | 直径　2.6<br>厚さ　0.6<br>重量　66.6 g | | 外面　タタキ | 茶褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 弥生土器大形甕を利用。 |
| 259 | 第50図 | SD－5<br>1層 | 土製支脚 | 長さ　(15.0)<br>幅　10.8<br>高さ　13.0 | 手づくね成形 | ナデ | 暗褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 4/5 | 古墳時代のもの。 |
| 260 | 第50図 | SK－122 | 土錘<br>(管状) | 長さ　5.0<br>幅　1.6<br>孔径　0.4<br>重量　15.3 g | | | 淡灰色 | 胎土：良<br>焼成：良 | 完形 | 全体に黒斑。 |
| 261 | 第50図 | SD－1<br>南半・１層 | 土錘<br>(管状) | 長さ　3.8<br>幅　3.0<br>孔径　1.4<br>重量　21.6 g | 裏面に網目状の圧痕有。 | | 淡褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | |
| 262 | 第50図 | SK－32 | 土錘<br>(管状) | 長さ　3.8<br>幅　2.8<br>孔径　1.5<br>重量　18.7 g | 裏面に２列の網目状の痕跡。 | | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | |
| 263 | 第50図 | SD－5<br>1層 | 土錘<br>(管状) | 長さ　3.6<br>幅　2.7<br>孔径　1.5<br>重量　20.0 g | 裏面に２列の網目状の痕跡。 | | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | |
| 264 | 第50図 | SK－165 | 土錘<br>(有溝) | 長さ　5.2<br>幅　5.2<br>厚さ　(3.5)<br>重量　144.9 g | 手づくね成形 | ユビオサエ<br>溝　ナデ | 淡黄褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 2/3 | |
| 265 | 第50図 | SK－107 | 土錘<br>(有溝) | 長さ　7.9<br>幅　4.6<br>厚さ　3.6<br>重量　97.0 g | 手づくね成形 | ユビオサエ<br>溝　ナデ | 淡赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 外面に黒斑。 |
| 266 | 第50図 | SK－107 | 土錘<br>(有溝) | 長さ　7.8<br>幅　5.4<br>厚さ　3.4<br>重量　118.4 g | 手づくね成形 | ユビオサエ<br>溝　ナデ | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | 外面に黒斑。 |
| 267 | 第50図 | SD－5<br>２層下位 | 焼塩壺<br>蓋 | 口径　7.0<br>器高　2.0 | | 口縁　ヨコナデ<br>体部　ユビオサエ後未調整 | 暗赤褐色 | 胎土：精良<br>焼成：良 | 完形 | |
| 268 | 第50図 | SD－5<br>1層 | 焼塩壺<br>身 | 口径　5.6<br>器高　9.9 | 内面に型押成形時の布目痕 | 口縁　ヨコナデ | 淡赤褐色 | 胎土：良<br>焼成：良 | 完形 | |

## 出土遺物観察表 10　石器・石製品 1

(　)は残存値

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種　類 | 計測値 | | | | 形態・技法の特徴 | 色　調 | 石　材 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | | | | |
| 269 | 第51図 | SK－82 | 石鏃 | (3.15) | (18.4) | 0.49 | 1.75 | 凹基式 | 淡黒灰色 | サヌカイト | 基部の両端部を欠 | 金山産？ |
| 270 | 第51図 | SK－143 | 石鏃 | (3.04) | 1.82 | 0.36 | 1.40 | 凹基式 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 271 | 第51図 | 検出時<br>W16.S８ | 石鏃 | (2.10) | (1.48) | 0.15 | 0.95 | 凹基式 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 272 | 第51図 | SV－1<br>上位 | 石鏃 | 3.16 | 1.38 | 0.34 | 1.95 | 平基式 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 273 | 第51図 | SK－164 | 石鏃 | (2.19) | 1.46 | 0.51 | 1.70 | 平基式 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 尖頭部欠 |
| 274 | 第51図 | SK－58 | 石鏃 | 2.59 | 1.56 | 0.45 | 1.70 | 円基式 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 275 | 第51図 | 第2層 | 石鏃 | 2.09 | 1.30 | 0.31 | 0.85 | 円基式 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 276 | 第51図 | SD－5<br>上面 | 石鏃 | (3.76) | 0.96 | 0.33 | 1.15 | 凸基有茎式<br>幅の狭いタイプ | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 基部欠 |
| 277 | 第51図 | SB－5<br>１層 | 石鏃 | (3.66) | 1.74 | 0.45 | 2.45 | 凸基有茎式　柳葉形 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 基部欠 |
| 278 | 第51図 | SD－1<br>１層 | 石鏃 | 3.08 | 1.30 | 0.44 | 1.40 | 凸基有茎式　柳葉形<br>石材中に白い斑状の不純物を混じえる。 | 淡黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 279 | 第51図 | SB－5内<br>SD－4 | 石鏃 | 2.90 | 1.20 | 0.48 | 1.50 | 凸基有茎式　柳葉形 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 280 | 第51図 | SK－73 | 石鏃 | 2.51 | 1.34 | 0.47 | 1.55 | 凸基有茎式　柳葉形 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 基部欠 |
| 281 | 第51図 | SK－3 | 石鏃 | (3.43) | 2.42 | 0.53 | 3.10 | 凸基有茎式<br>幅の狭いタイプ。ややいびつな形であり、基部も幅広となっている。 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 尖頭部欠 |
| 282 | 第52図 | 第2層 | 石錐 | 4.21 | 1.97<br>(摘み部) | 0.95<br>(摘み部) | 5.05 | 錐部φ0.5～0.6以内と細身で幅広の平板状摘み部が付くタイプ。 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 283 | 第52図 | 第2層 | 石錐 | (3.72) | 1.76<br>(摘み部) | 0.62<br>(摘み部) | 2.50 | 錐部φ0.5～0.6以内と細身で幅広の平板状摘み部が付くタイプ。 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 先端部欠 |
| 284 | 第52図 | SB－5内<br>P－25 | 石錐 | 4.22 | 1.63<br>(摘み部) | 0.77<br>(摘み部) | 4.60 | 錐部φ1.0㎝程度と太いものでやや幅広の平板状摘み部が付くタイプ。 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 先端部欠 |
| 285 | 第52図 | SB－5内<br>SK－2 | 石錐 | (3.84) | 1.13 | 0.69 | 3.00 | 錐部φ0.8程度で幅狭の平板状摘み部のもの。 | 黒灰色 | サヌカイト | ほぼ完形 | 先端部欠 |
| 286 | 第52図 | SK－82 | 石錐 | (4.58) | 1.02 | 0.73 | 3.25 | 錐部φ0.8程度で、両錐となっている。 | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 287 | 第52図 | SB－4内<br>P－7 | スクレイパー | 4.84 | 2.61 | 0.55 | 6.95 | 刃部長　4.84㎝ | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | |
| 288 | 第52図 | P－61 | スクレイパー | 3.33 | 3.25 | 0.85 | 7.55 | 刃部長　3.33㎝ | 黒灰色 | サヌカイト | 完形 | 掻器の可能性もあり。 |
| 289 | 第53図 | SD－1北半部<br>１層 | 石包丁 | (12.2) | 4.0 | 0.7 | 57.50 | 半月形態・片刃　内湾刃　敲打痕が一部にみられる。<br>紐穴未貫通一ヵ所あり。 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | ほぼ完形 | |
| 290 | 第53図 | SB－5<br>１層 | 石包丁 | (9.7) | 4.2 | 0.8 | 62.50 | 半月形態・片刃　直線刃　敲打痕あり。 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 1/2 | 破損後に砥石に転用。 |
| 291 | 第53図 | SK－174 | 石包丁 | (7.8) | 3.5 | 0.7 | 33.75 | 片刃 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 2/3 | 破損後、上・下端面を叩石に転用。 |

## 出土遺物観察表 11　石器・石製品２

( ) は残存値

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種　類 | 計測値 | | | | 形態・技法の特徴 | 色　調 | 石　材 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | | | | |
| 293 | 第53図 | SD－5<br>1層 | 石包丁 | (7.7) | 5.0 | 0.6 | 38.25 | 半月形態・片刃 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 2/5 | |
| 294 | 第53図 | SD－1南半<br>1層 | 石包丁 | (7.4) | 4.2 | 0.7 | 22.45 | 片刃 | 緑褐色 | 結晶片岩 | 2/5 | |
| 295 | 第53図 | SB－5南半<br>1層下位 | 石包丁 | (6.4) | 3.7 | 0.8 | 34.55 | 半月形態・片刃　　直線刃 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 2/5 | 周縁部を叩石に転用。 |
| 296 | 第53図 | SD－10 | 石包丁 | (5.8) | 4.3 | 0.8 | 31.95 | 片刃<br>紐穴５ヵ所残存。 | 黒灰色 | 結晶片岩 | 1/3 | |
| 297 | 第53図 | SK－106 | 石包丁 | (5.4) | 3.3 | 0.6 | 13.55 | 片刃 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 1/3 | |
| 298 | 第53図 | SK－122 | 石包丁 | (5.4) | 3.7 | 0.7 | 19.95 | 片刃 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 1/4 | |
| 299 | 第53図 | SD－1北半部<br>1層 | 石包丁 | 5.1 | 3.7 | 0.8 | 17.45 | 半月形態・片刃<br>側面敲打痕多い。 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 2/5 | 破損後叩石に転用。 |
| 300 | 第53図 | SB－5内<br>SD－6 | 石包丁 | (4.8) | 5.8 | 0.7 | 23.00 | 両刃 | 緑灰色 | 結晶片岩 | 2/5 | |
| 301 | 第53図 | SD－18 | 大形石包丁 | (10.5) | 8.8 | 0.5 | 67.50 | 台形<br>板状節理面にて面状に剥離。<br>紐穴2カ所残 | 明緑褐色 | 結晶片岩 | 2/5 | |
| 302 | 第53図 | SK－5<br>2層 | 大形石包丁 | (9.3) | 8.2 | 1.1 | 102.5 | 台形 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 1/2 | |
| 303 | 第53図 | SK－128 | 大形石包丁 | (6.7) | (3.0) | 1.1 | 25.35 | 表面に敲打痕が残る。 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 小破片 | |
| 304 | 第53図 | SD－5<br>1層 | 大形石包丁 | 2.7 | 2.6 | 0.9 | 5.95 | 片刃？ | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 小破片 | |
| 305 | 第54図 | SK－168 | 石包丁 | 14.1 | 6.6 | 0.8 | 130 | 紐穴なし<br>直線刃・半月形態 | 明緑褐色 | 結晶片岩 | 4/5 | 未製品 |
| 306 | 第54図 | SK－107<br>下層 | 石包丁 | (13.1) | (5.0) | 0.8 | 82.5 | 刃部と縁辺部を仕上げ、表・裏面を交互に磨いている。 | 暗緑灰色 | 結晶片岩 | 4/5 | 未製品 |
| 307 | 第55図 | SB－4内<br>SK－10 | 石斧 | 12.2 | 7.3 | 5.6 | 695 | 太形蛤刃 | 緑褐色 | 閃緑岩 | 1/2 | 破損後叩石に転用。 |
| 308 | 第55図 | SK－87 | 石斧 | 2.7 | 3.8 | 2.8 | 26 | 太形蛤刃<br>平滑　光沢あり。 | 暗緑灰色 | 閃緑岩 | 小破片 | 破損後叩石に転用。 |
| 309 | 第55図 | SD－5<br>1層 | 石斧 | 7.8 | 4.1 | 1.2 | 60 | 柱状片刃<br>板状節理面で剥離　表面は全て平滑だが、刃部面に光沢あり。 | 灰褐色 | 結晶片岩 | 1/4 | |
| 310 | 第55図 | SD－1・北半<br>2層 | 石斧 | 6.1 | 1.6 | 1.3 | 22.35 | 小形柱状片刃<br>全面に平滑で光沢あり | 黒灰色 | 黒色粘板岩 | 完形 | |
| 311 | 第55図 | SB－3内<br>P－55 | 石斧 | (8.9) | 5.7 | 2.3 | 205 | 扁平片刃<br>基部を除く側面全体におびただしい敲打痕あり。刃部を欠損後、叩石に転用されたものとみられる。 | 暗緑色 | 閃緑岩 | 4/5 | 破損後叩石に転用。 |
| 312 | 第56図 | SK－163 | 石鋸 | (8.8) | 3.5 | 0.9 | 35.5 | 両長辺に刃部。<br>使用痕顕著。 | 淡赤灰色 | 紅簾片岩 | 4/5 | |
| 313 | 第56図 | SK－73 | 叩石 | 8.5 | 6.0 | 5.3 | 360.0 | 楕円状の礫を全体的に研磨一部敲打痕あり。<br>磨石を兼ねる複合石器 | 灰褐色 | 砂岩 | 完形 | |
| 314 | 第56図 | SD－5<br>1層 | 叩石 | (7.9) | (4.6) | 3.5 | 190.0 | | 灰褐色 | 砂岩 | 完形 | |
| 315 | 第57図 | SB－5内<br>SK－3北半 | 台石 | 20.8 | 19.8 | 6.1 | 3870 | 中央に凹部。 | 暗灰褐色 | 砂岩 | ほぼ完形 | |
| 316 | 第57図 | SK－3 | 台石 | 27.1 | 17.9 | 6.0 | 6160 | 平板状<br>側面を使用。 | 緑褐色 | 結晶片岩 | 完形 | |
| 317 | 第58図 | SD－5<br>2層下位 | 砥石 | (8.4) | 3.6 | 1.1 | 70 | 側面３面には母材から切り出し時に用いた鋸痕を残す。が、短辺は明瞭に残るのに対して長辺の側面はややスリ消している。中世のものとみられる。 | 淡緑灰色 | 泥岩 | 2/3 | 仕上砥石 |
| 318 | 第59図 | SK－73 | 石鍋 | 高さ(1.4) | (2.6) | － | (7.1) | 底面とみられる細片。<br>残存面は磨かれて平滑。 | 黒灰色 | 滑石 | 小破片 | 長崎県西彼杵半島ホゲット遺跡産とみられる。 |
| 319 | 第59図 | SD－5<br>2層 | 火打石 | 3.6 | 3.3 | 2.1 | (30.3) | 縁端部にスス付着。 | 白色 | 石英 | 完形 | |
| 320 | 第59図 | SD－1南半<br>1層 | 火打石 | 2.1 | 2.0 | 2.0 | (11.0) | 角は全て打撃により潰れている。 | 白色 | 石英 | 完形 | |
| 321 | 第60図 | SE－3 | 石仏 | 高さ　3.4 | 18.0 | 10.9 | 6940 | 像高17.5㎝・像幅10.0㎝　像容は合掌した供養者像の立像とみられる。 | 灰緑褐色 | 砂岩 | 完形 | 埋込式 |
| 322 | 第60図 | SD－5<br>2層 | 石造五輪塔<br>(水輪) | 高さ　14.0 | 21.6 | 21.6 | (4660) | 球形にノミで仕上げる。<br>梵字彫刻は不明。 | 緑灰色 | 砂岩 | 1/2 | 組合式 |

## 出土遺物観察表 12　金属製品

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種　類 | 計測値 | | | | 形態・技法の特徴 | 色　調 | 材　質 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | | | | |
| 323 | 第61図 | SD－5<br>2層南端 | 鍬 | 刃部11.4<br>柄部10.8 | 刃部10.8<br>柄部2.8 | 0.9 | (277.0) | 二又の熊手(鍬)とみられる。 | 赤茶色 | 鉄 | 完形 | |
| 324 | 第61図 | SD－5<br>2層下位 | 刀 | 26.6 | 2.4 | 0.7 | (119.0) | 折れた部分から6.7㎝の範囲の刃を叩いて潰している。 | 暗赤茶褐色 | 鉄 | 1/2 | 折れた刀を小刀に再利用したもの。 |
| 325 | 第62図 | SD－5<br>2層下位 | 煙管<br>(吸口) | (2.6) | 直径　0.8 | － | (0.9) | 表面は渡金仕上げとみられる。 | 金色 | 銅 | 1/2 | |
| 326 | 第62図 | SD－5<br>1層 | 銅銭<br>(皇宋通寶) | 外縁<br>外径24.4㎜<br>内径19.6㎜ | 内郭<br>外径7.9㎜<br>内径6.1㎜ | 縁厚1.4㎜<br>内厚0.9㎜ | 2.2 | 内郭の表面深0.4㎜、裏面深0.1㎜(表面に比べ極めて浅い)。 | 淡緑褐色 | 銅 | 完形 | 中国銭、文字は篆書。<br>寛元元(1038)年初鋳。 |
| 327 | 第62図 | SD－2<br>西端部 | 鉄砲玉 | 直径1.2 | － | － | 10.2 | 型を合わせた際の痕跡を残す。 | 灰白色 | 鉛 | 完形 | 未使用品 |

## 出土遺物観察表 13　木製品

| 遺物番号 | 挿図番号 | 遺構・層位 | 種　類 | 計測値(cm) | | | 形態・技法の特徴 | 色　調 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 328 | 第63図 | SD－5<br>2層 | 箸 | 23.6 | 0.6 | 0.6 | 両端を細く削ったもので多角柱状。 | 淡灰茶褐色 | 完形 | |
| 329 | 第63図 | SD－5<br>2層下位 | 下駄(連歯) | 20.8 | 8.2 | 5.2 | 漆塗り | 台側面・上面：暗茶色<br>台下面・歯：黒色 | 4/5 | 女性左足用とみられる。 |
| 330 | 第63図 | SD－5<br>2層 | 板塔婆 | 19.0 | 2.4 | 0.5 | 残存した面は表裏不明。直径0.2㎝の釘穴がみられる。 | 暗灰茶褐色 | 不明 | 上部五輪部分の破片。 |
| 331 | 第63図 | SD－5<br>2層 | 板状加工品 | 6.9 | 2.5 | 0.6 | 全面を加工し、面取りを行う。<br>円孔2ヶ所。 | 暗灰茶褐色 | 完形 | |
| 332 | 第64図 | SD－5<br>2層 | 木札 | 17.3 | 3.4 | 0.4 | 柾目材を用いたもの。表・裏に墨書があり、表面に二層の建物と月など、裏面は文字状のもの。 | 黒褐色 | 不明 | 墨書の建物は塔とみられる。 |

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | おおだくろだいせき　だい59じはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 太田・黒田遺跡第59次発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 和歌山市都市整備公社発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第２集 |
| 編著者名 | 北野隆亮　　奥村　薫 |
| 編集機関 | 財団法人和歌山市都市整備公社 |
| 所在地 | 〒640－8227　和歌山県和歌山市西汀丁36　　TEL 073－435－1129 |
| 発行年月日 | 西暦　2009年３月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積（㎡） | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 太田・黒田遺跡（おおだくろだいせき）<br>太田城跡（おおだじょうあと） | 和歌山県和歌山市太田（わかやまけんわかやましおおだ） | 3020150 | 327<br>356 | 34°<br>23′<br>18″ | 135°<br>19′<br>97″ | 2007.4.16<br>～<br>2007.8.1 | 994 | マンション建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 太田・黒田遺跡<br>太田城跡 | 集落跡<br>城館跡 | 弥生時代<br>古墳時代<br>平安時代<br>鎌倉時代<br>室町時代<br>江戸時代 | 竪穴建物、土坑、溝、ピット、石組井戸 | 弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、瓦器、土師質・瓦質土器、中世陶器、輸入陶磁器、近世陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、石造物、金属製品、木製品 | 高床建物を描いた弥生土器壺体部破片が出土。 |

| | |
|---|---|
| 要約 | 調査歴の乏しい遺跡東部での調査。今回の調査で２面の遺構面を確認した。上面は弥生時代中期から江戸時代まで、下面は弥生時代前期から中期まで。遺構は、弥生時代前期の土坑、同中期の竪穴建物６棟・土坑墓、祭祀土坑などを検出した他、平安時代から江戸時代にかけての溝・土坑・石組井戸などを多数検出。 |

# 図　　版

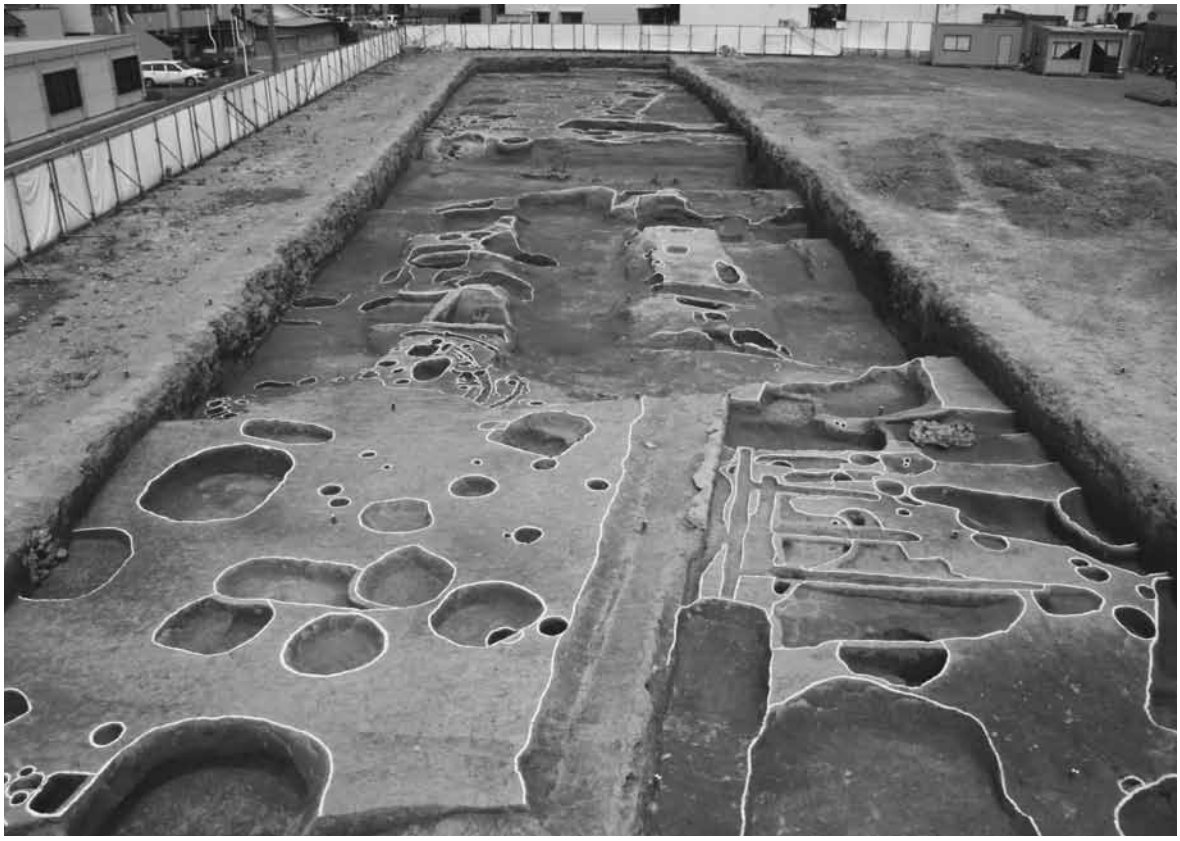
調査前の状況（西から）

調査前の状況（東から）

図版2

全景（上が北）

調査区西端部下面検出遺構（西から）



全景（西から）

全景（東から）

SB－1（東から）

SB－1（南から）

SB－1土層堆積状況（西から）

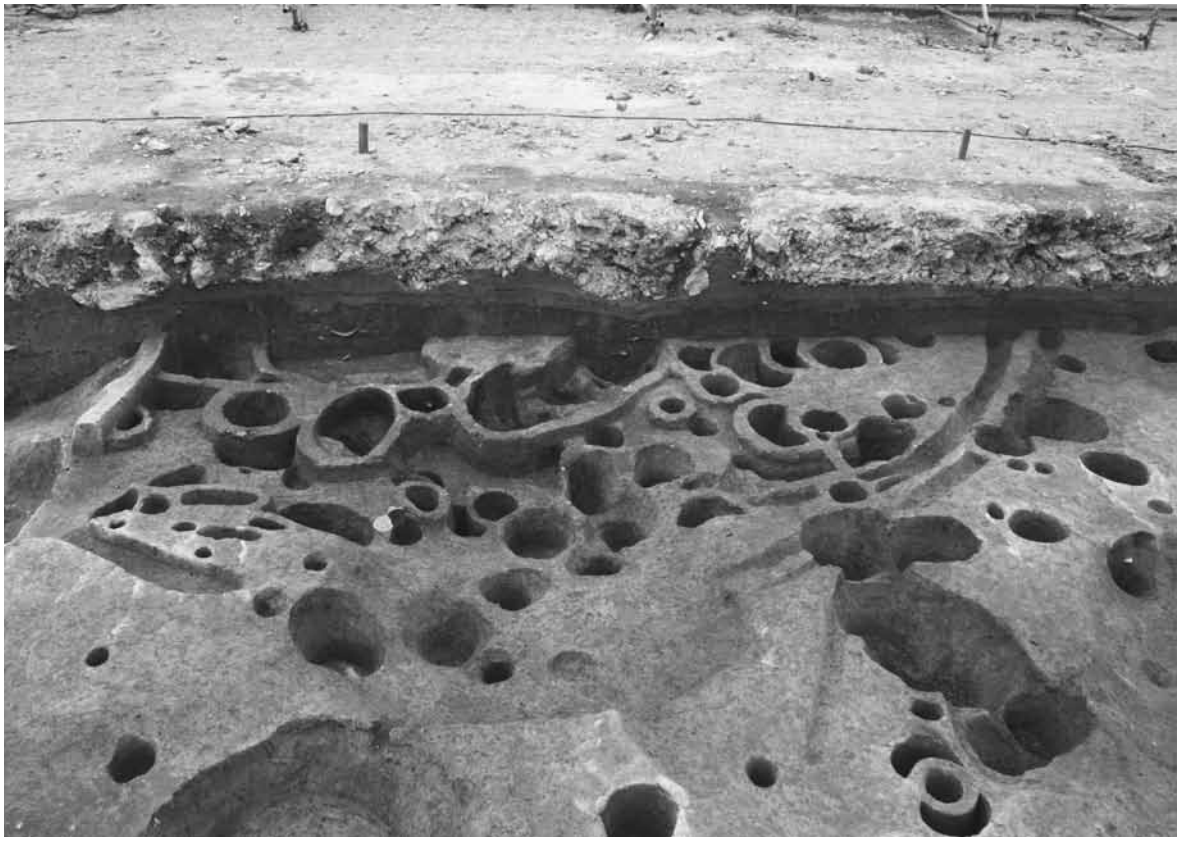
SB－3（上が北）

SB － 3（北から）

SB － 3（北東から）

SB－3炉（北から）

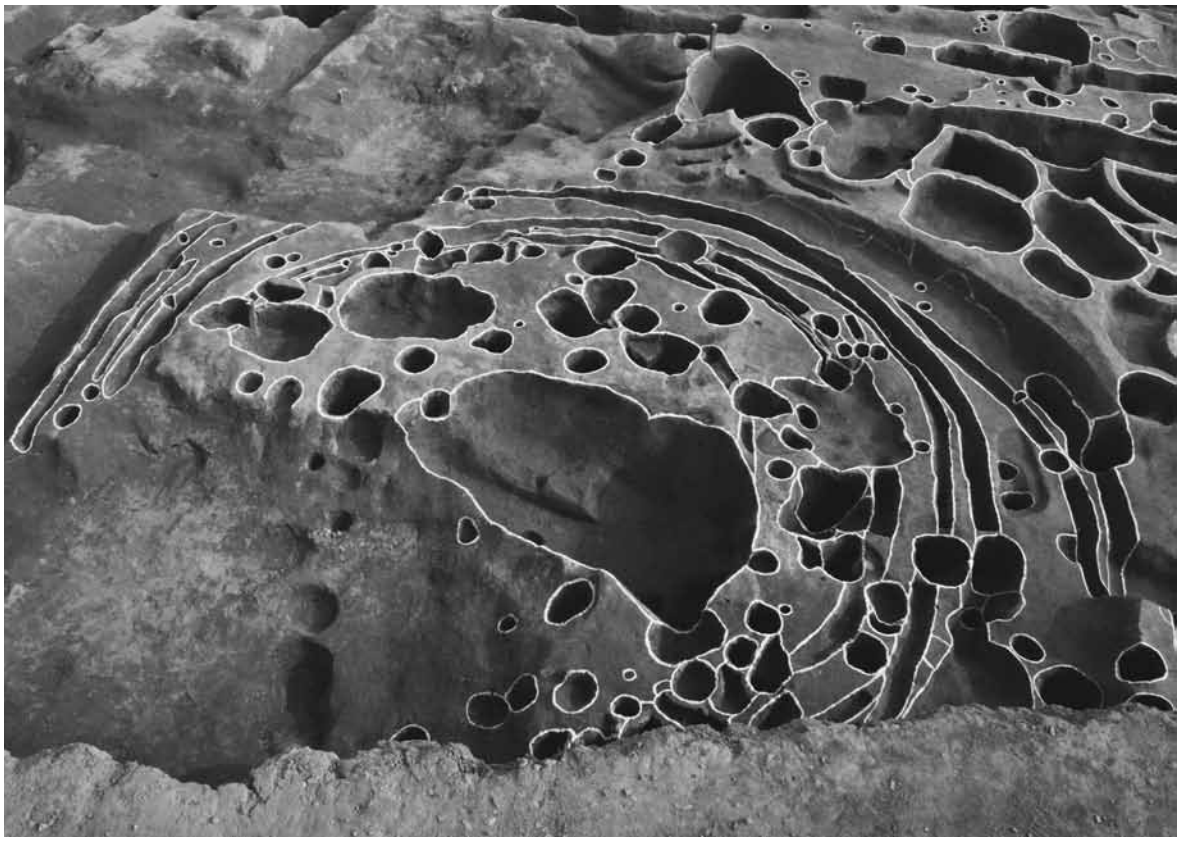
SB－4（上が北）



SB － 4（南から）

SB － 4 壁溝（南から）

SB－5・6（上が北）

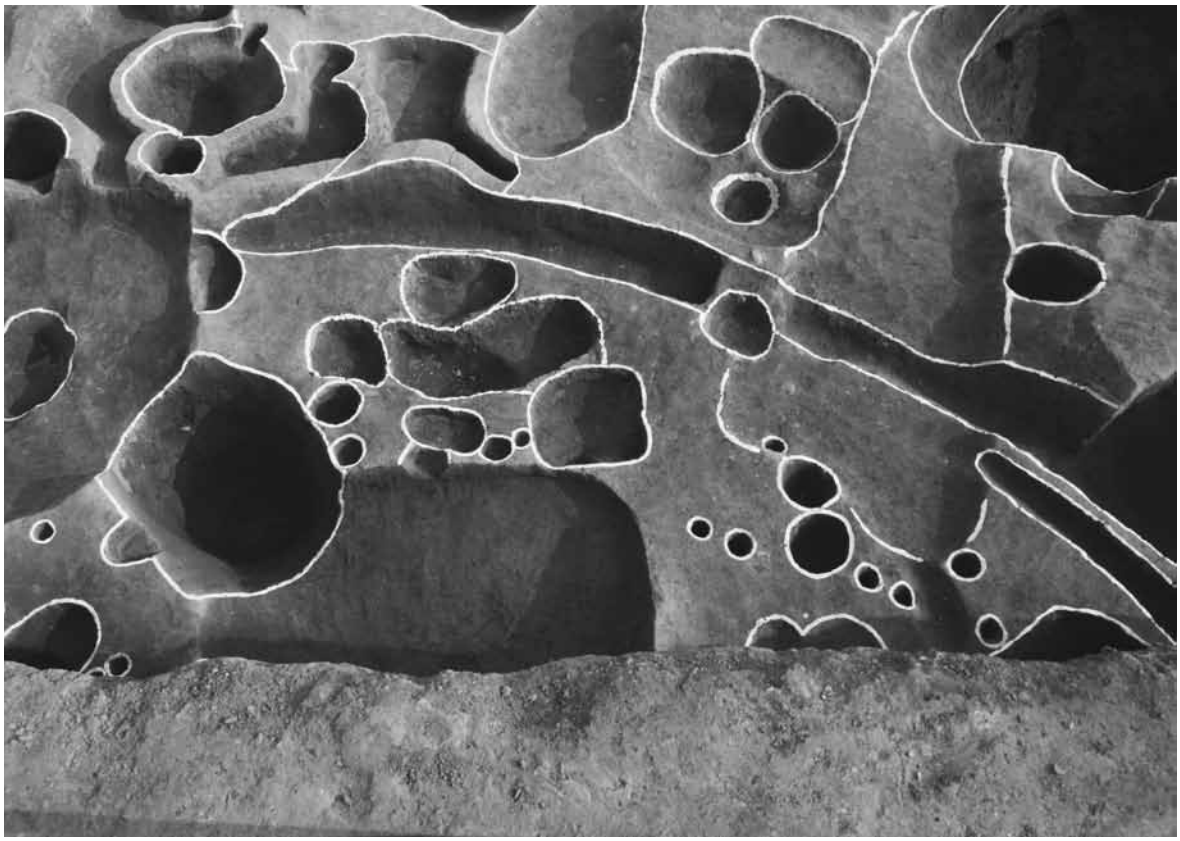


SB－5（北から）

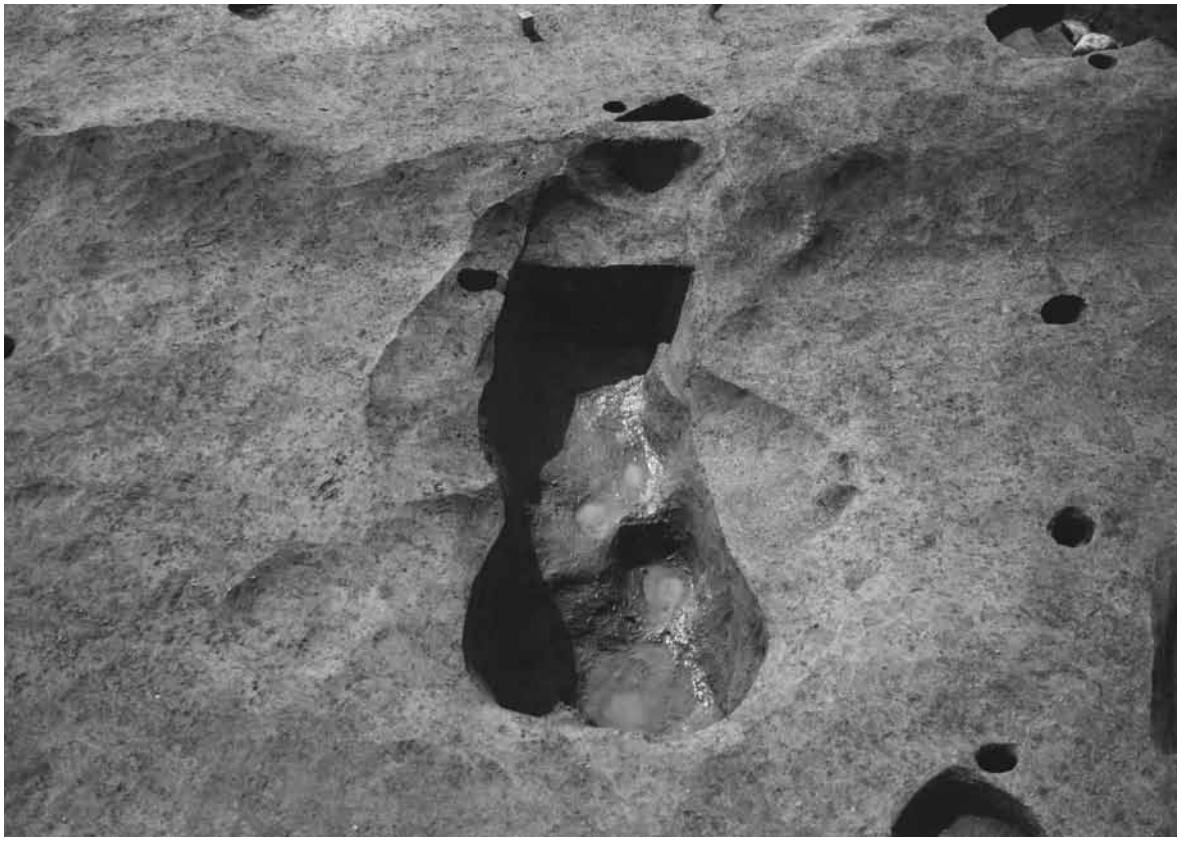
SB － 5（東から）

SB － 5 土層堆積状況（南西から）

SB － 5 炉土層堆積状況（南西から）



SB － 6（北から）



SK － 7（東から）

SK － 7 土層堆積状況（東から）

SK － 31（北東から）

SK － 31 遺物出土状況（北西から）

SK － 125（南から）

SK － 125 遺物出土状況（西から）

SK － 83（南から）

SK － 169（上が北）

SK － 169（西から）

SK － 169 土層堆積状況（西から）

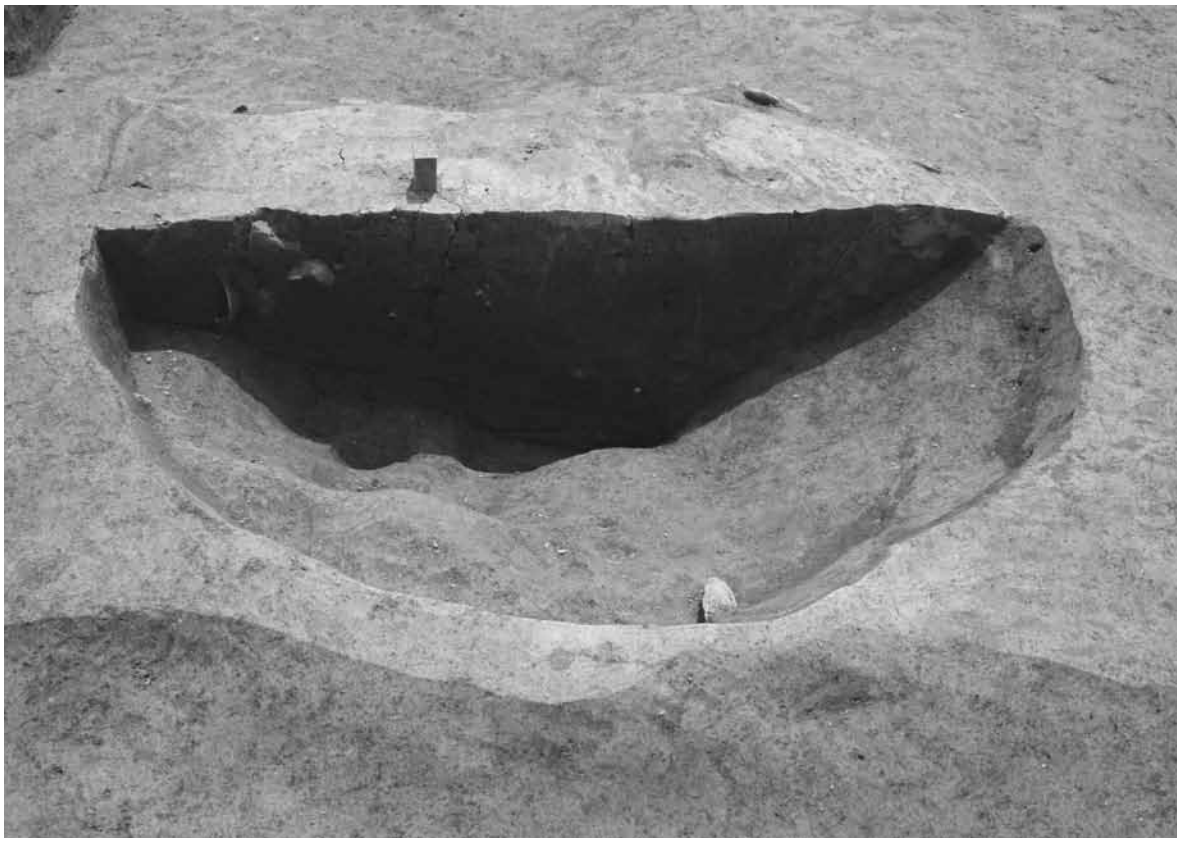
SK － 92（北西から）

SK － 95（南から）

SK － 95 土層堆積状況（南から）

SK － 96（東から）

SK － 10（東から）



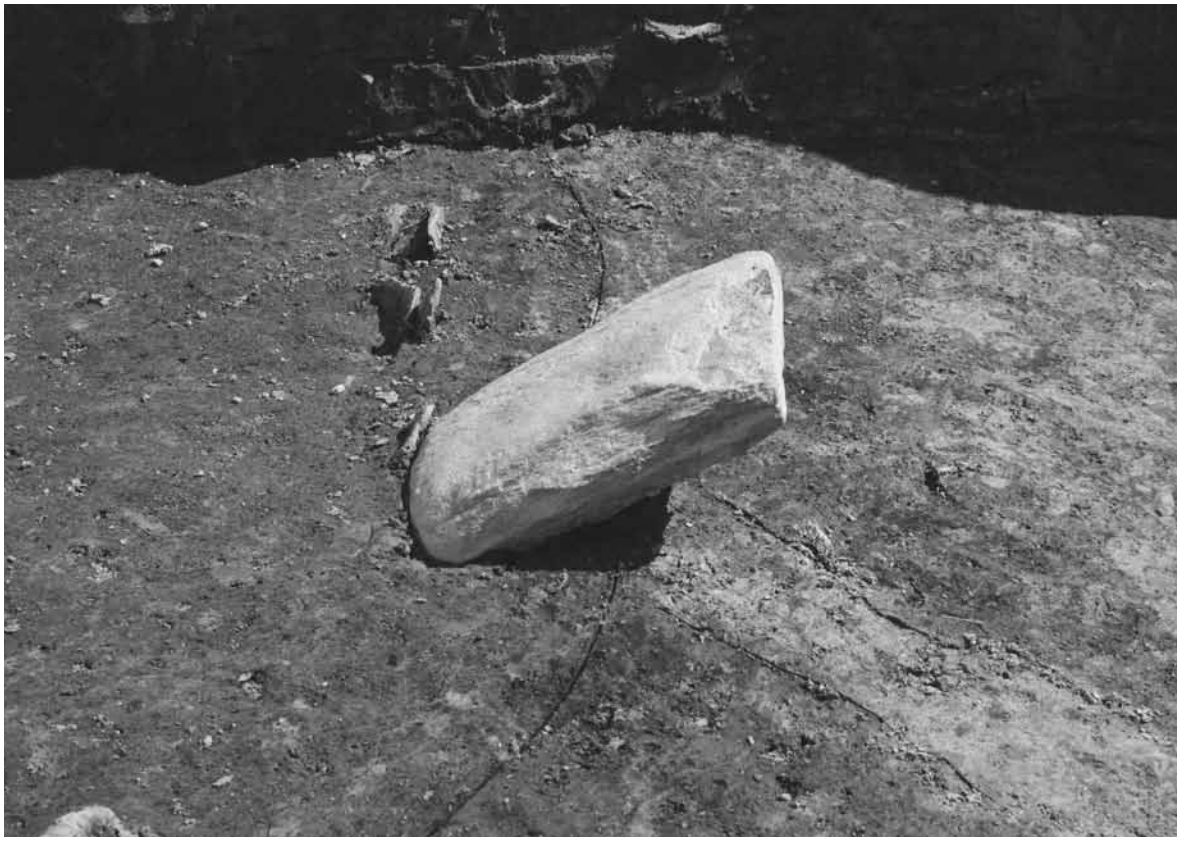
SK － 10 土層堆積状況（西から）

SD － 1（上が北）

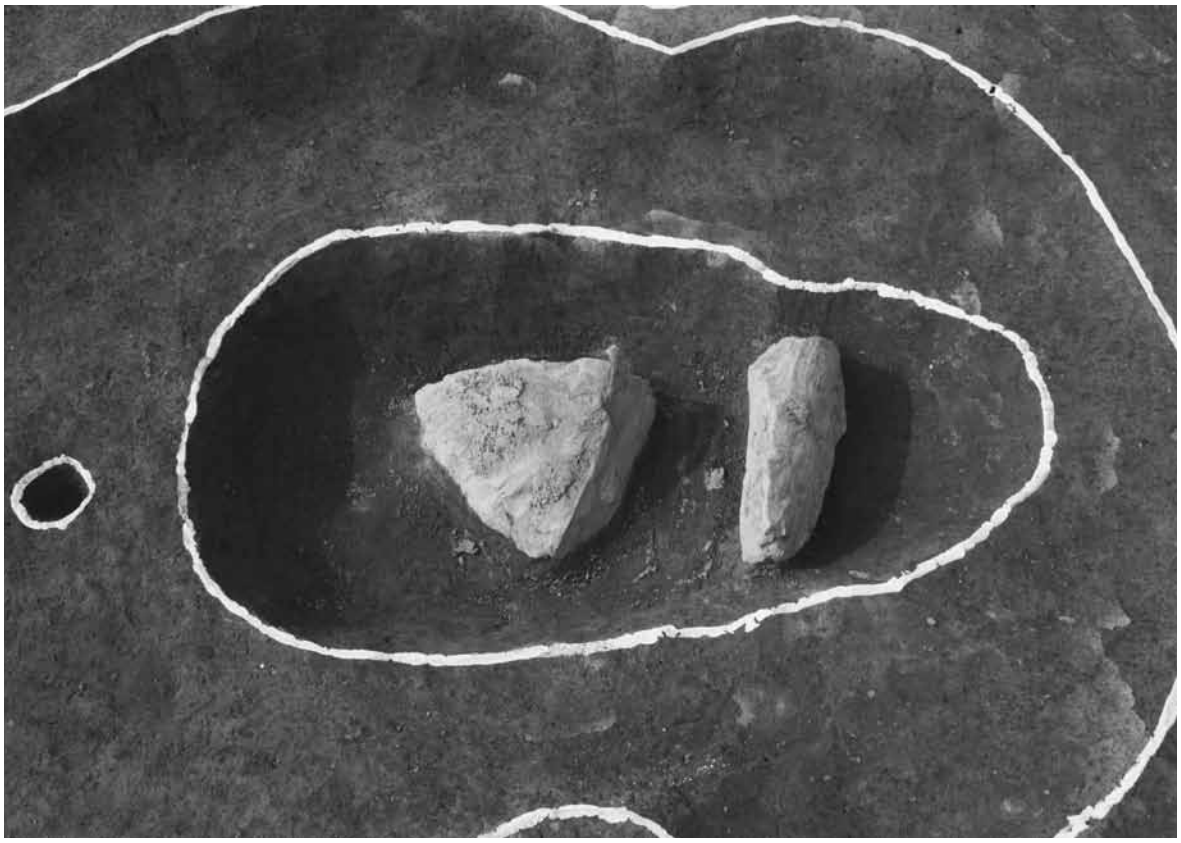
SD － 1 土層堆積状況（南から）

SD － 2 土層堆積状況（東から）

SD － 8 土層堆積状況（東から）

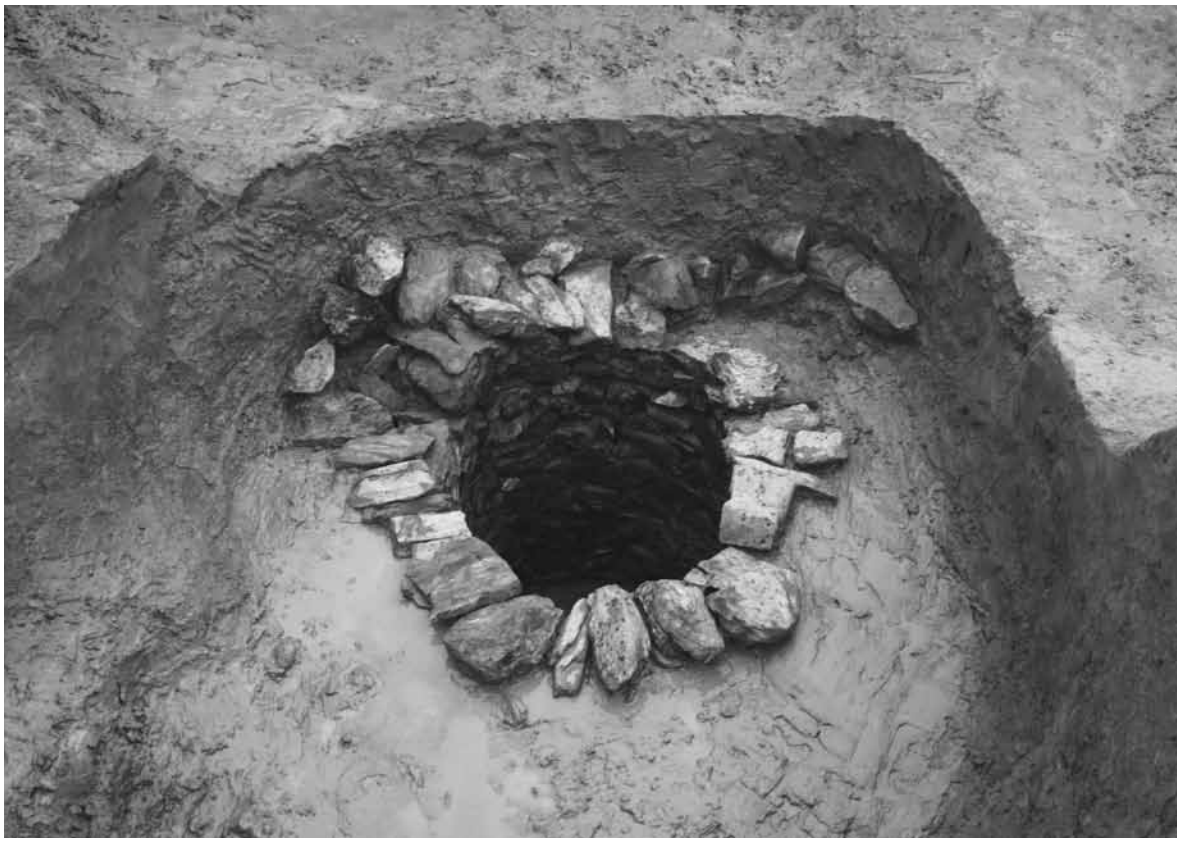


SK － 3 石製品出土状況（北から）



SK － 49（南から）

SE－2（西から）



SE－3（南から）

SE － 3 遺物出土状況（北西から）

SD － 5a・5b（上が北）

SD － 5a・5b（南から）

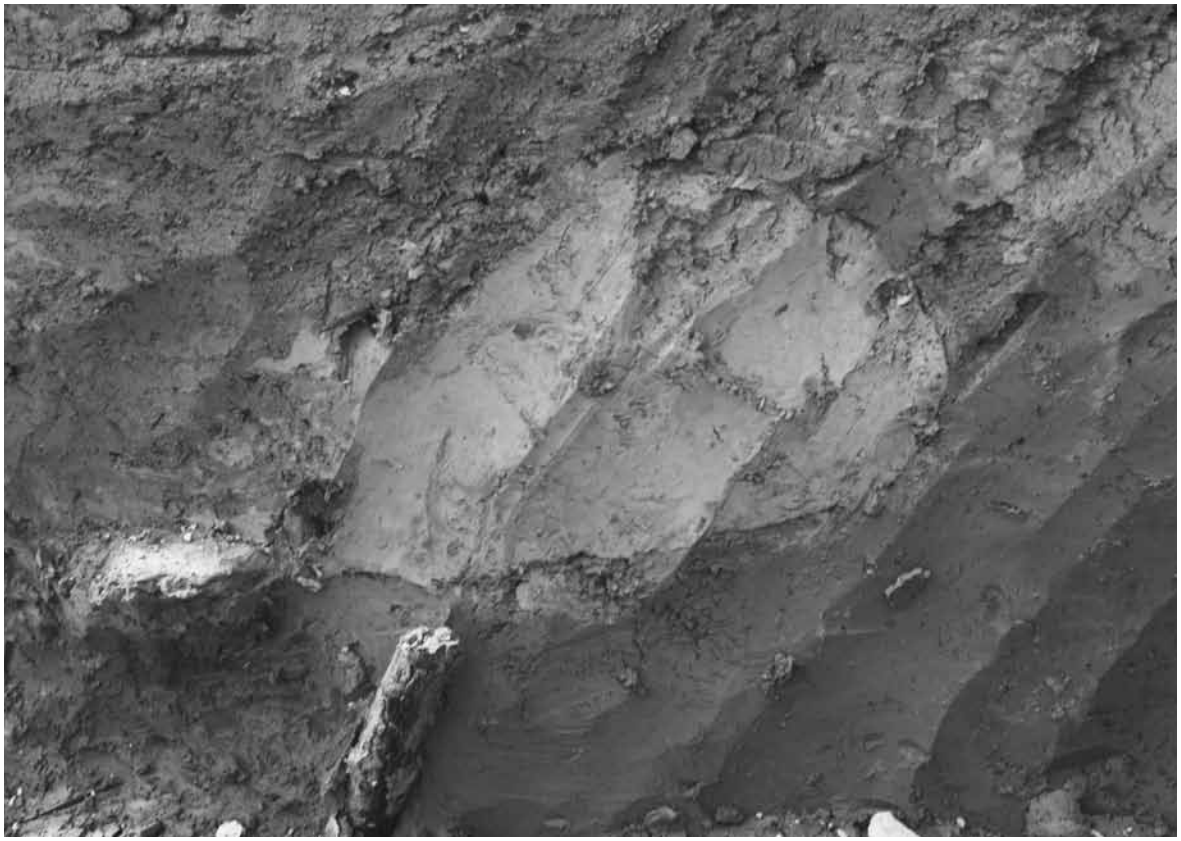
P － 233 埋甕底部（北から）

SD － 5a 護岸杭列と堰杭列（南から）

SD － 5a 護岸俵に打ち込んだ杭（南西から）

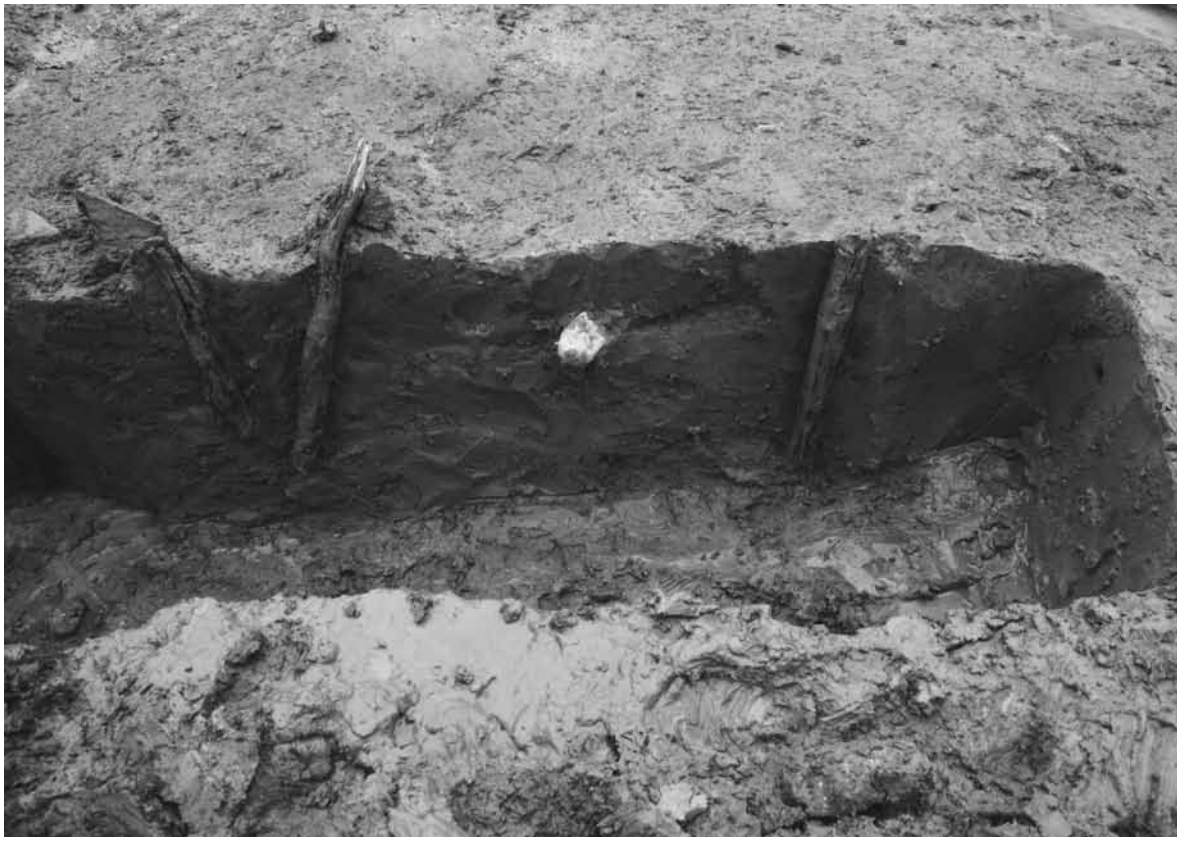
SD － 5a 護岸俵・杭列検出状況（南から）

SD － 5a 護岸俵・杭列断割状況（南東から）



SD － 5a 護岸俵・杭断面（北から）

SD － 5a 護岸杭列断割状況 1（東から）



SD － 5a 護岸杭列断割状況 2（東から）

SD － 5a 護岸杭列断割状況 3（東から）

SD － 7 堰杭断割状況（南から）

SD － 7 土層堆積状況（南から）

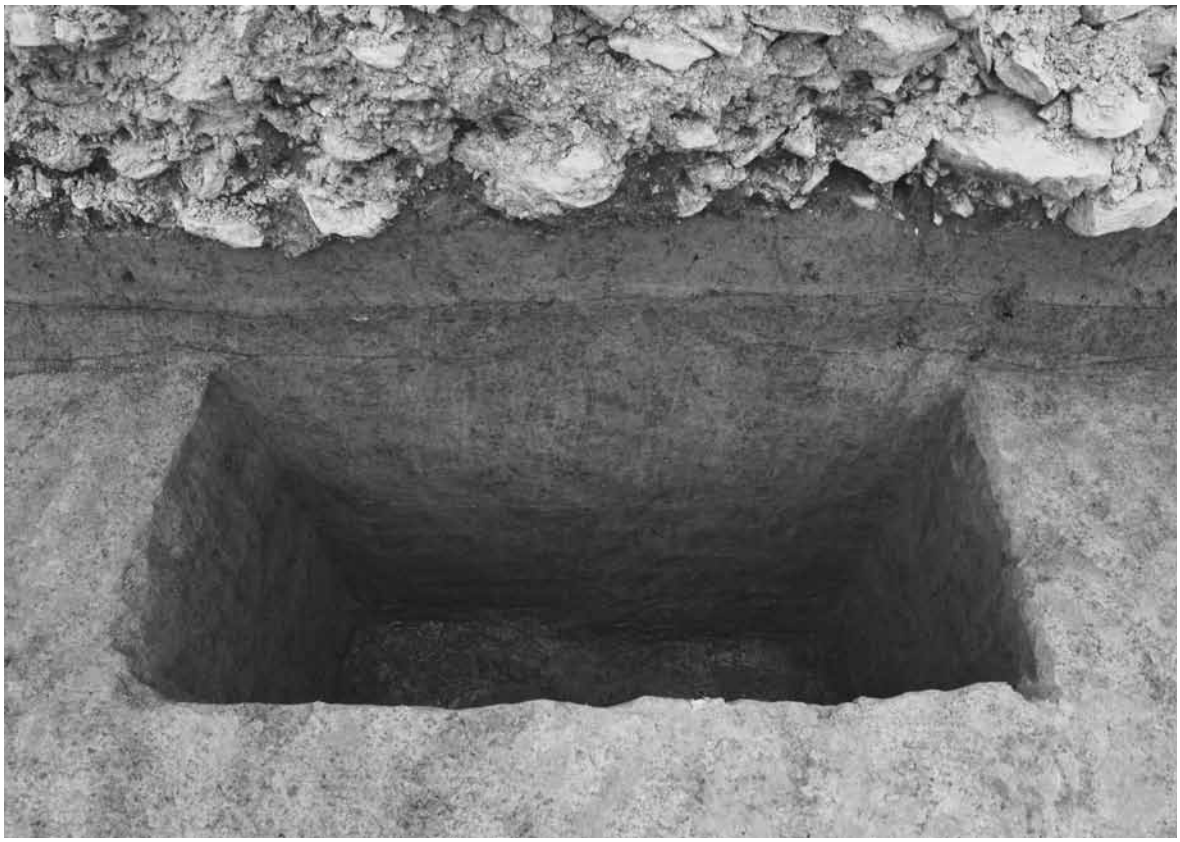
調査区西南端部小溝群 (SD － 11)（西から）

SX － 3（南から）

SK － 67（南から）

調査区西端部第４層上面遺構（西から）

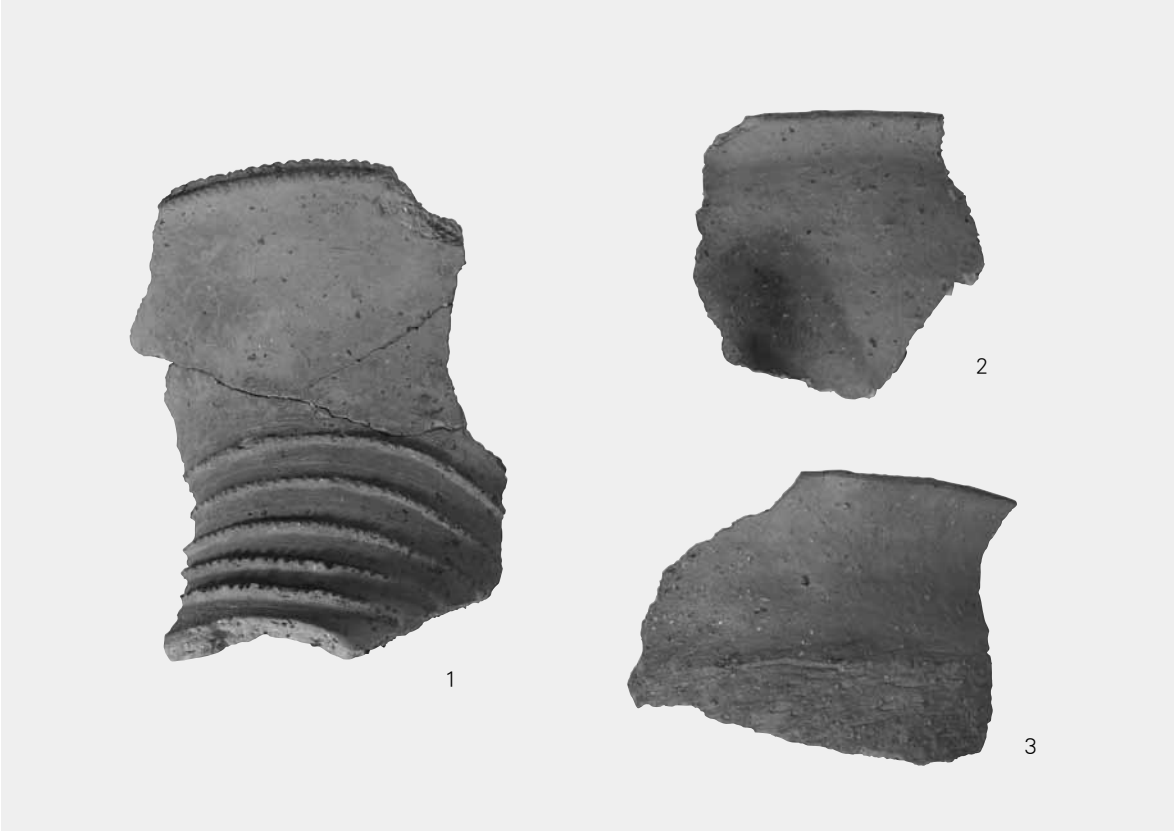
調査区西北端部近代屋敷地（西から）



サブトレンチ１（南から）

サブトレンチ２（南から）

サブトレンチ３（南から）




SK － 148 出土土器 弥生土器 1・2 壺 3 甕

SB － 5 出土土器 弥生土器 4 蓋

SB － 5 出土土器 弥生土器 5 甕

SK － 125 出土土器 弥生土器 6 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 7 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 8 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 9 壺

SK-125 出土土器 弥生土器 11 壺

SK-125 出土土器 弥生土器 12 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 13 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 14 壺

SK － 125 出土土器 弥生土器 15 鉢

SK － 125 出土土器 弥生土器 16 高杯

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 17 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 18 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 19 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 20 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 21 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 22 壺

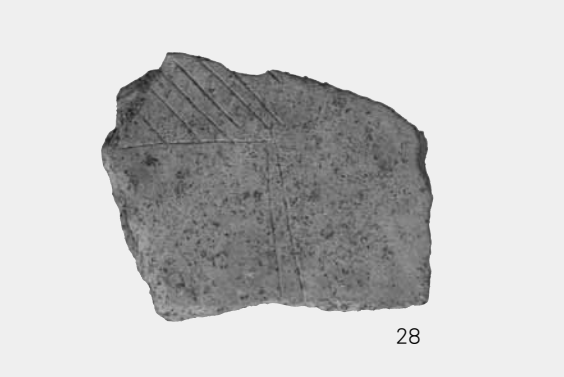
その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 23 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 24 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 25 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 26 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 27 壺



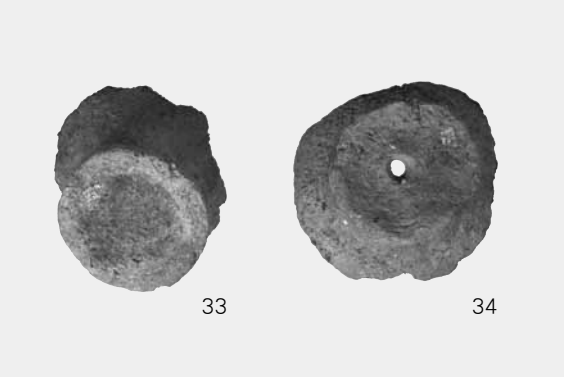

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 28 壺

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 29 甕

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 30 甕

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 31 甕

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 32 甕




その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 33 甕 34 甑

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 36 甕

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 37 甕

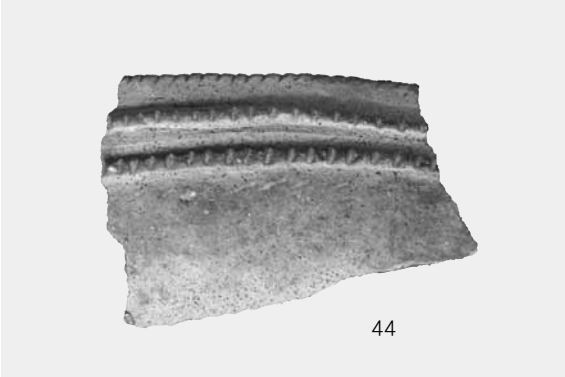
その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 38 蓋

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 40 高杯

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 41 高杯

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 42 高杯

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 43 高杯




その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 44 鉢

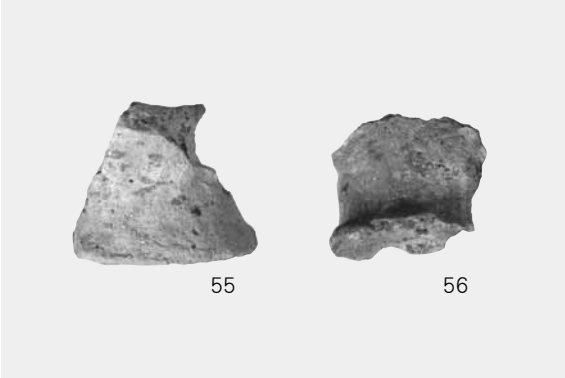
その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 45 鉢

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 46 鉢

その他遺構等出土土器（弥生時代）弥生土器 48 台付鉢

SK － 17 出土土器　土師器 51 高杯

SK － 133 出土土器　土師器 53 高杯




SK － 133 出土土器 土師器 55・56 製塩土器

その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 63 製塩土器

その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 57 壺

その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 58 鉢

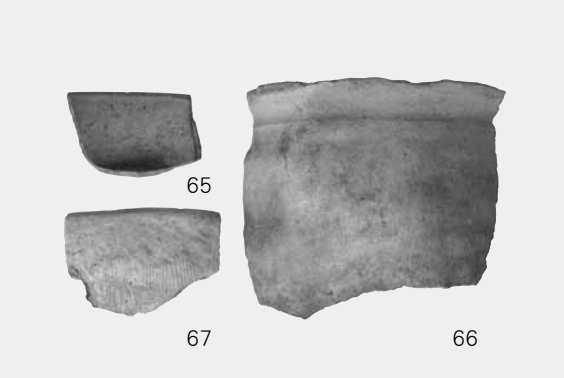
その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 59 高杯

その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 60 高杯

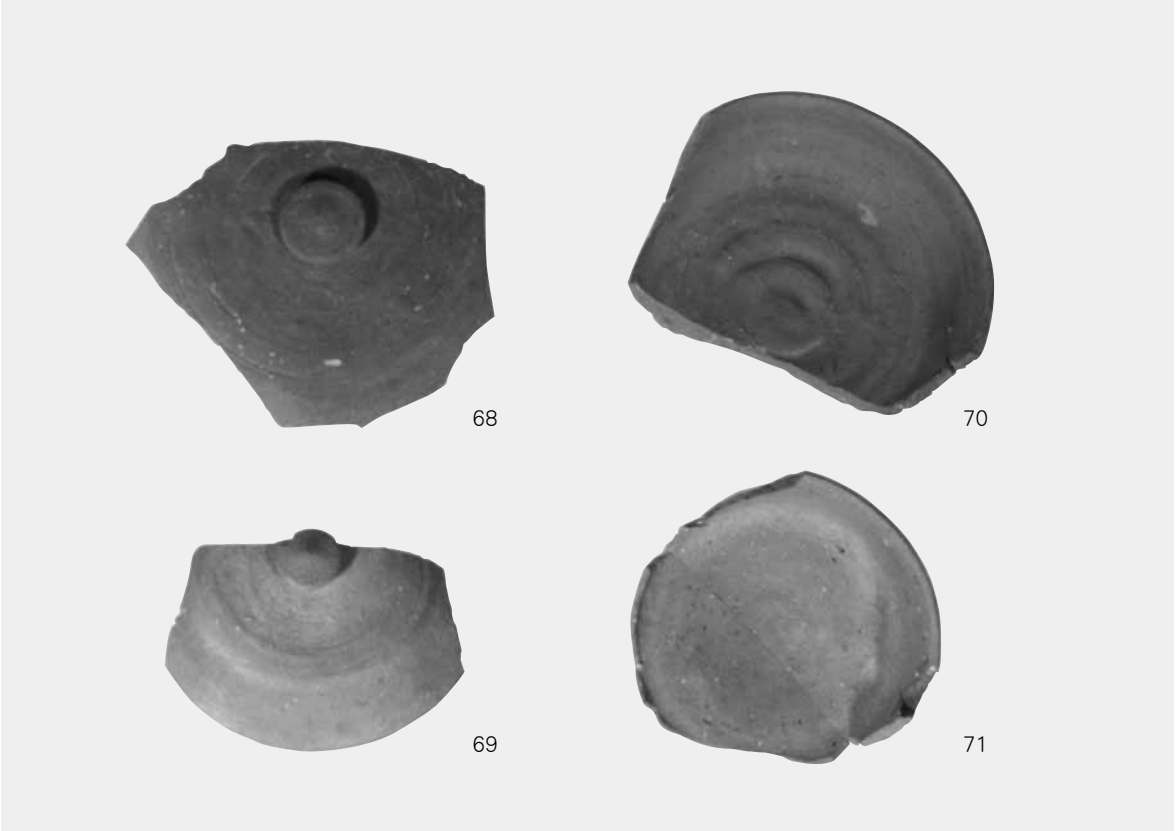
その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 61 甕

その他遺構等出土土器（古墳時代）土師器 62 甑

その他遺構等出土土器（古墳時代）須恵器 64 杯蓋




SK － 20 出土土器 土師器 65 杯 66 甕 67 甑




SK − 20 出土土器 須恵器 68・69 杯蓋 70・71 杯身

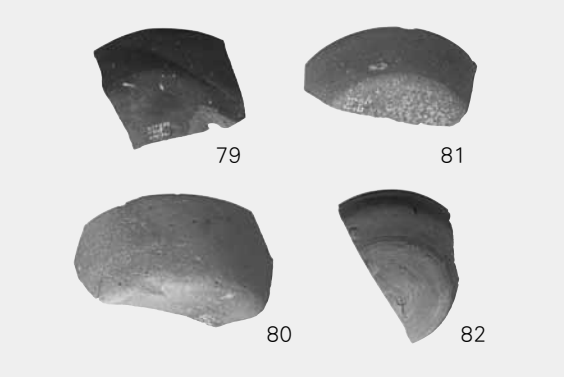
SK − 20 出土土器 須恵器 72 平瓶

SK − 20 出土土器 須恵器 73 甕

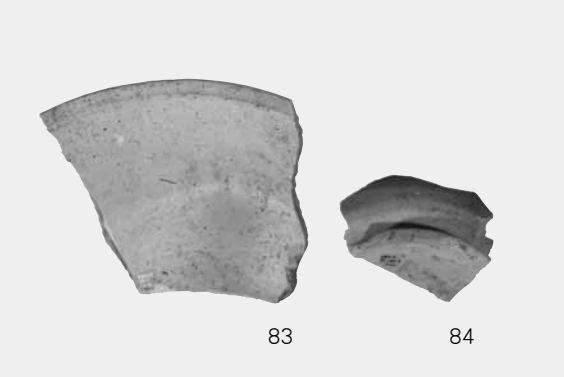
SK − 61 出土土器 土師器 74 甕

SK − 61 出土土器 土師器 75 甕

SK － 61 出土土器 須恵器 76 ～ 78 杯

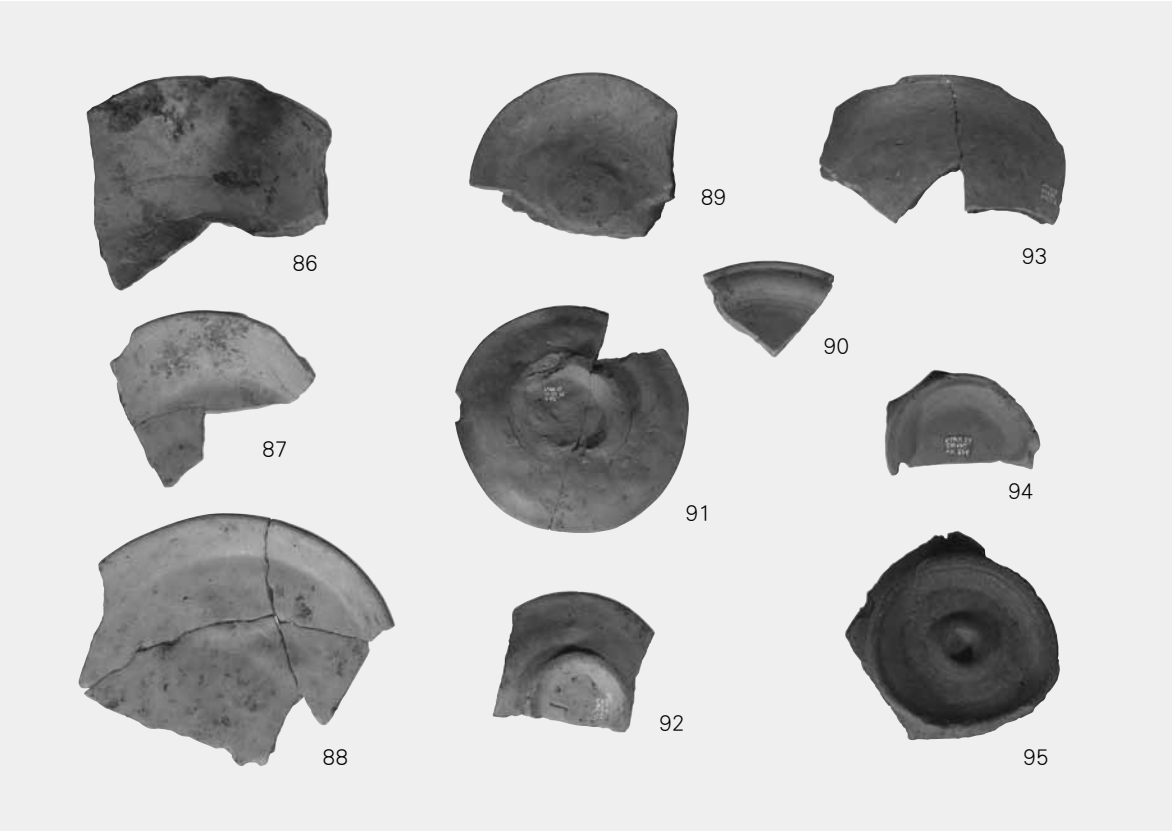



その他遺構等出土土器（古代）須恵器 79 ～ 82 杯

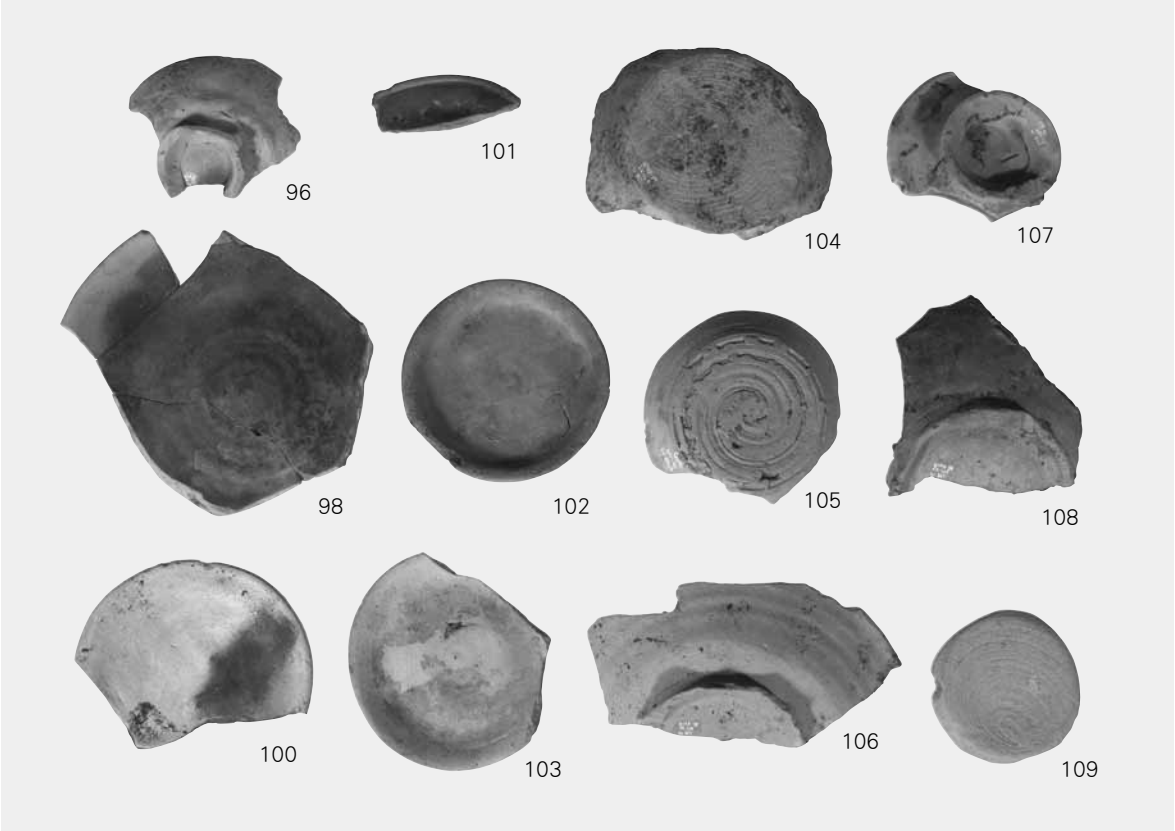



その他遺構等出土土器（古代）須恵器 83・84 盤

その他遺構等出土土器（古代）須恵器 85 平瓶




SK － 107 出土土器 土師器 86・87 杯 88 ～ 92 皿 93 椀 黒色土器 94・95 椀

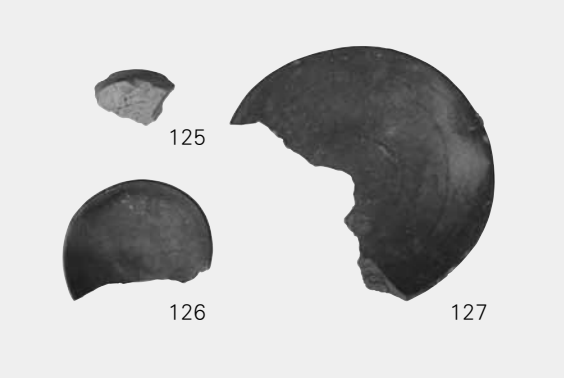



SK － 165・169 出土土器 土師器 96 椀 98 杯 100 ～ 105 皿 106・107 台付皿 109 円板状転用品　黒色土器 108 椀

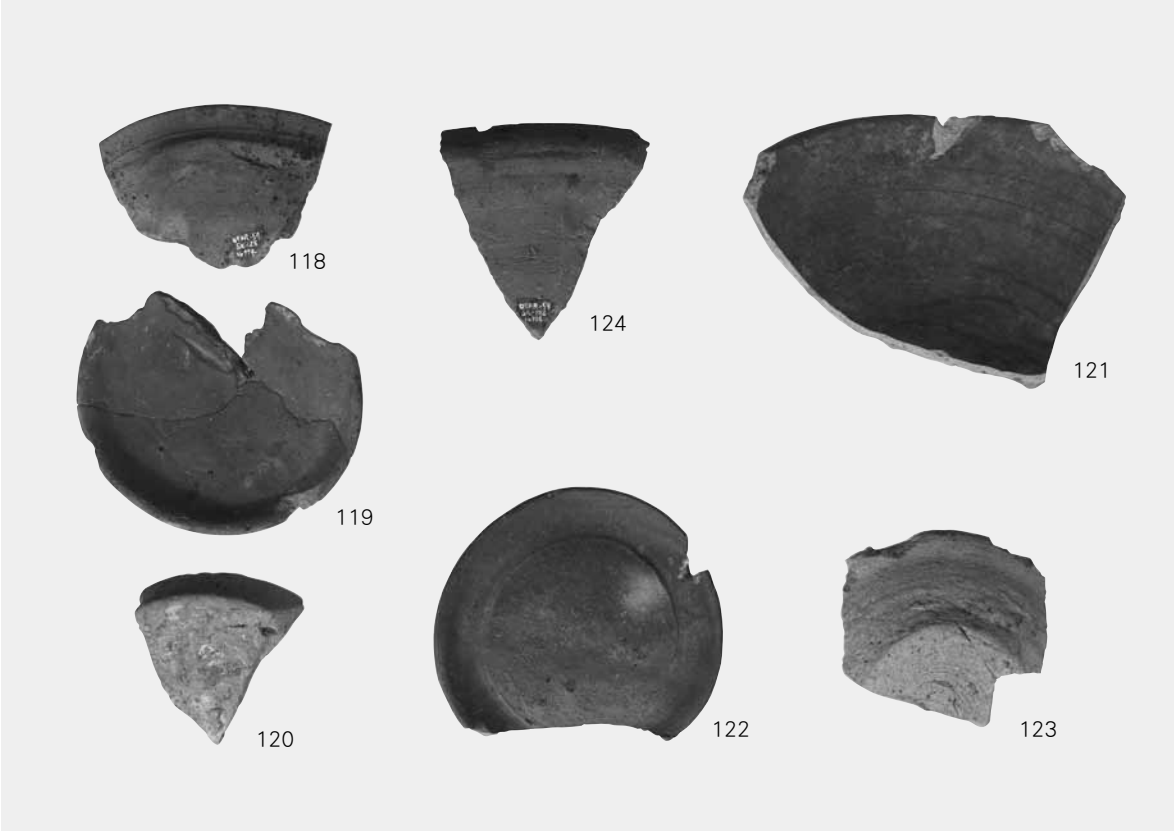
SK － 96 出土土器 土師器 110・111 皿 113 釜

SK － 96 出土土器 土師器 112 釜

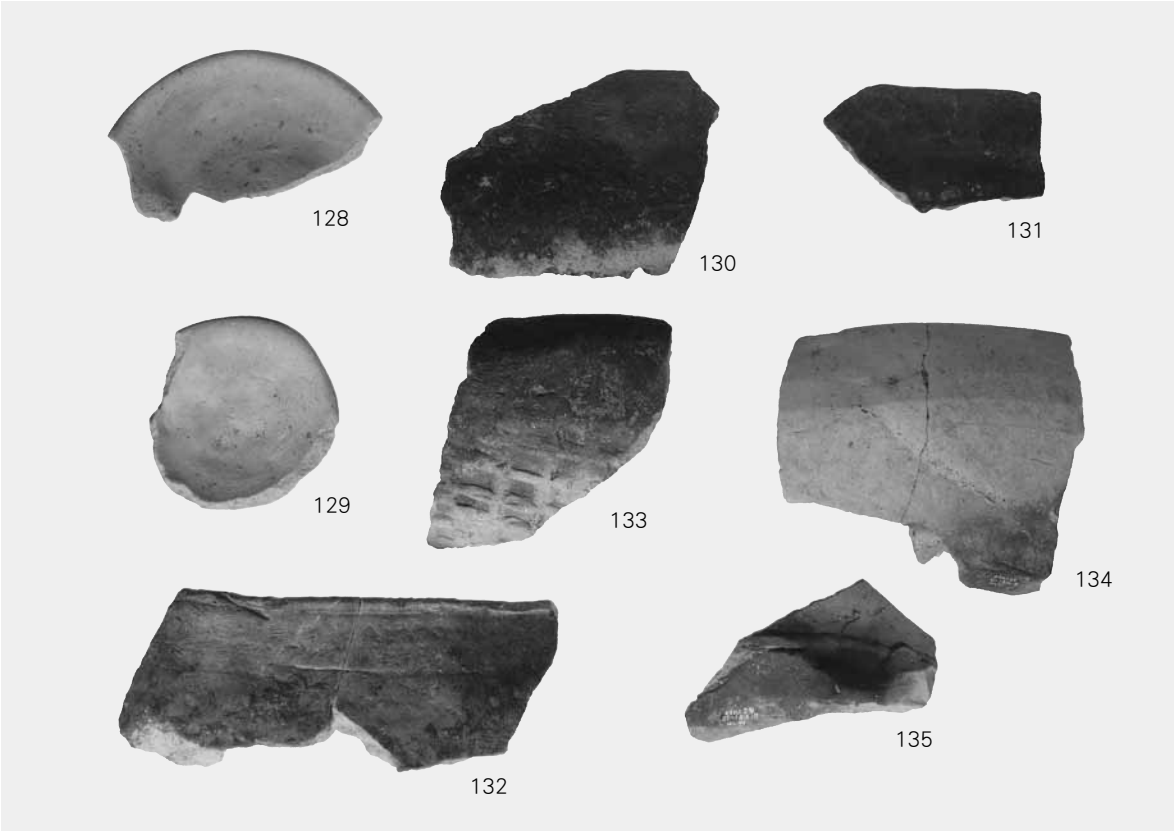
SK － 96 出土土器 瓦器 114 ～ 116 椀 117 皿



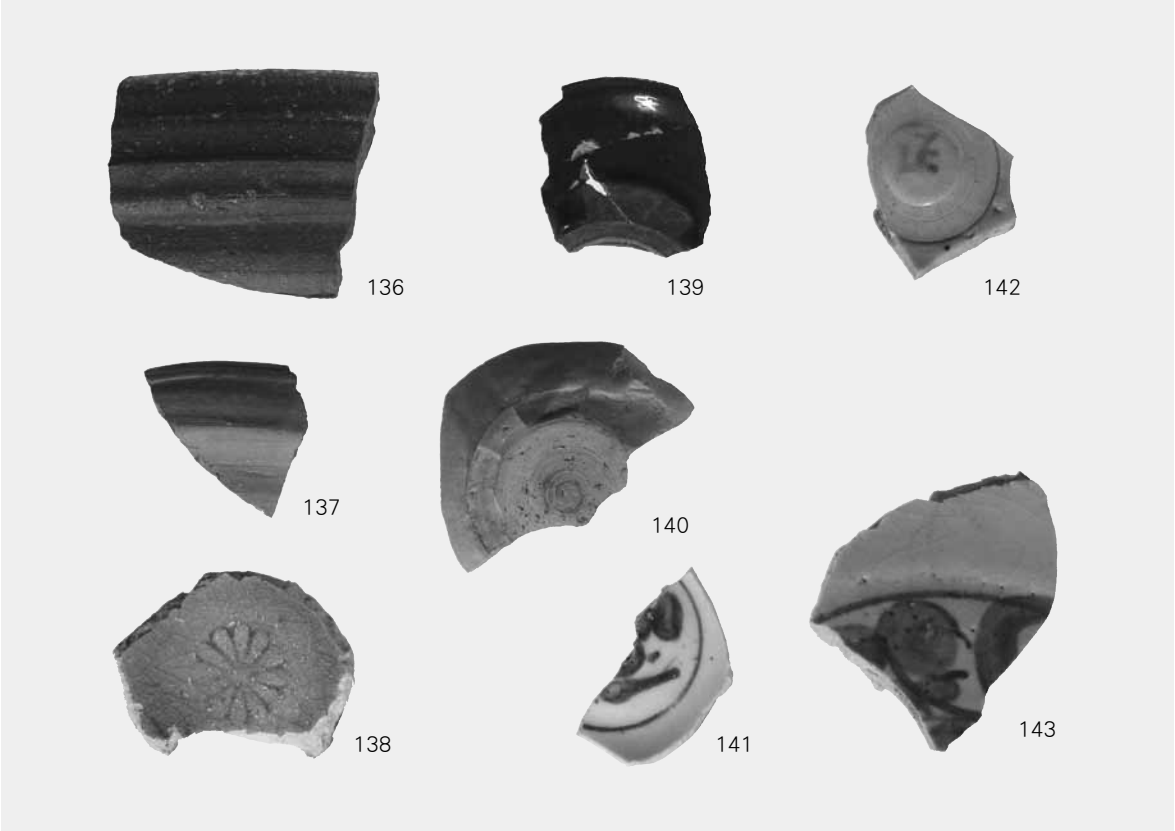

SK － 92 出土土器 土師器 125・126 皿　瓦器 127 椀



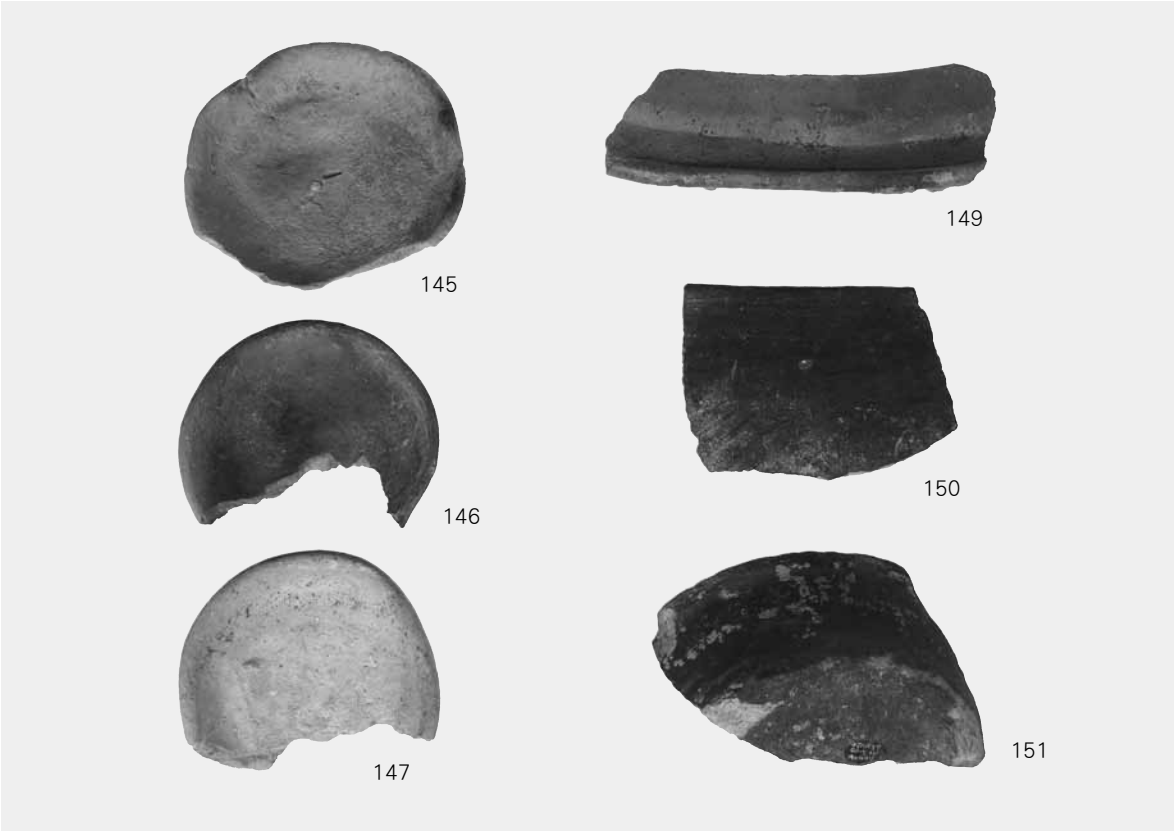

SK － 128 出土土器 土師器 118 ～ 120 皿 瓦器 121 椀 122 皿 山茶椀 123 皿 東播系須恵器 124 捏鉢



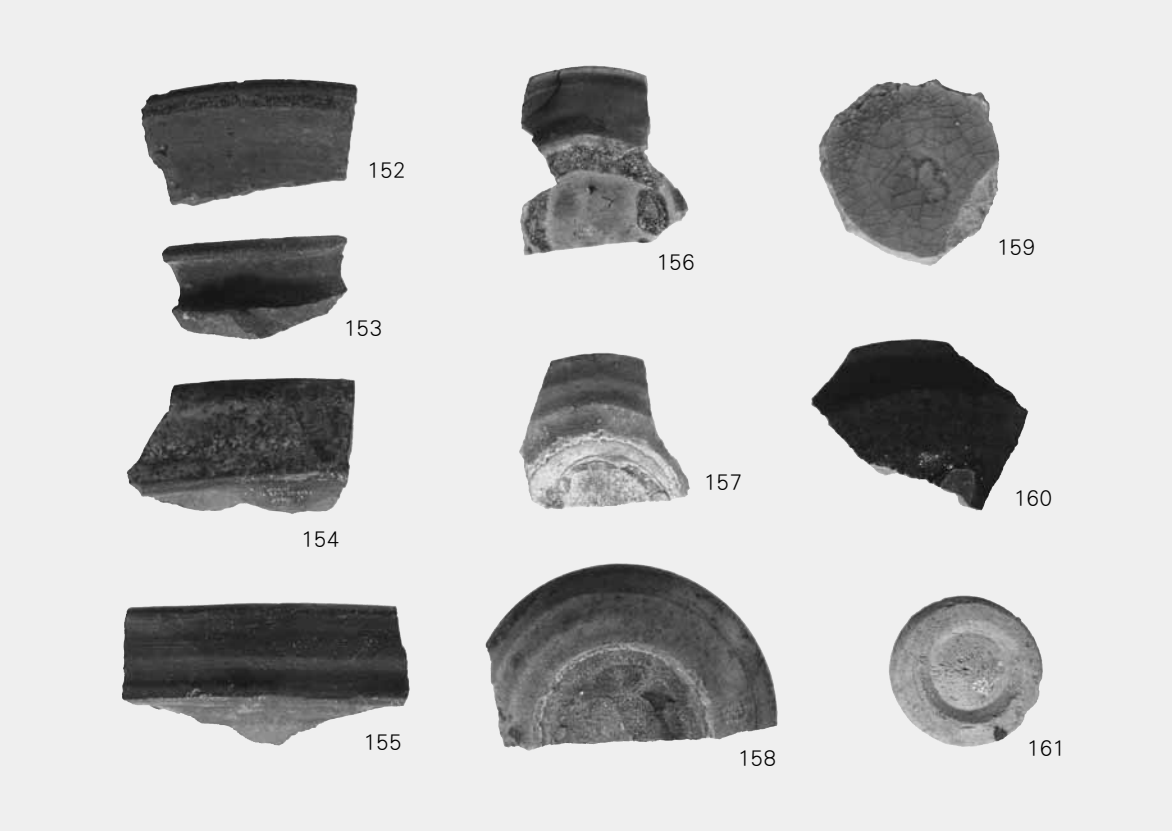

SD － 1・2 出土土器 土師器 128・129 皿 130 ～ 133 堝 土師質土器 134 火鉢 135 香炉



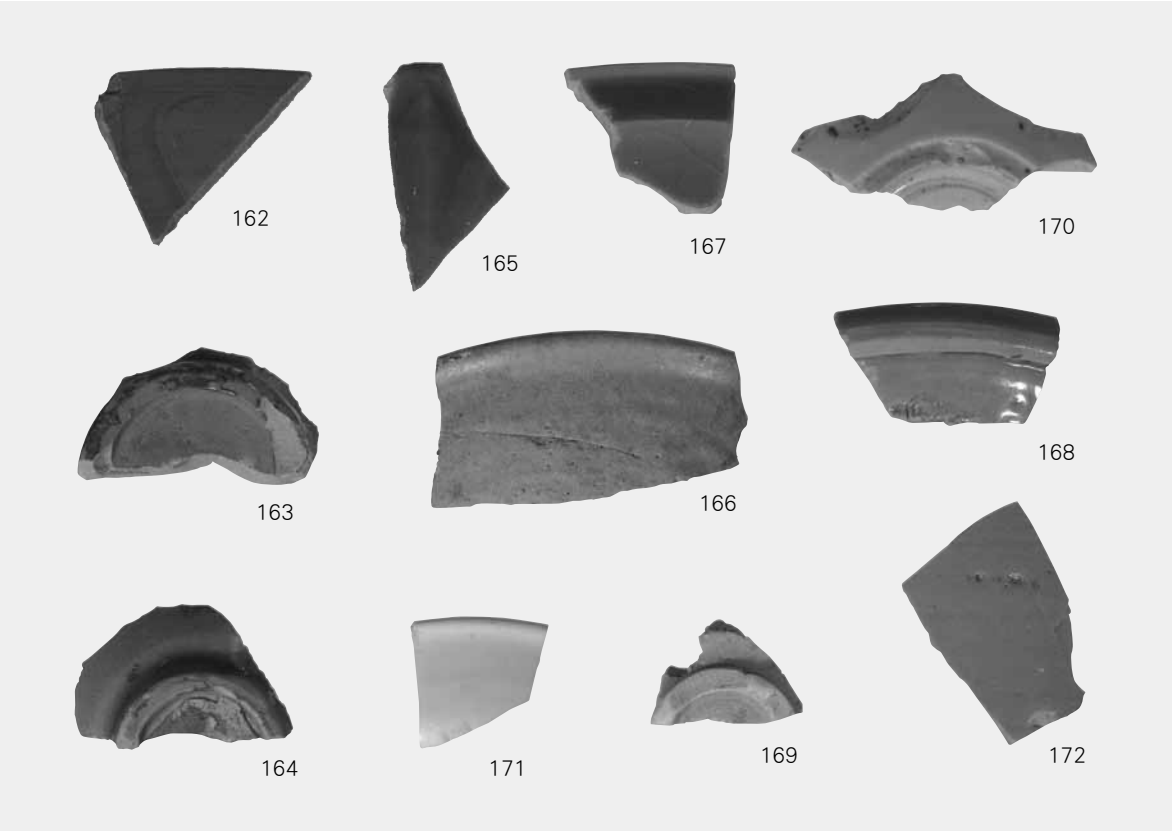

SD － 1・2 出土土器 備前焼 136 大甕 137 擂鉢　瀬戸美濃系陶器 138 灰釉皿 139 天目茶椀
中国製青磁 140 碗　中国製染付 141 椀 142 皿 143 大皿



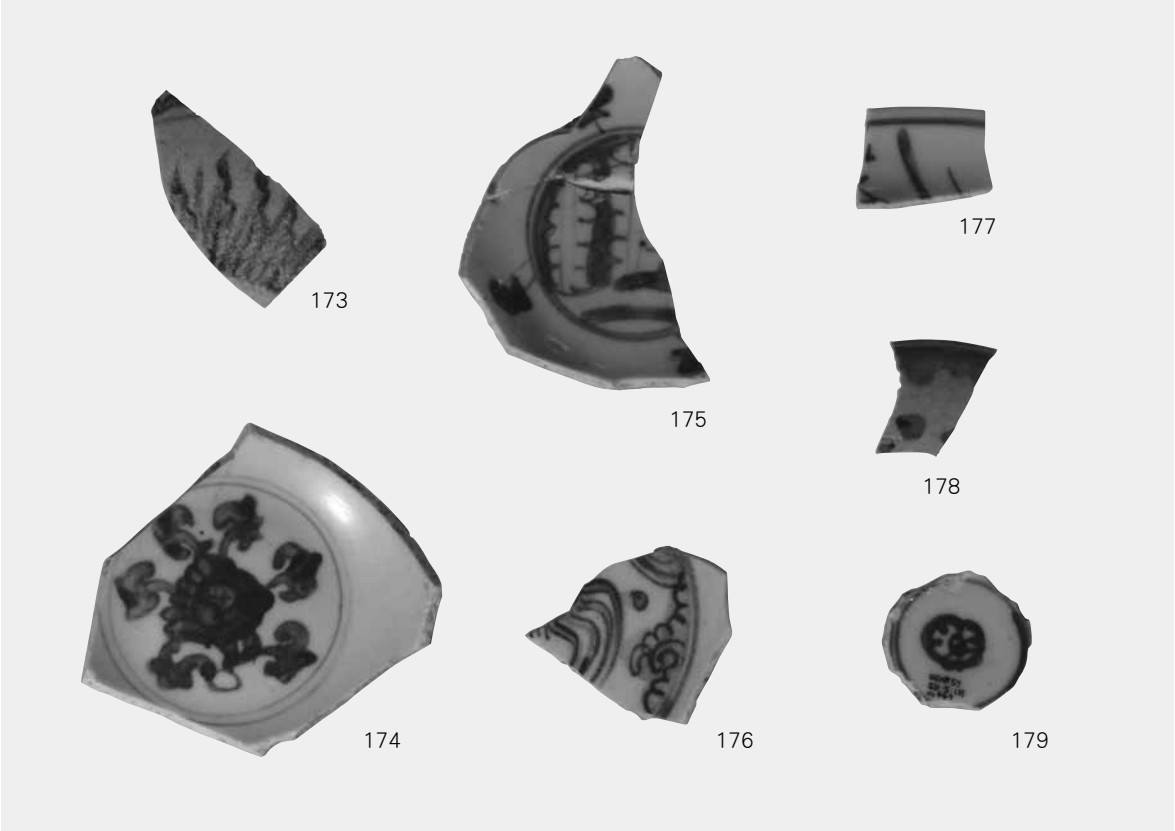

SD － 5 出土土器（中世）土師器 145 ～ 147 皿 149 釜 150 堝　瓦質土器 151 香炉




SD － 5 出土土器（中世）東播系須恵器 152 捏鉢　備前焼 153 壺 154・155 擂鉢
瀬戸美濃系陶器 156 ～ 159 灰釉皿 160・161 天目茶椀

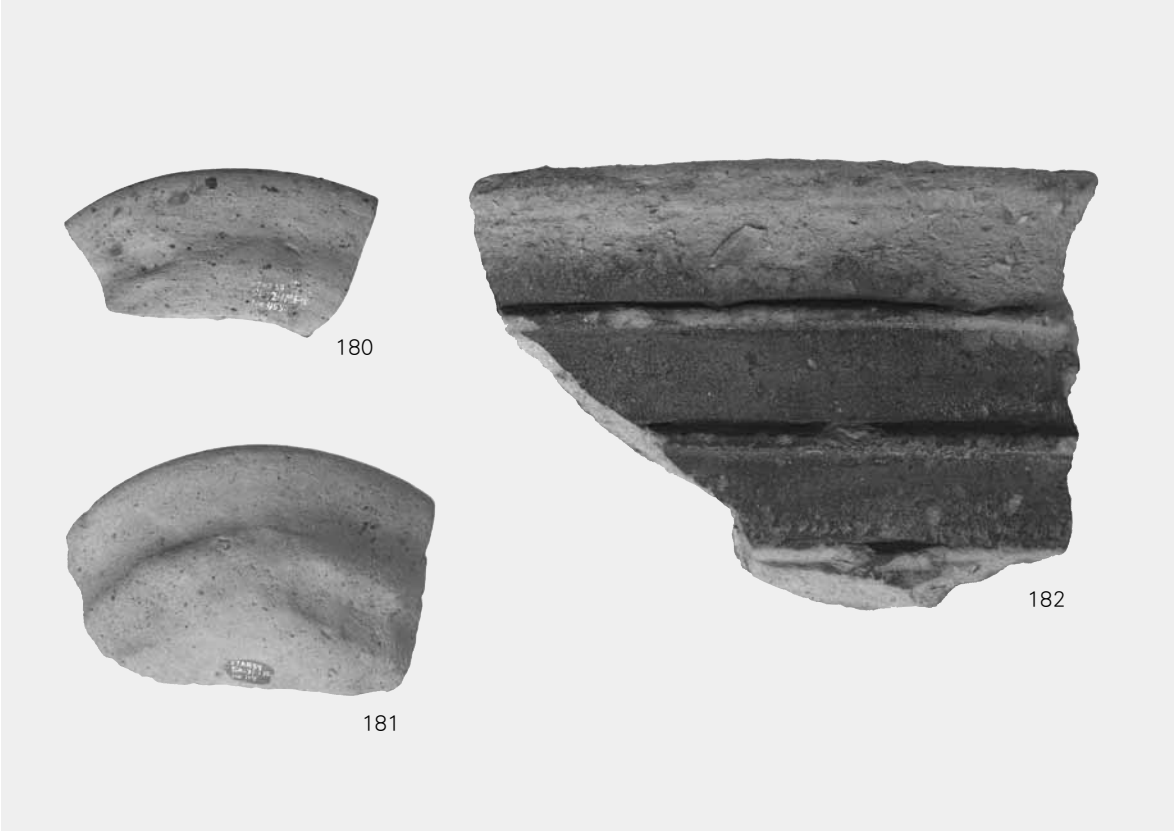



SD － 5 出土土器（中世）中国製青磁 162 ～ 166 椀 167 盤　中国製白磁 168 椀 169 ～ 171 皿 172 壺

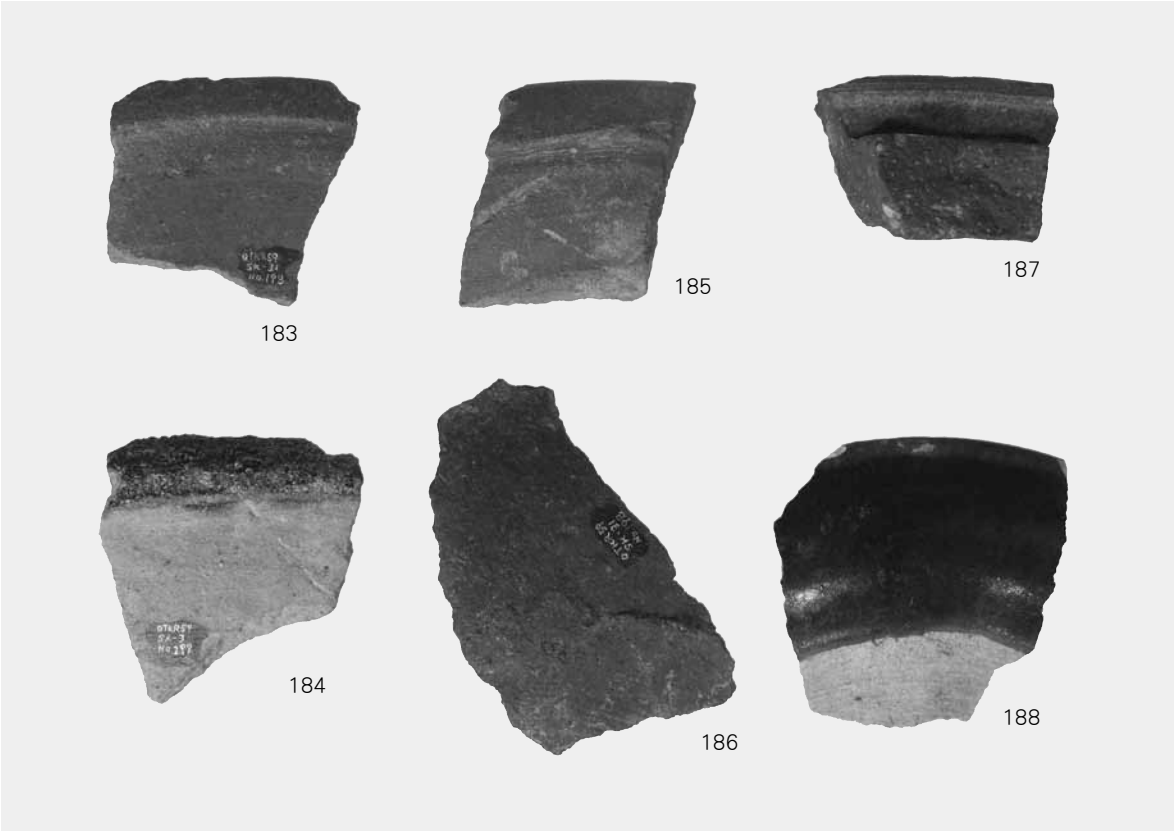



SD － 5 出土土器（中世）中国製染付 173 ～ 175 椀 176 ～ 178 皿 179 小杯

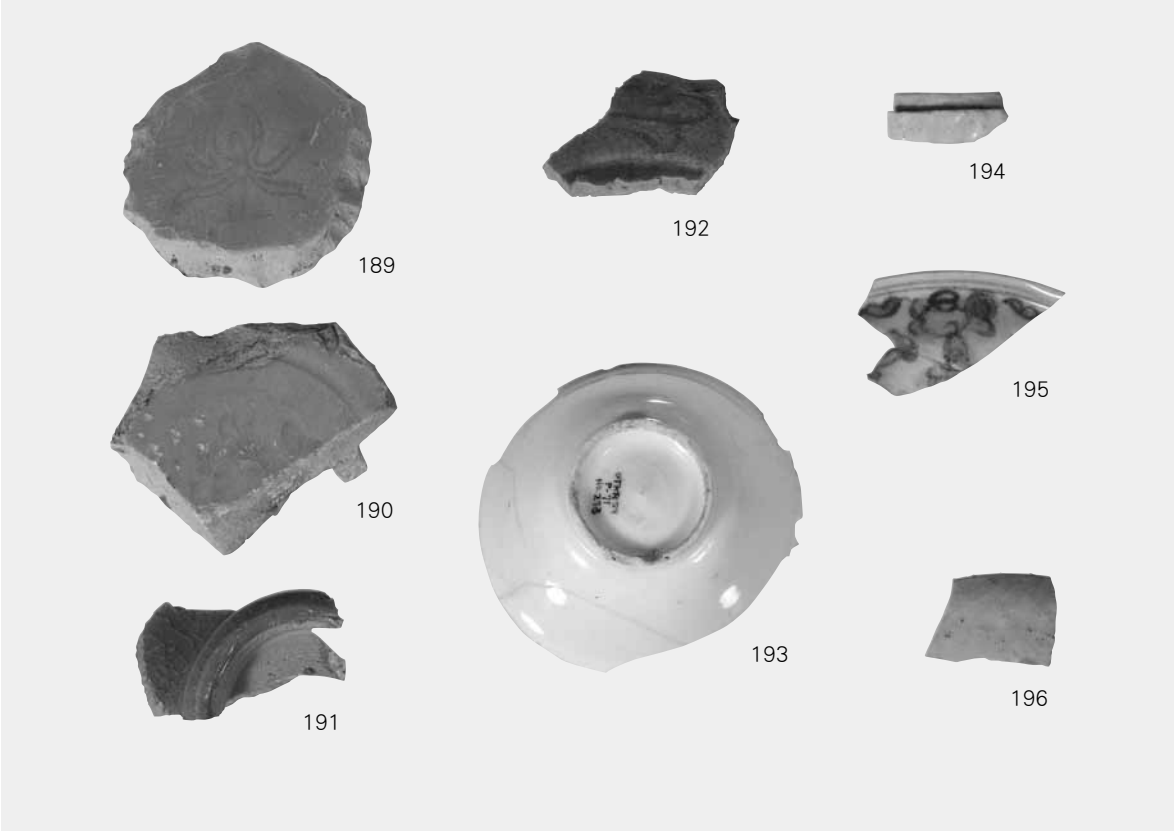
SD － 5 出土土器（中世）同 裏面




その他遺構等出土土器（中世）土師器 180・181 皿　瓦質土器 182 火鉢




その他遺構等出土土器（中世）東播系須恵器 183 ～ 186 捏鉢　備前焼 187 水屋甕　瀬戸美濃系陶器 188 天目茶椀




その他遺構等出土土器（中世）中国製青磁 189 ～ 191 椀 192 皿　中国製白磁 193 小杯
中国製青白磁 194 合子　中国製染付 195・196 皿

SK － 118 出土土器 瓦質土器 197 火鉢

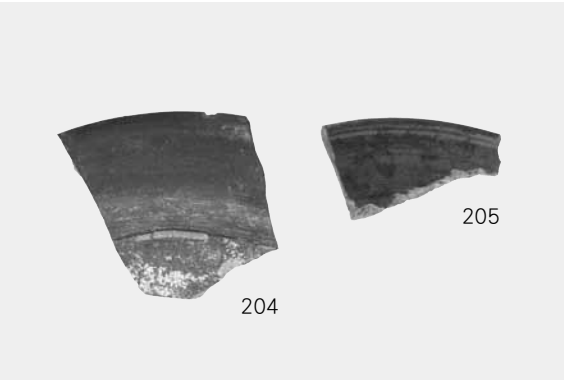
SK － 118 出土土器 備前焼 198 水屋甕

SD － 5 出土土器（近世）土師器 199 釜

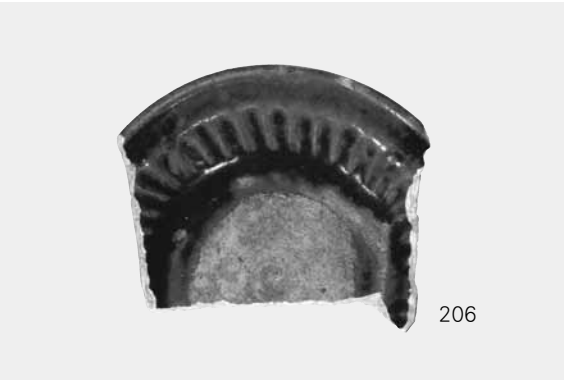
SD － 5 出土土器（近世）瓦質土器 200 火鉢

SD － 5 出土土器（近世）土師質土器 201 火鉢

SD － 5 出土土器（近世）瓦質土器 203 火鉢




SD － 5 出土土器（近世）備前焼 204・205 盤




SD － 5 出土土器（近世）瀬戸美濃系陶器 206 皿

SD － 5 出土土器（近世）瀬戸美濃系陶器 207 天目茶椀

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 209 皿

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 210 皿

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 213 皿

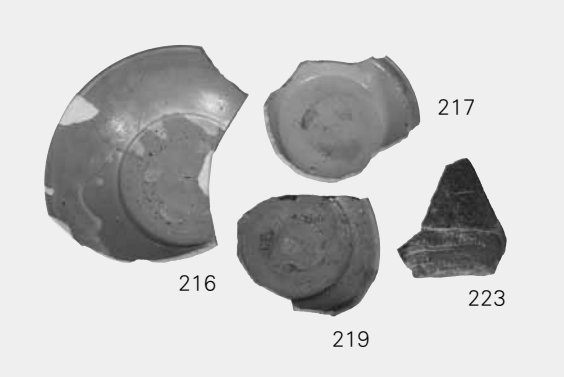
SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 218 皿

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 220 椀

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 221 椀

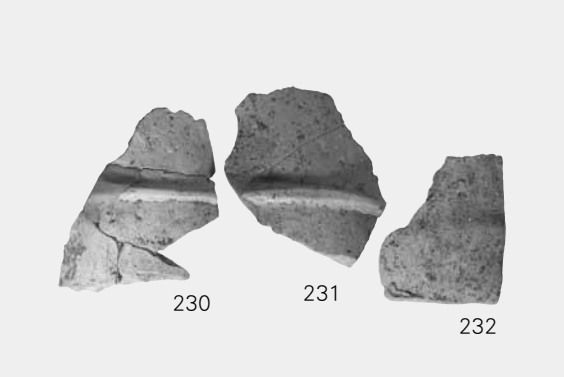
SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 222 椀

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 208・210 ～ 212・214・215 皿



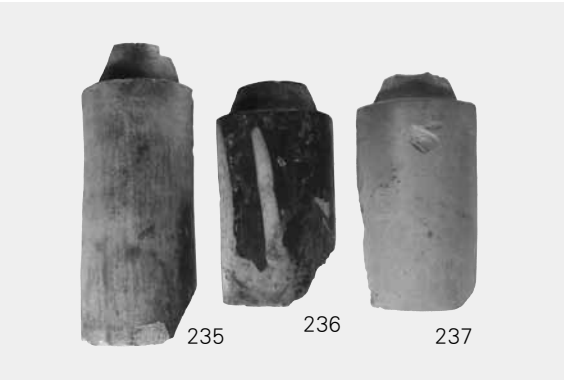

SD － 5 出土土器（近世）肥前系陶磁器 216・217・219 皿 223 瓶

その他遺構等出土土器（近世）土師器 224 堝　備前焼 225 建水 226 徳利 227 擂鉢　肥前系陶磁器 228 皿　大谷焼 229 甕




埴輪 230 ～ 232 円筒埴輪

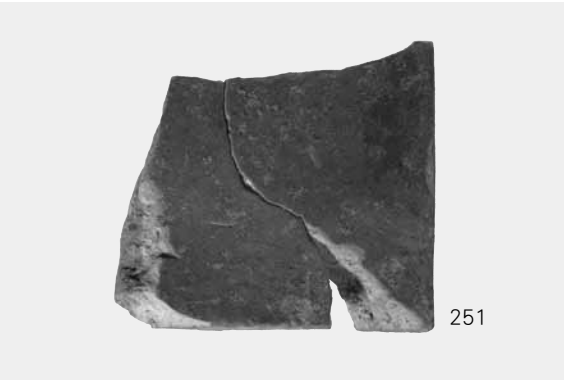
瓦 233・234 軒丸瓦



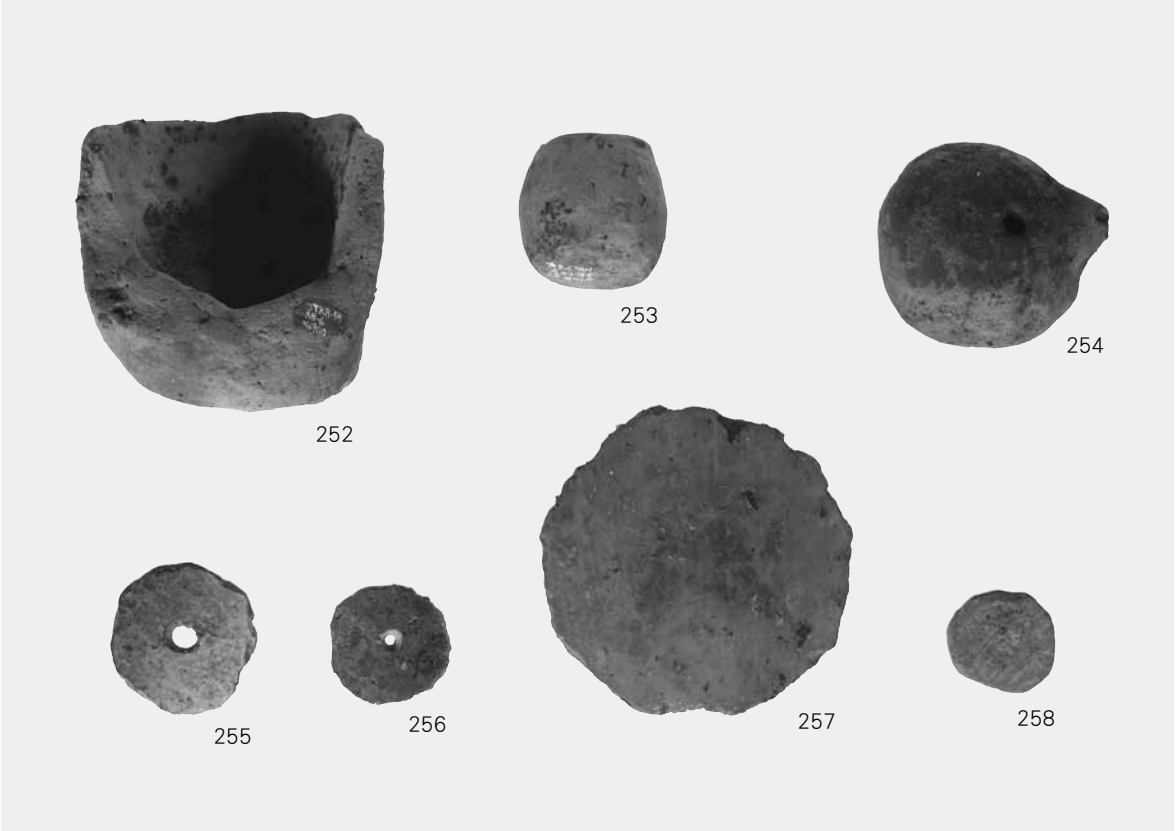

瓦 235 ～ 237 丸瓦

瓦 247 鳥伏間

瓦 249 熨斗瓦



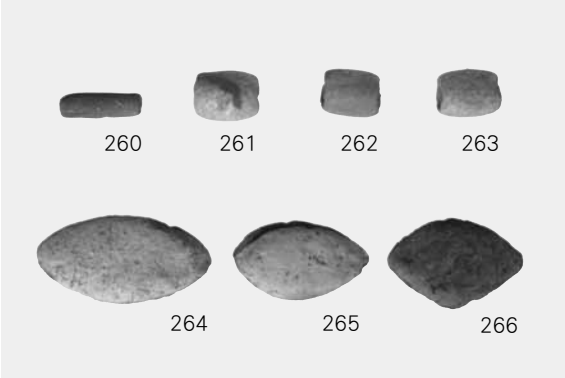

瓦 251 塼




土製品 252・253 ミニチュア土器壺 254 土笛 255・256 紡錘車 257・258 円板状土製品

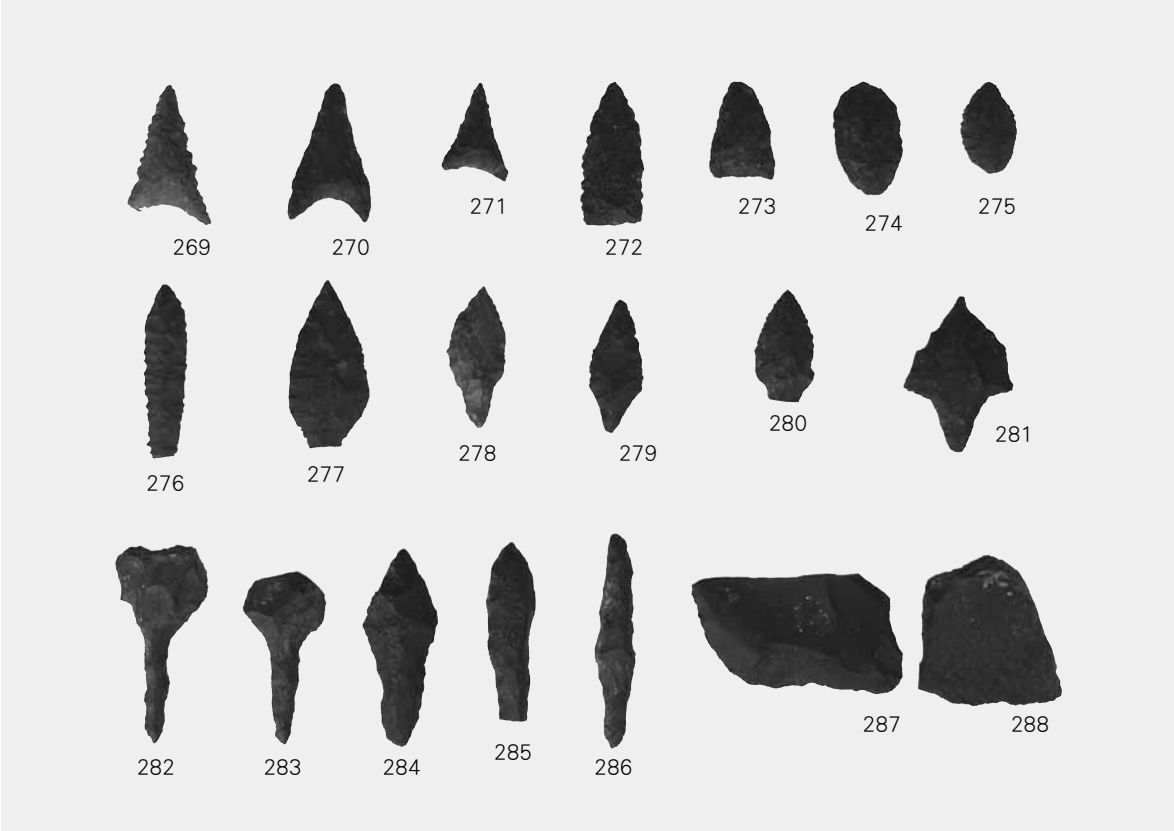
土製品 259 土製支脚（側面）

土製品 259 同（正面）

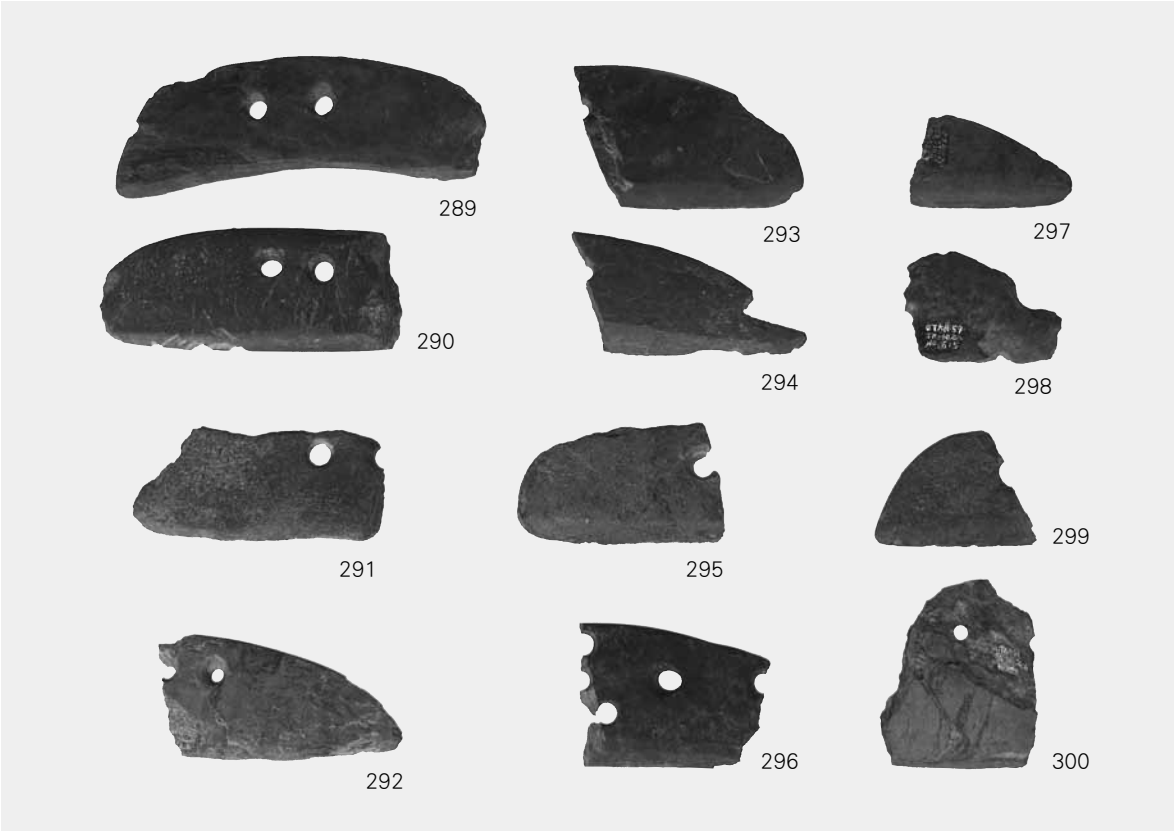



土製品 土錘 260 ～ 263 管状土錘 264 ～ 266 有溝土錘

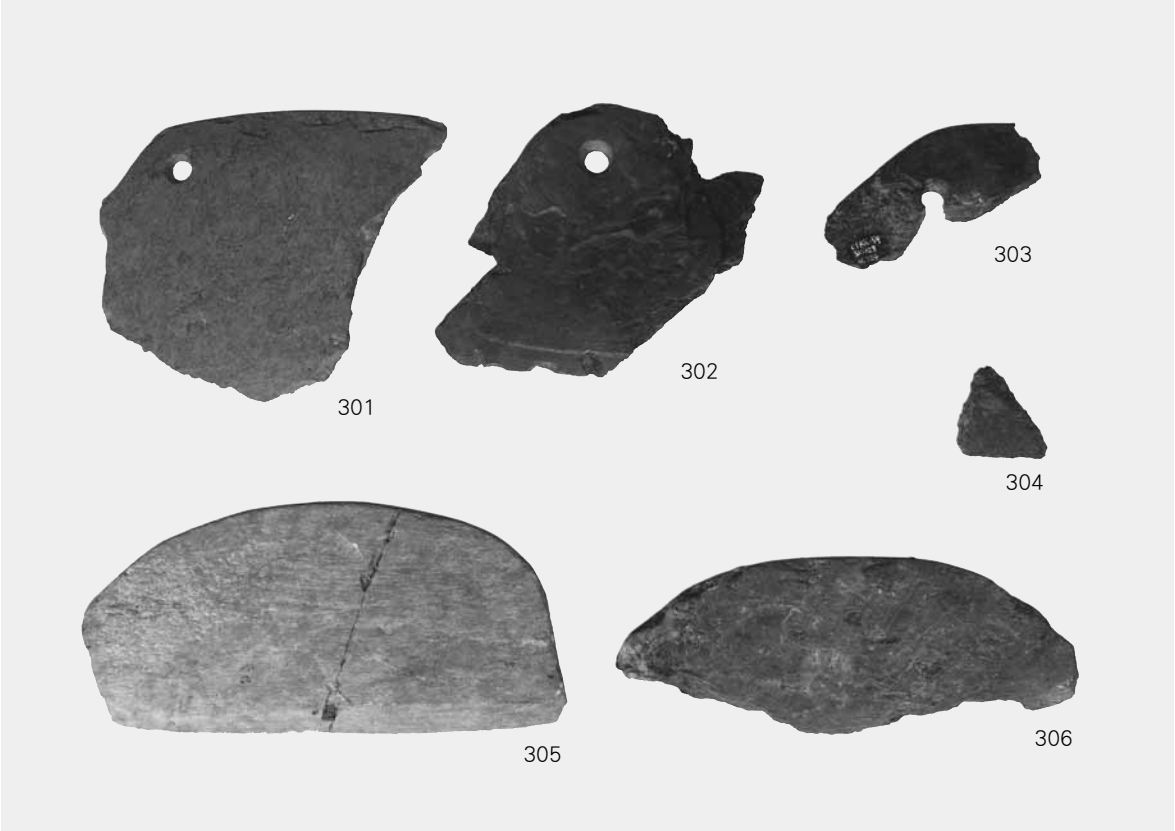
土製品 焼塩壺 267 蓋 268 身



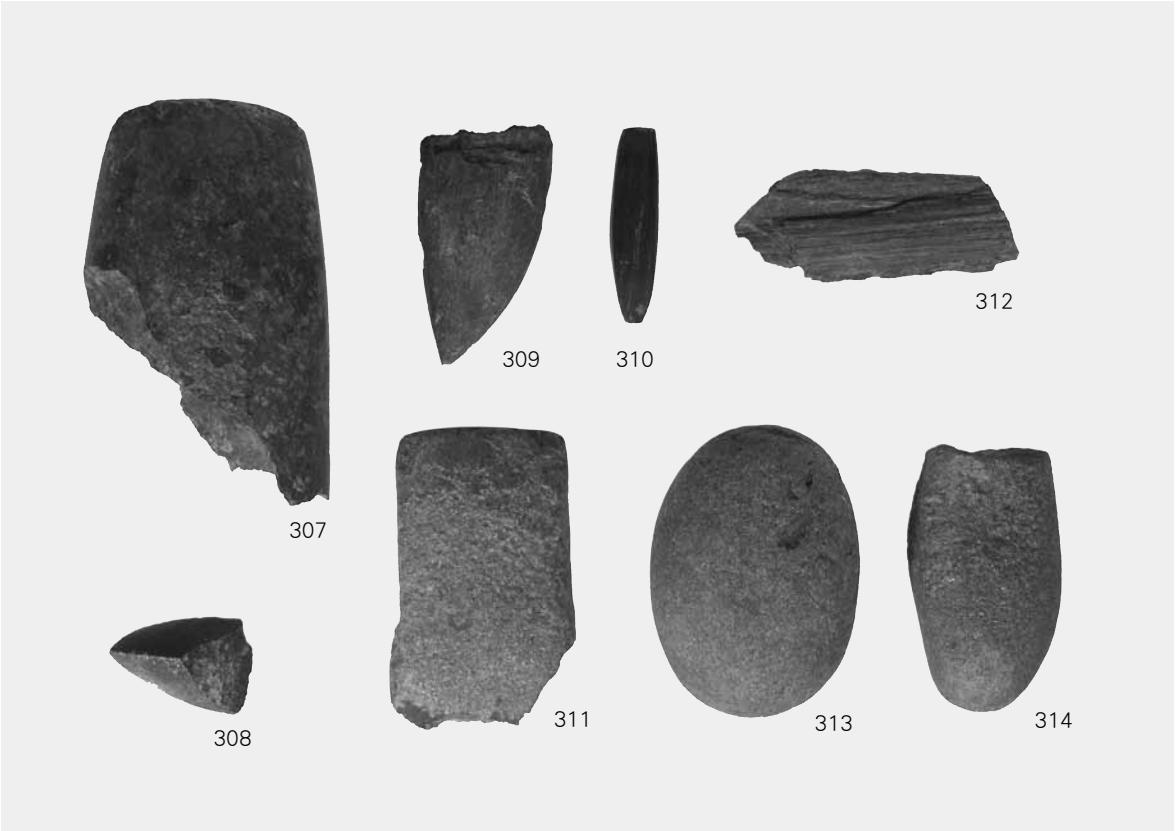

石器 打製石器 269 ～ 281 石鏃 282 ～ 286 石錐 287・288 スクレイパー




石器 磨製石器 289 ～ 300 石包丁



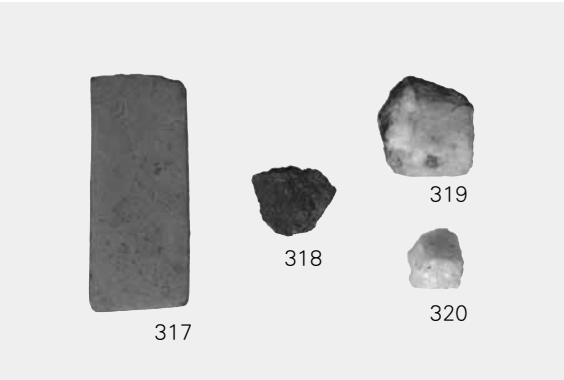

石器 磨製石器 301 ～ 304 大型石包丁 305・306 石包丁未製品




石器 磨製石器 307 ～ 311 石斧　礫石器 312 石鋸 313・314 叩石

石器 礫石器 315 台石

石器 礫石器 316 台石

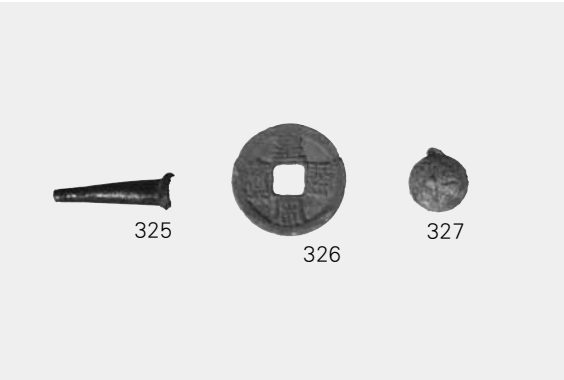



石製品 317 砥石 318 石鍋 319・320 火打石

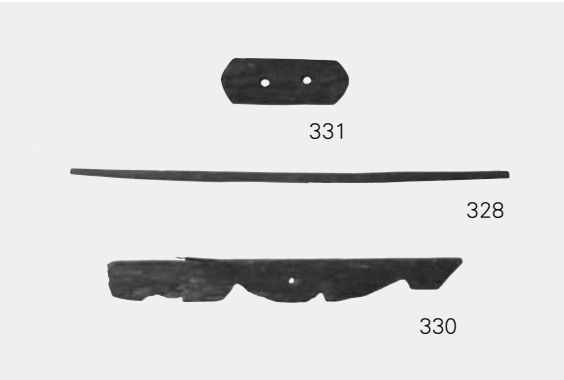
石造物 321 石仏

石造物 322 石造五輪塔（水輪）

金属製品 323 鍬 324 刀




金属製品 325 煙管（吸口）326 銅銭 327 鉄砲玉




木製品 328 箸 330 板塔婆 331 板状加工品

木製品 329 下駄

同側面

同裏面

木製品 332 木札（正面）

同赤外線撮影

同白黒反転

木製品 332 同（裏面）

同赤外線撮影

同白黒反転

平成21年３月31日発行

太田・黒田遺跡 第59次発掘調査報告書

編集・発行　　財団法人 和歌山市都市整備公社

印　　刷　　西岡総合印刷株式会社

Ⓒ財団法人 和歌山市都市整備公社2009